

静岡県 富士市

宮添遺跡 V

土地改良工事に伴う A 地区埋蔵文化財発掘調査報告書
市道改良工事に伴う B 地区埋蔵文化財発掘調査報告書
市道改良工事に伴う C 地区埋蔵文化財発掘調査報告書
駐車場整備工事に伴う L 地区埋蔵文化財発掘調査報告書

2012年3月

富士市教育委員会



L地区SB01 出土遺物
古墳時代中期後半の一括資料

序

私たちのまち富士市は、ユネスコ世界文化遺産登録に向けての機運が高まりを見せる「霊峰富士」と広大な駿河湾に囲まれ、豊かな水と自然の恩恵を受け、発展してまいりました。

信仰の対象であり、文化的側面を有する富士山は、時に人間に対して猛威を振るう、恐ろしい火山でもありました。今回報告します宮添遺跡での発掘調査では、5世紀後半の富士山の噴火の痕跡を、人々の住んでいた建物跡において確認することができました。一方で、噴火の後も同じ場所で人々は復興し、居住し続けるという祖先の力強さも確認することができました。

これまでに宮添遺跡において行われた発掘調査の成果報告は、今回の報告書刊行をもって終了することになります。今後はこれまでに明らかとなった調査成果を、広く市民の皆様に還元していくことを目標にすることとしたいと思います。

最後になりましたが、現地調査及び資料整理並びに本書の作成にあたり、御指導、御協力いただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成24年3月
富士市教育委員会
教育長 山田幸男

例 言

1. 本書は、静岡県富士市増川 692-2 番地に所在する宮添遺跡 A 地区、富士市増川 698-2 外に所在する宮添遺跡 B 地区、富士市増川 719 外に所在する宮添遺跡 C 地区、富士市増川 720 番地の 1 に所在する宮添遺跡 L 地区の発掘調査報告書である。

2. 調査は、土地改良工事（A 地区）、市道改良工事（B 地区・C 地区）、駐車場整備工事（L 地区）に伴い、埋蔵文化財の保護および記録保存のために、富士市教育委員会が実施した。

3. 各調査の期間と担当者は以下の通りである。

A 地区（本発掘調査 昭和 61 年 3 月 5 日～3 月 8 日）

担当 平林将信・志村博（文化体育課文化振興係 主事）

B 地区（本発掘調査 平成 5 年 10 月 18 日～平成 6 年 1 月 14 日）

担当 前田勝己（文化振興課文化財担当 主事）

C 地区（本発掘調査 平成 6 年 7 月 18 日～7 月 29 日）

担当 前田勝己（文化振興課文化財担当 主事）

L 地区（本発掘調査 平成 21 年 7 月 17 日～8 月 11 日）

担当 佐藤祐樹（文化振興課文化財担当 主事）

若林美希（文化振興課文化財担当 臨時職員）

整理作業（平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日）

担当 佐藤祐樹（文化振興課文化財担当 上席主事）

小島利史（文化振興課文化財担当 臨時職員）

4. 本書の執筆は 1 章から 5 章の遺構部分については小島、遺物部分は佐藤が分担して行った。6 章の執筆と編集は佐藤による。

5. 現地調査における記録写真は各調査担当者が撮影し、整理作業における遺物写真は、井上尚子（文化振興課文化財担当 臨時職員）が、L 地区遺物集合写真は、小田貴子（文化振興課文化財担当 臨時職員）が撮影した。

6. 本書にて報告する図面・発掘記録・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会が保管している。

7. 本書の作成にあたり、次の方々にご多大なご協力とご指導を賜りました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

大谷宏治 佐野五十三 篠原和夫 篠原武 鈴木一有 渡井英誉（敬称略・50 音順）

凡 例

1. 座標は、任意座標を使用した調査、もしくは世界測地系を使用して調査したものがある。ただし、全体図などには、すべて世界測地系（平成 14 年 4 月施行）に変換した数値を示してある。抄録のデータは E03 杭の数値である。
2. グリッドは、宮添遺跡全体を覆うように設定した任意グリッドによる。真北は、グリッドより 18 度西傾する。また、レベル高は海拔である。
3. 本書における遺構の標記（記号）は、次の通りである。

SB : 竪穴建物跡 SZ : 方形周溝墓 SK : 土坑 SD : 溝状遺構
Pit : ピット FP : 炉跡 SX : 性格不明遺構

4. 土器の実測図では、断面を以下のように表現することで種類の違いを示した。

土師器 :  須恵器 :  灰釉陶器 : 

5. 土層・遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
6. 本書では、遺構などの時期について、6 世紀以前は時代名称による表記をおこない、7 世紀以降はできるだけ世紀を用いた表記とした。また、本書で用いる土器・陶磁器の編年は主に以下を参考にした。

土師器

山本恵一 1995 「静岡県下の 6～7C の土師器 - 駿河東部・伊豆北部の現状について」『東国土器研究』第 4 号 東国土器研究会

山本恵一 1999 「駿河の古墳時代中期の土器 - 東駿河を中心にして - 」『東国土器研究』第 5 号 東国土器研究会

渡井英誉 1997 「弥生・古墳時代編」『富士宮市文化財調査報告書第 23 集 滝戸遺跡 - 市立富士宮第三中学校校舎増改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』富士宮市教育委員会

渡井英誉 1999 「中見代式土器小考 - 大廓式土器から中見代式土器へ - 」『東国土器研究』第 5 号 東国土器研究会

須恵器

田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店

鈴木敏則 2004 「第 5 章第 2 節 静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会

灰釉陶器

斉藤孝正 1989 「灰釉陶器の研究Ⅱ」『名古屋大学文学部研究論集』104 名古屋大学

目次

序
例言
凡例
目次

第1章 調査の概要	1
第1節 遺跡の立地と調査履歴	1
第2節 浮島ヶ原低地周辺の遺跡	2
第2章 A地区の調査	7
第1節 調査の経緯と経過	7
第2節 遺構と遺物	9
第3節 A地区の調査成果	10
第3章 B地区の調査	11
第1節 調査の経緯と経過	11
第2節 BⅠ調査区の調査成果	13
第3節 BⅡ調査区の調査成果	24
第4節 BⅢ調査区の調査成果	27
第5節 BⅣ調査区の調査成果	49
第6節 B地区の調査成果	55
第4章 C地区の調査	56
第1節 調査の経緯と経過	56
第2節 遺構と遺物	57
第3節 C地区の調査成果	58
第5章 L地区の調査	59
第1節 調査の経緯と経過	59
第2節 遺構と遺物	61
第3節 L地区の調査成果	70
第6章 宮添遺跡の調査成果	71
第1節 浮島ヶ原低地周辺の土器様相	71
第2節 宮添遺跡出土の青銅製品	75
第3節 宮添遺跡出土の石製模造品	76
第4節 宮添遺跡出土の墨書土器	80
出土遺物観察表	83
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第 1 章 調査の概要

第 1 図 宮添遺跡の位置	1
第 2 図 宮添遺跡の立地	2
第 3 図 周辺の遺跡	3
第 4 図 東駿河の主要古墳	4
第 5 図 宮添遺跡全体図	5

第 2 章 A 地区の調査

第 6 図 A 地区全体図	7
第 7 図 S Z 1	8
第 8 図 S B 1 遺構実測図	10
第 9 図 A 地区遺物実測図	10

第 3 章 B 地区の調査

第 10 図 調査区トレンチ配置図	11
第 11 図 B I ・ B II 調査区全体図	13
第 12 図 S B 1 遺構実測図	13
第 13 図 S B 1 遺物実測図	14
第 14 図 S B 5 遺構実測図	14
第 15 図 S B 5 遺物実測図	14
第 16 図 S B 7 遺構実測図	15
第 17 図 S B 7 カマド実測図	16
第 18 図 S B 7 遺物実測図	17
第 19 図 S B 9 遺物実測図	17
第 20 図 S B 9 遺構実測図	18
第 21 図 S B 6 ・ S B 2 ・ S B 28 遺構実測図	19
第 22 図 S B 2 遺物実測図	20
第 23 図 S B 3 ・ S B 4 遺構実測図	21
第 24 図 S B 3 カマド実測図	22
第 25 図 S B 3 遺物実測図	22
第 26 図 F P 1 遺構実測図	23
第 27 図 B I 遺構外出土遺物実測図	23
第 28 図 B I ・ B II 全体図	24
第 29 図 S B 8 遺構実測図	25
第 30 図 S B 8 カマド実測図	25
第 31 図 S X 3 遺構実測図	26
第 32 図 B II 遺構外出土遺物実測図	26
第 33 図 B III ・ B IV 調査区全体図	27
第 34 図 S B 10 ・ S B 11 遺構実測図	28
第 35 図 S B 10 遺物実測図	28
第 36 図 S B 11 遺物実測図	29
第 37 図 S B 12 遺構実測図	29
第 38 図 S B 12 カマド実測図	29
第 39 図 S B 12 遺物実測図	30
第 40 図 S B 13 遺構実測図	31
第 41 図 S B 13 遺物実測図	31
第 42 図 S B 14 遺構実測図	32
第 43 図 S B 14 遺物実測図	32
第 44 図 S B 21 ・ S B 23 遺構実測図	34
第 45 図 S B 21 遺物実測図 (1)	35
第 46 図 S B 21 遺物実測図 (2)	36
第 47 図 S B 21 遺物実測図 (3)	37
第 48 図 S B 23 遺物実測図	38

第 49 図 S B 22 ・ 24 ・ 26 遺構実測図	38
第 50 図 S B 22 遺物実測図	39
第 51 図 S B 24 遺物実測図	39
第 52 図 S B 26 遺物実測図	39
第 53 図 S B 24 カマド実測図	40
第 54 図 S B 25 遺構実測図	41
第 55 図 S B 25 遺物実測図	42
第 56 図 S B 27 遺構実測図	43
第 57 図 S B 27 遺物実測図	43
第 58 図 S K 1 遺構実測図	44
第 59 図 S K 1 遺物実測図	44
第 60 図 S X 1 遺構実測図	45
第 61 図 S X 1 遺物実測図	45
第 62 図 S X 2 遺構実測図	45
第 63 図 B III 遺構外出土遺物 (1)	46
第 64 図 B III 遺構外出土遺物 (2)	47
第 65 図 B IV 調査区全体図	49
第 66 図 S B 15 遺構実測図	49
第 67 図 S B 16 ・ S B 17 遺構実測図	50
第 68 図 S B 16 遺物実測図	50
第 69 図 S B 17 遺構実測図	51
第 70 図 S B 17 遺物実測図	52
第 71 図 S B 18 ・ 19 ・ 20 遺構実測図	53
第 72 図 S B 1 8 遺物実測図	53
第 73 図 S B 19 遺物実測図	53
第 74 図 S B 20 遺物実測図	54
第 75 図 S K 2 ・ S K 3 遺物実測図	54
第 76 図 S K 2 ・ S K 3 遺構実測図	54
第 77 図 B IV 調査区 遺構外出土遺物実測図	55

第 4 章 C 地区の調査

第 78 図 C 地区全体図	56
第 79 図 S Z 1 遺構実測図	57
第 80 図 S B 1 遺構実測図	58
第 81 図 遺構外遺物実測図	58

第 5 章 L 地区の調査

第 82 図 L 地区全体図	60
第 83 図 S B 01 遺構実測図	62
第 84 図 S B 01 遺物実測図	64
第 85 図 S B 02 遺構実測図	65
第 86 図 S B 03 遺構実測図	65
第 87 図 S B 02 ・ 03 遺物実測図	66
第 88 図 S D 01 遺構実測図	66
第 89 図 S D 02 遺構実測図	66
第 90 図 S X 01 遺構実測図	67
第 91 図 S X 01 遺物実測図	67
第 92 図 S X 02 ・ 03 遺構実測図	67
第 93 図 S K 01 遺構実測図	68
第 94 図 S K 03 遺構実測図	68
第 95 図 S K 04 遺構実測図	68
第 96 図 S K 05 遺構実測図	68
第 97 図 S K 遺物実測図	68

第 98 図 Pit 20 遺物実測図	69	第 107 図 宮添遺跡 D 地区 SB23 出土土器	72
第 6 章 宮添遺跡の調査成果		第 108 図 宇東川遺跡 A 地区 SB5032 出土土器	73
第 99 図 宮添遺跡 E 地区 SD01 出土土器	71	第 109 図 宮添遺跡 E 地区 SB42 出土土器	73
第 100 図 尾崎遺跡 1 号住居出土土器	71	第 110 図 宮添遺跡 E 地区 SB11 出土土器	73
第 101 図 平椎遺跡 SH08 出土土器	72	第 111 図 宮添遺跡 E 地区 SB16・SB17 出土土器	73
第 102 図 宮添遺跡 D 地区 SB32 出土土器	72	第 112 図 宮添遺跡出土の青銅製品	75
第 103 図 八兵衛洞遺跡第 2 号方形周溝墓出土土器	72	第 113 図 筒型銅製品の出土	75
第 104 図 平椎遺跡 SH05 出土土器	72	第 114 図 石製模造品の出土位置	76
第 105 図 称宜ノ前遺跡第 15 号住居址出土土器	72	第 115 図 宮添遺跡出土の石製模造品	77
第 106 図 宮添遺跡 D 地区 SB21 出土土器	72	第 116 図 宮添遺跡出土の墨書土器	80

挿表目次

第 1 章 宮添遺跡の立地と調査履歴	
第 1 表 宮添遺跡の調査履歴	1
第 3 章 B 地区の調査	
第 2 表 B 地区における竪穴建物	12
第 5 章 L 地区の調査	
第 3 表 L 地区 Pit 一覧	70
第 6 章 宮添遺跡の調査成果	
第 4 表 宮添遺跡出土の石製模造品	78
第 5 表 宮添遺跡出土の墨書土器	81

写真図版目次

PL.1 遺構

(A地区)

- 1 A地区遠景(浅間古墳を望む)
- 2 SZ1

PL.2 遺構

(A地区)

- 1 SZ1 東側周溝
- 2 SZ1 東側周溝土層
- 3 SB1

4 SZ1・SB1 土層

(B地区)

- 5 B地区 調査前遠景
- 6 SB1・SB5
- 7 SB7
- 8 SB7 カマド

PL.3 遺構

(B地区)

- 1 SB9
- 2 SB9 カマド
- 3 SB2・SB6
- 4 SB28
- 5 SB3
- 6 FP1
- 7 SB8
- 8 SX3

PL.4 遺構

(B地区)

- 1 SB10・SB11
- 2 SB10 カマド
- 3 SB12
- 4 SB12 カマド
- 5 SB14
- 6 SB14 土層
- 7 SB21
- 8 SB21 土層

PL.5 遺構

(B地区)

- 1 SB21 集石
- 2 SB23
- 3 SB22
- 4 SB24
- 5 SB24 カマド
- 6 SB26 カマド
- 7 SB26 カマド
- 8 SB25

PL.6 遺構

(B地区)

- 1 SB27
- 2 SK1
- 3 SB15
- 4 SB16
- 5 SB17
- 6 SB17 カマド
- 7 SB18
- 8 SB18 出土遺物

PL.7 遺構

(B地区)

- 1 SB19・20
 - 2 SB19 鉄鍬
- (C地区)
- 3 C地区 調査前近景
 - 4 C地区基本土層
 - 5 SZ1
 - 6 SZ1 土層
 - 7 SB1
 - 8 SB1 土層

PL.8 遺構

(L地区)

L地区全景(西より)

PL.9 遺構

(L地区)

- 1 L地区全景(南より)
- 2 調査区遠景(北より)

PL.10 遺構

(L地区)

- 1 SB01(南西より)
- 2 SB01 土層(北西より)
- 3 SB01 土層(南東より)
- 4 SB01 土層(スコリア堆積)(西より)
- 5 SB01 - FP01(南より)

PL.11 遺構

(L地区)

- 1 SB02(南より)
- 2 SB02 土層(北より)
- 3 SB02 - SX01(南より)
- 4 SD02(南より)

PL.12 遺構

(L地区)

- 1 SB03(南より)
- 2 SD01(南より)
- 3 SK01(南より)
- 4 基本土層(南より)

PL.13 遺物

(B地区)

SB01・SB05・SB07

PL.14 遺物

(B地区)

SB09・SB02・SB03・遺構外出土遺物(B I)

PL.15 遺物

(B地区)

遺構外出土遺物(B II)・SB10

PL.16 遺物

(B地区)

SB11・SB12・SB13

PL.17 遺物

(B地区)

SB14・SB21

PL.18～23 遺物

(B地区)

SB21

PL.24 遺物

(B地区)

SB21・SB23・SB22

PL.25 遺物

(B地区)

SB24

PL.26 遺物

(B地区)

SB26・SB25

PL.27 遺物

(B地区)

SB25・SB26

PL.28 遺物

(B地区)

SK01・SX01・

遺構外出土遺物(B III 5トレンチ付近)

PL.29 遺物

(B地区)

遺構外出土遺物(B III 2トレンチ付近)

PL.30～32 遺物

(B地区)

遺構外出土遺物(B III 1トレンチ付近)

PL.33

遺物(B地区)

遺構外出土遺物(B III 1トレンチ付近)・SB16

PL.34 遺物

(B地区)

SB17

PL.35 遺物

(B地区)

SB18・SB19

PL.36 遺物

(B地区)

SB20・SK02・SK03

(A地区)

SB1・表採

(C地区)

遺構外出土遺物

PL.37～38 遺物

(L地区)

SB01

PL.39 遺物

(L地区)

SB01・SB02・SB03

・SK01・SK05・SX01・Pit20

第1章 調査の概要

第1節 遺跡の立地と調査履歴

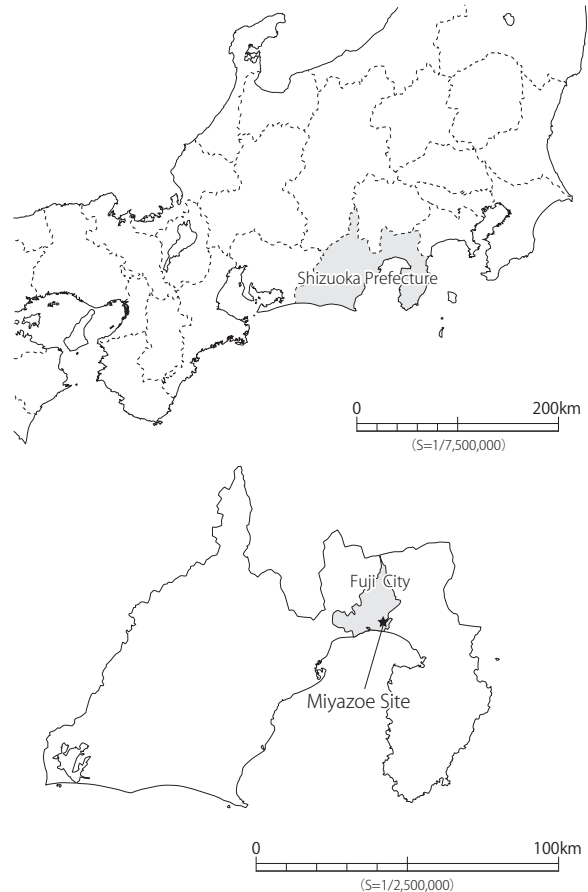
遺跡の立地 静岡県富士市は、東経138度40分35秒、北緯35度9分41秒（市役所）に位置し、東京まで146km、大阪まで410kmの県東部に位置する。北側には雄大な富士山を望み、南は駿河湾に面しており、平均気温16.7℃と一年を通じて比較的温暖な地域である。平成20年11月1日には、富士川を挟んだ富士川町と合併し、人口261,477人（平成22年12月31日現在）、面積245km²を有する東部地域を代表する都市である。

市域は、西方に岩渕火山地、星山丘陵、北方に富士火山地、東に愛鷹火山地、南方は駿河湾と富士川河口から沼津市の狩野川まで続く田子の浦砂丘に取り囲まれ、平野部は富士川の運搬した堆積物によって形成されたデルタ地帯により形成されている。また、愛鷹火山地と田子の浦砂丘に挟まれた低地部には「浮島ヶ原低地」とよばれるラグーン地帯が存在する。

「浮島ヶ原低地」と愛鷹火山地の境には、富士市から沼津市を経て三島市に至る「静岡県道22号三島富士線」通称「根方街道」が存在する。この街道沿いの丘陵上に弥生時代以降集落が営まれていることは、街道として整備される以前から人の往来のあった「路」が存在したことを想定させる。

増川に所在する宮添遺跡は愛鷹山南西麓に位置し、「根方街道」を臨む丘陵先端部に立地しており、遺跡の北西400mには、国指定史跡の前方後墳「浅間古墳」が存在する。

調査履歴 宮添遺跡は、昭和60年の調査を皮切りに、



第1図 宮添遺跡の位置

継続した調査が行われ、旧石器時代から近世までの遺構・遺物が発掘調査されてきた。本書の報告・刊行で平成21年度までに宮添遺跡で行われた発掘調査の報告は完了したこととなる。

第1表 宮添遺跡の調査履歴

地区名	調査種別	地番	調査経緯	調査開始年度	主な時代	主な遺構	文献
A地区	本調査	増川692-2	墓地造成	昭和60年度	古墳・平安	方形周溝墓・建物跡	本書
B地区	試掘・本調査	増川698-2外	市道建設	平成5年度	旧石器・古墳～平安	建物跡	本書
C地区	試掘	増川719外	市道建設	平成6年度	古墳	方形周溝墓・建物跡	本書
D地区	本調査	増川698-1	農地改良	平成6年度	旧石器・弥生～平安・近世	建物跡・溝	富士市2010b
E地区	本調査	増川718外	農地改良	平成10年度	旧石器・弥生～平安・中世	建物跡・溝	富士市2011
F地区	試掘	増川721外	農地改良	平成11年度		なし	—
G地区	試掘・本調査	増川716外	農地改良	平成13年度	弥生～平安	建物跡	富士市2009a
H地区	試掘	増川697外	駐車場造成	平成14年度	古墳～平安	建物跡	富士市2010a
I地区	試掘	増川710-1外	農地改良	平成14年度	弥生～平安	建物跡	富士市2010a
J地区	試掘	増川700-9外	土砂採取	平成15年度	古墳	建物跡	富士市2009b
K地区	本調査	増川696	農地改良	平成15年度	弥生～平安	建物跡・溝	富士市2008
L地区	試掘・本調査	増川720-1外	駐車場造成	平成19・21年度	古墳～奈良	建物跡	本書

第2節 浮島ヶ原低地周辺の遺跡

宮添遺跡が立地する浮島ヶ原低地周辺の遺跡について、特に近年調査・報告された成果を中心に提示していくこととする。

旧石器時代 愛鷹・箱根山麓は後期旧石器時代の遺跡が密集する地域として知られているが、その中心は愛鷹山南麓および箱根山西麓に集中している。特に桃沢川と高橋川に挟まれた傾斜の緩やかなことに加え、開析谷の発達のない地域の中心性は、調査数の多さだけでは説明が出来ない(中村 2011)。

一方、愛鷹山南西麓では、これまで峰山遺跡や陣ヶ沢A遺跡におけるナイフ形石器などの出土が認められるのみで本格的な調査が行われることがなかったため、その実態については明確とは言えない状況にあった。しかし、近年、第二東名高速道路建設に伴う発掘調査によりその実態が少しずつ明らかとなってきた。

矢川上C遺跡は市内において、初めて本格的に発掘調査が行われた旧石器時代の遺跡である。4枚の文化層から遺物が出土し、特に休場層直下黒色帯～休場層(第Ⅲ文化層)、



第2図 宮添遺跡の立地

休場層～富士黒土層（第Ⅳ文化層）では、当該期の愛鷹山麓において最多量の遺物が出土しており、上ヶ屋型彫器などの特徴的な遺物も出土している（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009）。また、古木戸B遺跡からも第Ⅲ黒色帯における石器集中が認められた（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010a）。加えて、古木戸A遺跡や天ヶ沢東遺跡でも旧石器時代の遺物が見つかっており、これまで開発が及ばなかった高所において今後も遺跡が発見される可能性が高い。

縄文時代 富士山南麓、愛鷹山麓に広く分布が認められている。近年、愛鷹南西麓の富士岡中尾遺跡の調査が実施され、早期の野鳥式、前期の諸磯式、前期末から中期初頭

の五領ヶ台式の遺物のほかにも前期の近畿地方との関連が想定される北白川下層式の遺物が出土していることが注目される（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010c）。また、前の原遺跡からも五領ヶ台式の竪穴建物跡や遺物が見つかるが、全体として遺跡数が少なく、早期から中期前半にかけては継続性があまり認められない。

その後、中期後半になり、遺跡数が増加する。浮島ヶ原低地の北西に位置する宇東川遺跡では、中期後半の曾利Ⅲ式期から後期中葉の加曾利B1式期の土器が認められ、中でも曾利Ⅳ～Ⅴ式期と堀之内式期に盛期が認められる（富士市教育委員会 2012）。

弥生時代 浮島ヶ原低地周辺では、これまで後期の的場



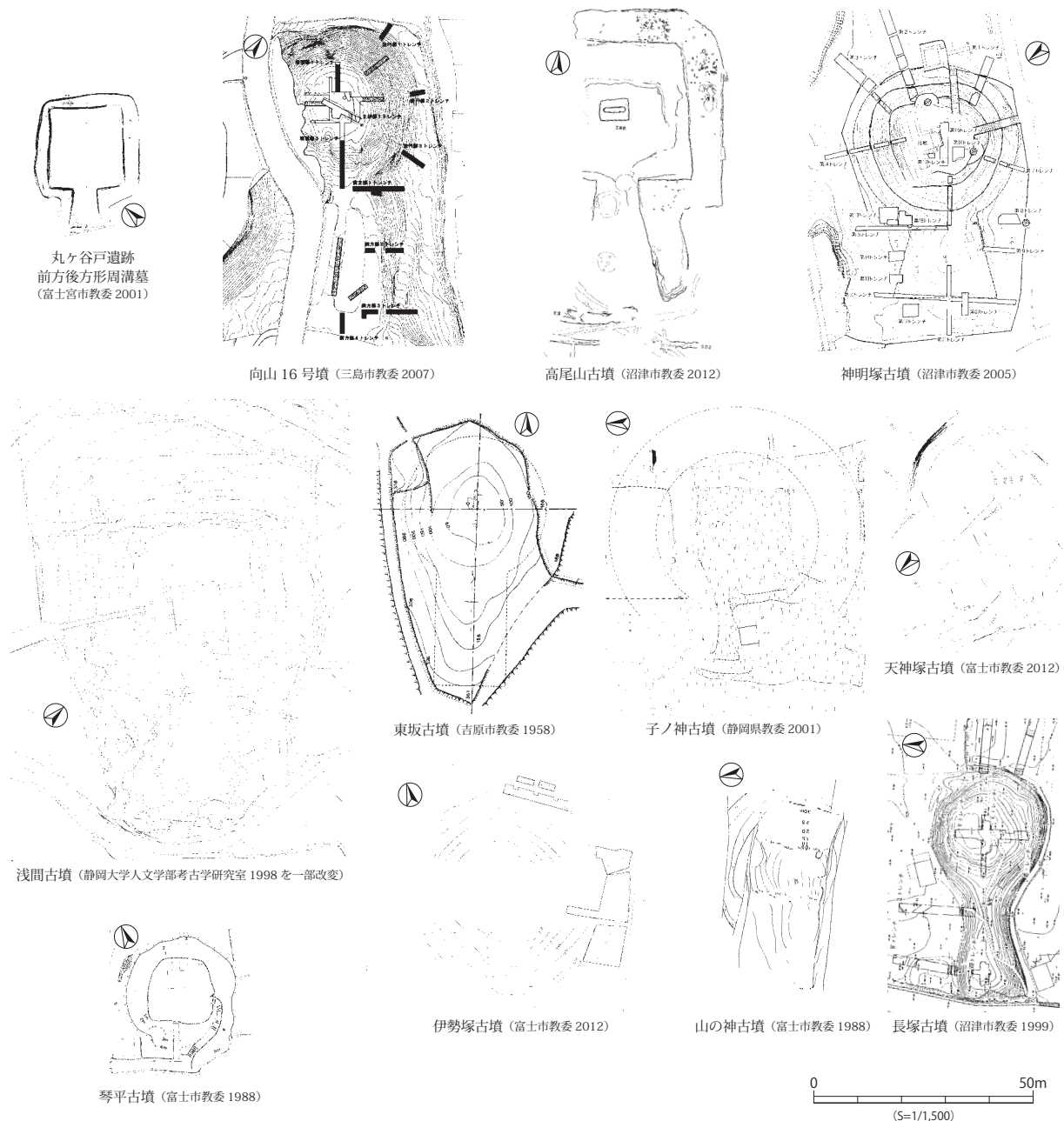
第3図 周辺の遺跡

遺跡が知られているのみであったが、宮添遺跡や近年行われたコーカン畑遺跡から後期前半の土器が見つかった（富士市教育委員会 2010）。平椎遺跡では、後期前半と考えられる断面V字形を呈する溝が検出され、環濠の可能性が考えられる。また、竪穴建物跡 SH08 からは、これまで明確でなかった弥生時代後期初頭の良好な一括遺物が出土した。菊川式や山中式と考えられる土器や西駿河、南関東地方の土器もあわせて出土しており、広域的な土器移動が認められる（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010c）。

古墳時代 浮島ヶ原低地周辺では、近年新たに発見された沼津市高尾山古墳（沼津市教委 2012）の築造後、沼津市神明塚古墳、富士市浅間古墳、富士市東坂古墳の順に築

造されるが、その後、浮島ヶ原低地周辺では明確な首長墓が認められなくなる。その後、中期後半から後期初頭に入り、天神塚古墳や船津薬師塚古墳を契機に、後期前半に山の神古墳が築造されるが、その後、前方後円墳が築かれることはない。その後、浮島ヶ原低地周辺では群集墳が認められるようになり、中里古墳群、神谷古墳群、須津古墳群など地形的まとまりごとに多数の古墳が築造されるようになる。

第二東名高速道路建設に伴い船津古墳群で1基、須津古墳群で3基の横穴式石室を有する古墳の調査が行われた。中でも須津J-第118号墳から出土した鉄針やJ-第159号墳から出土した馬具や大刀、鉄銚等の豊富な副葬



第4図 東駿河の主要古墳



第5図 宮添遺跡全体図

品が注目される（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010d）。

また、新規に発見された中期前半に位置づけられる間門松沢第1号墳からは木棺直葬の埋葬施設が3基並列して検出され、第3号埋葬施設からは刃関双孔鉄剣が出土している（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010d）。

沼津市秋葉林遺跡では根古屋古墳群に含まれる5基の古墳が調査された。そのうち無袖形石室を有する1号墳の石室からは、TK209型式期（6世紀末から7世紀初頭）に位置づけられる土師器1、玉類15以上、耳環5、金銅装圭頭大刀1、刀子4、鉄鏃31、両頭金具6などの副葬品が出土している。そのなかでも、金銅装圭頭大刀は拵えの全容が判明する貴重な資料である（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010d）。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落は、浮島ヶ原低地を取り囲むように存在し、密接な関係を持ちながら地域を形成していたものと考えられる（佐藤 2008・2010）。それらの地域内ネットワークの存在に欠かせない主要な「路」として考えられるのが、浮島ヶ原低地と愛鷹火山地の境に存在し、現在、富士市から沼津市を経て三島市に至る「静岡県道22号三島富士線」通称「根方街道」であったと考えられる。また、沖田遺跡で発見された準構造船の存在は、浮島ヶ原低地における舟を使用した内湾交通も存在したことを物語っている。

一方、前述の群集墳を造営したと考えられる、鉄器生産や馬匹生産等の特殊な技術集団がどういった生活を営んでいたのかということは、今後、明らかにしていかなければならないことである。東駿河の古墳時代後期以降の墳墓側における活発な議論に、集落側からの分析が加わったときに当時の社会像がさらに明確になってくるものと思われる。

奈良・平安時代 奈良時代に入り、浮島ヶ原低地西端において富士郡衙と考えられる東平遺跡の発展に連動して、東方の沼津市域に至るまでの間、舟久保遺跡、宇東川遺跡、祢宜ノ前遺跡、宮添遺跡などが認められる。田子の浦砂丘上でも三新田遺跡、柏原遺跡、沼津市中原遺跡、東畑毛遺跡などの遺跡が東海道沿いに認められる。これらの遺跡が存在する「根方街道」は古代東海道の一部であったと考えているが、それぞれが物流の通過点であって、複数の路が交わる交差点ではない。一方、富士市破魔射場遺跡や沼津市上ノ段遺跡、千本遺跡、三島市安久沓形遺跡、御殿場市永原追分C遺跡などは、海路・川路・陸路を合わせて複数の路の交差点であったことが推察される。

参考文献

大谷宏治 2010「東駿河における間門松沢第1号墳の位置」『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第231集
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009『矢川上C遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第200集
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010a『天ヶ沢東遺跡 古木戸A遺跡 古木戸B遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第228集
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010b『下高原遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第229集
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010c『富士山・愛鷹山麓の遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第230集
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010d『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第231集
佐藤祐樹 2008「古墳時代について」『祢宜ノ前遺跡』富士市教育委員会
佐藤祐樹 2010「集落の動態からみた古墳出現前夜の富士山南麓」静岡県考古学研究 41・42
静岡県教育委員会 2001『静岡県の前方後円墳 - 個別報告編 -』静岡県文化財報告書第55集
静岡大学人文学部考古学研究室 1998「静岡県富士市国指定史跡・浅間古墳測量調査の成果」『静岡県の重要遺跡』静岡県教育委員会
中村雄紀 2011「静岡県東部地域における後期旧石器時代の石器群と遺跡分布の変遷」『東京大学考古学研究室紀要』第25号
沼津市教育委員会 1999『長塚古墳・清水遺跡 発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第68集
沼津市教育委員会 2005『神明塚（第2次）発掘調査報告書』
沼津市教育委員会 2012『高尾山古墳発掘調査報告書』
富士市教育委員会 1986『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』
富士市教育委員会 1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』
富士市教育委員会 2008『宮添遺跡Ⅰ』
富士市教育委員会 2009『宮添遺跡Ⅱ』
富士市教育委員会 2009『平成15・19年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』
富士市教育委員会 2010『コーカン畑遺跡』
富士市教育委員会 2010『平成14・20年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』
富士市教育委員会 2010『宮添遺跡Ⅲ』
富士市教育委員会 2011『宮添遺跡Ⅳ』
富士市教育委員会 2012『宇東川遺跡A遺跡』富士市埋蔵文化財調査報告第50集
富士市教育委員会 2012『富士市内遺跡発掘調査報告書 平成11・12年度』富士市埋蔵文化財調査報告 第53集
富士宮市教育委員会 2001『丸ヶ谷戸遺跡Ⅱ』
三島市教育委員会 2007『文化財年報』第19号
吉原市教育委員会 1958『吉原市の古墳』

第2章 A地区の調査

第1節 調査の経緯と経過

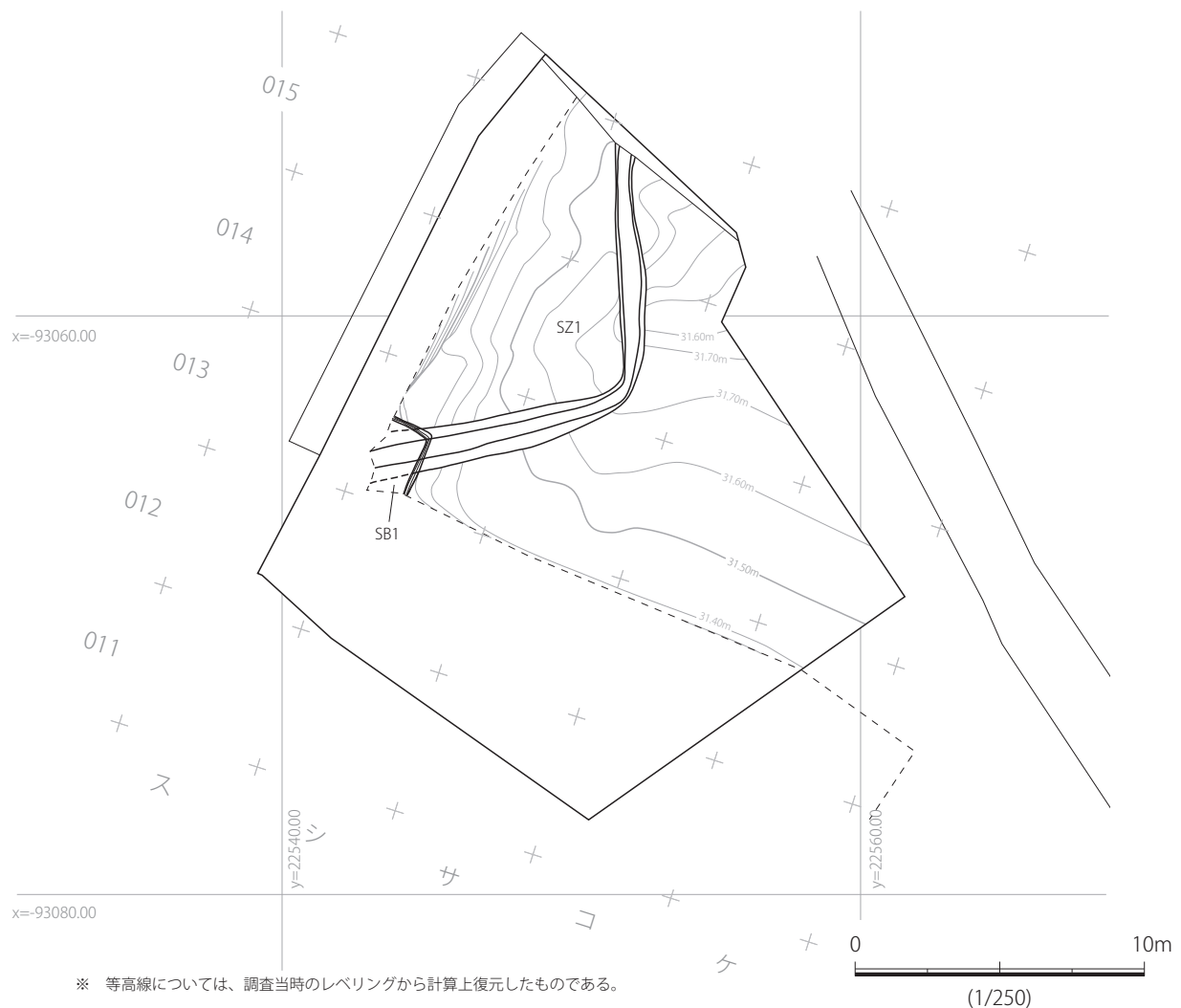
調査に至る経緯 宗教法人妙蓮寺代表役員 則武海園氏は、昭和61年3月、富士市増川692-2番地において土とり工事を計画した。当該地は、「周知の埋蔵文化財包蔵地」宮添遺跡の範囲内であり、現状の畑地からは土器の破片が多数散布していることが確認されていることから、富士市教育委員会は、則武海園氏からの埋蔵文化財調査指導依頼を受けて、同地点の発掘調査を実施するに至った。

本発掘調査 調査は富士市教育委員会教育長 小川清のもと、文化体育課職員が担当することとなり、昭和61年

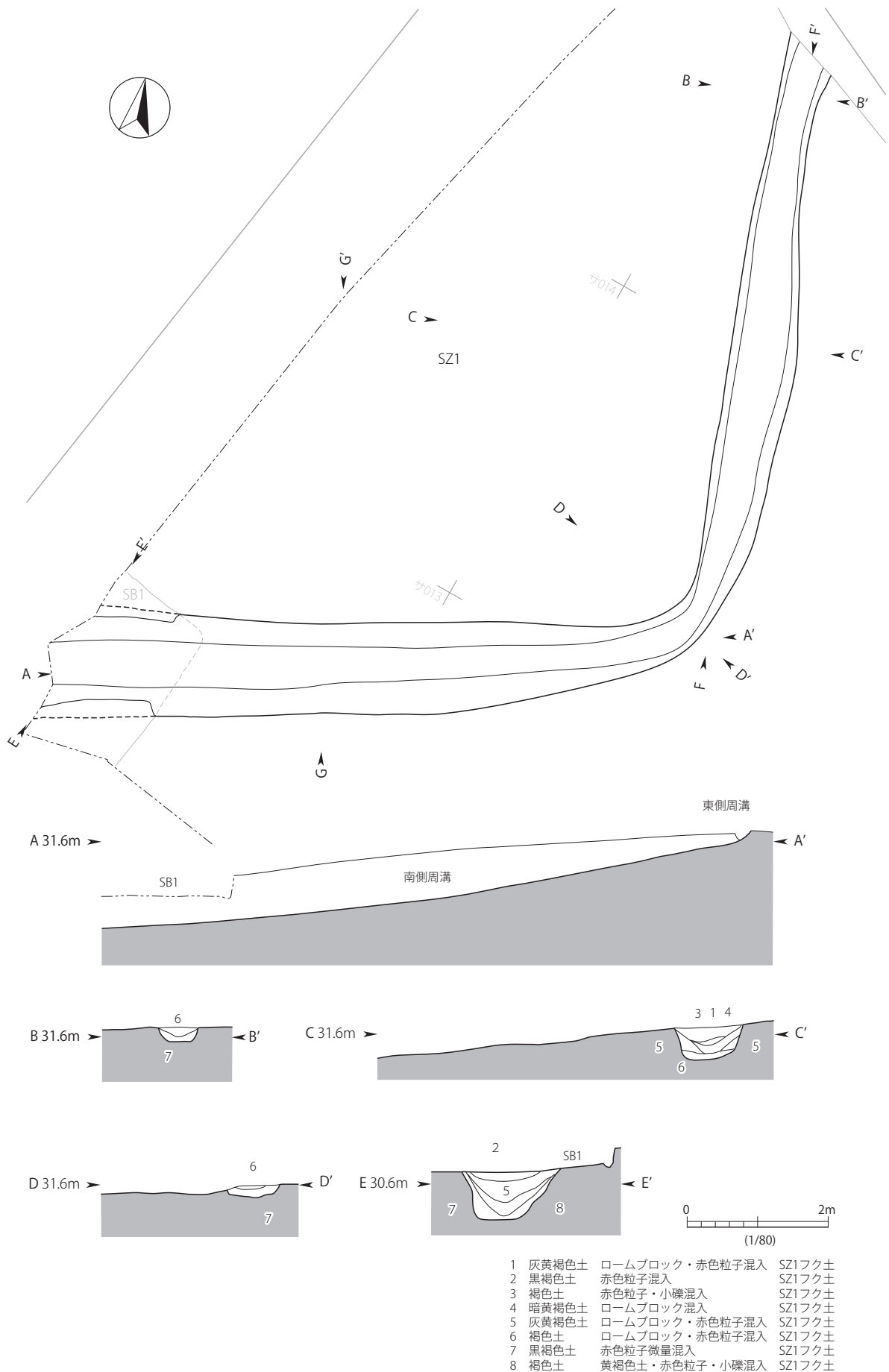
3月5日から昭和61年3月8日の4日間にわたり発掘調査を実施した。

本発掘調査では、方形周溝墓1基及び竪穴建物跡1軒を検出・完掘した。

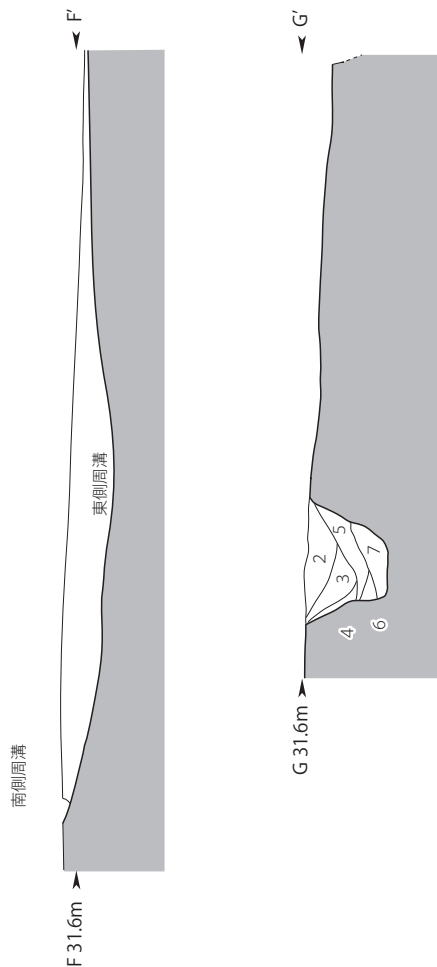
整理作業 整理作業は調査終了後、基礎整理を断続的に行い、平成23年4月1日より本格的な整理作業を再開し、本書の刊行をもって終了した。測量基準点については、調査当時は任意基準点を使用していたが、平成6年度、隣接するD地区の発掘調査に伴い5m方眼のグリッドが設



第6図 A地区全体図



第7図 SZ1遺構実測図



定されたことから、このグリッドを図上にて合成させ整理作業を行うものとした。なお、第2節第3項にて報告する土器については、宗教法人妙蓮寺において保管されている。

成果の一部は、『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』にて報告されているが、本書と異なる見解については本書を優先させるものとする。

調査の体制 本章で報告する宮添遺跡A地区の本発掘調査は、以下の体制で実施した。

調査主体：富士市教育委員会

教育長 小川 清

教育次長 秋山武雄

事務局 文化体育課

課長 深澤清一 課長補佐 鈴木政俊

係長 山本宣親 主事 佐野誠一

調査担当 主事 平林將信 志村 博

第2節 遺構と遺物

第1項 方形周溝墓

S Z 1

遺構（第7図・図版1・2）

位置：サ013・サ014・サ015・シ013・シ014・シ015グリッド

重複関係：(古) S Z 1 → S B 1 (新)

主軸方位：N - 11.0° - W

残存状況：遺構の上面は削平されていて、周溝のみが検出され、埋葬施設は確認できなかった。周溝は、東側・南側はとぎれることなく検出されたものの、西側・北側については調査区域外のため明らかではない。残存値で、東西6.9m、南北7.4mを測る。

周溝幅は、東側において最大80cm、南側では1mを測り、南東コーナーに向かって幅が減少し40cmとなる。また、周溝底についても、南東コーナーに向かって標高が上がっている為、東側では深さ50cm、南側では60cmを測

るにも関わらず、南東コーナー付近では、15cm程度しか存在しない。

覆土：周溝覆土は自然堆積したものと考えられ、下層部にロームブロックが多く確認される箇所がある。

出土遺物：図化出来た資料はない。

所見

古墳時代前期の遺構と考えられる。

第2項 竪穴建物跡

S B 1

遺構（第8図・図版2）

位置：シ013グリッド

重複関係：(古) S Z 1 → S B 1 (新)

主軸方位：N - 23.0° - E

残存状況：西側及び南側は削平を受けているため、建物跡

北東部のみ検出された。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西 1.6 m、南北 2.7 m の最大値を測る。焼土施設及び柱穴等は確認できないが、南側床面の広い範囲で粘土と炭化物が混入した灰褐色土が検出されることから、南東部にカマドが存在した可能性がある。

覆土：大淵スコリアを含む暗褐色土による自然堆積層

壁溝：幅 20cm、深さ 5cm の壁溝が検出範囲全体に確認される。

出土遺物：(第9図・図版36)

土師器片 2 点を図示した。1 は駿東坏で体部に墨書がみられるが、判読することが出来ない。2 は土師器甕の口縁部である。内外面共にヨコナデが施される。

所見

出土遺物から、9世紀から10世紀の建物跡と考えられる。

第3項 A地区遺構外出土遺物 (第9図・図版36)

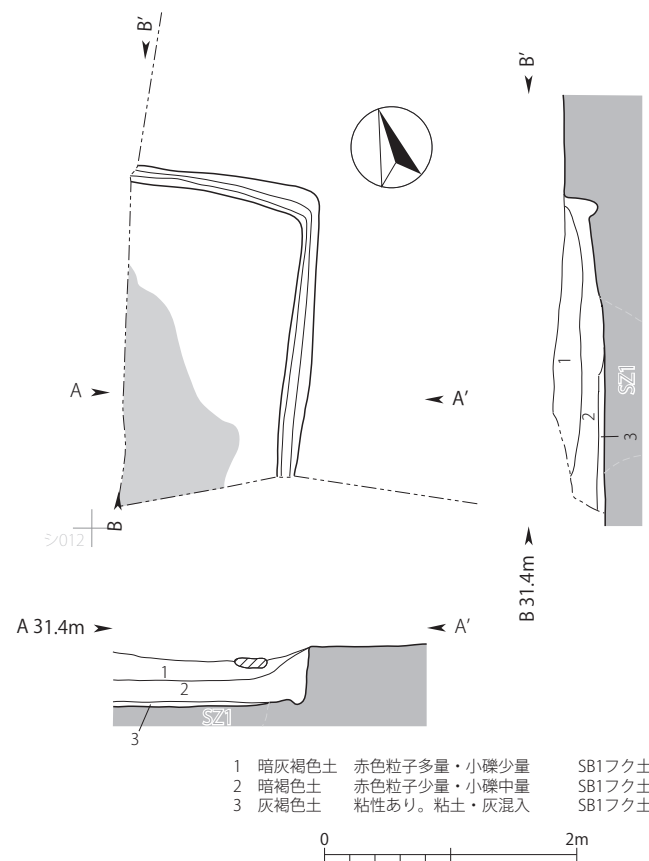
3は、調査前に土地管理者が同地点において土地掘削作業をした際に出土した土師器壺である。胴部最大径は胴中央からやや下半に有する。口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。外面全体に縦方向の丁寧なヘラミガキを施し、底部付近には、一部ヘラケズリの痕跡が残る。

第3節 A地区の調査成果

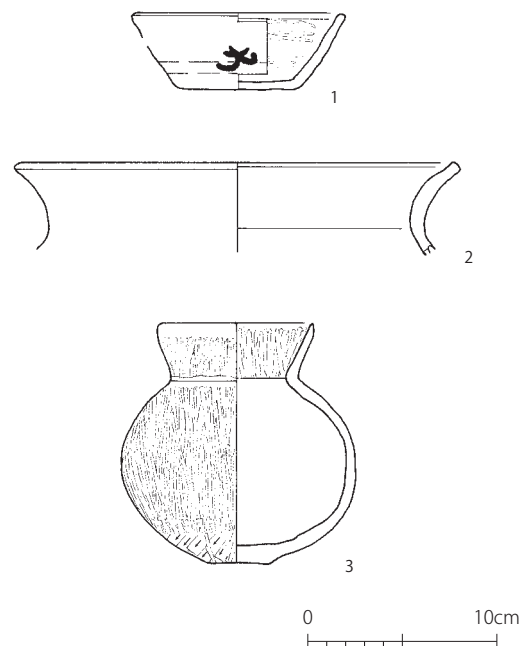
宮添遺跡A地区は、東 50 m 付近の尾根稜線から南西方向に広がる緩斜面に位置し、標高は 30 m を超える。明治時代以前は須津川扇状地を西に望む丘陵端部であったが、その後A地区西側は、開発又は天災等の要因で崩落し現在の地形となったものと思われる。

調査の結果、調査区東側は、耕地化等の要因により削平が激しく遺構は確認できず、調査区西側には1辺が7mを超える規模を持つ方形周溝墓SZ1と調査区南西端に平安時代の竪穴建物跡SB1が検出されたのみである。

方形周溝墓は出土遺物がないため、明確な時期決定ができないのは残念である。しかし、東方 60 m の同一標高上にC地区SZ1が検出されていることや扇状地を見下ろす丘陵端部という立地から、削平されているA地区西側を含めて群在していた可能性をもつ。



第8図 SB1 遺構実測図



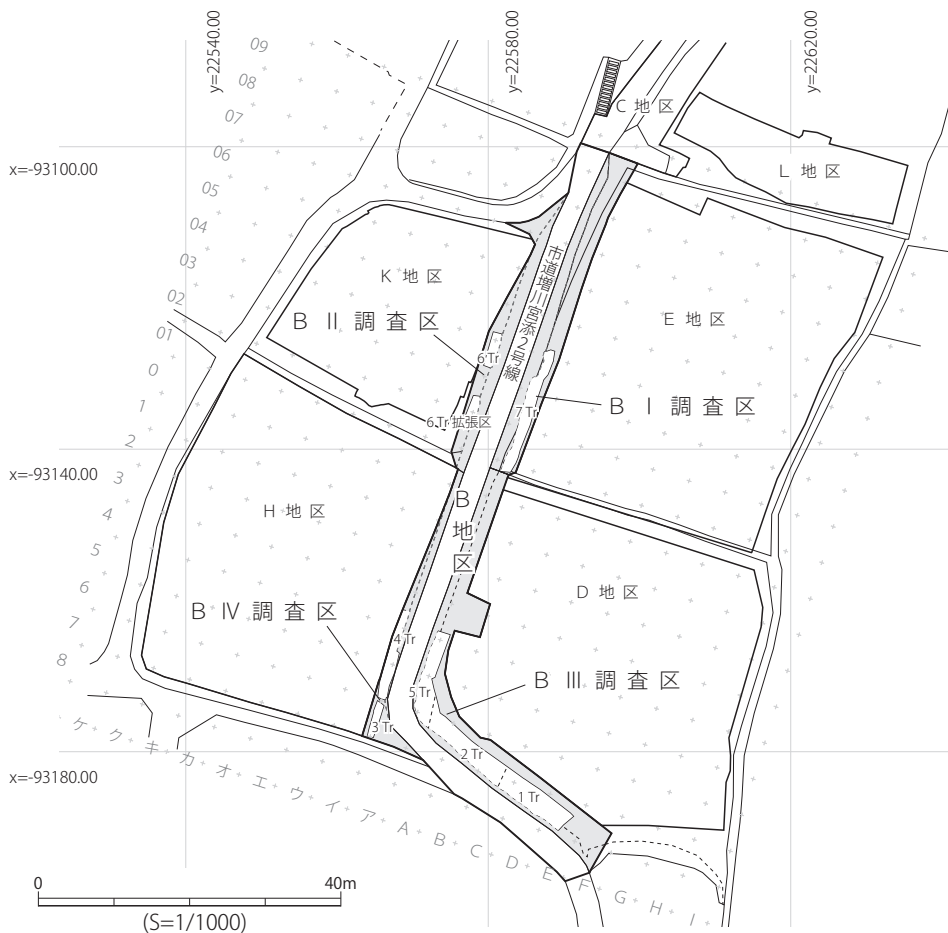
第9図 A地区 遺物実測図

第3章 B地区の調査

第1節 調査の経緯と経過

調査に至る経緯 平成5年、富士市（市長 鈴木清見）は、富士市増川地内に位置する増川宮添2号線の拡幅を目的とする道路改良工事を計画した。該当地は、「周知の埋蔵文化財包蔵地」宮添遺跡の範囲内であることから、富士市教育委員会は、平成5年8月27日付けで富士市（建設部道路建設課）から提出された文化財保護法（昭和25年法律第214号）に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」を静岡県教育委員会に進達した。それを受け、平成5年10月13日付けで静岡県教育委員会から、文化庁の指導により工事着工前に発掘調査を実施するよう通知がなされた。

本発掘調査 調査は富士市教育委員会教育長 山本厚のもと、文化振興課職員が担当することとなり、平成5年10月18日から平成6年1月14日まで、700㎡を調査した。道路は、切り通しであることから道路両側の法面を精査し、土層堆積状況を確認した。遺構は拡幅部分にしか残存しないことが判明したため、拡幅部分に7箇所のトレンチを配置し調査を実施した。また、遺構の残存状況等から、必要に応じてトレンチを拡張した結果、6トレンチにおいては拡張区を設置し、隣接する1・2・5トレンチについてはそれぞれのトレンチの間をすべて調査することとなった。



第10図 調査区トレンチ配置図

調査の結果、竪穴建物跡 28 軒等を検出・完掘し、平成 6 年 1 月 31 日、その結果を静岡県教育委員会教育長に「発掘調査終了報告」として送付した。また、平成 6 年 1 月 19 日、遺失物法に基づき、富士警察署長宛に埋蔵物の発見届を提出するとともに、同日、静岡県教育委員会に埋蔵文化財保管証を提出した。

整理作業 整理作業は調査終了後、基礎整理を断続的にい、平成 23 年 4 月 1 日より本格的な整理作業を再開し、本書の刊行をもって終了した。測量基準点については、調査当時は任意基準点を使用していたが、平成 6 年度、隣接する D 地区の発掘調査に伴い 5 m 方眼のグリッドが設定されたことから、このグリッドを図上にて合成させ整理作業を行うものとした。

期間中に出土土器の洗浄・接合・復原、遺物の図化作業、遺構図・遺物図等の編集、各図のトレース作業、観察表等の作成、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらにこれらを編集して報告書を作成した。本章で報告する遺物・図面は富士市教育委員会にて保管・管理されている。

また宮添遺跡においては、B 地区の調査終了後、隣接する D 地区、E 地区、H 地区、K 地区の調査が行われている。これらの地区には、B 地区と同一遺構を検出している事例も確認されていることから、整理作業の段階において B 地区を 4 つの調査区に細分し、表 2 のとおり関係性のある他の地区と合わせて整理検討することとした。ただし、他地区において既に報告されている内容と、本書と異なる見解については本書を優先するものとする。

第 2 表 B地区における竪穴建物

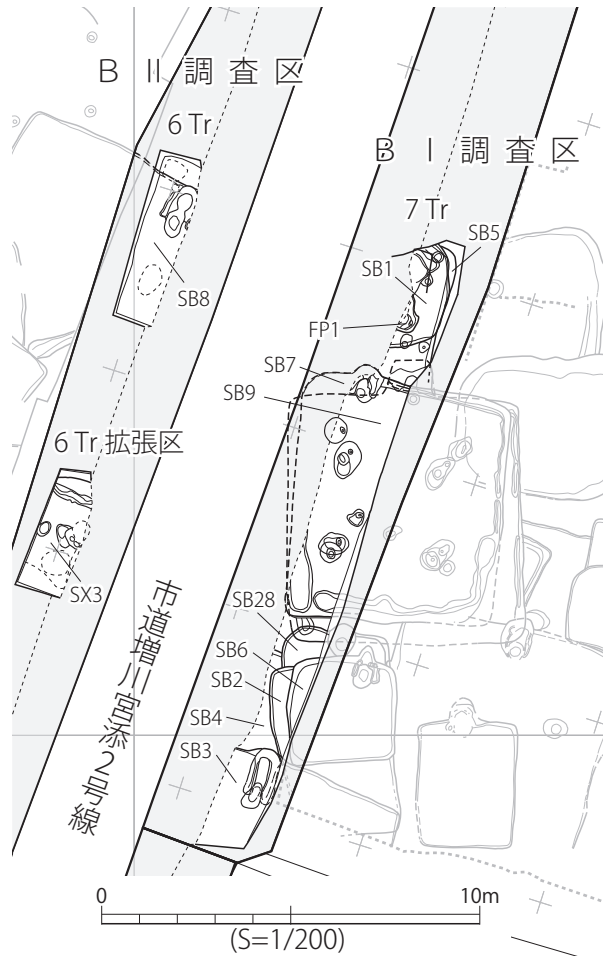
遺構	調査区	時期	グリッド	規 模		炉・加ト	主軸	同一遺構	掲載頁
				東西	南北				
S B 27	B III	弥生時代後期	D8・E8	7.1	(5.7)	炉	N-12.0° -E	D 地区 SB39	p.42
S B 25	B III	古墳時代前期	D8	3.6	(3.6)	?	N-5.0° -W		p.41
S B 21	B III	古墳時代中期後半	B7・C7	9.5	(5.0)	?	N-20.0° -E	D 地区 SB30	p.33
S B 15	B IV	古墳時代中期後半	I7・I8	(1.1)	(1.7)	?	N-21.5° -W		p.49
S B 18	B IV	古墳時代中期後半	A5・I5	(2.0)	(3.1)	?	N-30.0° -E		p.52
S B 23	B III	古墳時代中期後半?	B7・C7	(1.6)	(2.0)	?	N-11.0° -W		p.38
S B 3	B I	古墳時代中期後半	A0・A01	4.8	(3.0)	北壁中央	N-14.0° -E	E 地区 SB44	p.20
S B 4	B I	古墳時代中期末以降	A01			?	不明		p.20
S B 9	B I	古墳時代後期	A02・A03	6.2	6.8	北壁中央	N-2.0° -W	E 地区 SB13	p.17
S B 8	B II	古墳時代後期	A03・I04	(5.6)	(5.8)	北壁中央	N-32.0° -E	K 地区 SB5	p.24
S B 7	B I	古墳時代後期～7世紀	A02・A03	5.6	6.6	北壁西より	N-6.0° -E	E 地区 SB23	p.16
S B 16	B IV	7世紀後半～8世紀初頭	I6	(2.4)	4.0	?	N-36.5° -E		p.49
S B 12	B III	8世紀	A6・A65	(1.8)	2.8	北壁	N-35.0° -E		p.29
S B 13	B III	8世紀	A6	3.6	(3.0)	東壁北端	N-68.0° -E	D 地区 SB18	p.30
S B 26	B III	8世紀	D8	3.4	3.4	東壁南より	N-79.0° -E		p.40
S B 24	B III	8世紀	D8	3.2	(3.1)	北壁東より	N-1.0° -W		p.40
S B 22	B III	8世紀	D8	(1.3)	(1.4)	?	N-13.0° -W		p.40
S B 17	B IV	8世紀	I6	(1.3)	(1.8)	東壁	N-138.0° -E		p.51
S B 28	B I	9世紀以前	A01	2.9	(1.0)	北壁中央	N-2.0° -E	E 地区 SB46b	p.20
S B 2	B I	9世紀	A01	3.3	4.5	北壁?	N-3.0° -W	E 地区 SB46a	p.19
S B 6	B I	9世紀前半	A01	3.0	2.8	北壁東より	N-1.0° -W	E 地区 SB16	p.19
S B 14	B III	9世紀	A6・A7	4.4	3.9	東壁南より	N-113.0° -E	D 地区 SB17	p.31
S B 11	B III	9世紀	A4			?	不明		p.28
S B 20	B IV	9世紀	I4・I5	(2.7)	3.4	?	N-49.0° -E		p.54
S B 10	B III	9世紀	A5・A5	(1.3)	(3.7)	東壁南端	N-96.0° -E		p.27
S B 19	B IV	9世紀末～10世紀	I4・I5	(0.8)	(3.1)	?	N-10.0° -E		p.53
S B 5	B I	10世紀	A03・A04	(1.8)	(5.9)	—	N-13.5° -E		p.14
S B 1	B I	10世紀以降	A03・A04	(1.6)	(2.7)	—	N-0.5° -E		p.13

第2節 B I 調査区の調査成果

調査概要 B I 調査区は、道路東側の北部分、7トレンチを中心とした調査区でE地区（平成10年度調査）と隣接する箇所である。それぞれの調査で検出された遺構には、次のとおり同一遺構が存在する。ただし、E地区SB46については、調査報告（2011年3月『宮添遺跡Ⅲ』）において1軒の竪穴建物跡と報告したが、B地区の遺構を含めて整理検討した結果、北側と南側で別れる2軒の建物跡であったことを認識した。

（B I 調査区とE地区で検出された同一遺構）

B I 調査区	E地区
SB7	= SB23
SB9	= SB13
SB6	= SB16
SB2	= SB46 a
SB28	= SB46 b
SB3	= SB44



第11図 B I・B II 調査区全体図

第1項 竪穴建物跡

SB1

遺構（第12図・図版2）

位置：A03・A04グリッド 7トレンチ

重複関係：（古）SB5→SB1（新）

主軸方位：N-0.5°-E

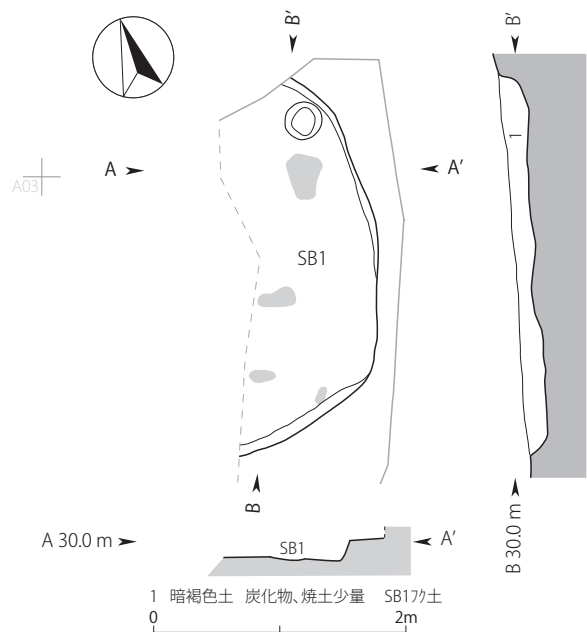
残存状況：西側は道路法面となり削平されている。平面形は楕円形を呈し、検出範囲内で東西1.6m、南北2.7mを測る。燃焼施設は検出されていない。

覆土：暗褐色土による自然堆積層で大淵スコリアは含まない。

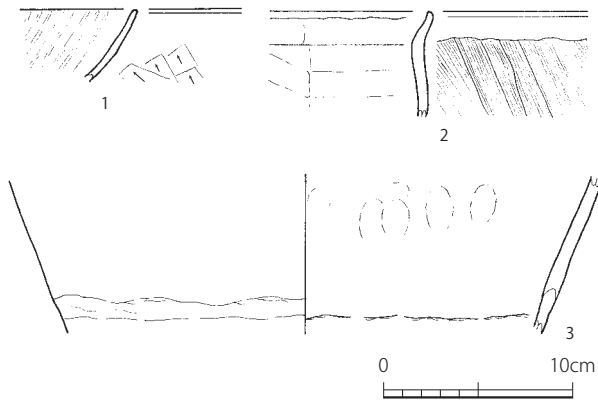
その他の遺構：床面には炭化物が点在する。また、ピット1基を検出。

出土遺物：（第13図・図版13）

土師器3点（1～3）を図示した。1の坏は、外面はナメ方向のケズリ、内面には放射状のミガキが見られ、甲



第12図 SB1 遺構実測図



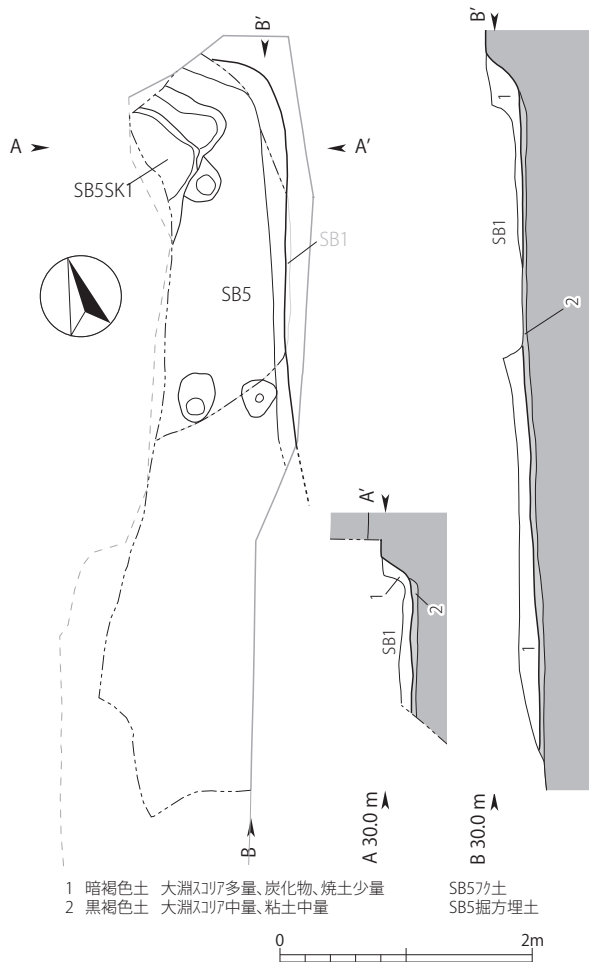
第13図 SB1 遺物実測図

斐型の坏と考えられる。2の小型甕は外面に荒いハケメが施され、口唇部は内側に若干摘み上げられている。3の長胴甕は胴下半の破片と考えられる。成形時の乾燥工程に対応すると考えられるヨコナデが外面に観察され、内面は輪積み痕が明瞭に残る。

3の時期決定は困難だが、1・2は9世紀後半以降と考えられる。

所見

遺構の重複関係から、10世紀以降の建物跡と考えられる。



第14図 SB5 遺構実測図

SB5

遺構 (第14図・図版2)

位置: A 03・A 04 グリッド 7トレンチ

重複関係: (古) SB5 → SB1 (新)

主軸方位: N - 13.5° - E

残存状況: 西側は道路法面となり削平されている。平面形は不整形な長方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西1.8m、南北5.9mの最大値を測る。焼土施設は検出されていない。

覆土: 大淵スコリアを多量に含む暗褐色土による自然堆積層。

貼床: 厚さ5cm程度の暗褐色土が、検出範囲全面に認められる。

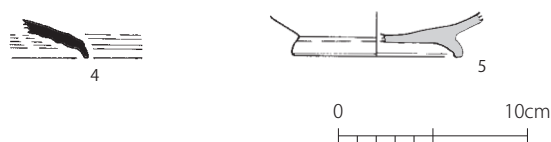
その他の遺構: 床面北東部に径70cmの土坑1基 (SB5SK1) と、その他にピット3基を検出。

出土遺物: (第15図・図版13)

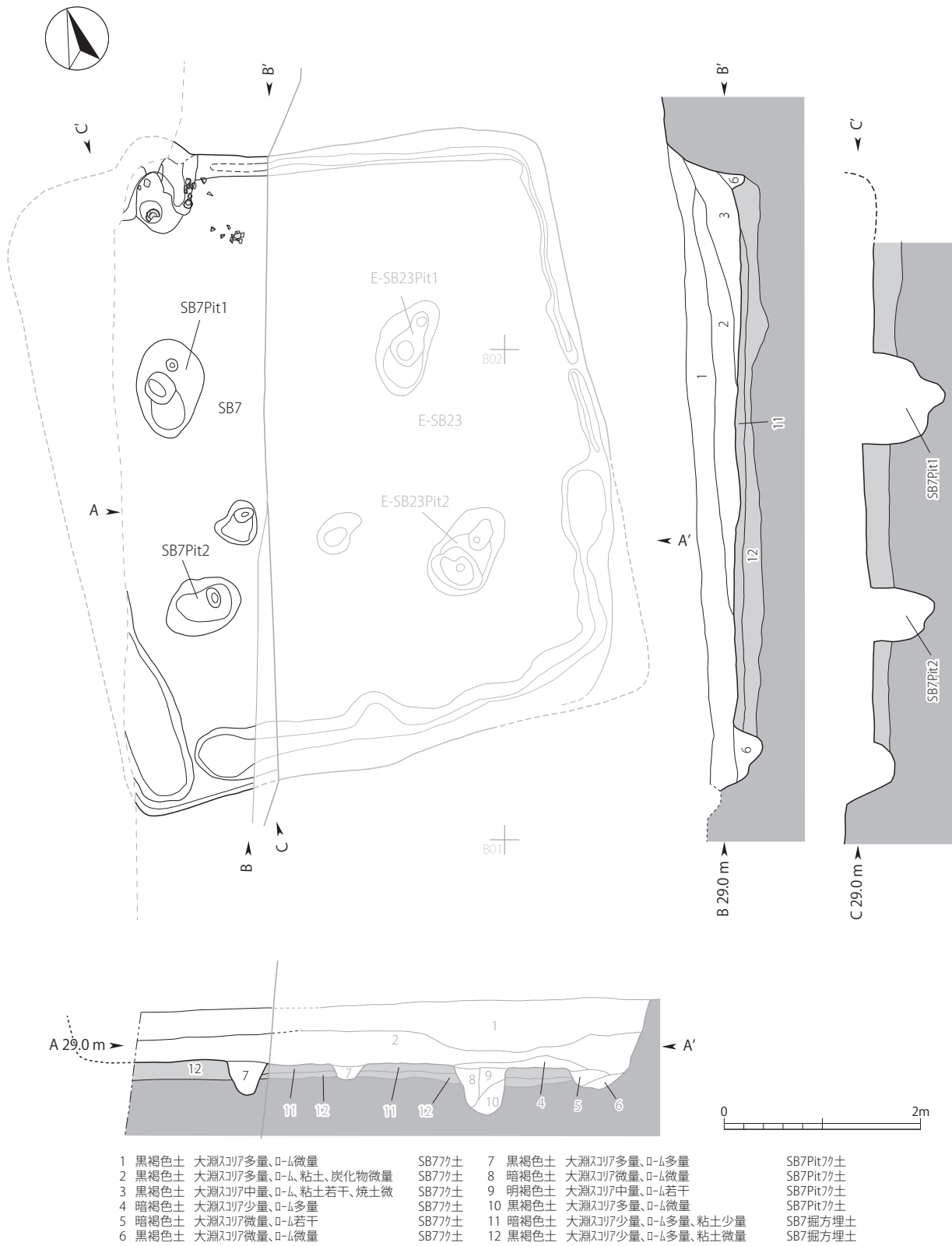
須恵器1点、灰釉陶器1点を図示した。5は碗の破片で底部回転糸切り後に、高台部分は内面から強くナゲられ内湾する。また、内面端部には、段差を有する。小破片のため、外面に釉は、観察されないものの、内面には明確に観察される。O-53型式併行期と考えられる。

所見

出土遺物から、10世紀の建物跡と考えられる。



第15図 SB5 遺物実測図



第16図 SB7 遺構実測図

SB7

遺構 (第16・17図・図版2)

位置: A 02・A 03 グリッド 7 トレンチ

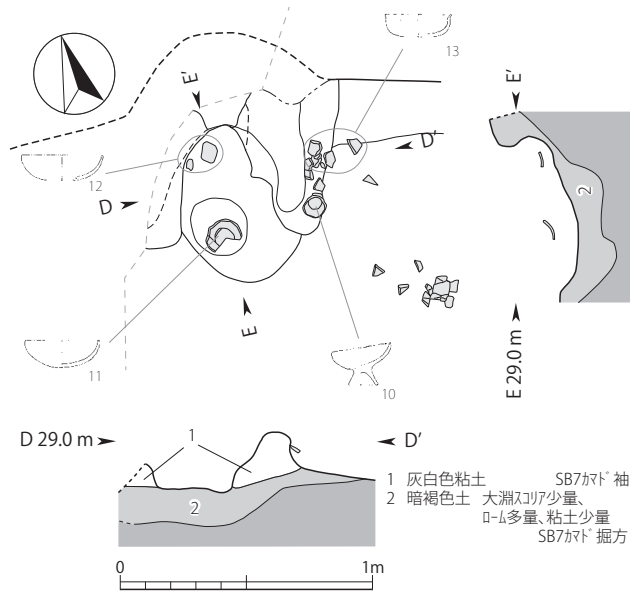
遺構対応: E地区SB23と同一遺構となる。

重複関係: (古) SB9 → SB7 (新)

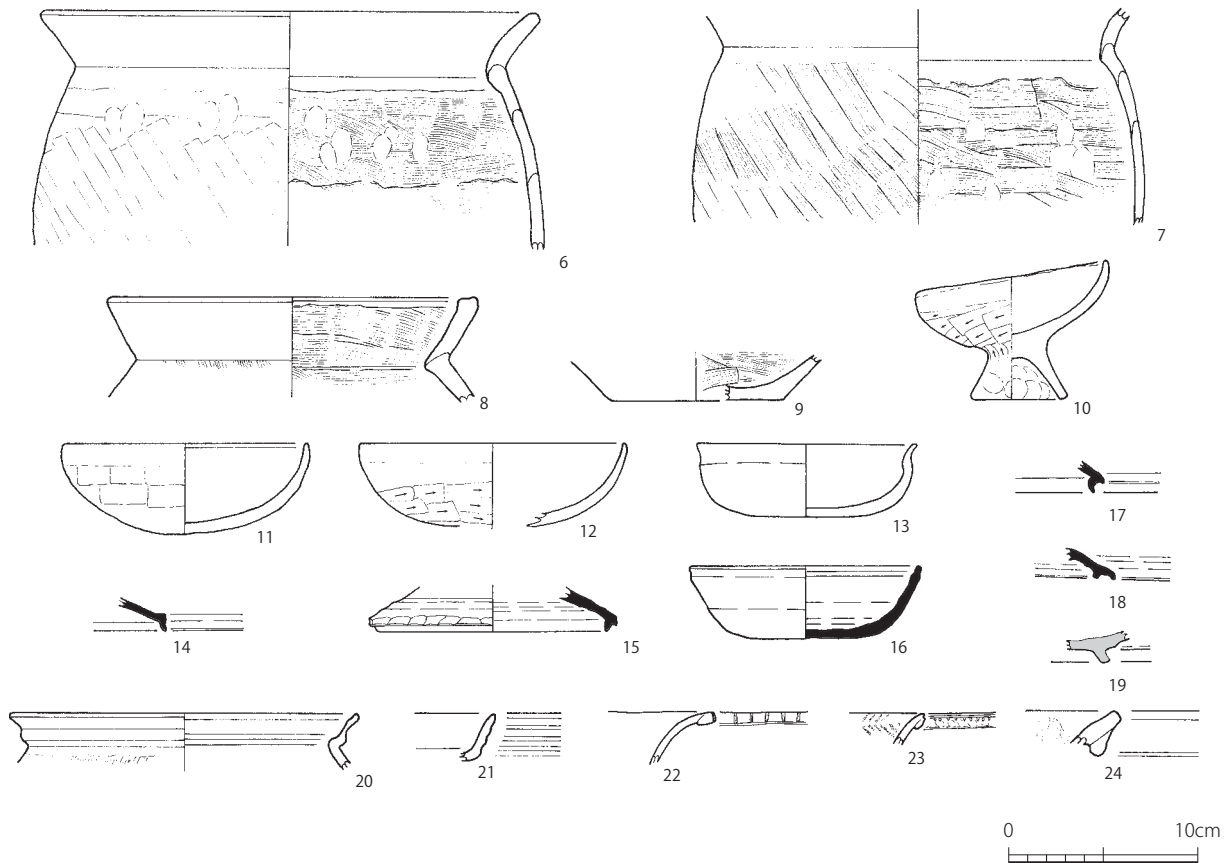
主軸方位: N - 6.0° - E

残存状況: 西側は道路法面となり削平されている。平面形はやや不整形な方形を呈する。遺構の規模は、E地区SB23と合わせると東西5.6m、南北6.6mを測る。

覆土: 大淵スコリアを多量に含む黒褐色土による自然堆積層。
貼床: 厚さ30cm程度の暗褐色土が、検出範囲全面に認められる。



第17図 SB7 カマド実測図



第18図 SB7 遺物実測図

壁溝：幅 30～40cm、深さ 20cm の不整形な壁溝が全体をめぐる。南側が広がる。

柱穴：4基（S B 7 Pit 1、S B 7 Pit 2、E-S B 23 Pit 1、E-S B 23 Pit 2）検出。径 70cm～1 m、深さ約 60cm を測る。

その他の遺構：ピット 2 基検出

カマド：北壁西よりに存在。西側は削平されてはいるが袖部・燃烧室の一部が遺存する。

中央内寸幅は 35cm を測る。燃烧室及び右袖東側付近からは遺物（10～13）がまとまって出土している。

出土遺物：（第 18 図・図版 13）

土師器 13 点、須恵器 5 点、灰釉陶器 1 点を図示した。6～8 は甕の口縁部片だが、形態、調整に差異が認められる。6 は、長胴を呈する甕と考えられ、外面はナナメ方向の板状工具によるナデ調整、内面はヨコ方向のハケ調整で所々にユビオサエが認められる。7 も、6 同様、長胴を呈する甕と考えられ、内面調整は共通するものの、外面はナナメ方向のハケメ調整が施されている。また、口縁部の接合方法にも違いが認められ、6 は頸部内面に丸みを持ちながら、なだらかに外方に広がる一方、7 は比較的明確な頸部を作り出している。6・7 とも口縁部内面はナデ調整で仕上げられている。一方、8 の内面はヨコハケが施され、

SB9

遺構（第 20 図・図版 3）

位置：A 02・A 03 グリッド 7 トレンチ

遺構対応：E 地区 S B 13 と同一遺構となる。

重複関係：（古）S B 9→S B 7（新）

主軸方位：N-2.0°-W

残存状況：西側は道路法面となり削平されている。上層は重複する S B 7 に削平されている。平面形は方形を呈する。遺構の規模は、E 地区 S B 13 と合わせると東西 6.2 m、南北 6.8 m を測る。

覆土：大淵スコリアを含む黒褐色土による自然堆積層。

貼床：厚さ 10cm 程度の黒褐色土が、検出範囲全面に認められる。

壁溝：B 地区では南西コーナーに一部検出されたのみであるが、E 地区 S B 13 では東側に幅 20cm 程の壁溝が検出されている。

柱穴：4基（S B 9 Pit 1、S B 9 Pit 2、E-S B 13 Pit 1、E-S B 13 Pit 2）検出。径 40～80cm、深さ約 60cm

端部のみ丁寧にナデ調整が行われる。

10 は高坏で全体的に荒いナデ、ケズリ調整により仕上げられ、坏部の形態や調整は 11・12 の坏の破片と共通する。11～13 は坏の破片でナデ調整ののち、底部付近にはケズリが施される。11・12 は口縁端部が内湾するものの、13 については屈曲し外方へ広がる。

14・15・17・18 は須恵器の坏蓋、16 は碗である。15 の端部には連続して打欠いたような痕跡が認められ、道具としての二次的な利用が想定される。いずれも、7 世紀後半のものと考えられる。

19 の灰釉陶器は小破片で内面のみに釉が認められる。回転糸切り後未調整。高台をつける際のナデが丁寧でないため、貼り付けた際の段差が残る。

21 の土師器は外面に凹線を有する破片である。甕の破片であれば古墳時代前期の北陸南西部系の可能性が考えられるが、器壁が薄く、古墳時代後期の坏身の破片とも考えられる。

所見

複数時期の遺物が見られるが、カマド付近から出土した遺物により、古墳時代後期後半から 7 世紀前半頃の建物跡と考えられる。

を測る。

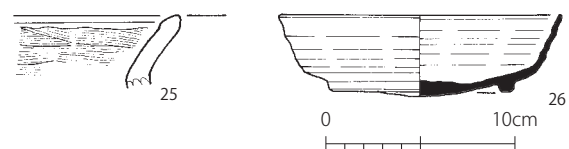
カマド：北壁中央に存在。S B 7 により削平されていて、燃烧室の北側の一部のみ残存する。

出土遺物：（第 19 図・図版 14）

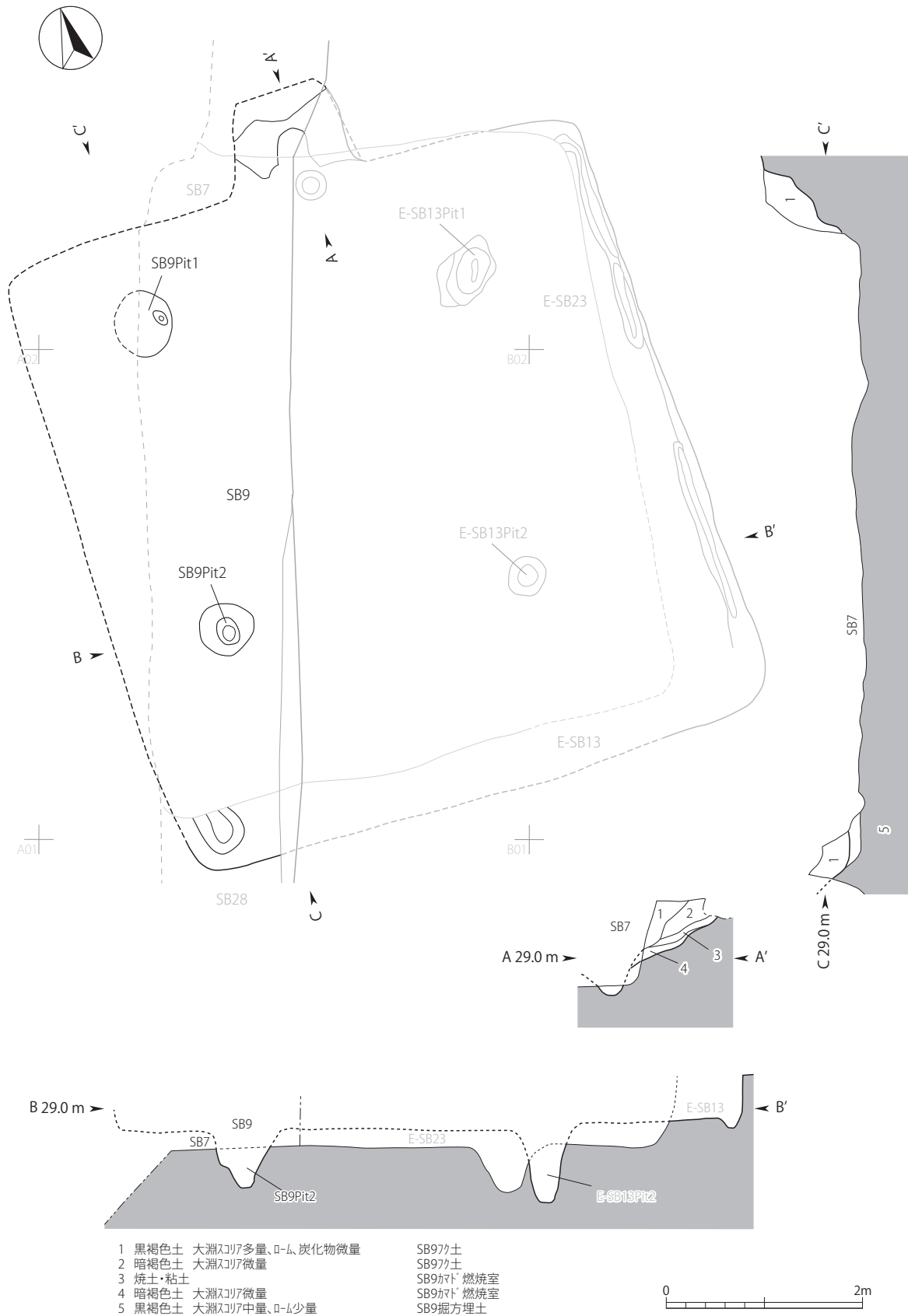
土師器 1 点、須恵器 1 点を図示した。25 は「駿東甕」の破片で内面ハケメ調整ののち、口唇部が丁寧にナデられている。26 は有台坏身で、底部外面の中央からやや外れたところに一条の沈線が認められる（図版 PL.14）。いずれも 8 世紀前半のものと考えられる。

所見

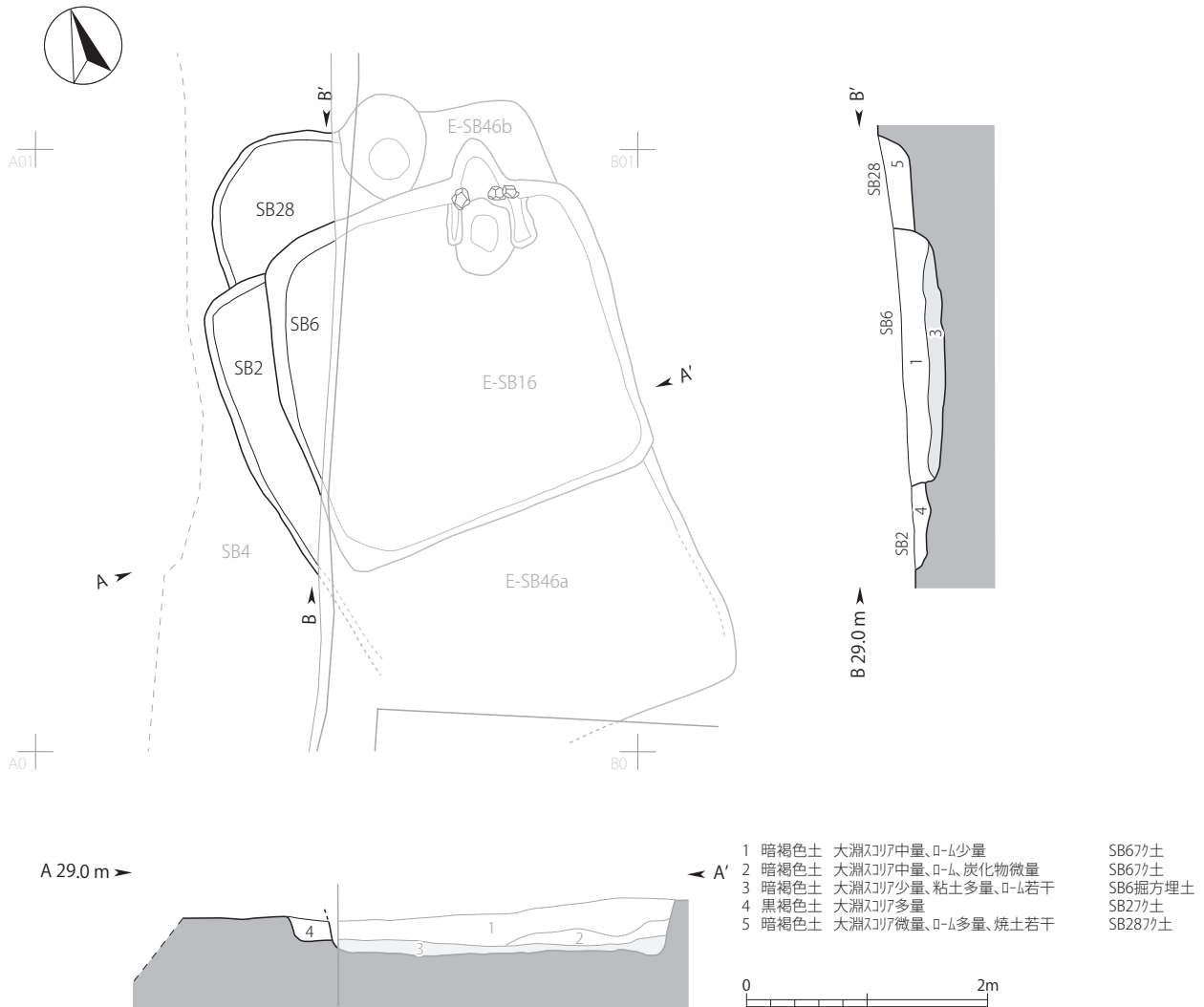
8 世紀前半の遺物も認められるが、遺構の重複関係やカマドの存在により、古墳時代後期の建物跡と考えられる。



第 19 図 SB9 遺物実測図



第20図 SB9遺構実測図



第21図 SB6・SB2・SB28 遺構実測図

SB6

遺構（第21図・図版3）

位置：A 01 グリッド 7トレンチ

遺構対応：E地区SB16と同一遺構となる。

重複関係：(古) SB28→SB2→SB6 (新)

主軸方位：N-1.0°-W

残存状況：平面形は隅丸方形を呈する。遺構の規模は、E地区SB16と合わせると東西3.0m、南北2.8mを測る。

覆土：大淵スコリアを含む暗褐色土による自然堆積層。

貼床：厚さ10cm程度の暗褐色土が、検出範囲全面に認められる。

カマド：北壁東寄りD地区に存在。燃烧室の掘り込みと袖部が検出され、全長115cm、中央内寸幅48cm、中央外寸幅75cmを測る。燃烧室は床面から10cm程度掘り込まれている。

出土遺物：図化出来た資料はない。

所見

検出状況やE地区SB16の出土遺物から、9世紀前半の建物跡と考えられる。

SB2

遺構（第21図・図版3）

位置：A 01 グリッド 7トレンチ

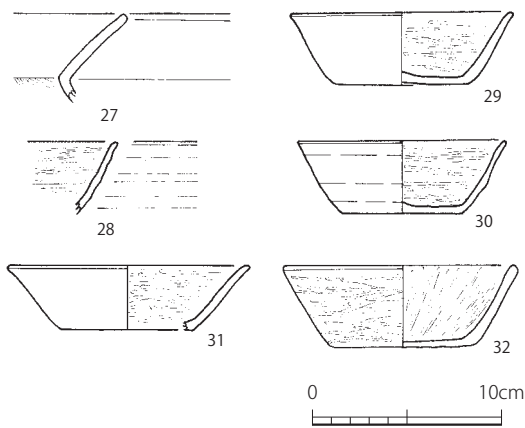
遺構対応：E地区SB46aと同一遺構となる。

重複関係：(古) SB28→SB2→SB6 (新)

主軸方位：N-3.0°-W

残存状況：東側はSB6-E地区SB16に削平されている。平面形は長方形を呈する。遺構の規模は、E地区SB46aと合わせると東西3.3m、南北4.5mを測る。燃烧施設は検出されない。

覆土：大淵スコリアを多量に含む黒褐色土による自然堆積



第22図 SB 2 遺物実測図

層。

貼床：E地区に位置する南東部にのみ、黄褐色ロームを多量含む黒褐色土が認められる。

出土遺物：(第22図・図版14)

土師器6点を図示した。27は甕もしくは甑の破片と考えられる。胎土に白色粒子を多量に含み、その結果、器面荒れが著しく、調整は明確ではない。他はいずれも坏の破片である。いずれも内面に丁寧なミガキが施されるが、なかでも、32には放射状のミガキが見られる。外面にケズリ調整は認められない。9世紀のものと考えられる。

所見

9世紀の建物跡と考えられる。

SB 28

遺構(第21図・図版3)

位置：A 01 グリッド 7トレンチ

遺構対応：調査時は土坑として検出したが、E地区SB 46 bと同一遺構となると判断し、竪穴建物跡に変更した。

重複関係：(古) SB 28 → SB 2 → SB 6 (新)

主軸方位：N - 2.0° - E

残存状況：南側はSB 6・SB 2に削平されている。平面形は不整形な隅丸方形を呈する。遺構の規模は、E地区SB 46 bと合わせると東西2.9m、南北は検出範囲最大で1.0mを測る。

覆土：大淵スコリアを微量に含む黒褐色土による自然堆積層。

カマド：E地区に位置する北壁中央に存在。燃烧室の掘り込みのみ検出する。

出土遺物：図化出来た資料はない。

所見

遺構の重複関係により、9世紀以前の建物跡と考えられるが、それ以上は明らかではない。

SB 4

遺構(第23図)

位置：A 01 グリッド 7トレンチ

重複関係：(古) SB 4 → SB 28 → SB 2 → SB 6 (新)

主軸方位：不明

残存状況：西側は道路法面となり、また重複するSB 28・SB 6・SB 2に大部分を削平されており、床面の一部を検出したのみで残存状況は良くない。平面形、規模等も不明である。

覆土：大淵スコリアを多量に含む黒褐色土による自然堆積層。掘方埋土には大淵スコリアは含まれない。

貼床：厚さ15cm程度の褐色土が、検出範囲全面に認められる。

出土遺物：図化出来た資料はない。

所見

SB 3との重複関係が明確でないため時期の断定はできないが、大淵スコリアの堆積状況から古墳時代中期末以降の建物跡と考えられる。

SB 3

遺構(第23・24図・図版3)

位置：A 0・A 01 グリッド 7トレンチ

遺構対応：E地区SB 44と同一遺構となる。

重複関係：(古) SB 3 → SB 2 (新)

主軸方位：N - 14.0° - E

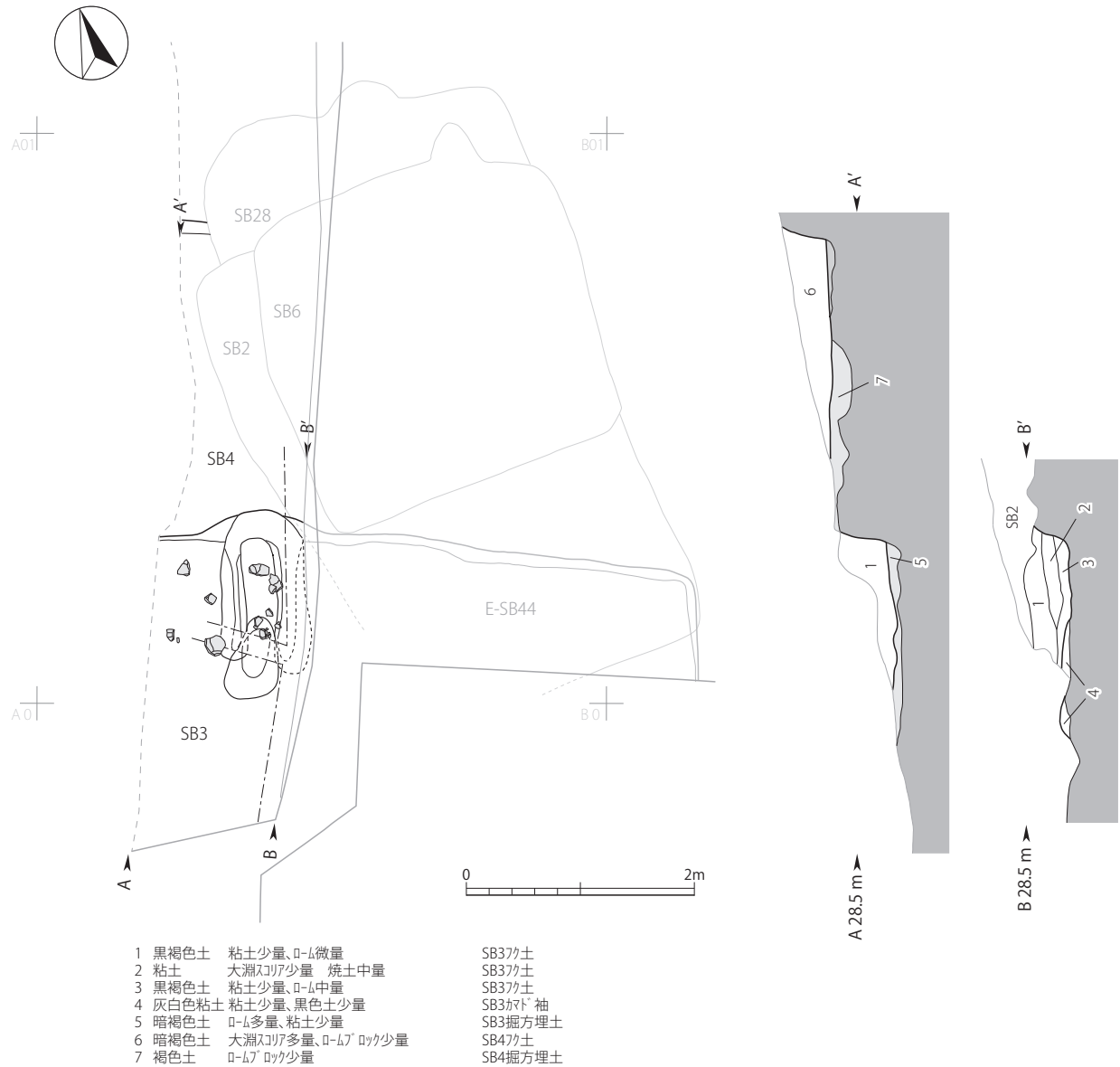
残存状況：西側は道路法面、南側は地形的に削平されている。平面形は方形を呈し、E地区SB 44と合わせると東西4.8m、南北3.0mの最大値を測る。

覆土：黒褐色土による自然堆積層。大淵スコリアは殆ど混入しない。

貼床：厚さ10cm程度で、黄褐色ロームを多量含む暗褐色土が認められる。

カマド：北壁に存在。比較的良好に残存する。全長は170cm、中央内寸幅25cm、中央外寸幅85cmを測る。燃烧室の掘り込みは床面から15cmの深さをもつ。燃烧室には支脚石が残存し、カマド周辺からはまとまって土師器片(34～36)が出土する。

出土遺物：(第25図・図版14)



第23図 SB3・SB4 遺構実測図

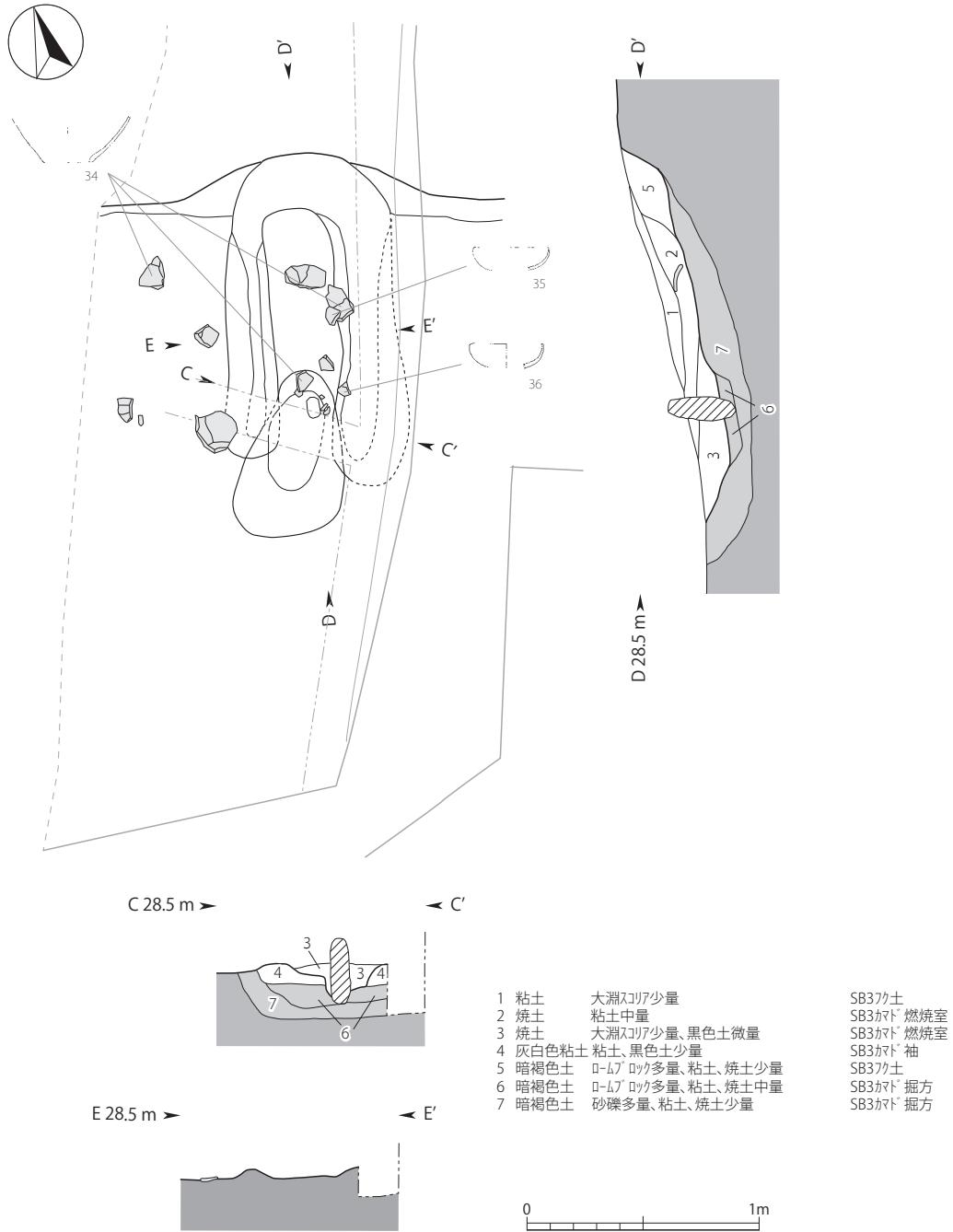
土師器7点を図示した。33・34は甑の破片とともに、白色粒子を極多量に含む。35・36の坏は口縁部が内湾した形態を示し、36の内面には放射状のミガキを有する。37は須恵器の坏身模倣の土師器で、底部外面はケズリもしくは板状工具によるナデが施される。

38は、太い柱状部を有する高坏の破片で、外面は丁寧なミガキ調整が施される。これまで、宮添遺跡での報告例はないが、古墳時代中期後半から後期のものと考えられる。

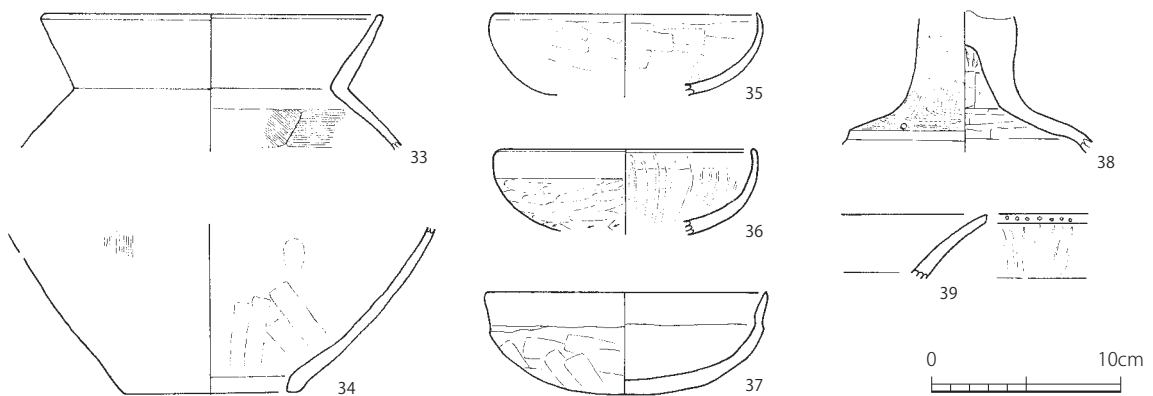
39の口縁端部には竹管による円形の窪みが施されており、その装飾性から壺の破片として図化した。胎土が砂質で他の破片と異なり、古墳時代前期の外来系遺物の可能性が考えられる。

所見

出土遺物の一部(37)は後出的な形態を示すもののカマド出土の坏(35・36)や大淵スコリアを含まない土層堆積状況から、古墳時代中期後半の建物跡と考えられる。



第24図 SB3 カマド実測図



第25図 SB3 遺物実測図

第2項 炉跡

FP1

遺構 (第26図・図版3)

位置: A 03 グリッド 7 トレンチ

重複関係: (古) FP1 → SB5 (新)

主軸方位: N - 28.0° - E

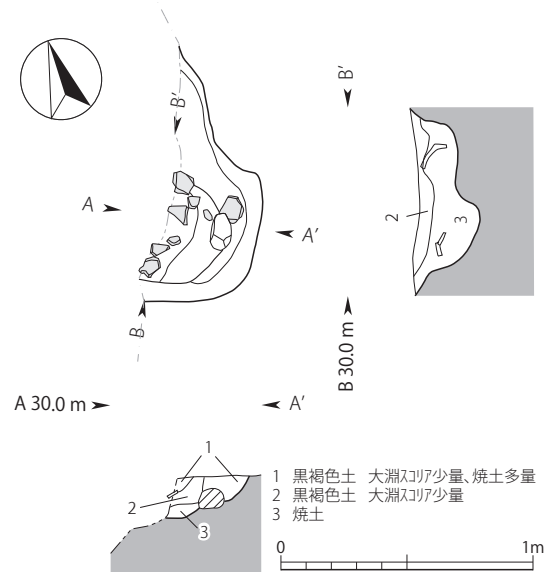
残存状況: SB5の下層に検出され、西側は道路法面となり削平されている。平面形は不整形な円形を呈し、検出範囲内で最大径 50cm を測る。

覆土: 大淵スコリアを少量含む黒褐色土による自然堆積層。

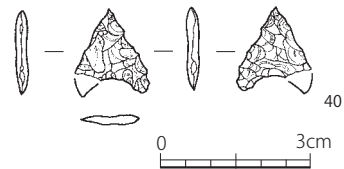
出土遺物: 図化出来た資料はない。

所見

時期は不明である。



第26図 FP1 遺構実測図



第27図 B I 遺構外出土遺物実測図

第3項 B I 調査区遺構外出土遺物 (第27図・図版14)

7 トレンチから出土した石器 1 点を図示した。黒耀石製の無舌石鏃で一部に欠けが認められる。

第3節 B II 調査区の調査成果

調査概要 B II 調査区は、道路西側の北部分、6トレンチ及び6トレンチ拡張区を中心とした調査区で宮添遺跡K地区（平成15年度調査）と隣接する箇所である。それぞれの調査で検出された遺構には、次のとおり同一遺構が存在する。

（B II 調査区とK地区で検出された同一遺構）

B II 調査区SB8 = K地区SB5

第1項 竪穴建物跡

SB8

遺構（第29図・図版3）

位置：ア03・イ03グリッド 6トレンチ

遺構対応：K地区SB5と同一遺構となる。

主軸方位：N-32.0°-E

残存状況：東側は道路法面となり削平されている。平面形は方形を呈し、K地区SB5と合わせると検出範囲内で東西5.6m、南北5.8mの最大値を測る。

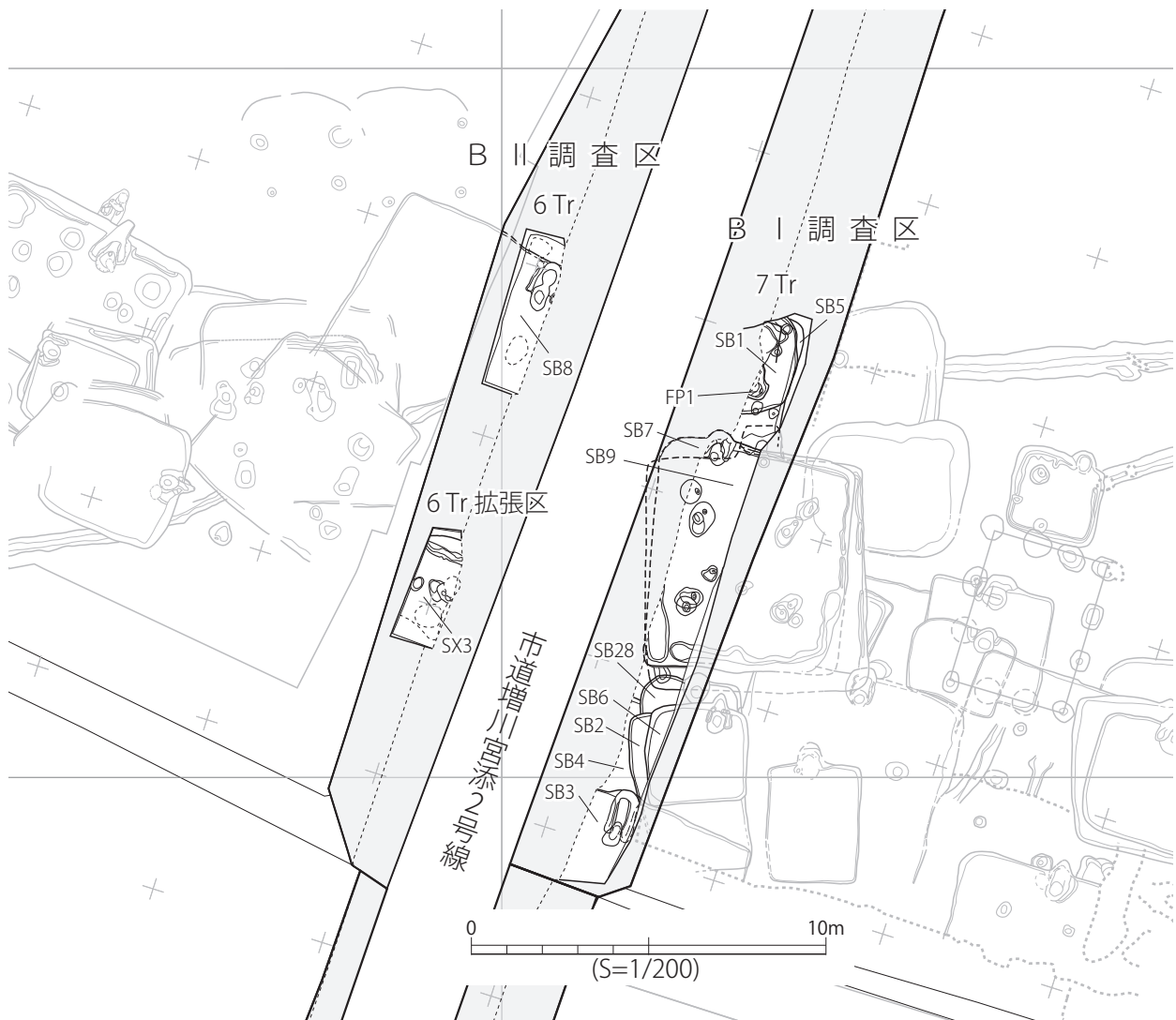
覆土：大淵スコリアを含む暗褐色土による自然堆積層。

カマド：北壁に存在。東側は削平されている。全長は145cm、中央内寸幅55cmを測る。燃烧室の掘り込みは床面から15cmの深さをもつ。燃烧室には支脚石が残存する。

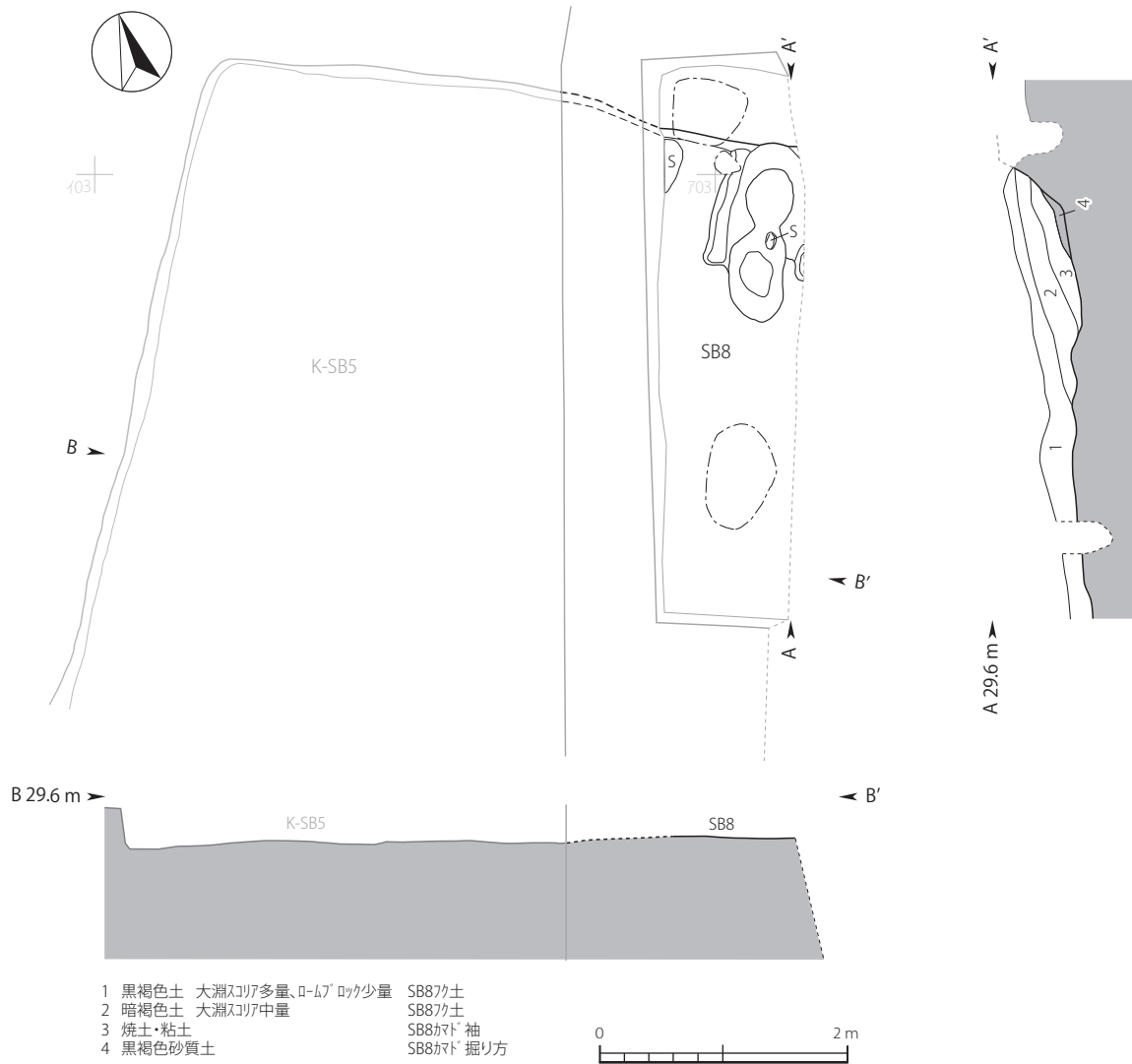
出土遺物：図化出来た資料はないが、古墳時代後期の土師器片が出土している。

所見

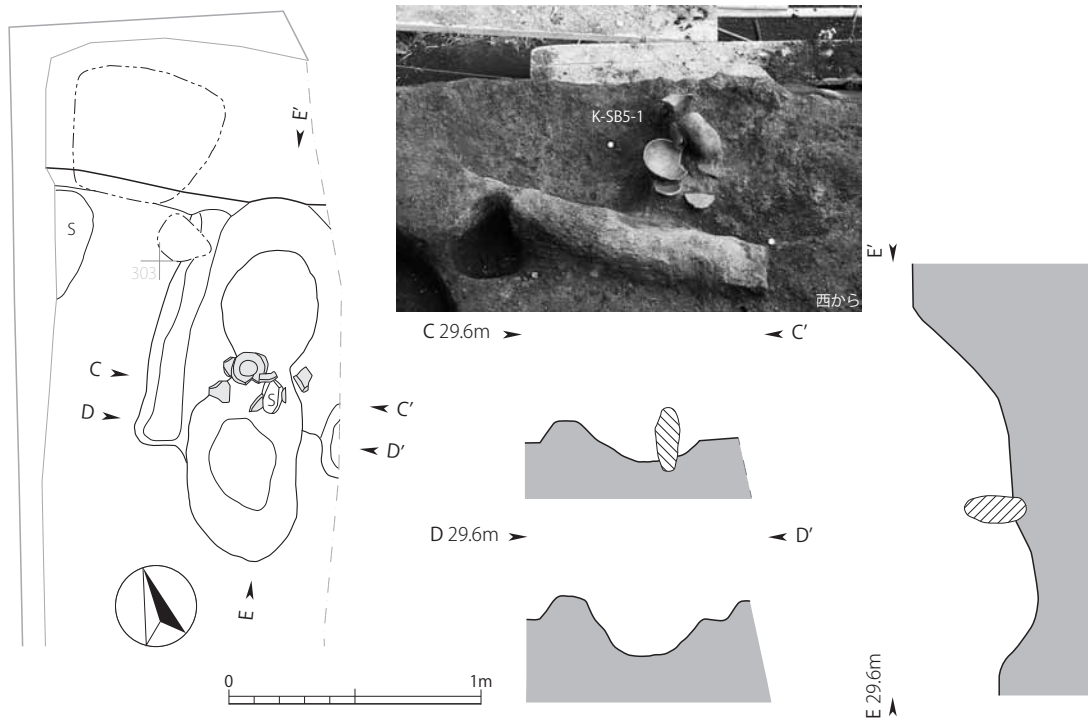
出土遺物及びK地区SB5の検出状況から、古墳時代後期の建物跡と考えられる。



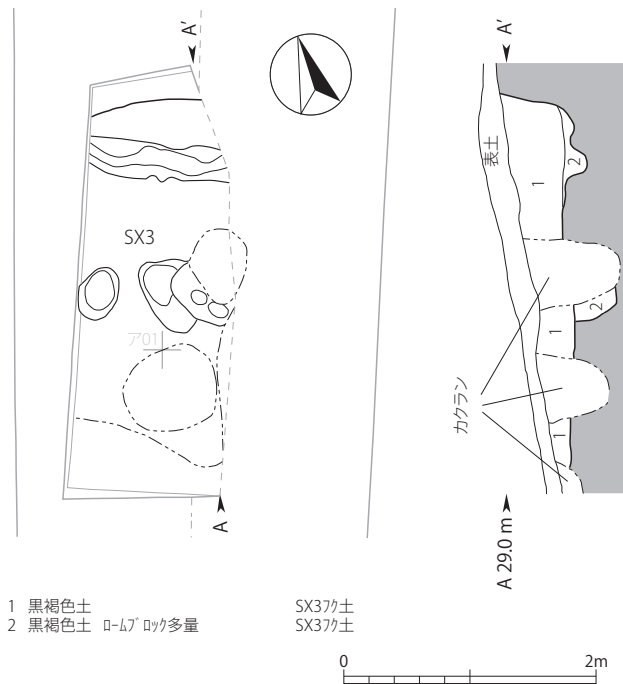
第28図 B I・B II 全体図



第29図 SB8 遺構実測図



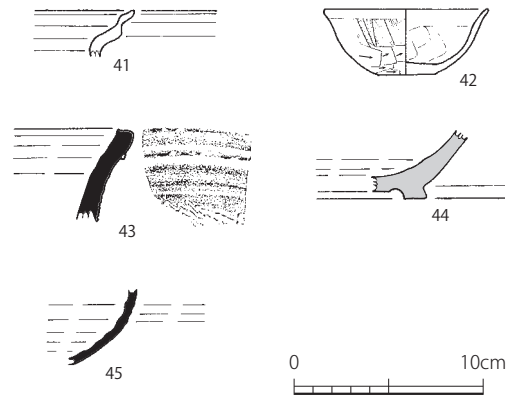
第30図 SB8 カマド実測図



1 黒褐色土
2 黒褐色土 ローム 礫多量

SX377土
SX377土

第31図 SX3 遺構実測図



第32図 B II 遺構外出土遺物実測図

第2項 性格不明遺構

SX3

遺構（第31図・図版3）

位置：ア01・ア02グリッド 6トレンチ拡張区

主軸方位：不明

残存状況：東側は道路法面となり削平されている。検出範囲が狭く平面形は不明である。北側部分に幅25cmを測る壁溝状の溝を有し竪穴建物の可能性をもつ。

覆土：大淵スコリアを含まない黒褐色土による自然堆積層。

その他の遺構：ピット3基検出

出土遺物：図化出来た資料はないが、S字口縁甕等の古墳時代前期の土師器片が出土している。

所見

出土遺物から、古墳時代前期の遺構と考えられる。

第3項 B II調査区遺構外出土遺物（第32図・図版15）

6トレンチ出土の遺物、土師器2点、須恵器2点、陶器1点を図示した。41はS字甕の破片である。頸部内面にハケメ調整らしきものも一部確認できるが、小破片のため定かではない。また、口縁部内面に明確な段差を有し、外方へ広がっている。42は鉢の破片である。頸部の屈曲は明瞭でなく、ヨコナデ調整により口縁部が作り出されている。ハケメ調整の後、底部外面付近はケズリが施される。大廓IV式から中見代I式頃の遺物と考えられる。

43は波状文を有する甕の破片である。口唇部下端に突帯を持つが突出は低く滑らかである。波状文は太い。45は器壁が薄く、盃の破片と考えられる。44は古瀬戸の壺底部の破片で15世紀後半頃の遺物と考えられる。

第4節 BⅢ調査区の調査成果



第33図 BⅢ・BⅣ 調査区全体図

調査概要 BⅢ調査区は、道路東側の南側部分、1トレンチ、2トレンチ、5トレンチを中心とした調査区で宮添遺跡D地区（平成6年度調査）と隣接する箇所である。それぞれの調査で検出された遺構には、次のとおり同一遺構が存在する。

（BⅢ調査区とD地区で検出された同一遺構）

BⅢ調査区	SB13	=	D地区	SB18
	SB14	=		SB17
	SB21	=		SB30
	SB27	=		SB39

第1項 竪穴建物跡

SB10

遺構（第34図・図版4）

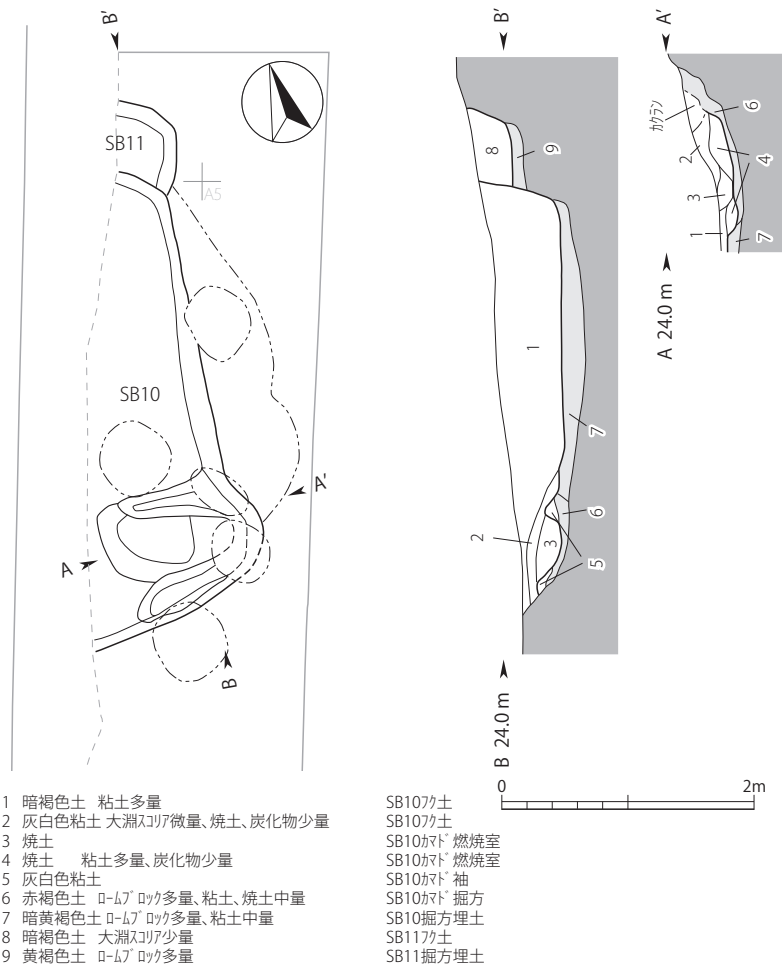
位置：ア5・A5グリッド 5トレンチ

遺構対応：形状、規模、床面の高さから、BⅣ調査区SB19と同一遺構の可能性をもつ。

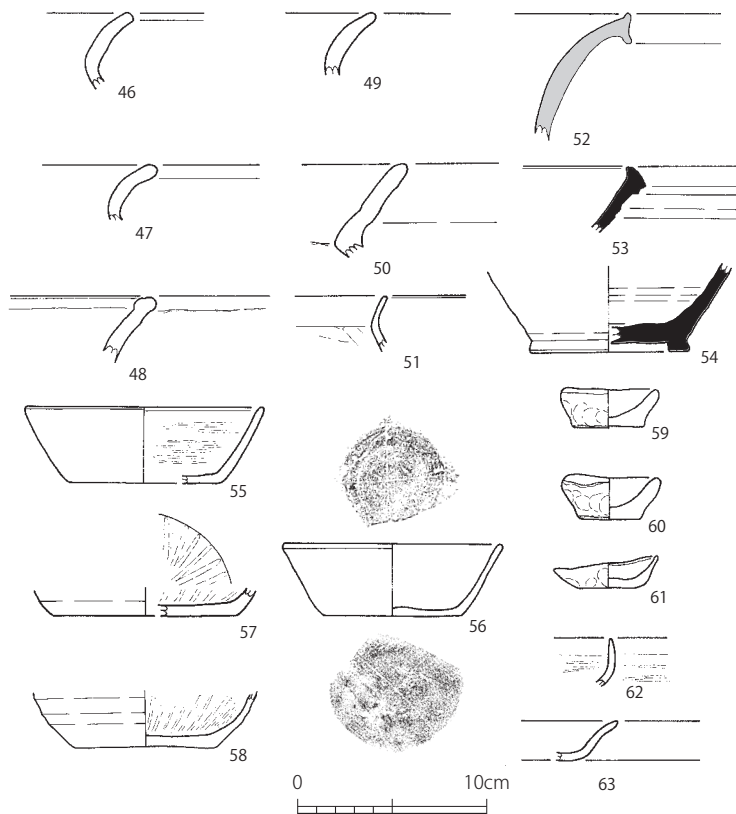
重複関係：（古）SB11→SB10（新）

主軸方位：N-96.0°-E

残存状況：西側は道路法面となり削平されている。平面形は隅丸方形を呈し、検出範囲内で東西1.3m、南北3.7mの最大値を測る。



第34図 SB10・SB11 遺構実測図



第35図 SB10 遺物実測図

覆土：大淵スコリアを微量含む暗褐色土による自然堆積層。

貼床：厚さ 15cm 程度の暗黄褐色土が、検出範囲全面に認められる。

カマド：東壁南端に存在。両袖と燃烧室を検出する。全長は 130cm、中央内寸幅 45cm、中央外寸幅 110cm を測る、燃烧室の掘り込みは床面から 5cm の深さをもつ。

出土遺物：(第 35 図・図版 15)

土師器 12 点、須恵器 2 点、陶器 1 点、てづくね 3 点を図示した。

46～50 は「駿東甕」の破片と考えられるが時期は明らかでない。55～58 は坏の破片である。56 は底部内外面に「十」字の刻みがある。57・58 ともに内面に放射状のヘラミガキが観察される。外面にヘラケズリは確認されない。いずれも 9 世紀の遺物と考えられる。

所見

検出状況から、9 世紀の建物跡と考えられる。

SB11

遺構 (第 34 図・図版 4)

位置：ア 4 グリッド 5 トレンチ

遺構対応：形状、規模、床面の高さから、B IV 調査区 SB 20 と同一遺構の可能性をもつ。

重複関係：(古) SB 11 → SB 10 (新)
 主軸方位：不明

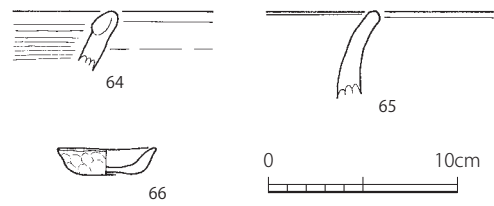
残存状況：西側は道路法面となり、また SB 10 により大部分を削平されていて、形状、規模等不明である。検出範囲内で東西 0.6 m、南北 0.7 m の最大値を測る。

覆土：大淵スコリアを少量含む暗褐色土による自然堆積層。

貼床：厚さ 8cm 程度の黄褐色土が検出される。

出土遺物：(第36図・図版16)

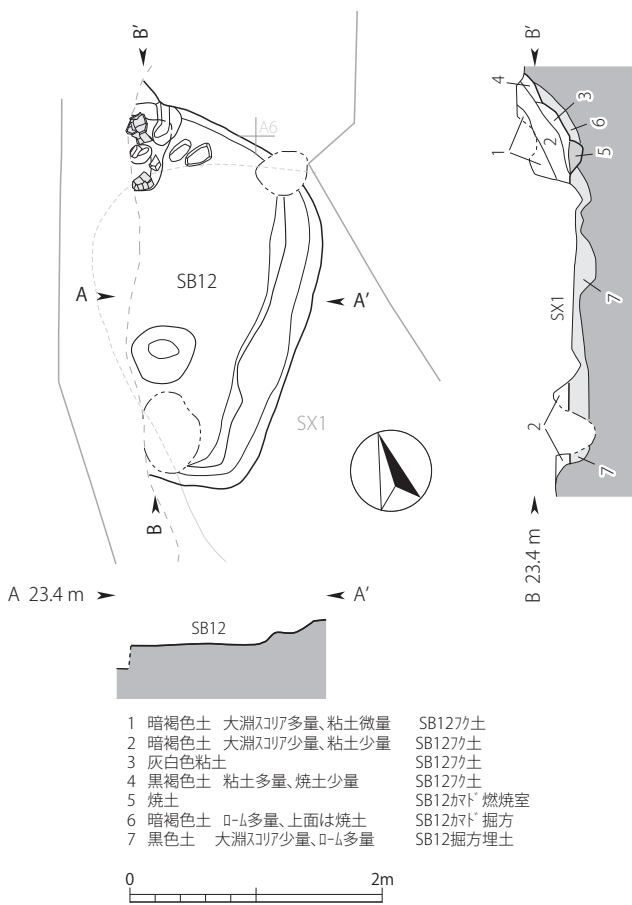
土師器2点、手づくね1点を図示した。64・65はともに「駿東甕」の口縁部片だが、内面調整や形態に差異が認められる。65は64に対して白色砂粒が非常に多く、端部を肥厚させていない。



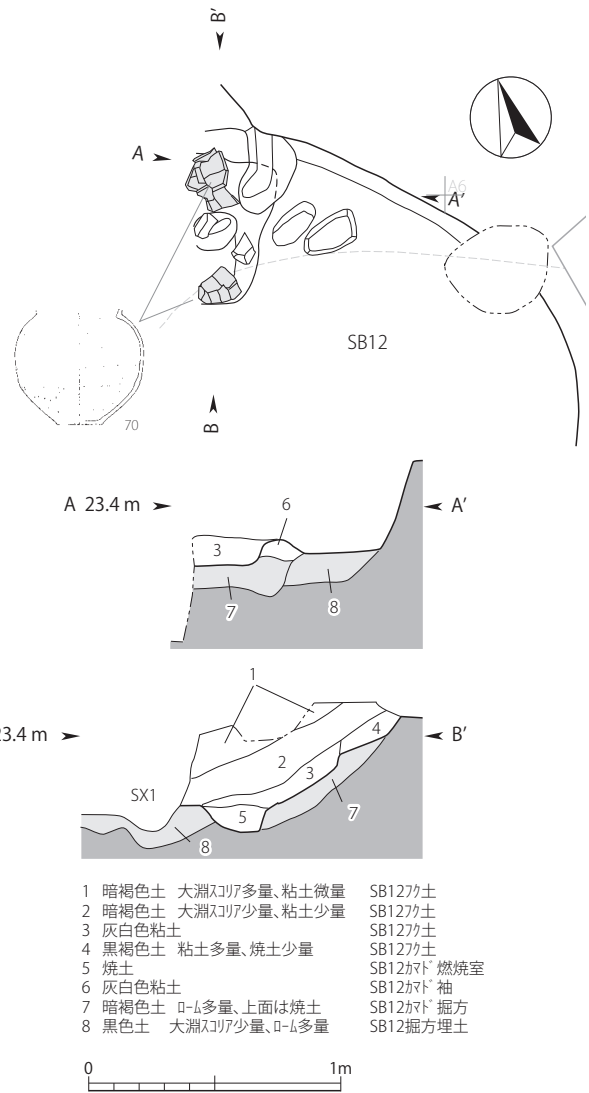
第36図 SB 11 遺物実測図

所見

出土遺物から、9世紀の建物跡と考えられる。



第37図 SB 12 遺構実測図



第38図 SB 12 カマド実測図

SB 12

遺構 (第37・38図・図版4)

位置：ア6・A6グリッド 5トレンチ

重複関係：(古) SB 12 → SX 1 (新)

主軸方位：N - 35.0° - E

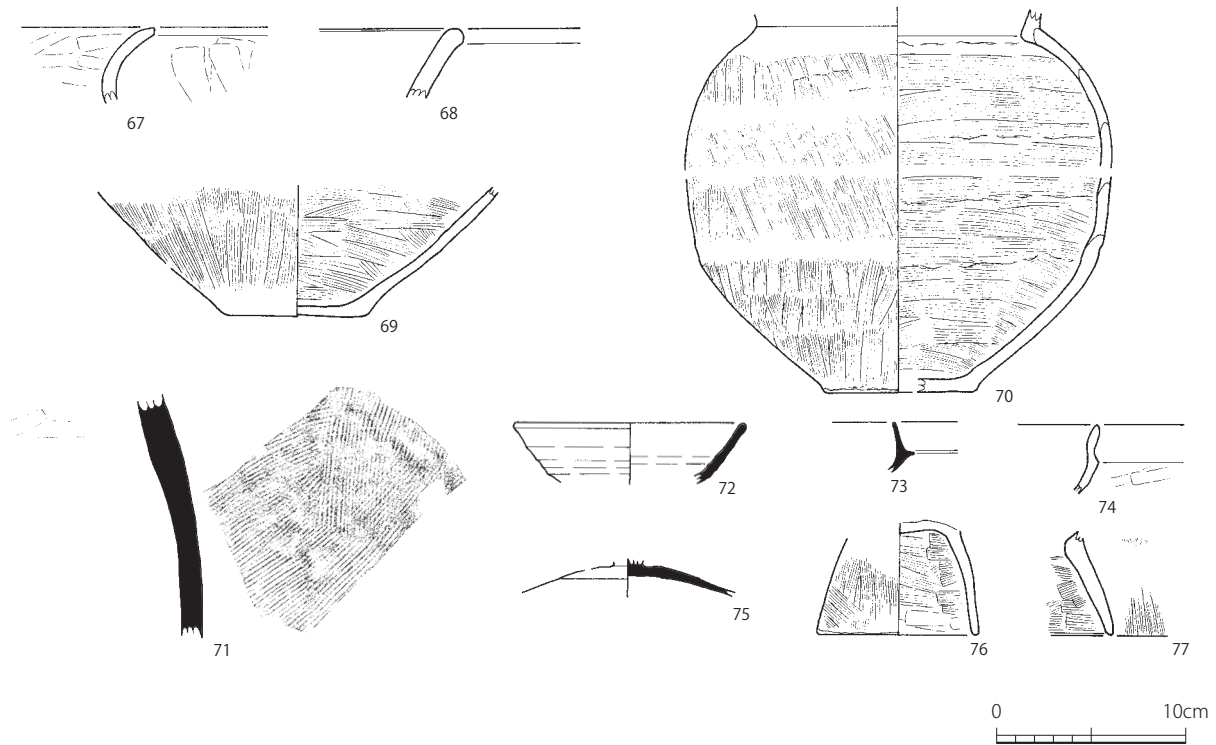
残存状況：西側は道路路面となり、上層はSX 1により削平されている。平面形は不整形な隅丸方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西1.8m、南北2.8mの最大値を測る。

覆土：大淵スコリアを多量含む暗褐色土による自然堆積層。
 貼床：厚さ15cm程度で黄褐色ロームが多量混入した黒色土が、検出範囲全面に認められる。

その他の遺構：ピット1基検出。

カマド：北壁に存在。西側は道路路面となり削平されている。全長は175cmを測る、燃烧室は僅かに掘り込まれている。燃烧室からは土師器甕(70)が出土している。

出土遺物：(第39図・図版16)



第39図 SB12 遺物実測図

土師器7点、須恵器4点を図示した。67～70は甕の破片でいずれも「駿東甕」とされるものである。70は胴部の張る球胴を呈し、内外面ともに丁寧なハケメ調整が施される。いずれも8世紀のものと考えられる。

73の須恵器坏身は器壁が薄く、全体的にシャープに作られ、立ち上がり部も長い。径が復元できない小破片のため断定できないが、遠江編年Ⅱ期からⅢ期前葉のものと考えられる。

76は台付甕の台部の破片で直線的な形態を示し、内外面とも丁寧なハケメ調整が施される。弥生時代後期の甕の可能性が考えられる。77も一見、台付甕の破片に見えるものの、内面に割れ口がなく底部を作り出していないことから、器台のように思われるが、ここでは器種不明とする。胎土は古墳時代前期に多く見られるものである。

所見

出土遺物から、8世紀の建物跡と考えられる。

SB13

遺構（第40図）

位置：A6グリッド 5トレンチ

遺構対応：D地区SB18と同一遺構となる。

重複関係：(古) SB12→SB13→SX1、SB13→SB14(新)

主軸方位：N-68.0°-E

残存状況：南側はSB14により削平されている。平面形は不整形な隅丸方形を呈するものと考えられ、D地区SB18と合わせると検出範囲内で東西3.6m、南北3.0mを測る。

覆土：大淵スコリアを含む黒褐色土による自然堆積層。

貼床：厚さ10cm程度で黄褐色ロームが多量混入した暗褐色土が、検出範囲全面に認められる。

壁溝：幅30cm、深さ10cmの不整形な壁溝が全体をめぐる。

その他の遺構：ピット2基検出。

カマド：東壁北端に存在。両袖の一部と燃烧室が残存する。全長88cm、中央内寸幅45cm、中央外寸幅90cmを測る。燃烧室の掘り込みは床面から15cmの深さを測る。

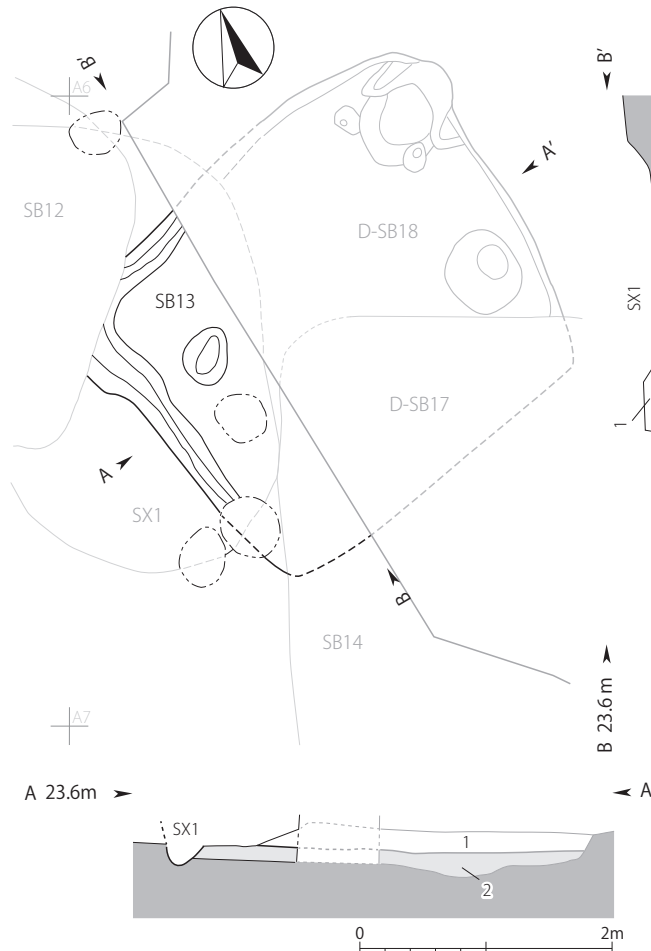
出土遺物：(第41図・図版16)

土師器3点、須恵器2点、石製品1点を図示した。78は小型の甕で底部外面に木葉痕が見られる。胴部径に対して比較的大きな底部を有する。外面ハケ、内面ナデ調整によって仕上げられる。

79は坏蓋、80は有台坏身の破片で、78を含め8世紀のものと考えられる。

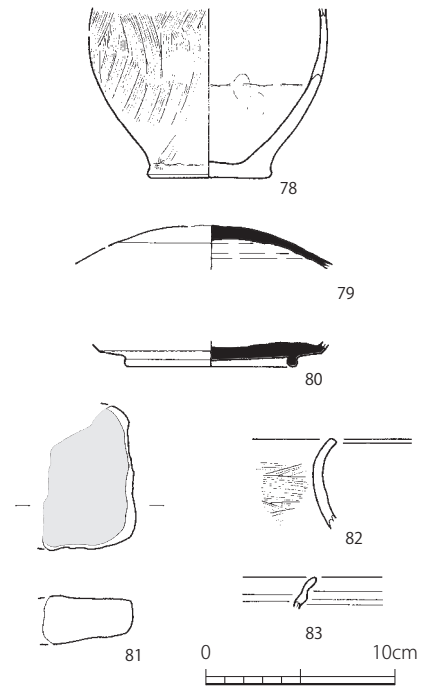
所見

出土遺物から、8世紀の建物跡と考えられる。



1 黒褐色土 大淵スコリア中量、炭化物少量 SB137f土
 2 黒褐色土 大淵スコリア中量、炭化物少量 SB137f土
 3 暗褐色土 大淵スコリア多量、 α - μ 多量 SB13掘方埋土

第40図 SB13 遺構実測図



第41図 SB13 遺物実測図

SB14

遺構 (第42図・図版4)

位置: A6・A7グリッド 5トレンチ

遺構対応: D地区SB17と同一遺構となる。

重複関係: (古)SB13→SB14(新)

主軸方位: N-113.0°-E

残存状況: 平面形は不整形な隅丸方形を呈し、D地区SB17と合わせると東西4.4m、南北3.9mを測る。床面全体に20cm程の大きさの礫が検出され、土師器片も多く出土する。

覆土: 大淵スコリアを多量含む暗褐色土による自然堆積層。

貼床: 厚さ5cm程度の暗褐色土が、検出範囲全面に認められる。

壁溝: 幅15cm、深さ15cmの壁溝が西壁の一部と南東コーナー部分に認められる。

柱穴: 2基(SB14Pit1、D-SB17Pit1)検出。径30~40cm、深さ約50cmを測る。

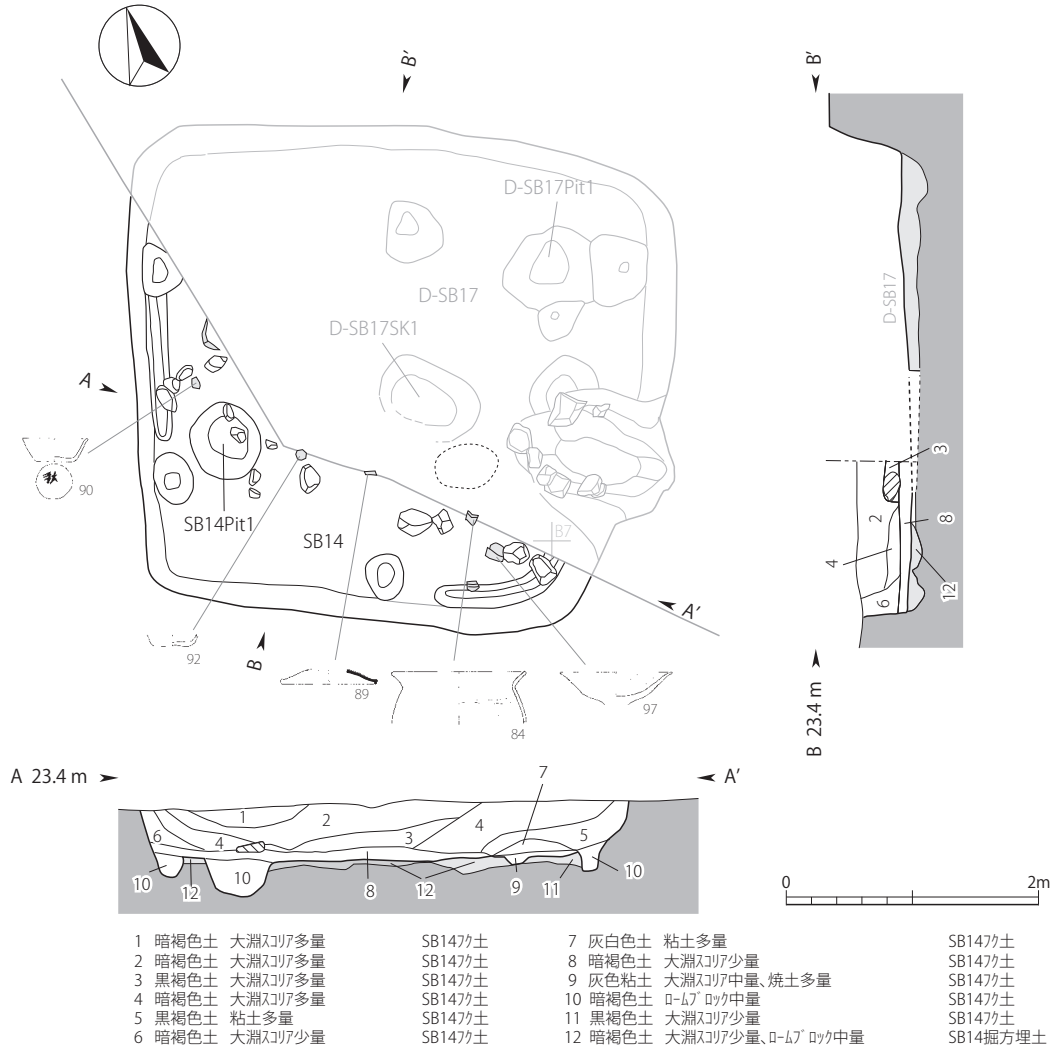
その他の遺構: 遺構中央に土坑(D-SB17SK1)が検出され東西55cm、南北40cm、深さ50cmを測る。その他ピット7基を検出する。

カマド: 東壁南寄りに煙道・燃烧室・袖部とも比較的良好に遺存する。燃烧室を囲む様に芯材として使用していたと考えられる礫が検出される。全長134cm、中央内寸幅34cm、中央外寸幅98cmを測る

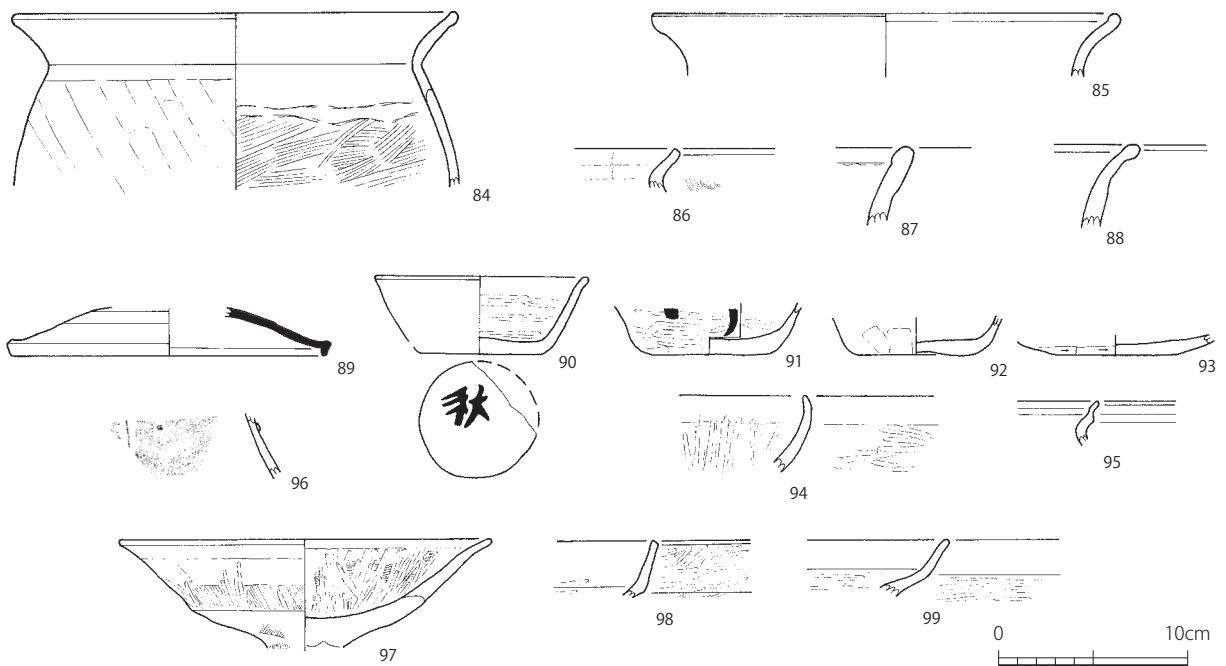
出土遺物: (第43図・図版17)

土師器15点、須恵器1点を図示した。84は、甕の破片で外面が板状工具によるナデ調整、内面はヨコハケが施されている。9世紀のものと考えられる。その他の甕の破片は時期を決定するには困難である。

90~92・94は複数の時期にわたる坏の破片である。90・91は9世紀の「駿東坏」でともに墨書が認められる。90は「秋」と判別できるものの、91については小破片のため判別できない。93は坏の破片で外面下半にヘラケズ



第42図 SB14 遺構実測図



第43図 SB14 遺物実測図

りが認められる。「甲斐型」の坏と考えられる。94は古墳時代後期の坏である。

99は灰釉陶器を模倣した土師器の坏で内外面に丁寧なヘラミガキが認められる。

96は弥生時代後期の壺頸部の破片で、二段の羽状縄文が施される。97はやや大きめの柱状脚高坏の坏部で、口縁端部がやや外反しながら広がる形態を示す。全体的に器壁が厚く、最終調整にはミガキが施されるものの、前工程のハケメ調整などが観察される程度の仕上げである。古墳時代前期末から中期初頭（中見代Ⅰ式からⅡ式）にかけ

ての遺物である。98は口唇端部が平滑に調整されており、坏の破片とするよりも壺の口縁部片と考えられる。

所見

D地区のS B 17出土の灰釉陶器(162)や、須恵器(89)、土師器坏(90)より、9世紀の建物跡と考えられる。

S B 21

遺構（第44図・図版4・5）

位置：B 7・C 7グリッド 2トレンチ

遺構対応：D地区S B 30と同一遺構となる。また上面には、D地区S B 16に繋がる遺構があったものと推定される。

重複関係：(古) S B 21 → S B 23 (新)

主軸方位：N - 20.0° - E

残存状況：南側は道路となり削平されている。平面形は方形を呈し、D地区S B 30と合わせると検出範囲内で東西9.5m、南北5.0mを測る。焼焼施設は検出されていない。覆土：大淵スコリアを殆ど含まない黒褐色土による自然堆積層。西側周辺の覆土中からは多数の礫が検出され、土師器片も多く出土する。

貼床：厚さ10cm程度の黒色土が、全面に認められる。

壁溝：幅25cm、深さ10cmの壁溝が北壁の一部に認められる。

仕切り溝：床面北側には、床面を東西に約2mの間隔で四分割する南北方向の溝(S B 21 S D 1、S B 21 S D 2、D - S B 30 S D 1、D - S B 30 S D 2)と東壁から東西方向に設けられた溝(S B 21 S D 3)を検出した。溝の幅は約30cm、深さは15cmを測る。

その他の遺構：北西部に土坑2基(SB21 S K 1、SB21 S K 2)、北東部に土坑2基(D - S B 30 S K 1、D - S B 30 S K 2)を検出し、また東側に浅い土坑(SB21 S K 3)を検出した。土坑(SB21 S K 3)については、位置、深さ等の検出状況から仕切り溝(D - S B 30 S D 1、D - S B 30 S D 2)と関係する可能性をもつ。

ピットは5基検出し、うちS B 21 Pit 1 ~ Pit 3は主軸に直交し仕切り溝とほぼ同じ間隔で検出される。

出土遺物：(第45 ~ 47図・図版17 ~ 24)

弥生土器・土師器102点、須恵器14点、石器・石製品5点を図示した。図化した遺物の所属時期は多岐に渡るが、大きくは弥生時代後期、古墳時代前期（特に後半）、古墳時代中期後半から後期前半、7世紀に分けることが出来る。

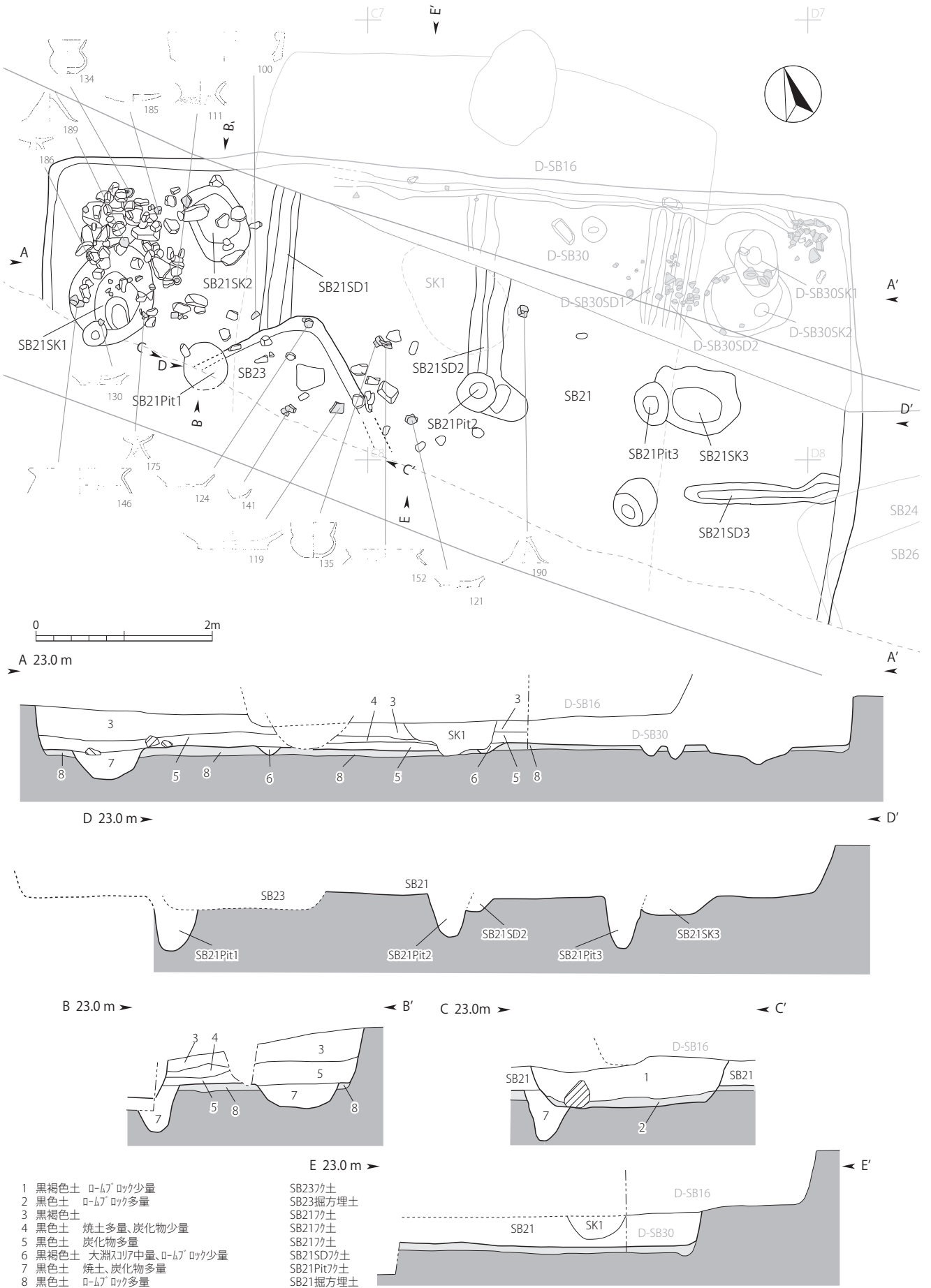
弥生時代後期から古墳時代前期の土器では広口壺とされるものが大部分をしめ、100、105のように口縁部内面に突出を持つ大型壺の破片もあり、大廓式を特徴付ける遺物として注目される。100の大型壺は胎土に白色粒子を多量に含む結果、器壁荒れが著しく、112、115、117に共通する。また、底部直径17.5cmを測る119の大型壺の胎土もそれに酷似しており、同一型式のものと推察される。101は、壺の破片と考えられ、口唇部が上方に摘み上げられており、二重口縁壺の破片と考えられる。134 ~ 137の鉢（小型壺）は、136・137が古墳時代前期後半から末、134・135が古墳時代中期初頭のもので、調整の粗雑化、体部高の増大などの変化が見られる。後者に共存するものとして144・145の小型壺が想定される。174・175・188は小型器台でいずれも古墳時代前期のものである。全体的に器壁は厚く作られているものの、丁寧なヘラミガキで調整され光沢をもつ。

179 ~ 201の高坏は、大部分が古墳時代中期後半に位置づけられ遺物の一群として考えられる。

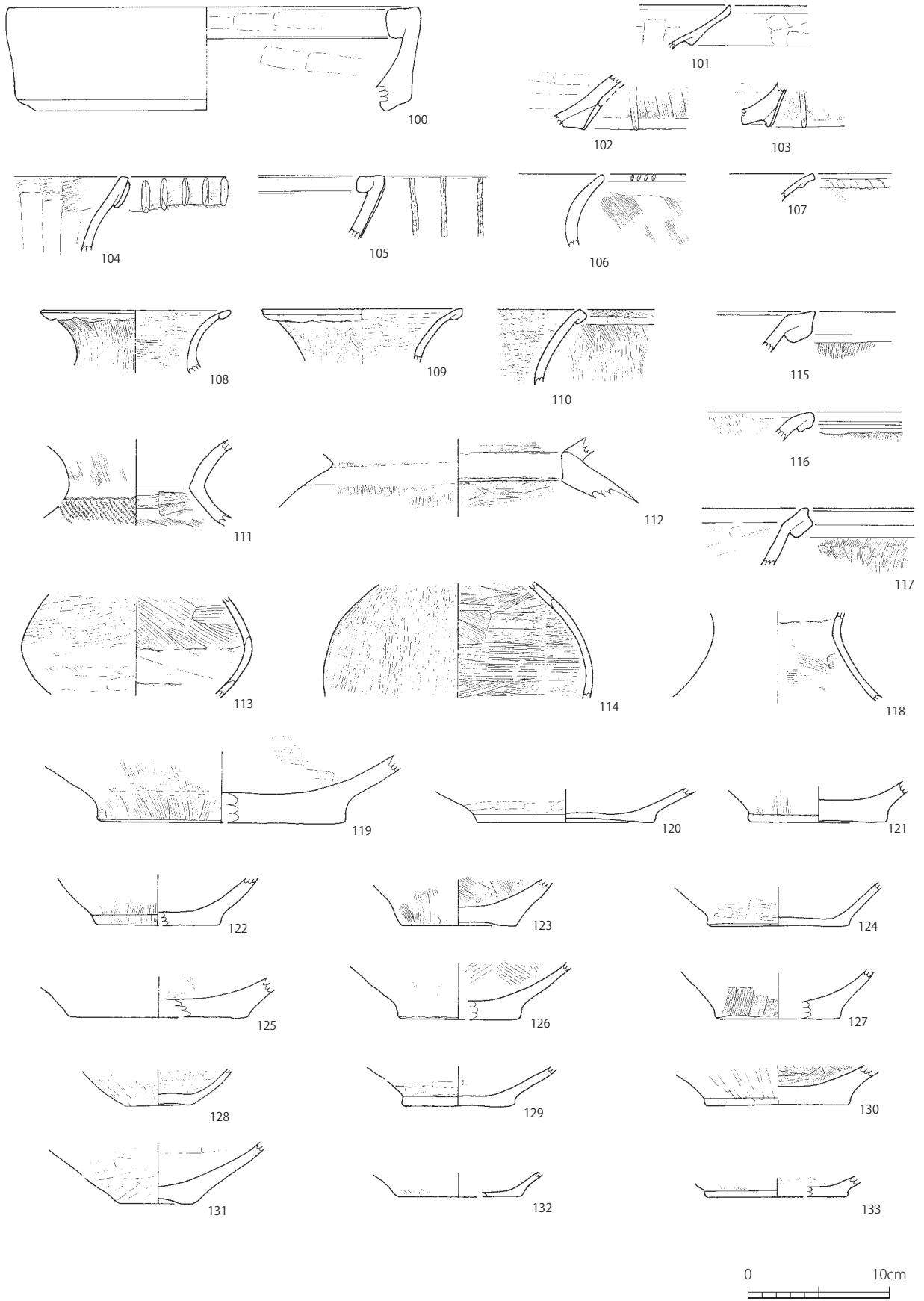
須恵器は、坏身、坏蓋が多く、207・208のように明らかに古墳時代後期に位置づけられるもののほかは7世紀のものが多い。

所見

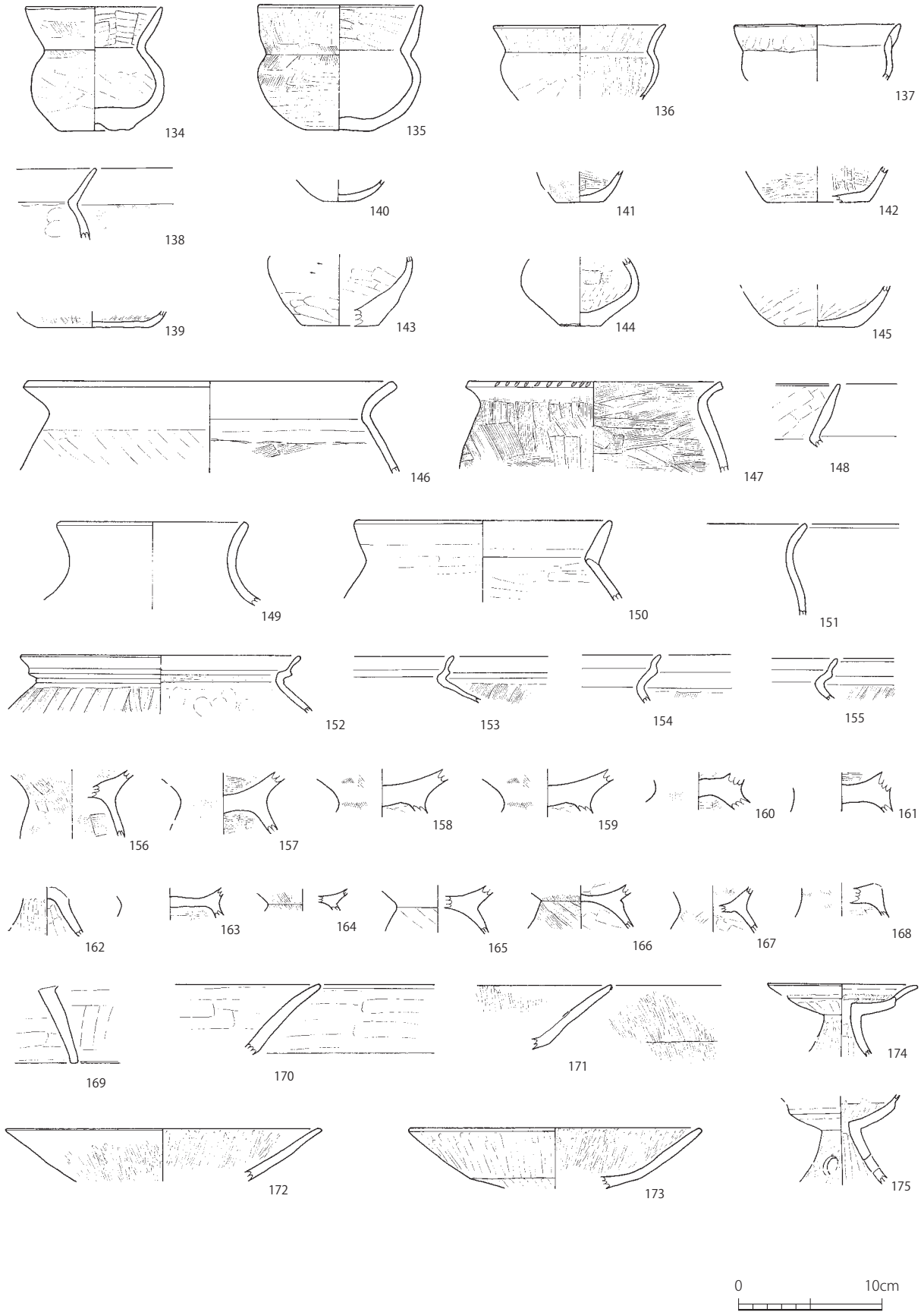
検出状況から、古墳時代中期後半の建物跡と考えられる。7世紀の遺物についてはD地区S B 16に伴う可能性が考えられる。



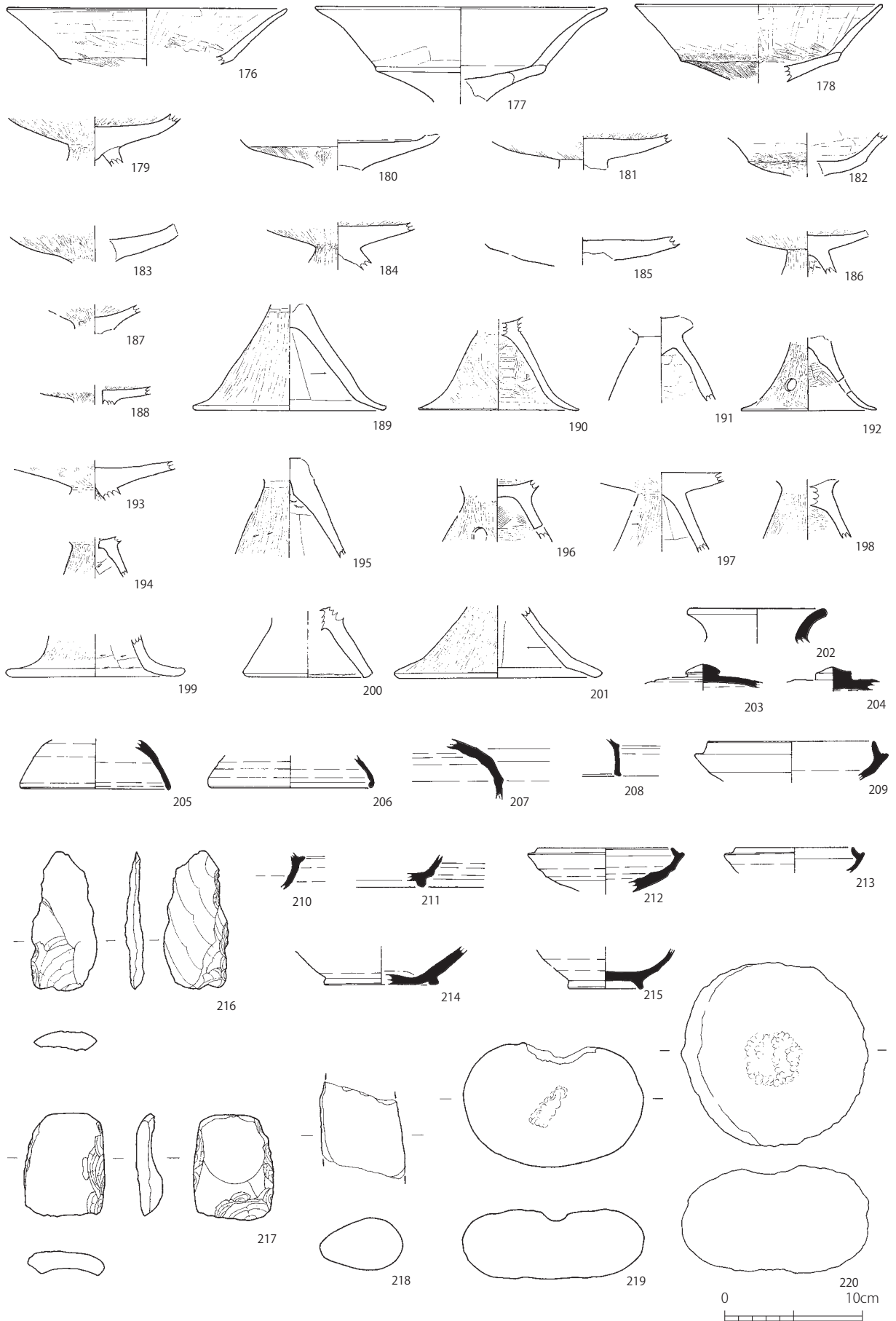
第44図 SB 21・SB 23 遺構実測図



第45図 SB 21 遺物実測図(1)



第46図 SB 21 遺物実測図(2)



第47図 SB 21 遺物実測図(3)

SB 23

遺構 (第 44 図・図版 5)

位置: B 7・C 7 グリッド 2 トレンチ

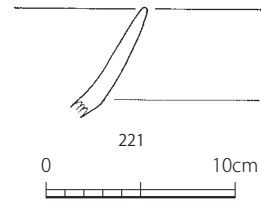
重複関係: (古) SB 21 → SB 23 (新)

主軸方位: N - 11.0° - W

残存状況: 南側は道路となり北東コーナーの一部のみ検出される。また、上層にはD地区SB 16に繋がる遺構があったものと推定される。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西 1.6 m、南北 2.0 mを測る。

覆土: 大淵スコリアを殆ど含まない黒褐色土による自然堆積層。

貼床: 厚さ 10cm 程度の黒色土が、検出範囲全面に認められる。



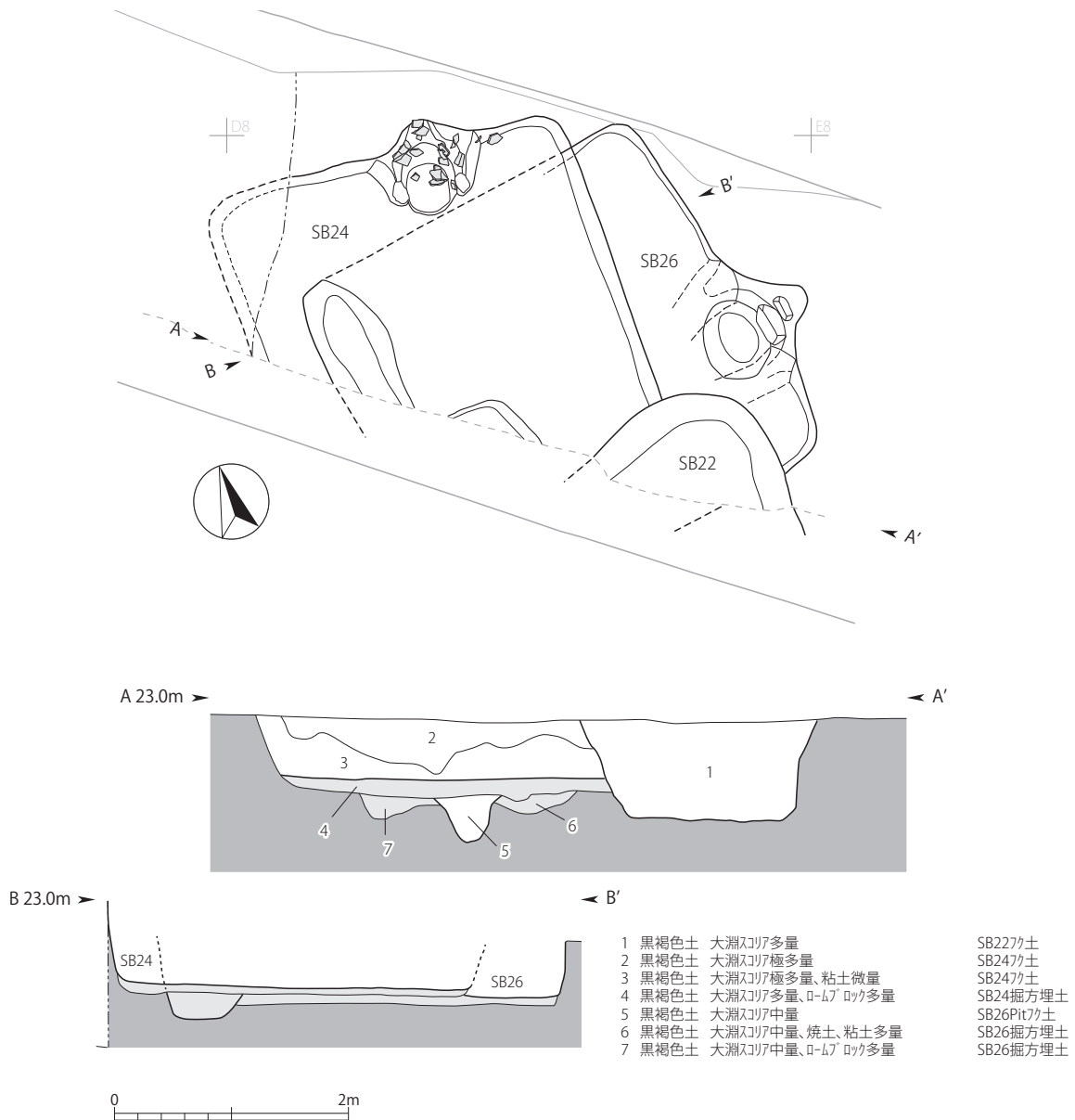
第 48 図 SB 23 遺物実測図

出土遺物: (第 48 図・図版 24)

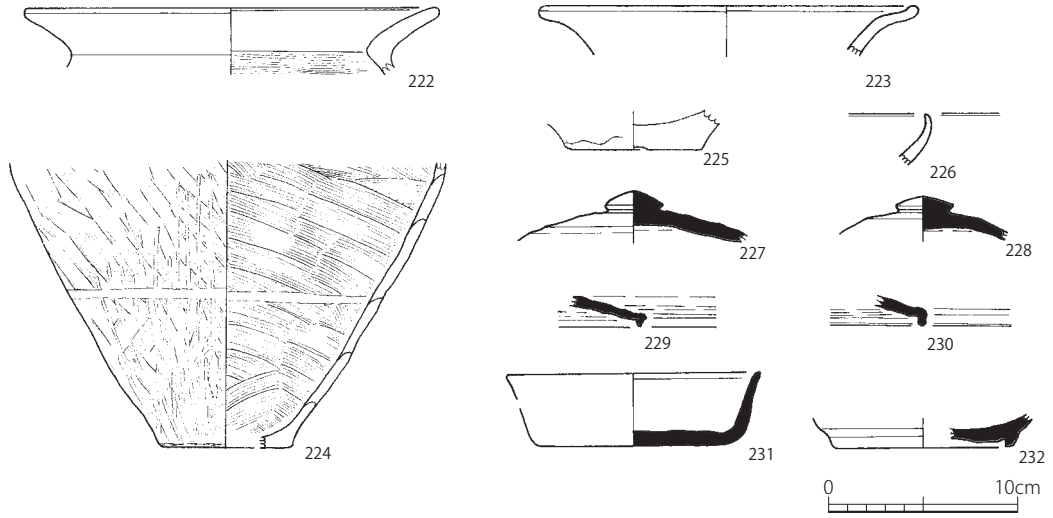
土師器 1 点を図示した。高坏の破片で器面荒れが著しく調整は不明。古墳時代中期のものと考えられる。

所見

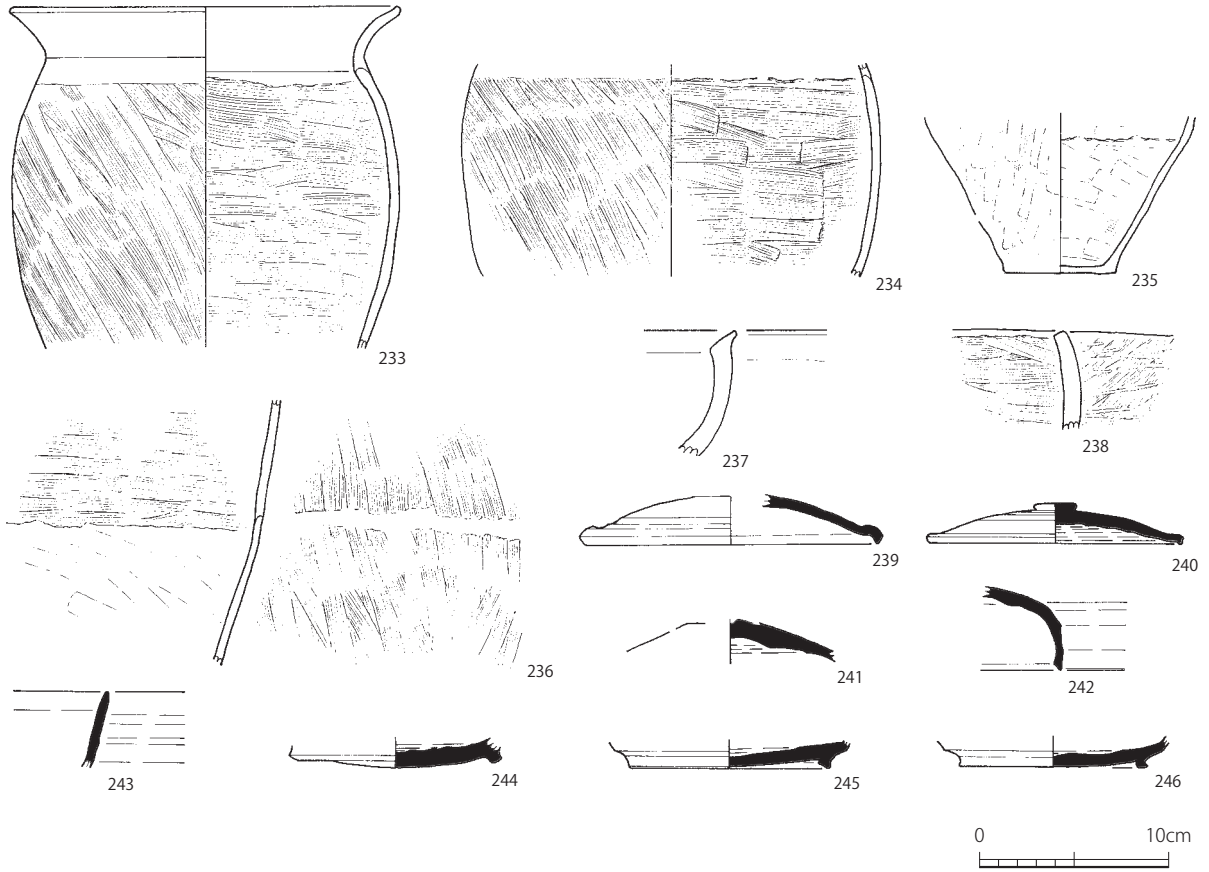
土層の状況等から、古墳時代中期後半の建物跡と考えられる。



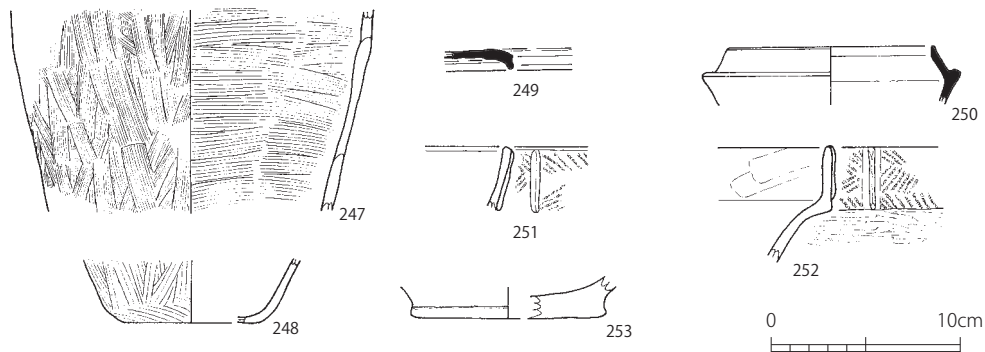
第 49 図 SB 22・24・26 遺構実測図



第50図 S B 22 遺物実測図



第51図 S B 24 遺物実測図



第52図 S B 26 遺物実測図

SB 22

遺構 (第 49 図・図版 5)

位置：D 8 グリッド 1 トレンチ

重複関係：(古) SB 26 → SB 24 → SB 22 (新)

主軸方位：N - 13.0° - W

残存状況：南側は道路となり北東コーナーの一部のみ検出される。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西 1.3 m、南北 1.4 m を測る。

覆土：大淵スコリアを多量含む黒褐色土による自然堆積層。

出土遺物：(第 50 図・図版 24)

土師器 5 点、須恵器 6 点を図示した。223・224 は遠江系の水平口縁甕で 8 世紀、返り蓋 (229・230) や無台杯 (231) の須恵器も同様の時期を示す遺物である。

所見

出土遺物から、8 世紀の建物跡と考えられる。

SB 24

遺構 (第 49・53 図・図版 5)

位置：D 8 グリッド 1 トレンチ

重複関係：(古) SB 26 → SB 24 → SB 22 (新)

主軸方位：N - 1.0° - W

残存状況：南側は道路となり削平される。平面形は方形又は長方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西 3.2 m、南北 3.1 m を測る。

覆土：大淵スコリアを極めて多量に含む黒褐色土による自然堆積層。

貼床：厚さ 15cm 程度の黒褐色土が、検出範囲全面に認められる。

カマド：北壁東寄りに存在する。上層は削平されているが燃焼室・袖部とも比較的良好に遺存する。両袖端部に石材が検出される。全長 160cm、中央内寸幅 70cm、中央外寸幅 180cm を測る。燃焼室は僅かに窪む。カマド周辺からは、遺物 (233・234・245) が出土する。

出土遺物：(第 51 図・図版 25)

土師器 6 点、須恵器 8 点を図示した。一部に古墳時代後期 (242) や 7 世紀 (237・238) と考えられる遺物があるものの、他は 8 世紀を中心とする遺物である。

233・234・236 は「駿東甕」の中でも長胴甕とされるもので、内外面ともに丁寧なハケメ調整が施される。233 は遠江系甕の影響からか口唇部が上方に摘み上げられている。

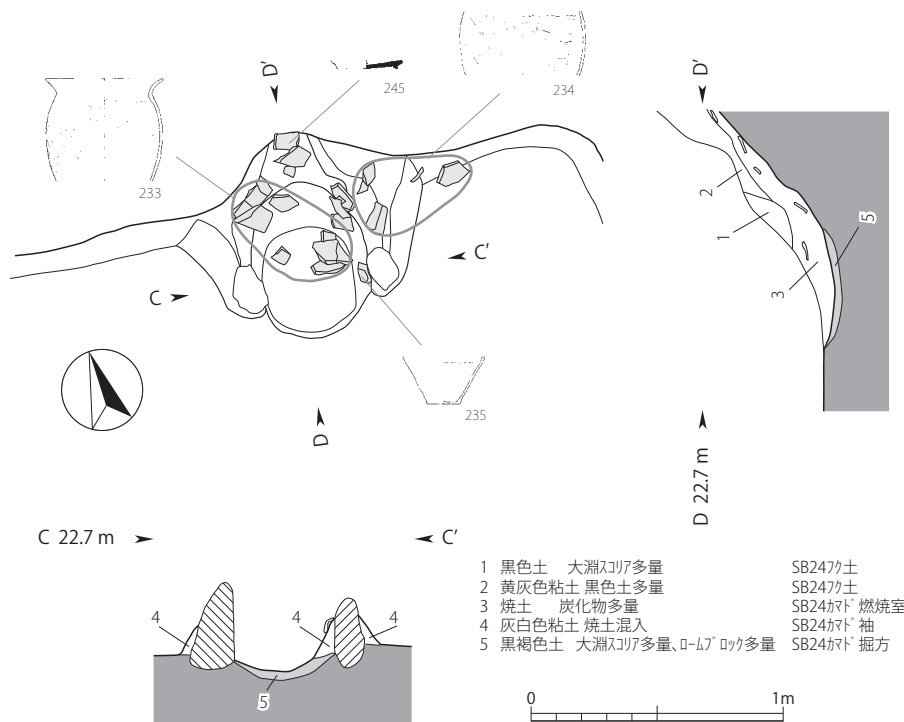
所見

カマドから出土した遺物より、8 世紀の建物跡と考えられる。

SB 26

遺構 (第 49 図・図版 5)

位置：D 8 グリッド 1 トレンチ



第 53 図 SB 24 カマド実測図

重複関係：(古) S B 26 → S B 24 → S B 22 (新)

主軸方位：N - 79.0° - E

残存状況：南側は道路となり削平される。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西 3.4 m、南北 3.4 mを測る。

覆土：大淵スコリアを含む黒褐色土による自然堆積層。

貼床：厚さ 10cm 程度の黒褐色土が、検出範囲全面に認められる。

カマド：東壁南寄りに存在する。上層は S B 24 により削

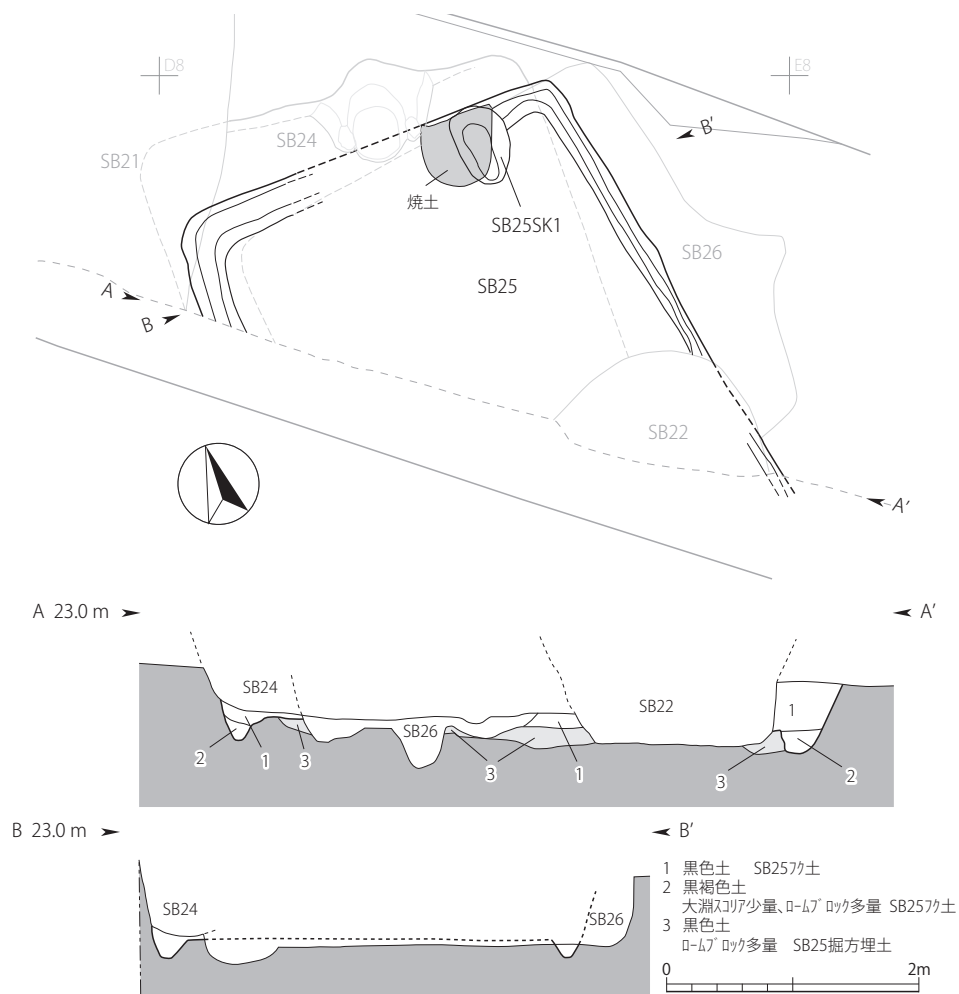
平されていて規模等は不明である。

出土遺物：(第 52 図・図版 26)

弥生土器・土師器 5 点、須恵器 2 点を図示した。248 は遠江系の水平口縁甕の破片で、8 世紀の年代が想定される。251・252 は広口壺の破片で、いずれも口縁部外面に羽状縄文が施されたのち、棒状粘土が貼り付けられる。両者とも弥生時代後期の破片で同一個体の可能性がある。

所見

検出状況から、8 世紀の建物跡と考えられる。



第 54 図 S B 25 遺構実測図

S B 25

遺構 (第 54 図・図版 5)

位置：D 8 グリッド 1 トレンチ

重複関係：(古) S B 25 → S B 26 (新)

主軸方位：N - 5.0° - W

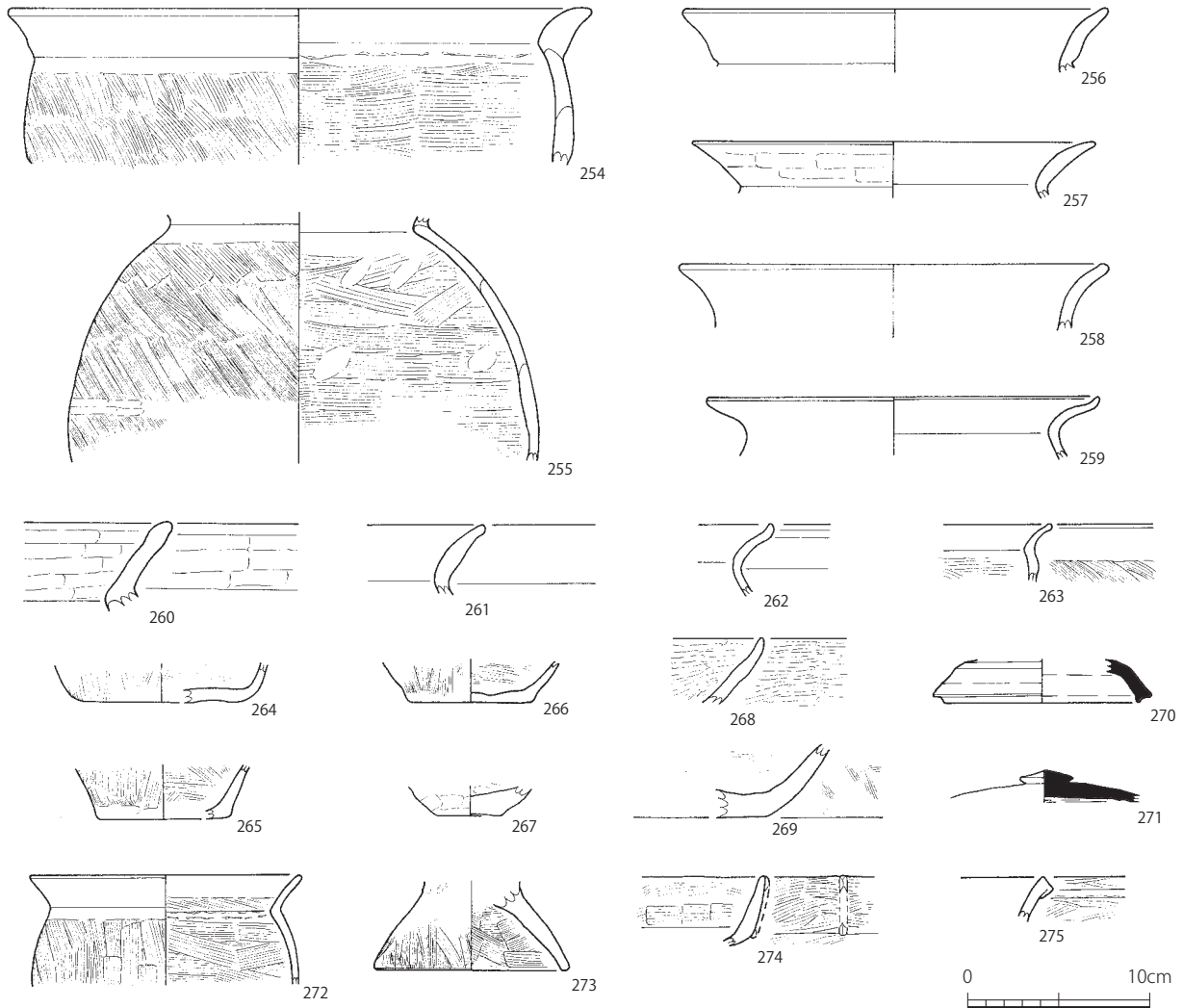
残存状況：南側は道路となり削平される。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西 3.6 m、南北 3.6 mを測る。

覆土：黒色土による自然堆積層。大淵スコリアは殆ど含まない。

貼床：厚さ 15cm 程度の黒色土が、検出範囲全面に認められる。

壁溝：幅 25cm、深さ 10cm の壁溝が検出範囲全面に認められる。

その他の遺構：北壁東寄りの位置に土坑 (S B 25 S K 1)



第55図 SB 25 遺物実測図

と焼土の広がりを検出する。

出土遺物：(第55図・図版26・27)

土師器20点、須恵器2点を図示した。

254は「駿東型」埴の破片で口縁部が肥厚する。内外面ともハケメ調整の後、口縁部ヨコナデ。255は「駿東甕」でその中でも球胴甕とされるものである。調整は254に酷似し、いずれも8世紀のものと考えられる。

272は古墳時代前期の甕で、内外面ハケメ調整の後、口縁部がヨコナデされているのが特徴である。大廓Ⅲ式以降に見られる外来的要素である。

所見

8世紀の遺物が多く見られるが、それらは重複するSB 24・SB 26に伴い、後述する1トレンチ付近の出土遺物と272～275がSB 25に伴う遺物と考えられる。そのため、SB 25については古墳時代前期の建物跡と推測される。

SB 27

遺構(第56図・図版6)

位置：D8・E8グリッド 1トレンチ

遺構対応：D地区SB 39と同一遺構となる。

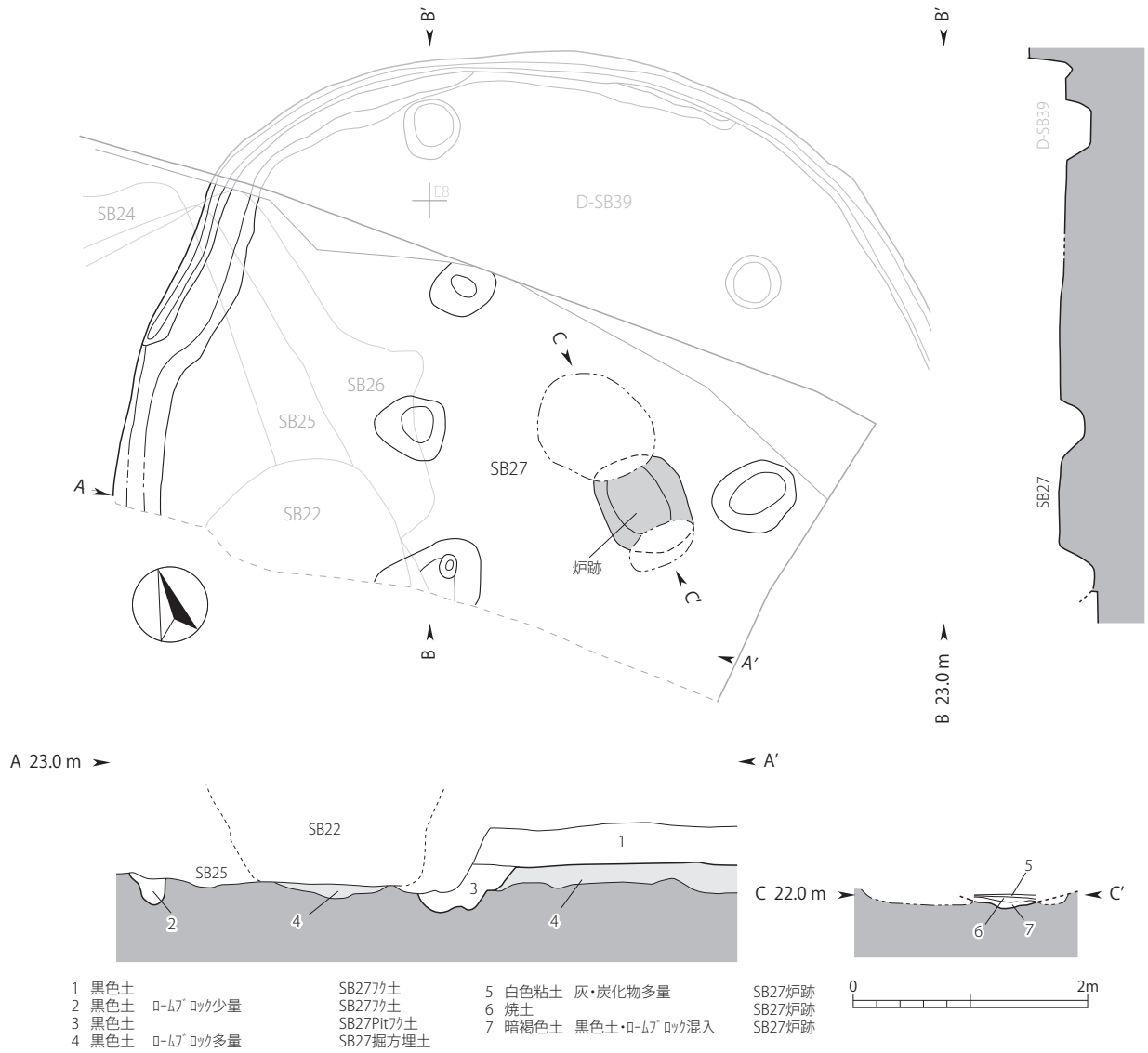
重複関係：(古) SB 27 → SB 25 → SB 26 → SB 24 → SB 22 (新)

主軸方位：N-12.0°-E

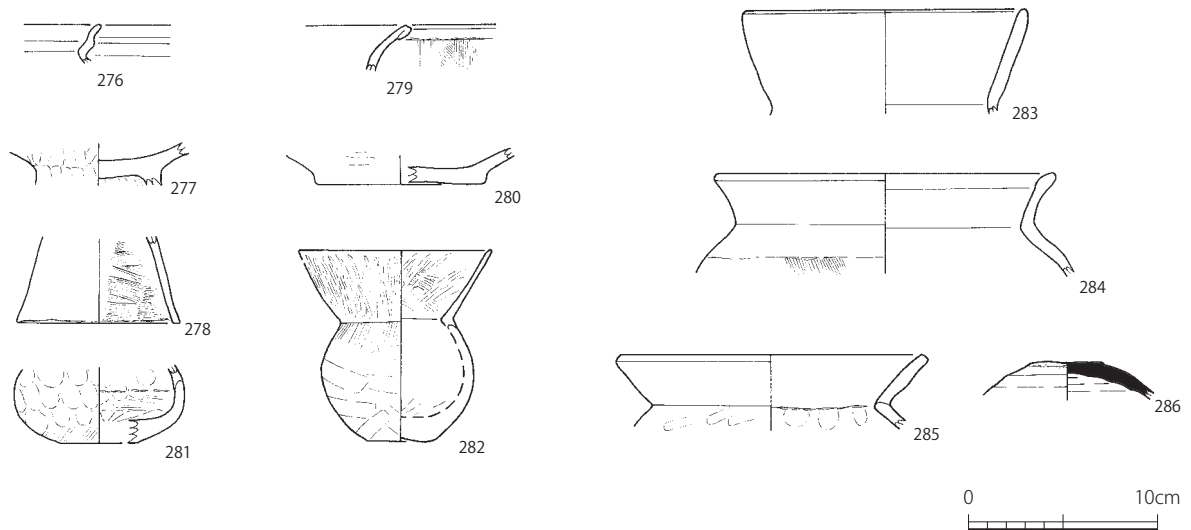
残存状況：南側は道路となる。西側の上層はSB 25・SB 26・SB 24・SB 22により削平される。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、D地区SB 39と合わせると検出範囲内で東西7.1m、南北5.7mを測る。

覆土：黒色土による自然堆積層。大淵スコリアは含まない。貼床：厚さ15cm程度の黒色土が、検出範囲全面に認められる。

壁溝：幅20～40cm、深さ10～20cmの壁溝が検出範囲全面に認められる。



第56図 SB 27 遺構実測図



第57図 SB 27 遺物実測図

その他の遺構：ピット7基検出。径50～80cm、深さ約40cmを測る。

炉跡：床面中央から東寄りに位置する。両側の端部は攪乱されていて炉石等は検出されない。東西70cm、南北80cm、深さ10cmを測る。

出土遺物：(第57図・図版27)

土師器10点、須恵器1点を図示した。

278・279・280は、広口壺、台付甕の破片で、弥生時代後期のものと考えられる。281・282はともに小型壺である。281は底部内外面にハケメ調整を残すが、他はコビナデなど比較的簡易な調整で仕上げられている。282も

281同様、胴部にミガキなどの調整は確認されないものの、直線的に広がる口縁部には、縦方向のヘラミガキが施される。中見代I～II式のものである。

283は壺、285は甕の破片である。両者とも橙色を呈し、白色粒子を極多量に含む。古墳時代中期末から後期初頭の土器に多く見られる胎土である。

所見

出土遺物や遺構の形態から、弥生時代後期の建物跡と考えられる。

第2項 土坑・性格不明遺構

SK1

遺構(第58図・図版6)

位置：C7グリッド 2トレンチ

主軸方位：不明

残存状況：平面形は不整形な楕円形を呈するものと考えられる。規模は東西1.0m、南北1.5m、深さ25cmを測る。底面付近から須恵器高坏が出土する。

覆土：大淵スコリアを含まない黒色土による自然堆積層。

出土遺物：(第59図・図版28)

須恵器1点を図示した。287は有蓋高坏の坏部の破片で、口縁部はやや内傾しながらも直立し、端部には凹みを有する。受部は山形に突出し、下端のナデは胴部との境界を示す調整で緩やかな屈曲を有する。脚部には四角形の三方向の透かしを有する。TK47・MT15型式併行期のものと考えられる。

所見

出土遺物から、古墳時代中期末～後期初頭の遺構と考えられる。

SX1

遺構(第60図)

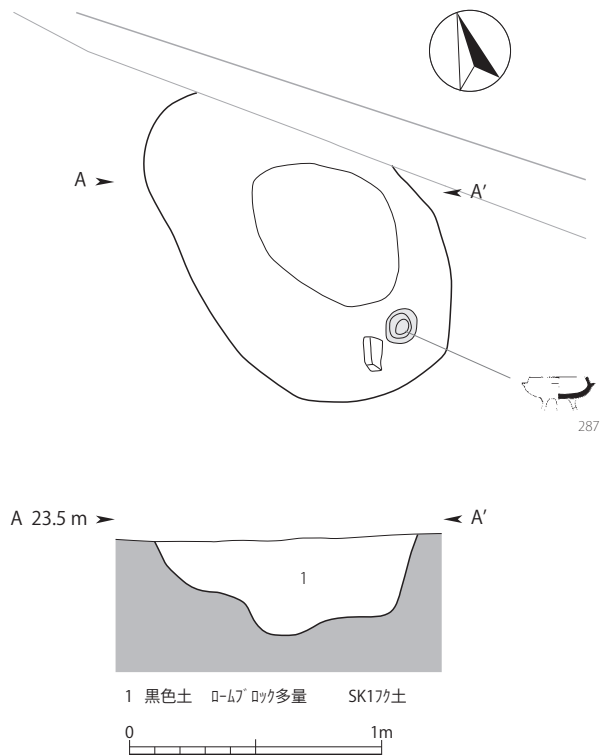
位置：A6・A6グリッド 5トレンチ

重複関係：(古)SB12→SX1(新)

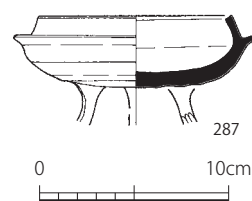
主軸方位：N-6.0°-W

残存状況：南側は道路となり削平される。平面形は不整形な楕円形を呈するものと考えられる。規模は東西2.6m、南北3.9m、深さ30cmを測る。

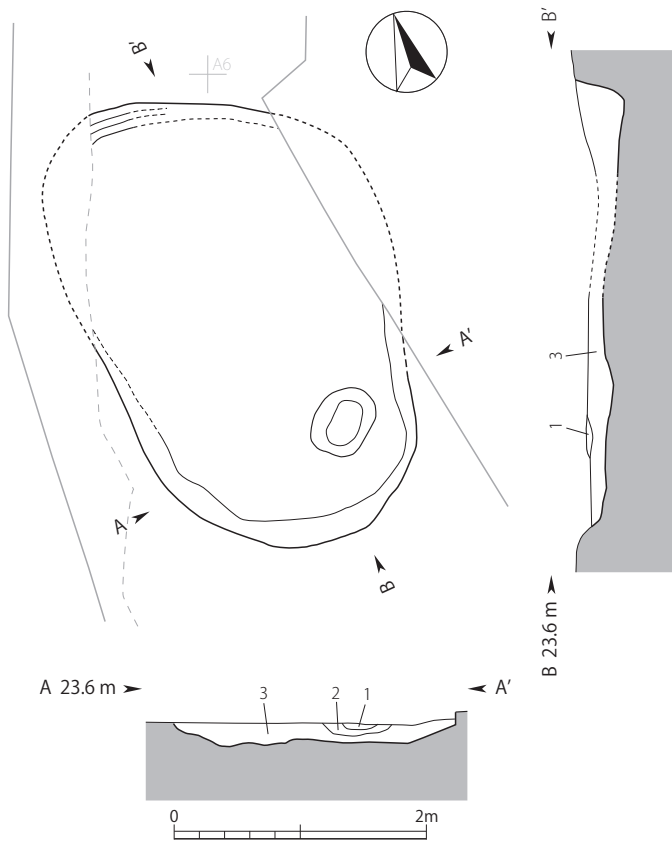
覆土：大淵スコリアを含む黒褐色土による自然堆積層。



第58図 SK1 遺構実測図

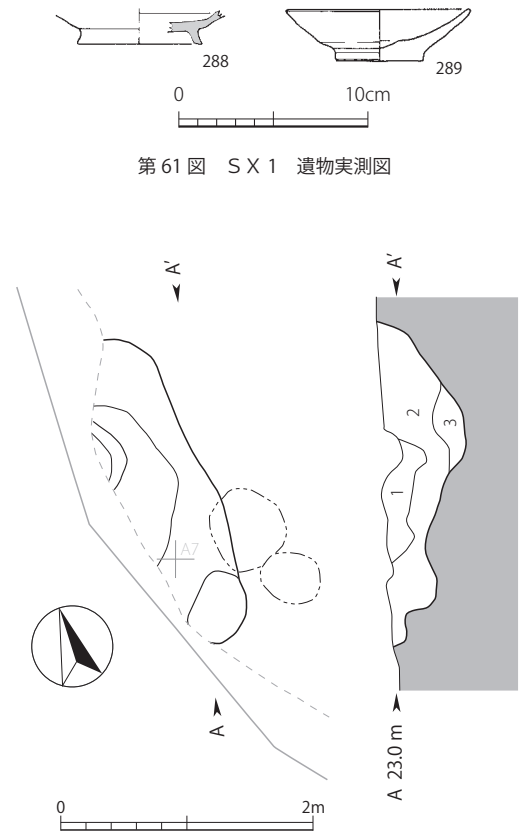


第59図 SK1 遺物実測図



- 1 焼土
- 2 黒色土 大淵スコリア中量
- 3 黒褐色土 大淵スコリア中量

第60図 SX1 遺構実測図



第61図 SX1 遺物実測図

第62図 SX2 遺構実測図

- 1 暗褐色土 大淵スコリア微量、 \square - Δ 多量 SX277土
- 2 暗褐色土 \square - Δ 少量 SX277土
- 3 暗褐色土 \square - Δ 多量 SX277土

その他の遺構：上層に焼土が堆積するピット1基を検出。

出土遺物：(第61図・図版28)

緑釉陶器1点、土師器1点を図示した。288は緑釉陶器の稜碗の破片で底部のみ残存する。底部内面に稜を有することから稜碗とした。全体はロクロナデで仕上げられているが、高台内面には一部ヘラミガキとも考えられる痕跡が確認される。10世紀のものと考えられる。

所見

出土遺物から、10世紀以降の遺構と考えられる。

東西0.7m、南北2.6m、深さ70cmを測る。

覆土：大淵スコリアを殆ど含まない暗褐色土による自然堆積層。

出土遺物：図化出来た資料はない。

所見

時期は不明である。

SX2

遺構(第62図)

位置：ア6グリッド 5トレンチ

主軸方位：N-9.0°-W

残存状況：南側は道路となり削平される。平面形は不整形な楕円形を呈するものと考えられる。規模は検出範囲内で

第3項 B III調査区遺構外出土遺物

(第63・64図・図版28～33)

290～300は、5トレンチ付近の出土遺物である。土師器7点、須恵器3点、灰釉陶器1点を図示した。

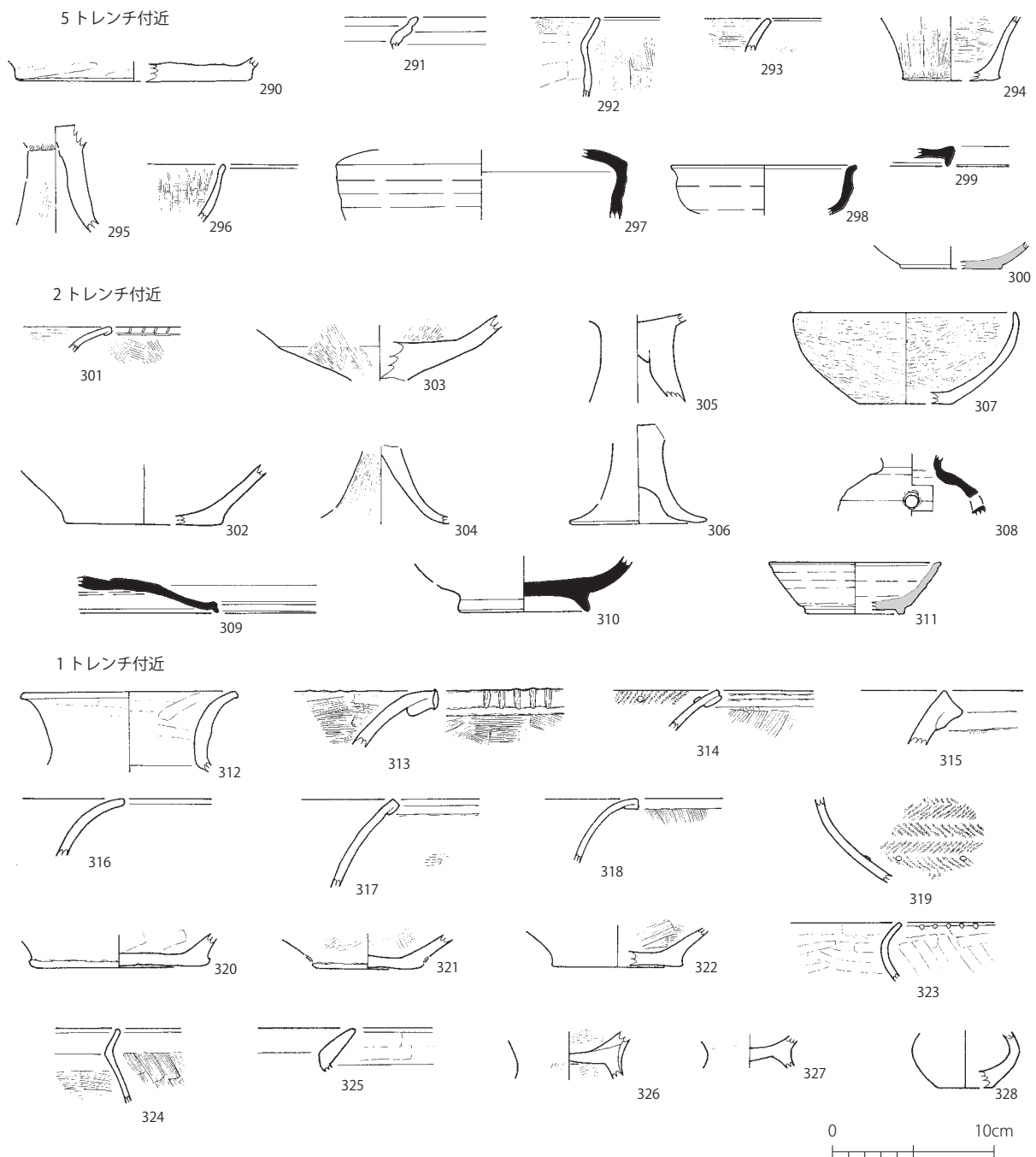
290は大型の壺底部で、古墳時代前期の大廓式のものである。296は坏の破片で内面に丁寧なヘラミガキが施される。小破片のため外面のケズリの有無は明らかでない。297は長頸壺、298は盤類と考えられ、底部外面にヘラケズリが施される。

301～311は、2トレンチ付近の出土遺物であ

る。土師器7点、須恵器3点、灰釉陶器1点を図示した。

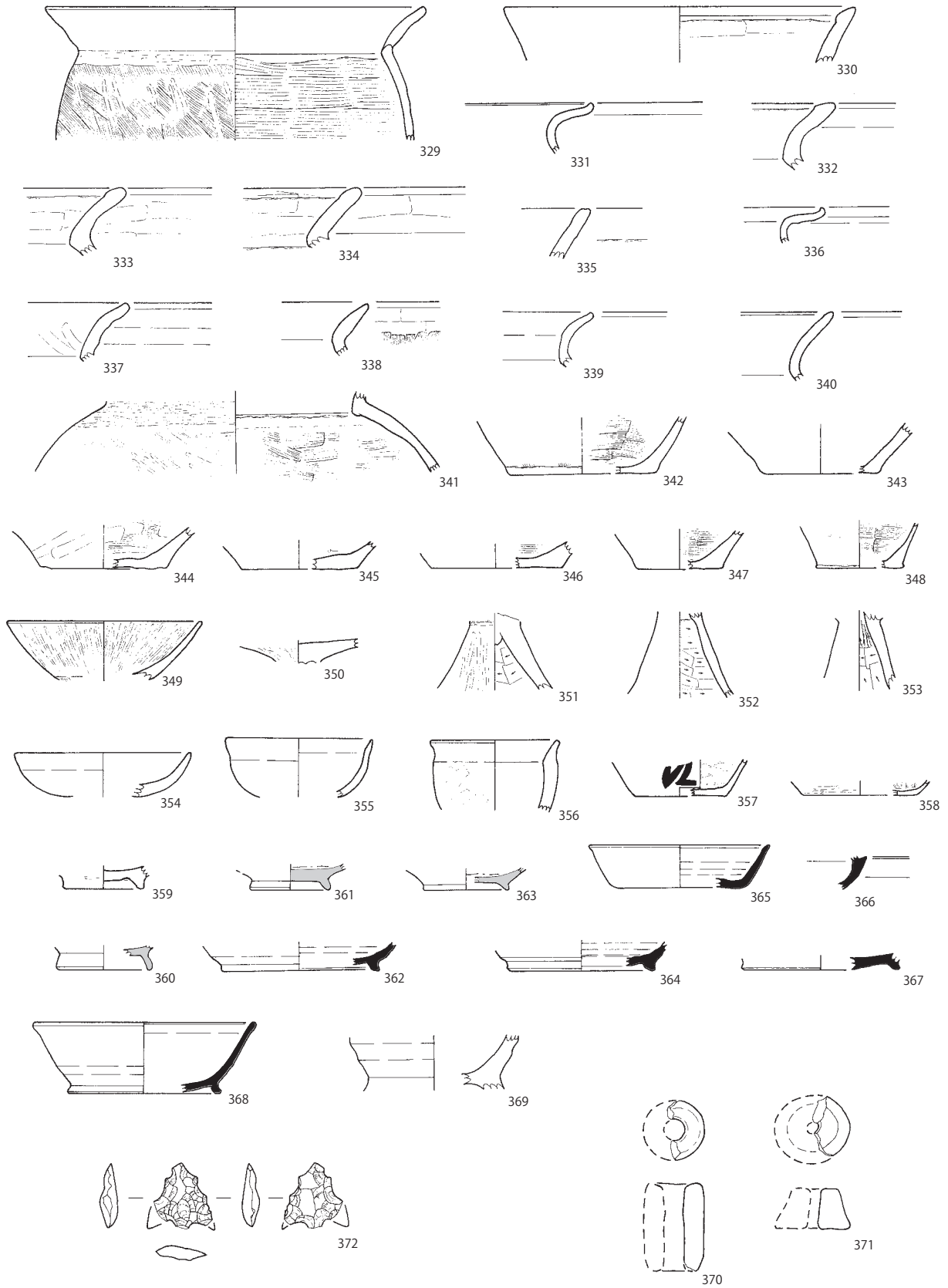
301、302は広口壺の破片で弥生時代後期に位置づけられ、303～306の高坏は古墳時代中期後半～後期初頭と考えられる。307は坏の破片で、内外面に丁寧なヨコミガキが施される。前述の高坏と同時期の遺物に位置づけられる

312～372は、1トレンチ付近の出土遺物である。土師器49点、須恵器6点、灰釉陶器3点、石器1点、土製



第63図 B III 遺構外出土遺物(1)

1 トレンチ付近



第64図 B III 遺構外出土遺物(2)

品2点を図示した。これらの遺物の多くは、トレンチの位置からS B 24～S B 27に伴うものと推察される。

312～322は壺の破片でその多くは、弥生時代後期に位置づけられる。312は口縁部だけの破片で、頸部から口縁部にやや直線的に立ち上がる。ヘラミガキののちヘラナデが施されている。313は口縁部に折り返しを有し、ナデ調整による面取りののち棒状貼り付け文が付加される。314は、内面に縄文を施文したのち、円形貼り付け文が付加される。323は甕の破片で内外面ともに板状工具によるナデで調整後、端部にはキザミが施される。

329～348は甕の破片である。329は長胴化した甕で、内外面ともハケメ調整の後、口縁部はヨコナデが施される。頸部外面、および胴部の一部にはヘラミガキも確認される。330・332～334は口縁部内面が肥厚する「駿東甕」、331・336は、口縁部が水平に開き、端部が摘みあがる甕である。341は、球胴甕の破片で頸部付近に横方向のヘラミガキが施される。7世紀から8世紀のものと考えられ

る。

349～353は柱状脚高坏の破片である。349は、比較的深い坏部で、内外面ともに丁寧なヘラミガキが施される。351～353は脚部の破片で内面にはケズリが確認される。いずれも古墳時代中期のものと考えられる。

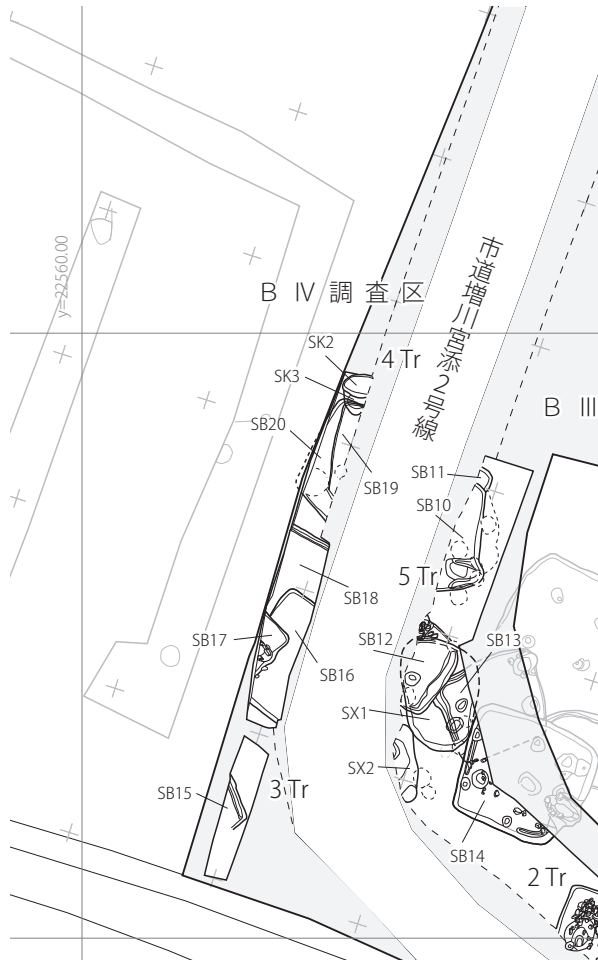
357は坏の破片で外面に墨書が認められるものの、判読は出来ない。

360・361・363は灰釉陶器の碗の破片だが、小破片のため年代は明らかでない。

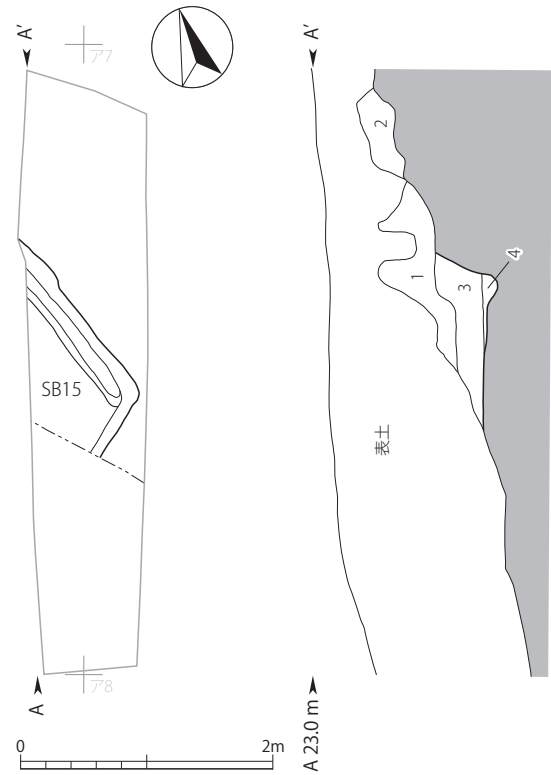
362・364～368は須恵器の坏の破片であるが、その製作時期は多岐に渡る。366は7世紀代、362・364・368は有台坏の破片で、7世紀末から8世紀前半のものである。また、365は箱坏と呼ばれるもので8世紀後半頃の製作と考えられる。

372は黒耀石製の有舌石鎌の破片で、370は土錘、371は土製紡錘車の破片である。

第5節 B IV調査区の調査成果



第65図 B IV 調査区全体図



第66図 SB15 遺構実測図

- | | |
|---------------------------|---------|
| 1 黒褐色土 大淵スコリア多量、ロームブロック微量 | |
| 2 黒褐色土 大淵スコリア微量、ロームブロック多量 | |
| 3 暗褐色土 大淵スコリア少量、ロームブロック中量 | SB157粘土 |
| 4 黒褐色土 大淵スコリア微量、ロームブロック多量 | SB157粘土 |

調査概要 B IV調査区は、道路西側の南側部分、3トレンチ及び4トレンチを中心とした調査区で宮添遺跡H地区（平成14年度調査）と隣接する箇所である。

第1項 竪穴建物跡

SB15

遺構（第66図・図版6）

位置：イ7・イ8グリッド 3トレンチ

主軸方位：N-21.5°-W

残存状況：南側は地形的に削平されていて、建物跡南東部のみ検出する。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西1.1m、南北1.7mの最大値を測る。焼土施設等は検出されない。

覆土：大淵スコリアを微量に含む暗褐色土による自然堆積層。SB15埋没後に多量の大淵スコリアが混入した黒褐色土が堆積している。

壁溝：幅35cm、深さ10cmの壁溝が東壁部分にのみ検出される。

出土遺物：図化出来た資料はない。

所見

検出状況から、古墳時代中期後半の建物跡と考えられる。

SB16

遺構（第67図・図版6）

位置：イ6グリッド 4トレンチ

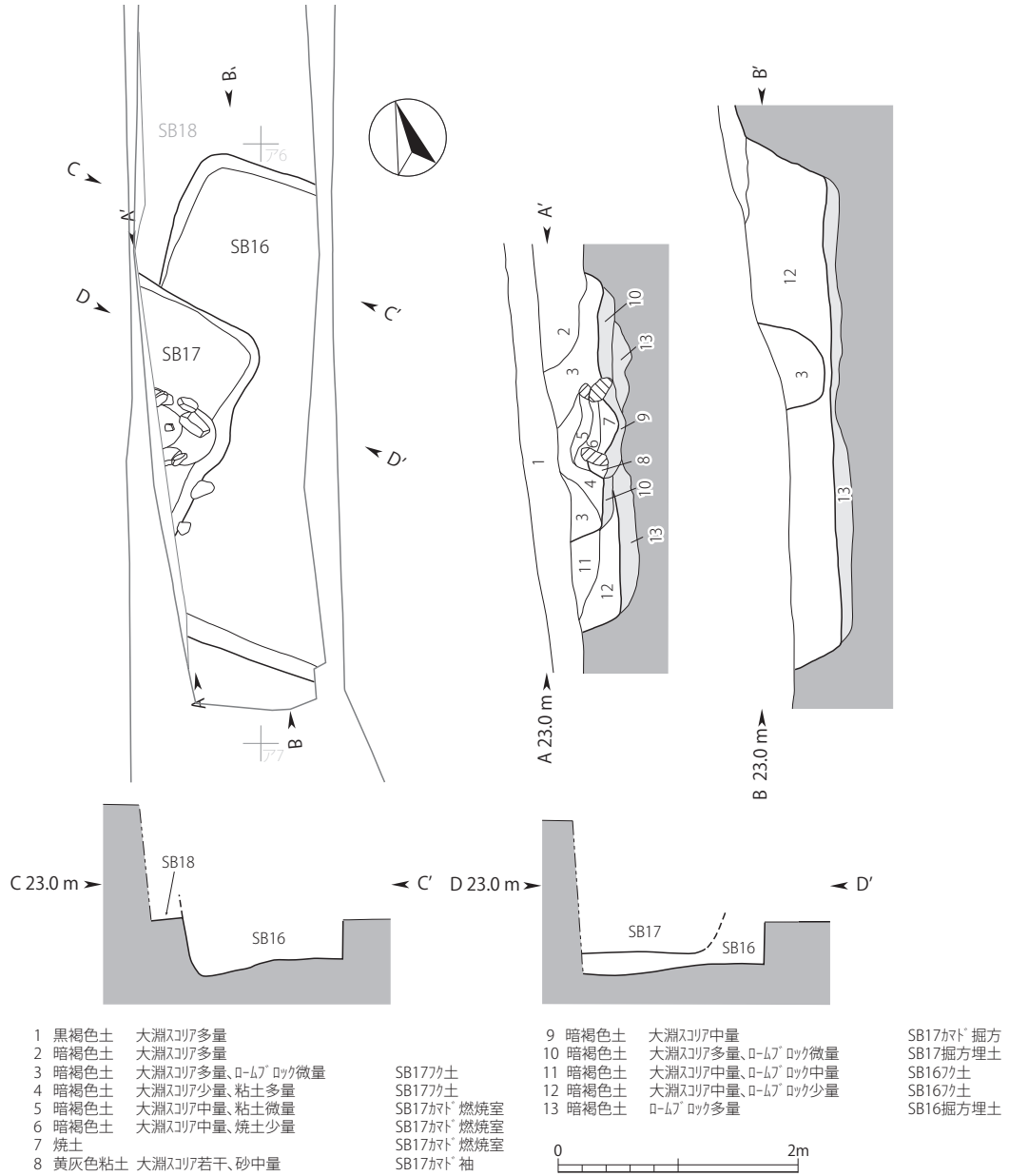
重複関係：（古）SB16→SB17（新）

主軸方位：N-36.5°-E

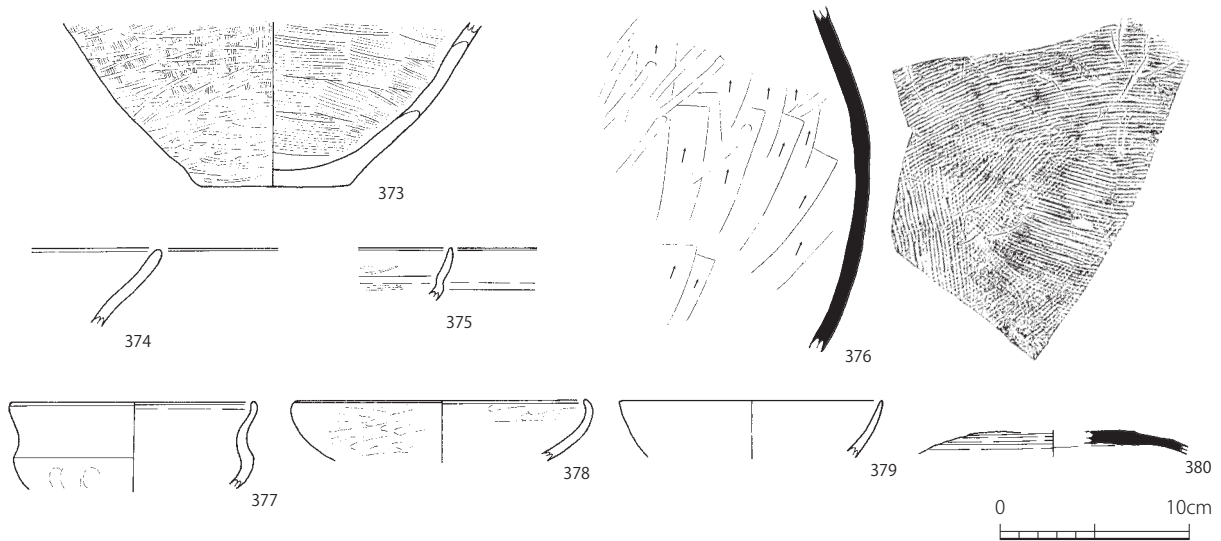
残存状況：東側は道路法面となり削平されている。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西2.4m、南北4.0mの最大値を測る。焼土施設は検出されない。

覆土：大淵スコリアを含む暗褐色土による自然堆積層。

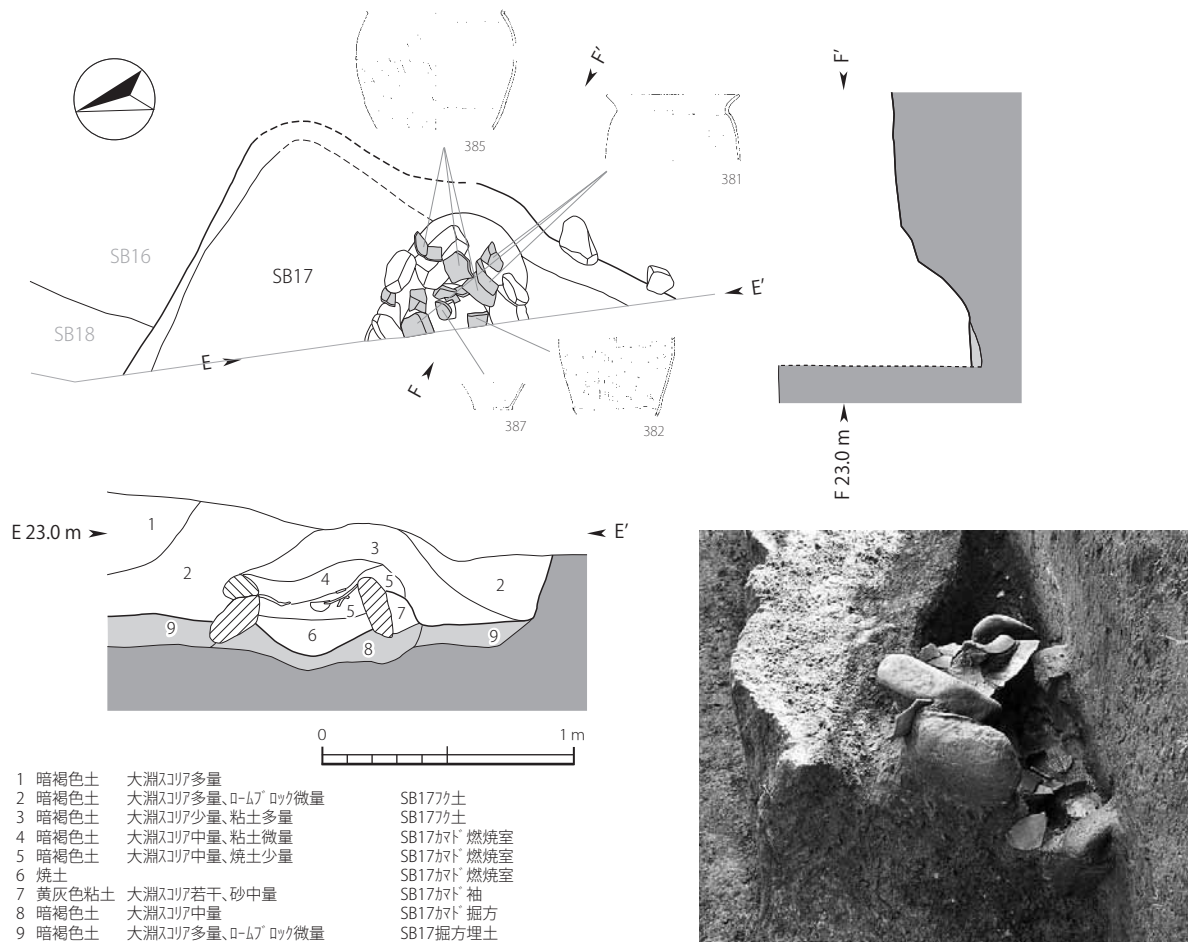
貼床：厚さ15cm程度の暗褐色土が、検出範囲全面に認



第 67 図 SB 16・SB 17 遺構実測図



第 68 図 SB 16 遺物実測図



第69図 SB17 遺構実測図

められる。

出土遺物：(第68図・図版33)

土師器6点、須恵器2点を図示した。

373は球胴甕の破片で、外面タテハケののち、丁寧なヘラミガキが施される。

375は環の破片で須恵器の環蓋を模倣したものと考えられ、7世紀のものと考えられる。

須恵器は甕(376)と環蓋(380)の破片で、380は7世紀後半から8世紀初頭のものと考えられる。

所見

出土遺物から、7世紀後半から8世紀初頭の建物跡と考えられる。

SB17

遺構(第67・69図・図版6)

位置：イ6グリッド 4トレンチ

重複関係：(古)SB16→SB17(新)

主軸方位：N-138.0°-E

残存状況：西側は調査区域外となり、建物跡北東部のみ検

出する。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西1.3m、南北1.8mの最大値を測る。

覆土：大淵スコリアを多量に含む暗褐色土による自然堆積層。

貼床：厚さ10cm程度の大淵スコリアを多量に含む暗褐色土が、検出範囲全面に認められる。

カマド：東壁に存在。西側は調査区域外となり全長は不明。中央内寸幅は45cm、中央外寸幅は70cmを測る。燃烧室を囲む様に芯材と思われる石材が点在する。燃烧室からは遺物(381・382・385・387)がまとまって出土している。

出土遺物：(第70図・図版34)

土師器12点、須恵器1点を図示した。

381・382・385は長胴甕の破片である。381・382はほとんど肩の張らない形態を示す。内外面ともに細かいハケメ調整で仕上げられている。382は輪積み部分のナデ調整により、ハケメが消されている。8世紀のものと考えられる。

384は土師器の皿で、灰釉陶器の皿もしくは段皿の模倣と考えられる。内外面ともに横方向の丁寧なヘラミガキ

が施される。10世紀後半のものと考えられる。

388は高坏の破片と考えられ、短い脚部を有する。全面ナデ調整で仕上げられている。390とあわせて、7世紀のものと考えられる。

391～393は坏の破片である。いずれも「駿東坏」とされるものであるが、器高と底部径の大きさなどから見て同一型式のものとは考えられず、391・392・393の順で新しくなるものと考えられる。

所見

カマドから出土した遺物により、8世紀の建物跡と考えられる。

S B 18

遺構（第71図・図版6）

位置：ア5・イ5グリッド 4トレンチ

重複関係：(古) S B 18 → S B 16 → S B 17 (新)

主軸方位：N - 30.0° - E

残存状況：東側は道路法面となり南側はS B 16・S B 17に削平されている。床面と北壁の一部が検出される。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西2.0

m、南北3.1mの最大値を測る。焼焼施設は検出されない。

また、床面上からは完形の坏（403）が出土している。

覆土：大淵スコリアを微量含む黒色土による自然堆積層。S B 18埋没後に多量の大淵スコリアが混入した黒褐色土が堆積している。

壁溝：幅20cm、深さ15cmの壁溝が北壁部分に検出される。

出土遺物：（第72図・図版35）

土師器 10点を図示した。

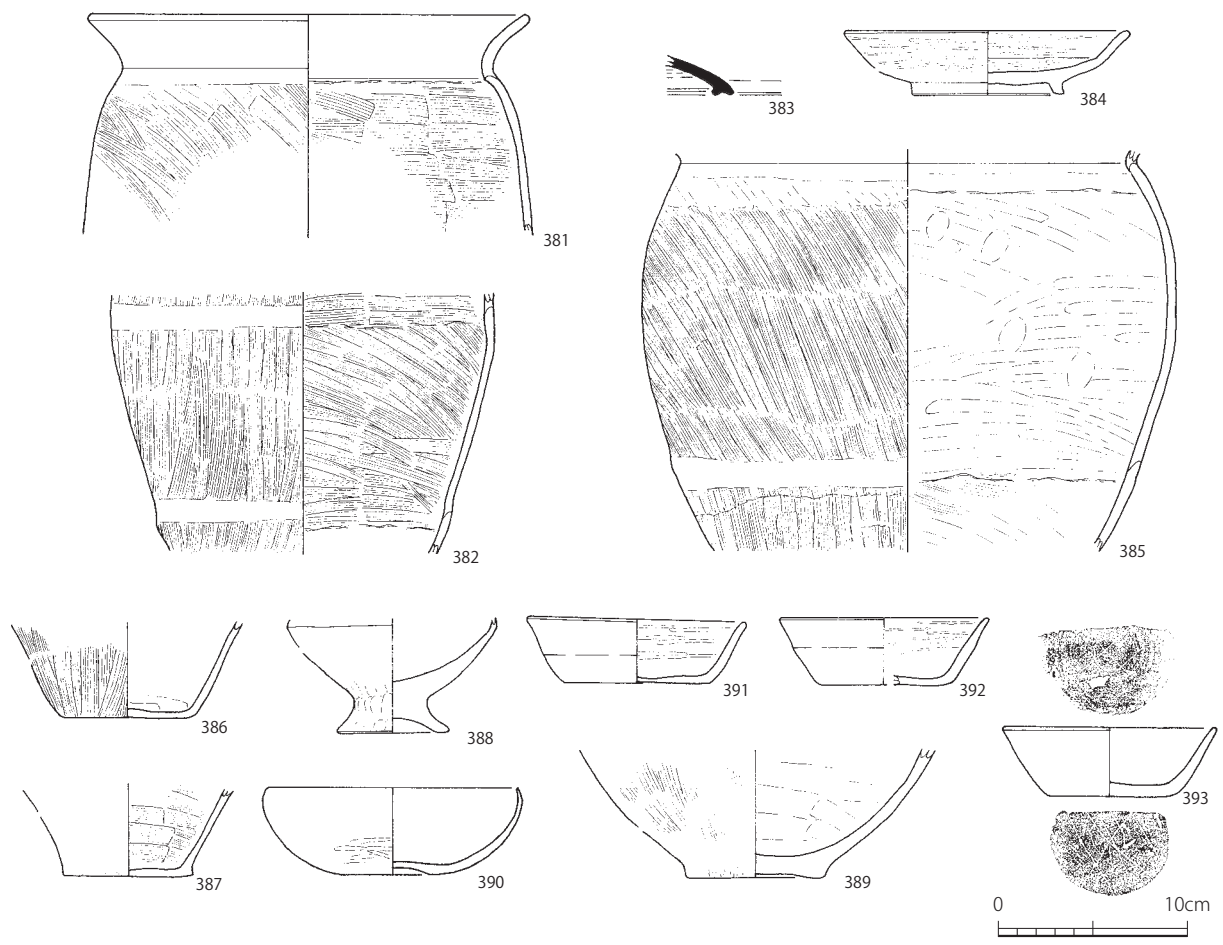
古墳時代前期～中期初頭のもの（394～396・398～401）と古墳時代中期後半～後期前半のもの（397・402・403）に大きく二つの時期に分けられる。

399は中見代Ⅰ～Ⅱ式の柱状脚高坏、400は大廓式後半の高坏の破片である。401は小型器台の破片であるが、器面荒れのため調整が確認できない。

397は直口壺の破片で、荒いヘラミガキが施される。397・403は胎土が荒く、白色粒子を極多量に含む。403は古墳時代中期後半の坏で口縁部が内面に屈曲する。

所見

大淵スコリアの堆積状況や出土遺物から、古墳時代中期後半の建物跡と考えられる。



第70図 S B 17 遺物実測図

SB 19

遺構 (第71図・図版7)

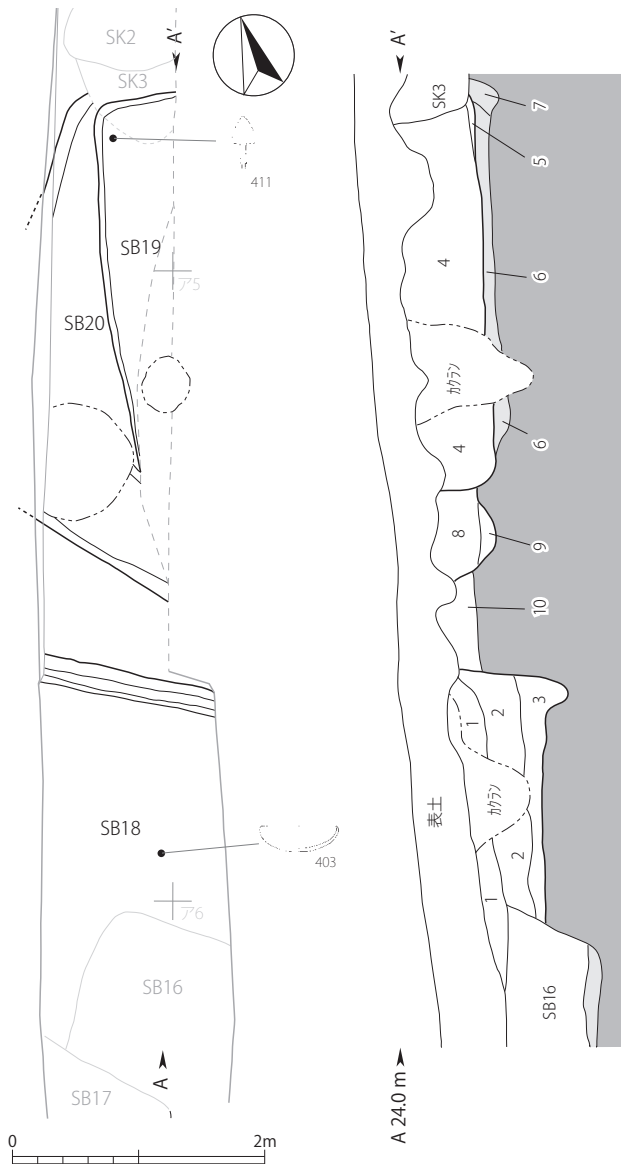
位置: イ4・イ5グリッド 4トレンチ

遺構対応: 形状、規模、床面の高さから、B III調査区SB 10と同一遺構の可能性をもつ。

重複関係: (古) SB 20 → SB 19 → SK 3 (新)

主軸方位: N - 10.0° - E

残存状況: 東側は道路法面となり削平されている。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西0.8m、南北3.1mの最大値を測る。燃烧施設は検出されない。ま



- | | |
|---------------------------|----------|
| 1 黒褐色土 大淵スコリア多量 | SB187ク土 |
| 2 黒色土 大淵スコリア微量、炭化物少量 | SB187ク土 |
| 3 黒色土 大淵スコリア微量、ロームブロック中量 | SB197ク土 |
| 4 暗褐色土 大淵スコリア多量、ロームブロック微量 | SB197ク土 |
| 5 黒褐色土 大淵スコリア少量 | SB197ク土 |
| 6 黒褐色土 大淵スコリア少量、ロームブロック多量 | SB19掘方埋土 |
| 7 黒色土 ロームブロック多量 | SB197ク土 |
| 8 暗褐色土 大淵スコリア少量、ロームブロック微量 | SB207ク土 |
| 9 黒褐色土 ロームブロック多量 | SB20掘方埋土 |
| 10 黄褐色土 黒褐色土多量 | |

第71図 SB 18・19・20 遺構実測図

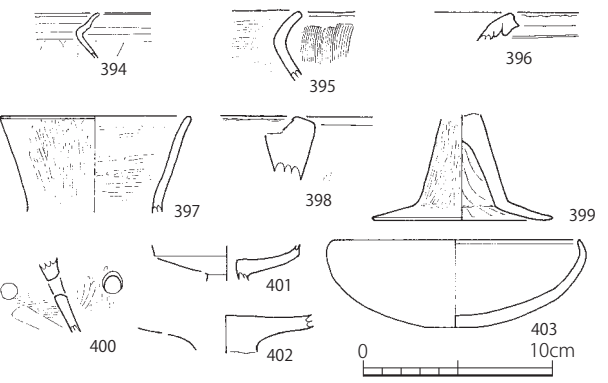
た、北東コーナー付近の床面からは、鉄鏃(411)が出土している。

覆土: 大淵スコリアを多量含む暗褐色土による自然堆積層。
貼床: 厚さ10cm程度で、ロームブロックが多量に混入した黒褐色土が検出範囲全面に認められる。

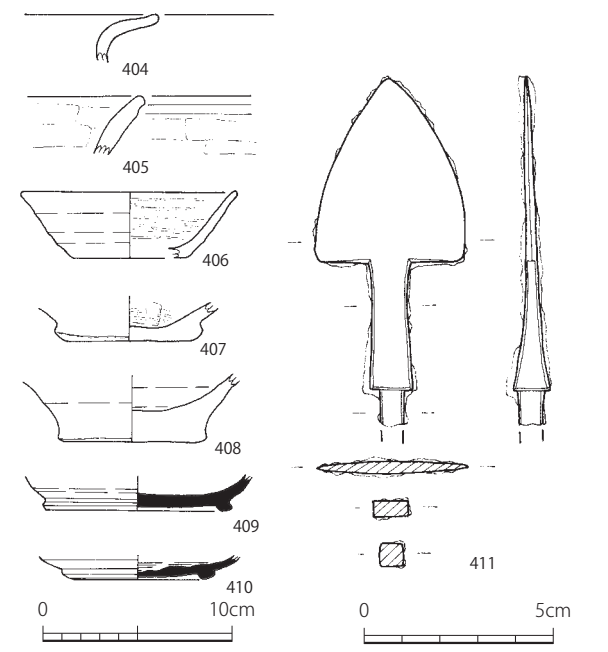
出土遺物: (第73図・図版35)

土師器5点、須恵器2点、鉄製品1点を図示した。
404・405は甕の破片で、404は口縁部が水平に広がり、遠江系のもと考えられる。408は、坏の破片で、底部糸切り後未調整で、10世紀のもと考えられる。409・410は有台坏の破片で8世紀のである。

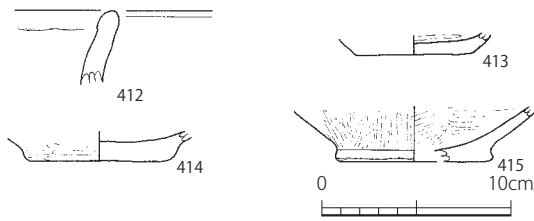
411は平根三角形式の鉄鏃で、床面からの出土である。残存長8.0cm、鉄身部長4.3cmを測る。刃部はふくらが張り、幅3.45cm、平造りの断面は厚さ0.25cmを測る。頸部は、2.9cmを測り、断面四角形を呈する。茎関は台形関である。



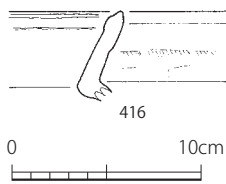
第72図 SB 18 遺物実測図



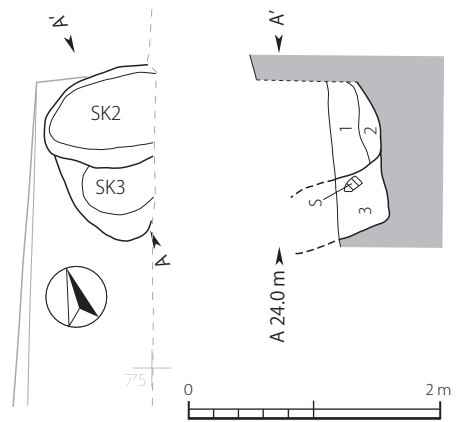
第73図 SB 19 遺物実測図



第74図 SB 20 遺物実測図



第75図 SK 2・SK 3 遺物実測図



1 黒色土 大淵スコリア多量 SK27カ土
2 黒色土 大淵スコリア多量、ロム7 ロック中量 SK27カ土
3 暗褐色土 大淵スコリア多量 SK37カ土

第76図 SK 2・SK 3 遺構実測図

所見

検出状況から、9～10世紀の建物跡と考えられる。

SB 20

遺構（第71図・図版7）

位置：イ4・イ5グリッド 4トレンチ

遺構対応：形状、規模、床面の高さから、BⅢ調査区SB 11と同一遺構の可能性をもつ。重複関係：（古）SB 20→SB 19→SK 3（新）

主軸方位：N-49.0°-E

残存状況：東側は道路法面となり削平されている。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西2.7m、南北3.4mの最大値を測る。焼焼施設は検出されない。

覆土：大淵スコリアを少量含む暗褐色土による自然堆積層。

壁溝：幅45cm、深さ10cmの壁溝が南壁にのみ検出される。

出土遺物：（第74図・図版36）

土師器4点を図示した。412は甕、413は杯の破片である。415は壺の破片で弥生時代後期のものである。

所見

検出状況から、9世紀の建物跡と考えられる。

第2項 土坑

SK 2

遺構（第76図）

位置：イ4グリッド 4トレンチ

重複関係：（古）SK 3→SK 2（新）

残存状況：東側は道路法面となり削平されている。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西1.1m、南北0.8mの最大値を測る。

覆土：大淵スコリアを多量含む黒色土による自然堆積層。

出土遺物：（第75図・図版36）

SK 2又はSK 3の覆土から出土した土師器1点を図示した。甕の破片だが、小破片のため時期不明。

所見

検出状況から、9世紀以降の遺構と考えられる。

SK 3

遺構（第76図）

位置：イ4グリッド 4トレンチ

重複関係：（古）SB 19→SK 3→SK 2（新）

残存状況：東側は道路法面となり、北側はSK 2により削平されている。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西0.6m、南北0.9mの最大値を測る。

覆土：大淵スコリアを多量含む暗褐色土による自然堆積層。

所見

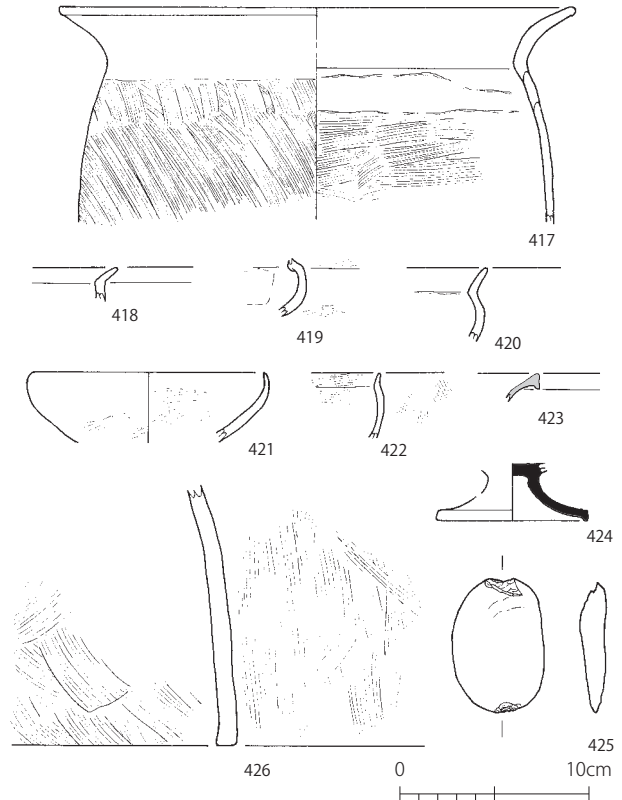
検出状況から、9世紀以降の遺構と考えられる。

第3項 BIV調査区 遺構外出土遺物(第77図・図版36)

4トレンチ出土の土師器6点、灰釉陶器1点、須恵器1点、石器1点、土製品1点を図示した。

417は、長胴の甕で、胴部に対して口縁部が厚く作られている。外面は斜め方向のハケメ調整、内面は屈曲部以下は横方向のハケメ調整が施される。ハケメ調整の後、口縁部にヨコナデにより仕上げられる。419は小型壺、420は鉢の破片で、古墳時代前期後半から中期初頭のものと考えられる。421は坏の破片で、胎土が荒く、白色粒子極多量に含む。やや直線的に広がる体部から屈曲して口縁部にいたる。古墳時代中期後半～後期のものと考えられる。

426は不明土製品とした。厚さ1cm、上方に向かうにつれて内傾し、湾曲を持たないため径は復元できない。外面は縦方向(一部ナナメ方向)のハケメ調整(5本/cm)、内面も下方のみハケメ調整が施される。外面にススのようなものが付着している。神奈川県海老名市秋葉山2号墳で出土している円筒形土製品や移動式カマドの破片の可能性が指摘できる。



第77図 BIV調査区 遺構外出土遺物実測図

第6節 B地区の調査成果

宮添遺跡B地区の調査においては、28軒の竪穴建物跡等が検出され、弥生時代後期から平安時代に至る期間に造営された集落の一部を発見できた。ただし調査区が幅狭であること及び遺構の重複が激しいことから不明瞭の点を残したが、既に報告されている隣接する地区の成果と合わせて検討することで遺構の概要を把握することが出来た。各遺構の築造時期については表2(P.12)のとおりである。

B地区の調査成果として注目する点として、古墳時代中期の竪穴建物跡S B 21は、東西の幅が9.5 mを測る規模の大きい建物跡で、出土遺物も豊富である。床面には仕切り溝が検出されている。

東壁にカマドを有する8世紀の竪穴建物跡S B 17は、西側が調査区域外となるため未調査部分を残したが良好な状態でカマドが検出されている。カマド燃焼室周囲から多数の石材が検出され、支脚石には逆さまにした甕の底部が被せられていた。同様の事例がD地区S B 47においても認めれることから、所謂“カマド廃棄儀礼”が行われている可能性を持つ。

第4章 C地区の調査

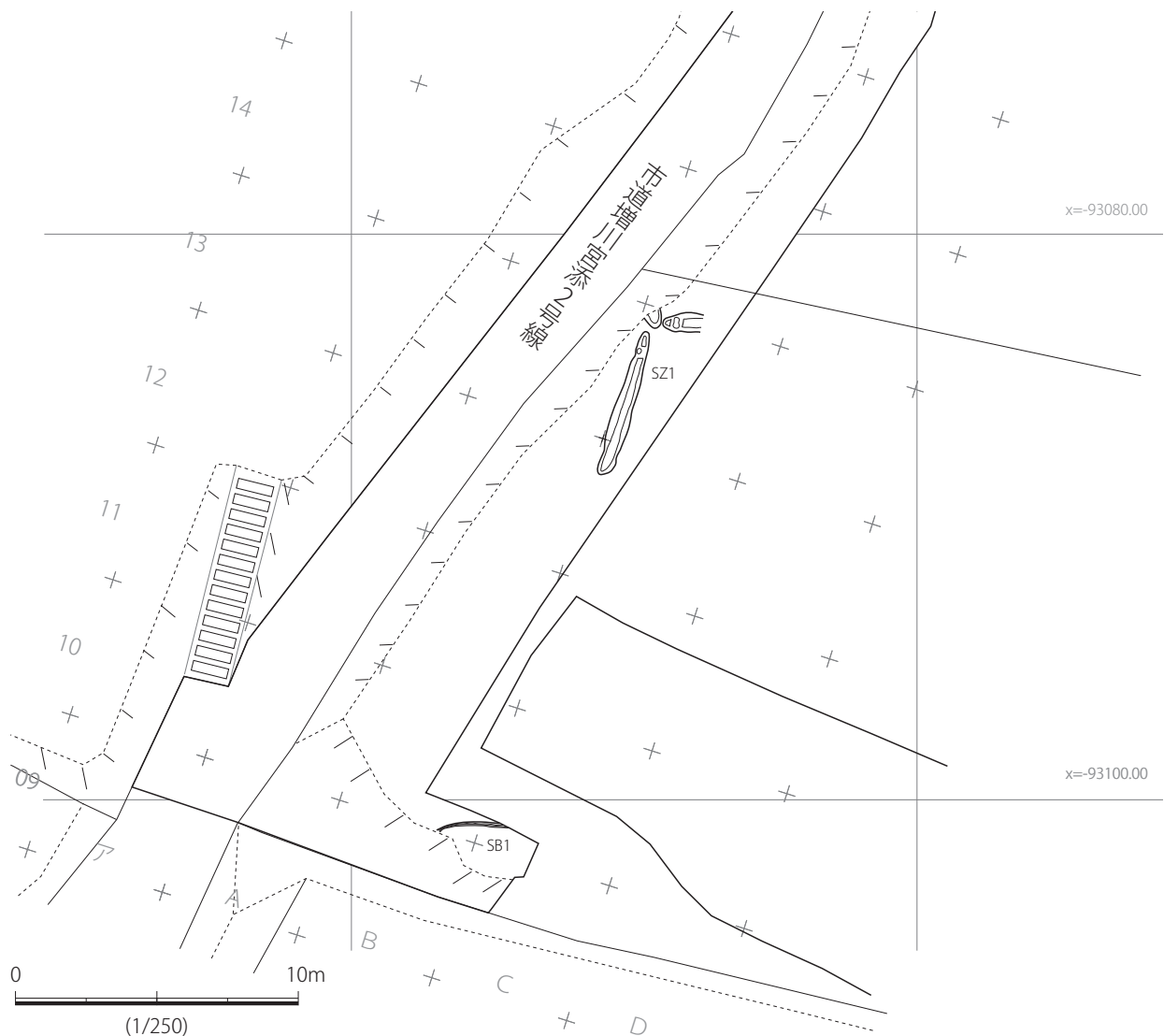
第1節 調査の経緯と経過

調査に至る経緯 富士市（市長 鈴木清見）は、富士市増川地内に位置する増川宮添2号線の拡幅を目的とする道路改良工事を計画した。該当地は、「周知の埋蔵文化財包蔵地」宮添遺跡の範囲内であることから、富士市教育委員会は、平成6年4月28日付けで富士市（建設部道路建設課）から文化庁長官宛に提出された文化財保護法（昭和25年法律第214号）に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」を静岡県教育委員会に進達した。それを受け、平成6年6月9日付けで静岡県教育委員会から、文化庁の指導（昭和56年2月7日付け庁保記第11号）により工事着工前

に発掘調査を実施するよう通知がなされた。

本発掘調査 調査は富士市教育委員会教育長 山本厚のもと、文化振興課職員が担当することとなり、平成6年7月18日から平成6年7月29日まで、586㎡を調査した。

現況の道路は、切り通しであることから道路東側の法面を精査し、土層堆積状況を確認した。遺構は拡幅部分にしか残存しないことが判明したため、道路東側の拡幅部分についてのみ調査を行った。発掘調査では、方形周溝墓1基・竪穴建物跡1軒を検出・完掘し、平成7年5月12日、



第78図 C地区 全体図

その結果を静岡県教育委員会教育長に「発掘調査終了報告」として送付した。

整理作業 整理作業は調査終了後、基礎整理を断続的に行い、平成23年4月1日より本格的な整理作業を再開し、本書の刊行をもって終了した。測量基準点については、調査当時は任意基準点を使用していたが、平成6年度、隣接するD地区の発掘調査に伴い5m方眼のグリッドが設定されたことから、このグリッドを図上にて合成させ整理作業を行うものとした。

期間中に出土土器の洗浄・接合・復原、遺物の図化作業、遺構図・遺物図等の編集、各図のトレース作業、観察表等の作成、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらにこれらを編集して報告書を作成した。本章で報告する遺物・図面は富士市教育委員会にて保管・管理されている。

調査の体制 本章で報告する宮添遺跡C地区の本発掘調査は、以下の体制で実施した。

調査主体：富士市教育委員会

教育長 山本 厚

教育次長 影島英三

事務局 文化振興課

課長 立田守彦 課長補佐 若林富彦

係長 池田晴夫

調査担当 主事 前田勝己

第2節 遺構と遺物

第1項 方形周溝墓

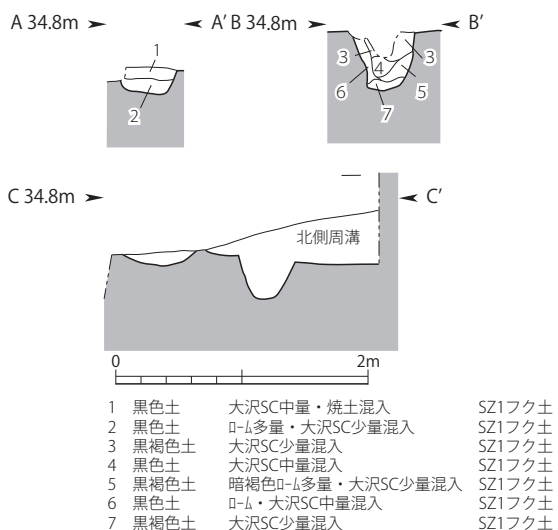
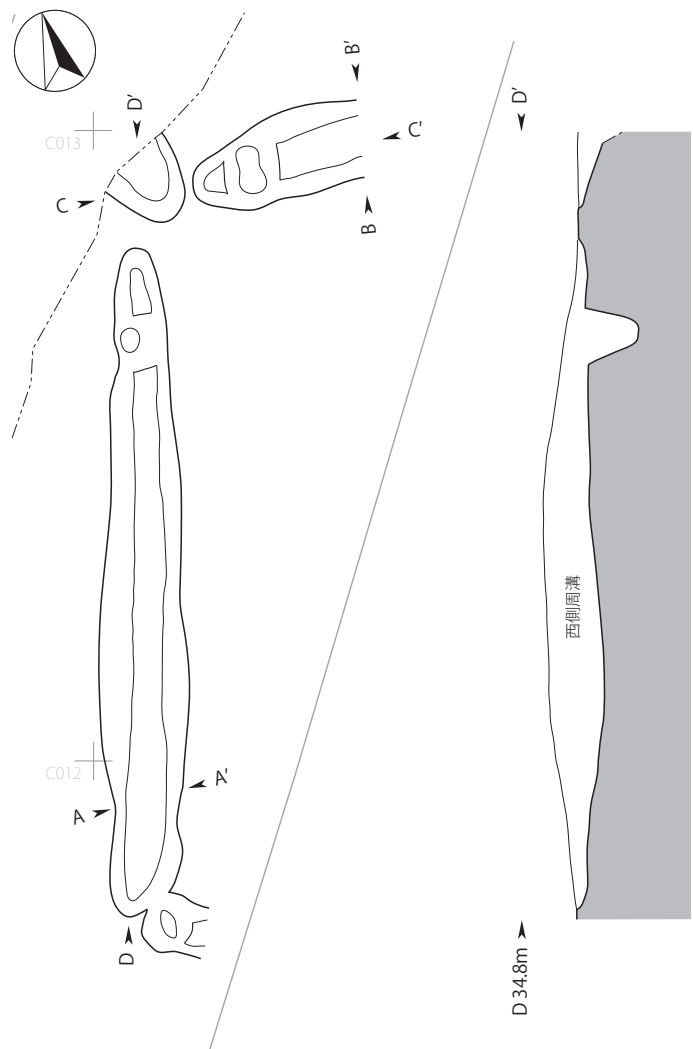
SZ1

遺構（第79図・図版7）

位置：C 012・C 013 グリッド

主軸方位：N-2.0°-W

残存状況：遺構の上面は削平されていて、周溝のみが検出され、埋葬施設は確認できなかった。周溝は、西側と北側及び南側の一部が検出される。北西コーナーは途切れており、このコーナーから方形周溝墓に伴うものかは不明であるが、北西方向に延びる溝状の遺構が検出される。残存値は、東西2.4m、南北6.5mを測る。周溝幅は、西側において最大70cmを測る。北側及び南側の周溝については、殆



第79図 SZ1 遺構実測図

どが調査区域外となり形状、規模等は不明である。

覆土：暗褐色ロームが混入した黒褐色土による自然堆積層

出土遺物：図化出来た資料はない。

所見

検出範囲が狭く不明な点が多いが、古墳時代前期以前の遺構と考えられる。

第2項 竪穴建物跡

SB1

遺構（第80図・図版7）

位置：C 04・C 05 グリッド

主軸方位：N - 0.5° - E

残存状況：南側は削平、東側は調査区域外となるため、建物跡北西部のみ検出される。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で東西 3.6 m、南北 2.1 m の最大値を測る。燃焼施設は検出されていない。

覆土：暗褐色土による自然堆積層で上層にのみ大淵スコリアが少量含まれる。

貼床：厚さ 8 cm 程度の暗褐色土であり、中央部分に硬化面が確認される。

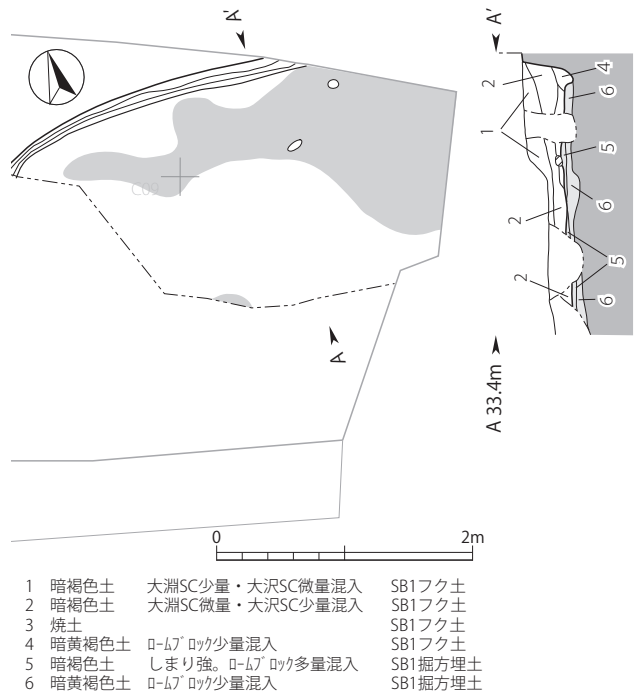
壁溝：幅 20cm、深さ 8cm の壁溝が検出範囲全体に確認される。

その他の遺構：床面に広い範囲で広がる焼土及び炭化物が検出されている。

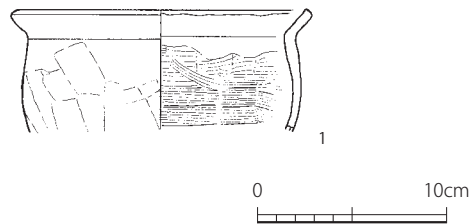
出土遺物： 図化出来た資料はないが、古墳時代前期の土師器片の出土が確認されている。

所見

出土遺物から、古墳時代前期の建物跡と考えられる。



第80図 SB1 遺構実測図



第81図 C地区 遺構外出土遺物実測図

第3項 C地区遺構外出土遺物（第81図・図版36）

土師器1点を図示した。小型甕の破片で外面はナナメ方向の板状工具によるナデ調整、内面にヨコハケが施されている。9世紀のものと考えられる。

第3節 C地区の調査成果

宮添遺跡C地区では、方形周溝墓1基と竪穴建物跡1軒が検出された。

SZ1は、1辺が6.5mを測る方形周溝墓と認識され、周溝幅は最大で70cmと比較的小さい規模の方形周溝墓である。検出範囲が狭いことや上面が全体的に激しく削平されていることから不明な点が多いが、A地区においても方形周溝墓が検出されていることから群在する可能性を持つ。

竪穴建物跡SB1については、大半が削平されていることから不明な点が多いが、堆積状況と形状から古墳時代前期とされる。隣接するL地区においても古墳時代前期の遺構が検出されていることから、範囲を広げて検討することが必要と思われる。

第5章 L地区の調査

第1節 調査の経緯と経過

調査に至る経緯 平成19年6月、柳下啓氏は所有地である富士市増川720番地の1において土地造成工事を計画し、当該地が「周知の埋蔵文化財包蔵地」宮添遺跡の範囲内であることから、富士市教育委員会に試掘調査を依頼した。この依頼を受けて富士市教育委員会文化振興課は、平成19年6月15日から6月26日まで試掘調査を実施し、2軒の竪穴建物跡を含む遺構及び遺物が遺存していることを確認した。

平成21年6月、柳下啓氏は、当該地の造成工事を行い駐車場として整備することを計画した。富士市教育委員会は、文化財保護法（昭和25年法律第214号）第93条第1項の規定に基づき柳下啓氏より提出された「埋蔵文化財発掘の届出書」を静岡県教育委員会教育長宛に進達した。それを受け、静岡県教育委員会の指導により、工事着工前に本発掘調査を実施するよう通知がなされた。

本発掘調査 調査は富士市教育委員会教育長 平岡彦三のもと、文化振興課職員が担当することとなり、本発掘調査は平成21年7月17日から8月11日まで実施した。

本発掘調査では、竪穴建物跡3軒等を検出・完掘し、その結果を静岡県教育委員会教育長に「発掘調査結果概報」として送付した。

また、平成21年8月18日、遺失物法に基づき富士警察署長宛に埋蔵物の発見届を提出するとともに、同日、静岡県教育委員会に埋蔵文化財保管証を提出した。

整理作業 整理作業は調査終了後、基礎整理を断続的に行い、平成23年4月1日より本格的な整理作業を再開し、本書の刊行をもって終了した。測量基準点については、他地区との位置関係等を合わせるため、隣接する平成6年度のD地区の発掘調査に伴い設定された5m方眼のグリッドを図上にて合成させ整理作業を行うものとした。

期間中に出土土器の洗浄・接合・復原、遺物の図化作業、遺構図・遺物図等の編集、各図のトレース作業、観察表等の作成、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらにこれらを編集して報告書を作成した。本章で報告する遺物・

図面は富士市教育委員会にて保管・管理されている。

調査の体制 本章で報告する宮添遺跡L地区の本発掘調査は、以下の体制で実施した。

調査主体：富士市教育委員会

教育長 平岡彦三

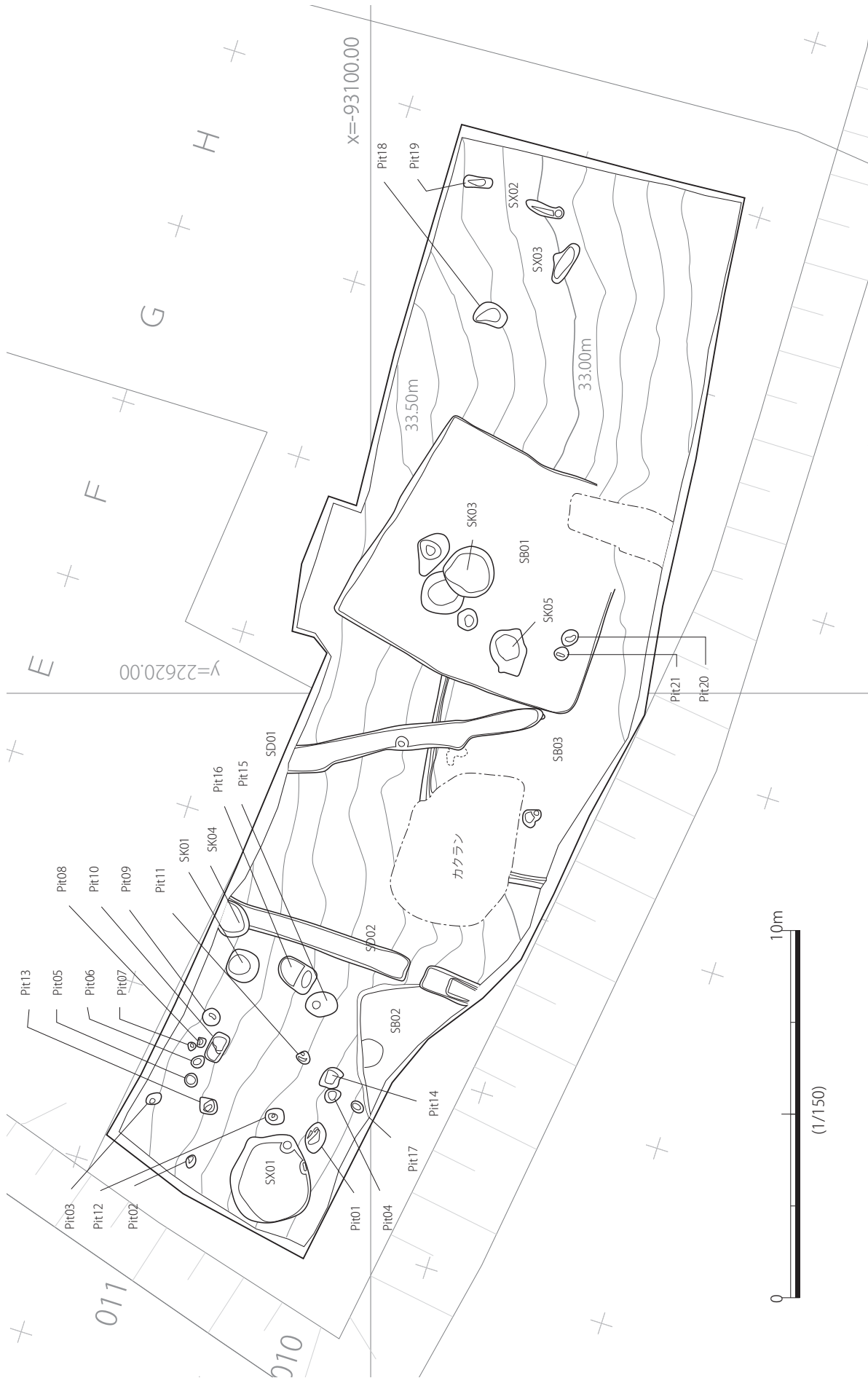
教育次長 堀内哲雄

事務局 文化振興課

課長 友野貴正 統括主幹 若月正己

主幹 木ノ内義昭

調査担当 主事 佐藤祐樹 臨時職員 若林美希



第82図 L地区 全体図

第2節 遺構と遺物

第1項 竪穴建物跡

S B 01

遺構（第83図・図版10）

位置：F 10・F 11 グリッド

重複関係：(古) S B 03 → S B 01 (新)

主軸方位：N - 31.5° - E

残存状況：南側の上面は深く削平されているため、南壁付近は、たちあがり明確でない。平面形は方形を呈し、東西6.4 m、南北6.5 mを測る。壁溝、柱穴は検出されない。床面付近には、焼土、炭化物が認められる。

覆土：黒褐色土による自然堆積層がレンズ状に堆積する。上層には大淵スコリアが多量に混入し、中層（4層）は大淵スコリア単層である。下層には大淵スコリアは混入しない。

貼床：建物跡西側にのみ、厚さ8 cm程度の黒褐色土が認められる。

その他の遺構：建物跡北西部に土坑1基(SB01SK01)検出。円形で東西1.2 m、南北1.1 m、深さ45 cmを測る。ピットは1基検出する。

炉跡：焼土の量が少なく明確ではないが建物跡北西部の位置に炉跡(SB01FP01)を検出した。不整形な楕円形を呈し、東西1.2 m、南北80 cm、深さ12 cmを測る。

出土遺物：(第84図・図版37～39)

須恵器3点、土師器21点、土製品1点を図示した。

1は大甕の破片である。緩やかに外反しながら広がる口唇部に至る。二条の突帯を有し、その下方には波状文が施される。二条の突帯のうち、上方の突帯は鋭く、立ち上がりが高く、下方の突帯は全体的に滑らかに調整されている。口径39.4 cmに復元される。

2・3はハソウの破片で、同一個体と考えられる。口縁部には、突出する鋭い段差を有する。口唇部内側には段差はなく、丸くおさめられているのが特徴である。3の胴部には円形のスカシを有し、円の上方に合わせるように二条の沈線が認められる。2・3ともに断面の色調は紫色を呈する。TK208型式併行期のものと考えられる。

4～6は小型壺の破片である。4は、やや内湾しながら立ち上がる口縁部で、内外面ともに縦方向のヘラミガキが施され、さらに頸部には、横方向のミガキが施される。胎土が他と異なり砂っぽい。5は口縁部の破片で内外面に凹凸があり、口唇部のみ外方に広がる。6は算盤玉のように

胴部が張る壺である。明確な平底の底部を有する。外面はハケ・ケズリののち縦方向のヘラミガキが施される。内面はハケやナデ調整が施されているが、頸部付近には、調整が行き届かず輪積み痕跡が明瞭に残る。

7・8は甕である。7・8ともに比較的広い底部を有し、胴の張らない形態を呈する。7は内外面ともに荒いハケメ調整が施される。頸部下方のみ細かいハケメ調整が施された後、口縁部内外面にヨコナデが施される。8も外面に荒いハケメが施されるものの内面はナデ調整で仕上げられる。9も甕の胴部と考えられるが、全体の形状は明らかでない。ハケメ調整が施された胴部付近に外側から打撃が加えられ直径9 mmの穴が穿たれる。

10・11は坏もしくは高坏の坏部の破片である。口唇部の形状に差異が認められるものの、細かいヘラミガキを施す調整などは共通する。12の高坏坏部は板状工具によるナデ調整で仕上げられている。13～17は高坏の柱状部、脚部の破片である。全体的に脚部は短く、太い。坏底部と脚部との接合方法に二つのパターンが認められる。16・19は坏底部が閉じられていない状態で脚部と接合され、坏底部内面から栓をするようにして底部が作り出されている。他は、坏部と脚部が別々に造られた後、両者が接合されている。20は弥生時代後期の壺の可能性もあるが、ハケメやナデ調整が施され、口縁部ナデ調整が欠落していることから高坏脚部の破片とした。20～24は他の遺構からの流れ込みと考えられる。

所見

出土遺物から、古墳時代中期の建物跡と考えられる。

S B 02

遺構（第85図・図版11）

位置：C 10・D 10 グリッド

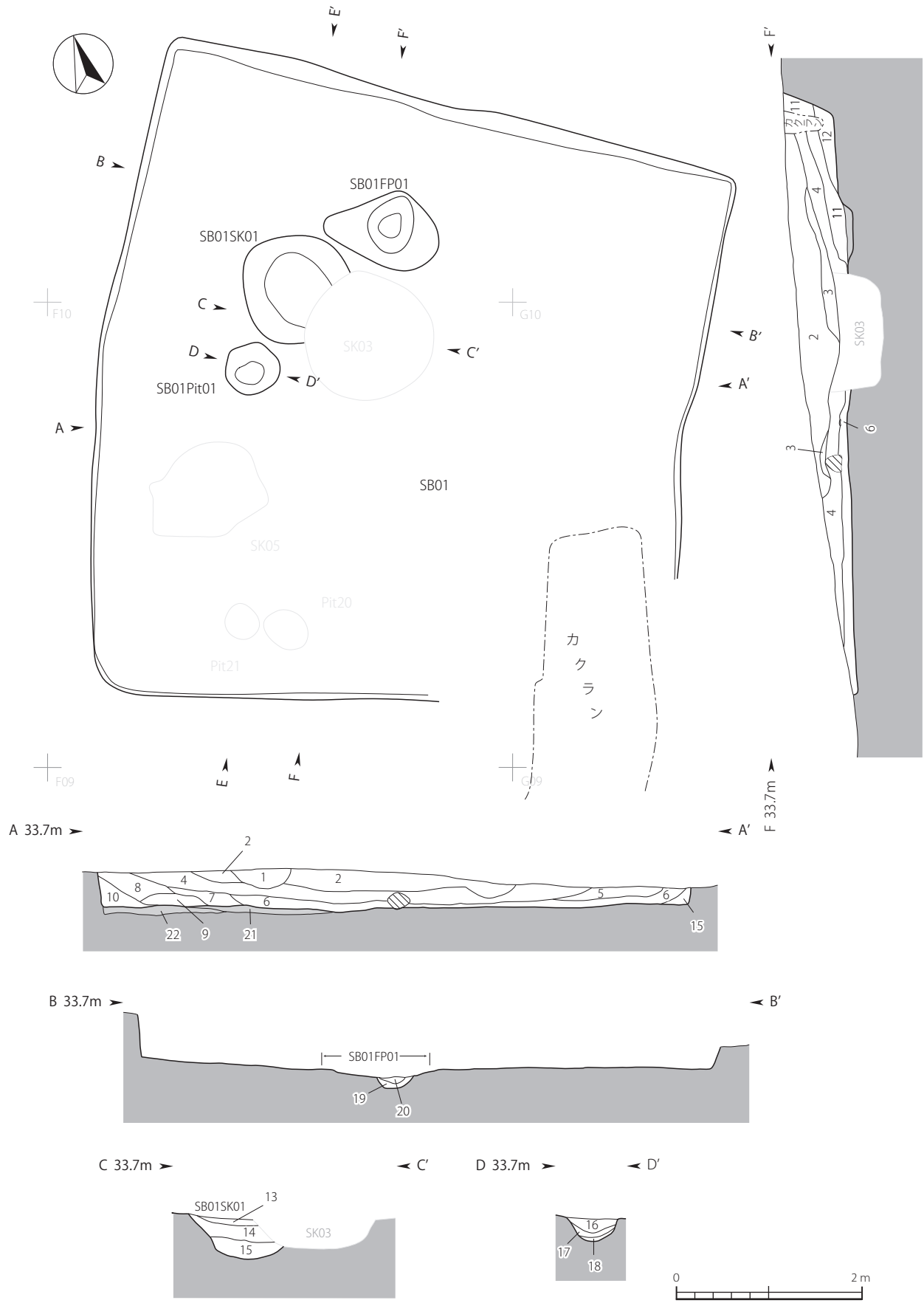
重複関係：(古) S B 02 → S D 02 (新)

主軸方位：N - 5.0° - W

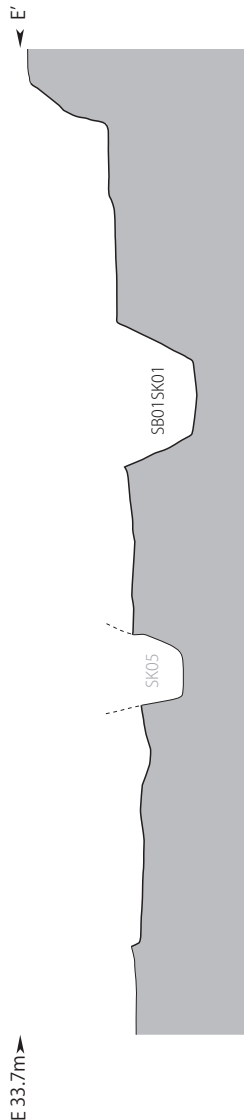
残存状況：上面は削平され覆土は浅く、南側は調査区域外のため北側のみ遺存する。平面形は方形を呈するものと考えられ、残存値で東西3.5 m、南北3.1 mを測る。

覆土：大淵スコリアを含む黒褐色土による自然堆積層。

その他の遺構：北東部の床面上に集石（S B 02 - S X



第83図 SB01 遺構実測図



1	黒褐色土	しまり強。粘性やや弱。大淵SC多量に含む。赤色粒子少量含む。	カクラン
2	黒褐色土	しまり強。粘性やや弱。大淵SC多量に含む。	SB01SK1フク土
3	黒褐色土	しまり強。粘性弱。大淵SC少量含む。褐色土がブロック状に混ざる。鈍い橙色の粒子少量含む。炭化物含む。	SB01SK1フク土 SB01SK1フク土
4	大淵SC単層	しまり無。粘性無。大淵SCの層混ざり無。粒も大きい。	SB01SK1フク土
5	黒褐色土	しまり強。粘性やや弱。大淵SC無。橙色の粒子少量含む。	SB01SK1フク土
6	黒褐色土	しまり強。粘性やや弱。大淵SC無。橙色の粒子中量含む。炭化物含む。	SB01SK1フク土
7	黒褐色土	しまりやや強。粘性弱。大淵SC無。	SB01SK1フク土
8	黒褐色土	しまり強。粘性弱。大淵SC無。橙色の粒子中量含む。	SB01SK1フク土
9	黒褐色土	しまり強。粘性やや弱。大淵SC無。橙色の粒子少量含む。	SB01SK1フク土
10	黒褐色土	しまり強。粘性弱。大淵SC無。橙色の粒子中量含む。	SB01SK1フク土
11	黒褐色土	しまり強。粘性弱。大淵SC無。	SB01SK1フク土
12	暗褐色土	しまり強。粘性弱。大淵SC無。	SB01SK1フク土
13	黒色粒	しまり無。粘性無。大淵SCの層混ざり無。粒も大きい。	SB01SK1フク土
14	鈍い黄褐色土	しまりややあり。粘性ややあり。大淵SC全く無。自然堆積	SB01SK1フク土
15	暗褐色土	しまりややあり。粘性ややあり。大淵SC全く無。自然堆積	SB01SK1フク土
16	褐色土	しまりあり。粘性あり。炭化物少量含む。	SB01Pit1フクド
17	黒褐色土	しまり無。粘性無。1cm程度の炭化材、中量含む。	SB01Pit1フクド
18	鈍い黄褐色土	しまり無。粘性無。炭化材含まず。	SB01Pit1フクド
19	暗赤褐色焼土	しまりやや弱。粘性無。下層は黒味強い。炭化物混ざる。	SB01FPフクド
20	黒褐色焼土	しまり強。粘性無。ブロック状に硬くする。(特に上層)	SB01FPフクド
21	黒褐色土	しまり強。粘性やや弱。炭化物少量含む。橙色粒子少量含む。黄褐色ローム混ざる。	SB01FPフクド
22	黒褐色土	しまり強。粘性弱。橙色粒子少量含む。黄褐色ローム混ざる。	掘り方埋土



南東から

01) が検出される。10～15cm 程度の川原石の集石で、明確な掘り込み等は確認されない。

貼床：厚さ 10cm 程度の灰褐色土が認められるが、北東部分では検出できない。

カマド：北壁中央に位置し、焼土及び粘土の広がりを認められる程度で構造は不明である。

出土遺物：(第 87 図・図版 39)

土師器 2 点を図示した。26 は S 字甕の口縁部の破片である。頸部外面は屈曲が明瞭で、ハケメ調整の後、ナデ調整が丁寧に行われている。頸部内面には立ち上がりを意識したような平らな面が存在する。また、口唇部端部内面には段差をつける意識が読み取れる。27 は高坏坏部の破片で内外面に丁寧なヘラミガキが確認される。26、27 は他の遺構からの流れ込みと考えられ、図化出来なかったが古墳時代後期の土師器甕の破片が出土している。

所見

検出状況から、古墳時代後期の建物跡と考えられる。

S B 03

遺構 (第 86 図・図版 12)

位置：E 10 グリッド

重複関係：(古) S B 03 → S B 01, S B 03 → S D 01 (新)

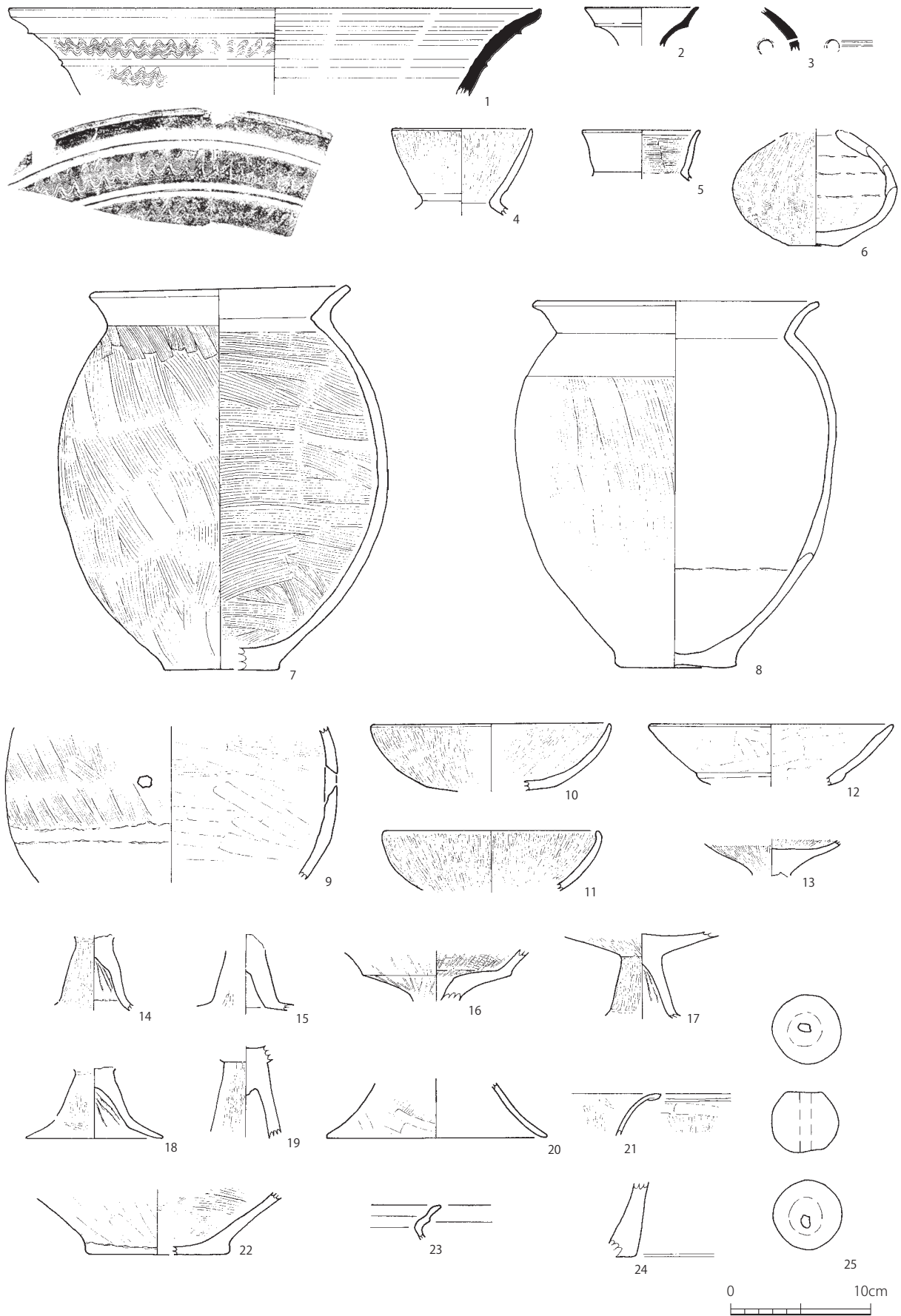
主軸方位：N - 9.0° - E

残存状況：東側は S B 01 により削平され、南側は調査区域外となるため、北西部のみ遺存する。平面形は方形を呈するものと考えられ、残存値で東西 5.2 m、南北 5.3 m を測る。北壁付近の床面には、焼土の広がりが認められるものの炉跡は検出されない。

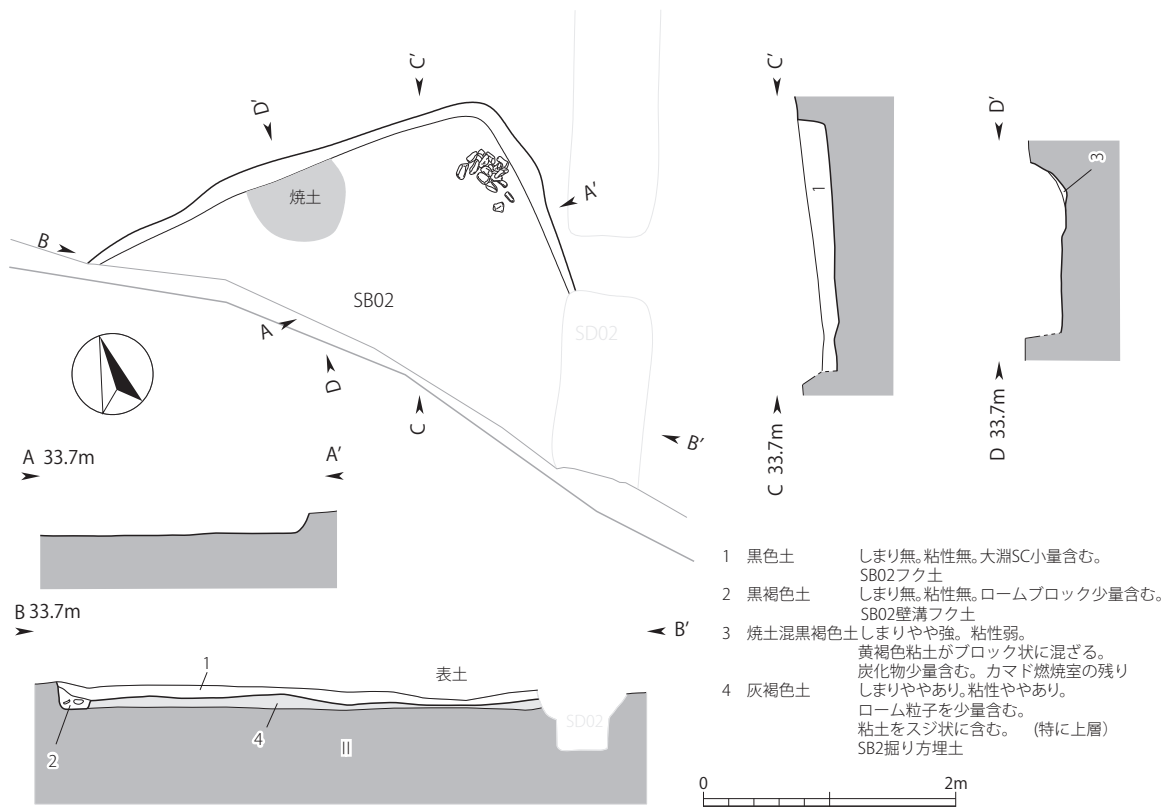
覆土：黒褐色土及び黒色土による自然堆積層で大淵スコリアは混入しない。

貼床：厚さ 15cm 程度の暗褐色土が、全面に認められる。壁溝：幅 18cm、深さ 8cm の溝が検出範囲全面に認められる。

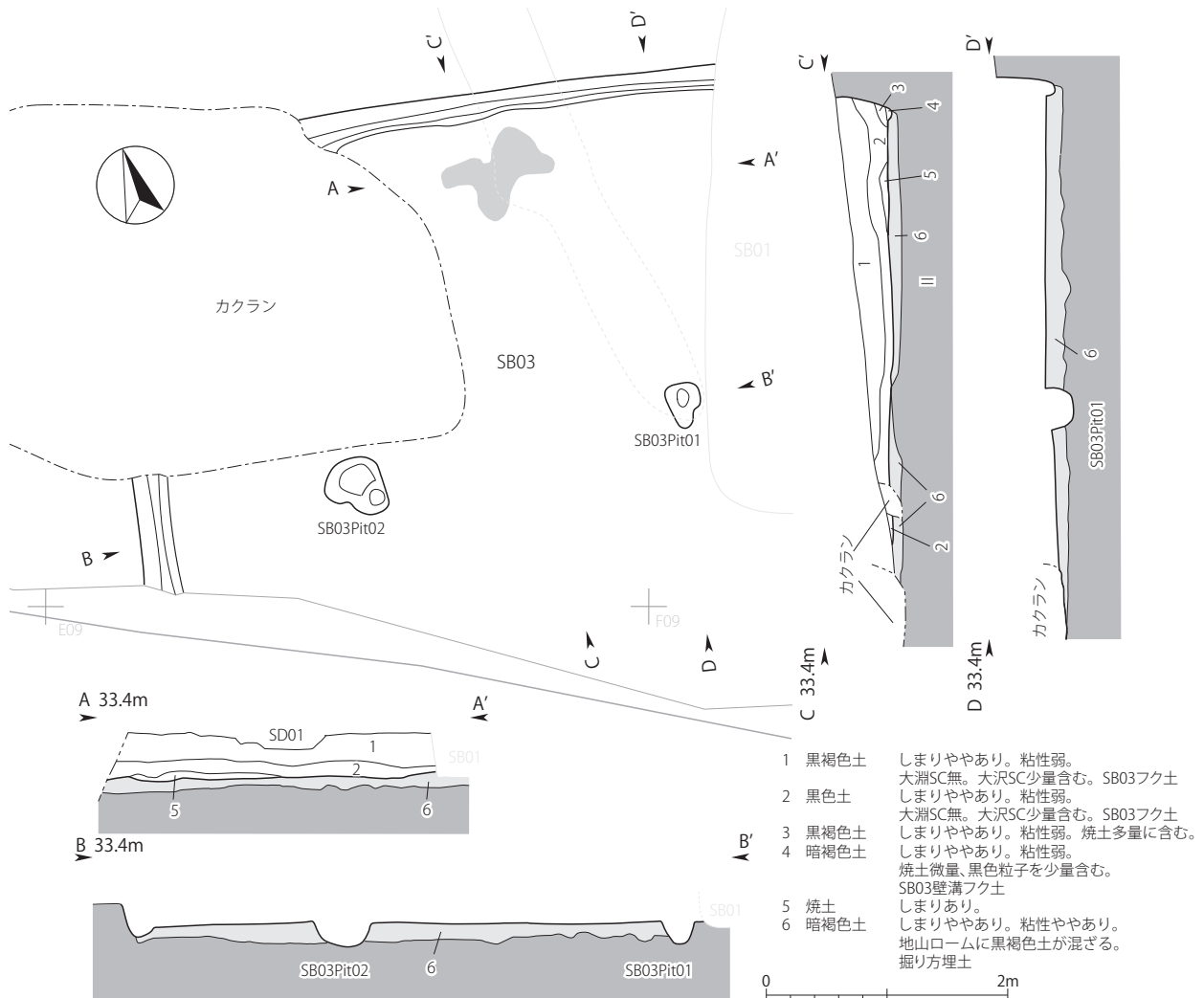
その他の遺構：ピット 2 基を検出する。



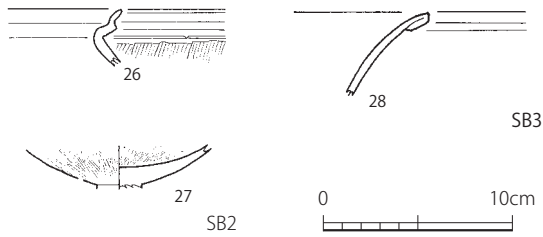
第84図 SB 01 遺物実測図



第85図 SB02 遺構実測図



第86図 SB03 遺構実測図



第87図 SB 02・03 遺物実測図

出土遺物：(第87図・図版39)

弥生土器1点を図示した。28は端部を折り返す広口壺の破片である。28は他の遺構からの流れ込みと考えられ、図化出来なかったが古墳時代前期の土師器片が出土している。

所見

検出状況から、古墳時代前期の建物跡と考えられる。

第2項 溝状遺構

SD 01

遺構(第88図・図版12)

位置：E 10・E 11 グリッド

重複関係：(古) SB 03 → SD 01 (新)

主軸方位：N - 9.0° - W

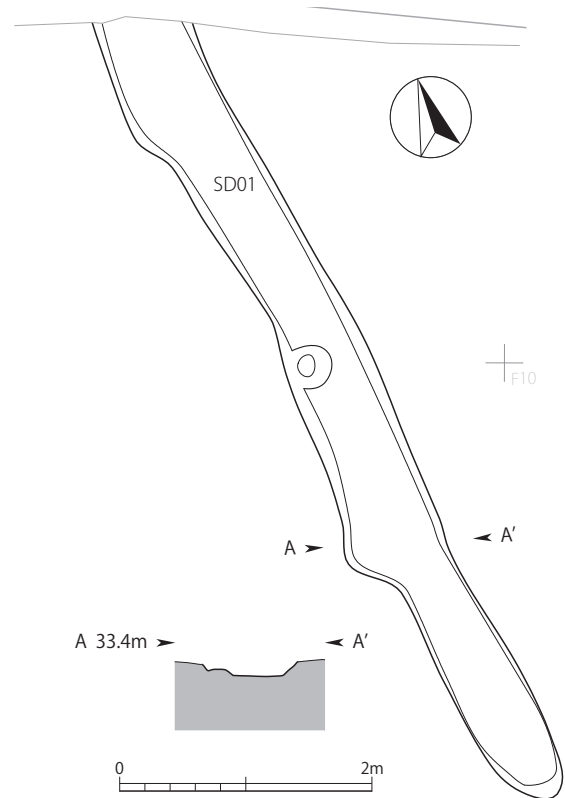
残存状況：南北方向に存在する浅い溝であり、北側は調査区域外となる。形状はやや不整形で、底面は凹凸が激しく安定しない。残存値は長さ7m、幅は70cm、深さは15cmを測る。

覆土：大淵スコリアを含む黒色土による自然堆積層。

出土遺物：図化出来る資料はない。

所見

時期は不明である。



第88図 SD 01 遺構実測図

SD 02

遺構(第89図 図版11)

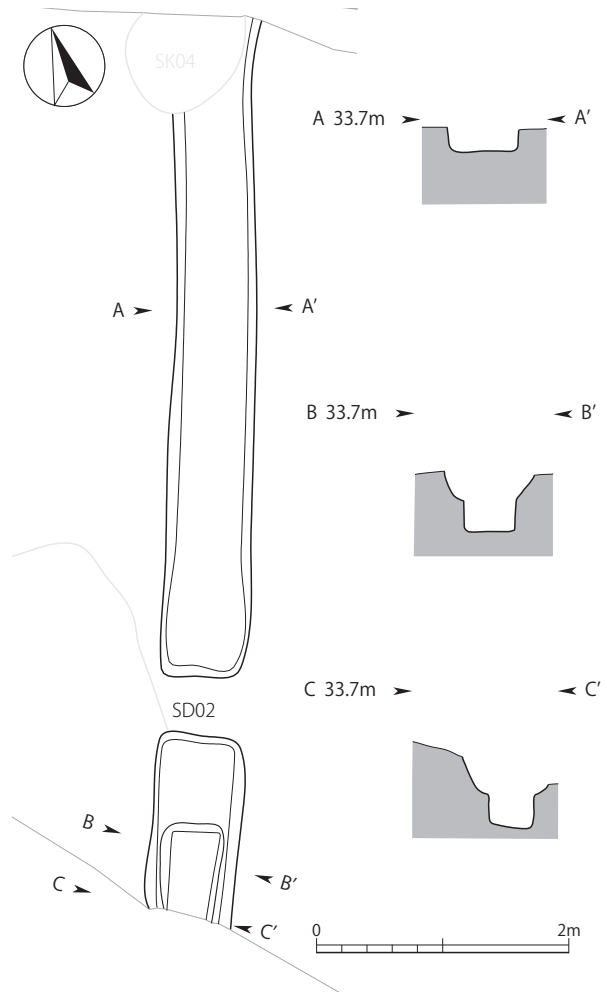
位置：E 10・E 11 グリッド

重複関係：(古) SB 02 → SD 02 (新)

主軸方位：N - 22.0° - W

残存状況：南北方向に存在する溝であり、北側及び南側は調査区域外となる。平面形は細長い長方形を呈し、南側においては50cm程の間隔で途切れている。残存値として長さ7.2m、幅は70cmを測る。底面は比較的平坦で深さは15cmを測るが、南側の端部においてのみ段をもって深くなり深さ50cmを測る。

覆土：大淵スコリアを含む黒褐色土による自然堆積層。



第89図 SD 02 遺構実測図

出土遺物：図化出来る資料はない。

所見

時期は不明である。

第3項 性格不明遺構

S X 01

遺構（第90図）

位置：C 10・C 11 グリッド

主軸方位：N - 20.5° - W

残存状況：平面形はほぼ円形を呈し、規模は東西 2.40 m、南北 2.20 m、深さ 30cm を測る。

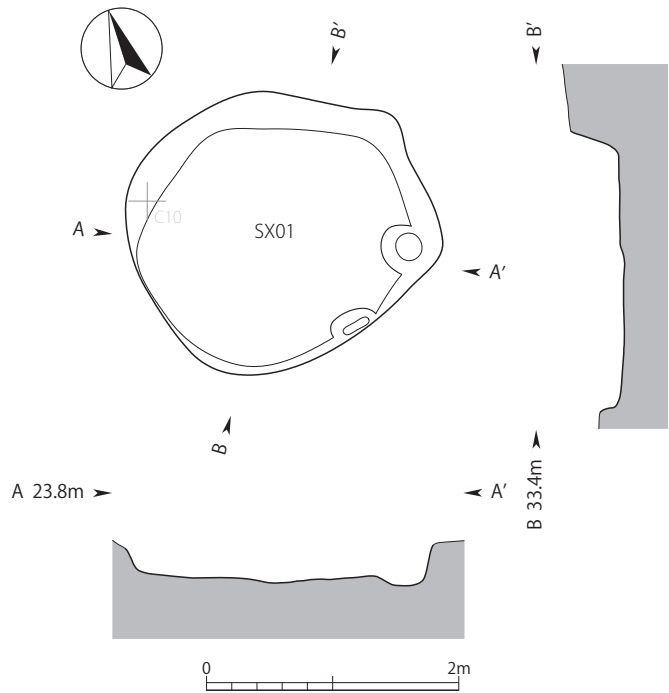
覆土：大淵スコリアを少量含む黒褐色土による自然堆積層で焼土が混入する。

出土遺物：（第91図・図版39）

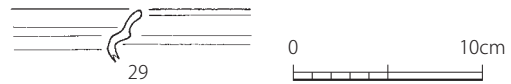
土師器 1 点を図示した。29 は S 字襷の口縁部の破片で頸部内面に明確な平らな面が意識的に作られている。

所見

土師器片 29 は他の遺構からの流れ込みと考えられ、検出状況から古墳時代中期以降の遺構と考えられるが、時期性格は不明である。



第90図 S X 01 遺構実測図



第91図 S X 01 遺物実測図

S X 02

遺構（第92図）

位置：H 11 グリッド

主軸方位：N - 18° - E

残存状況：平面形は南北方向に長い楕円形を呈し、南端部に窪みをもつ。規模は東西 35cm、南北 1 m、深さ 15cm を測る。

出土遺物：図化出来る資料はない。

所見

時期は不明である。

S X 03

遺構（第92図）

位置：H 10 グリッド

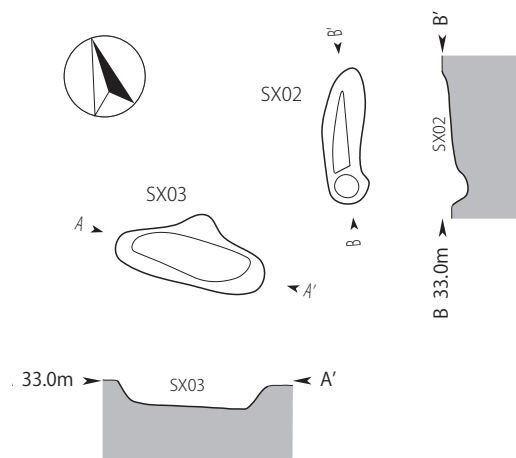
主軸方位：N - 60° - W

残存状況：平面形は東西方向に長い楕円形を呈する。規模は東西 40cm、南北 1.20 m、深さ 15cm を測る。

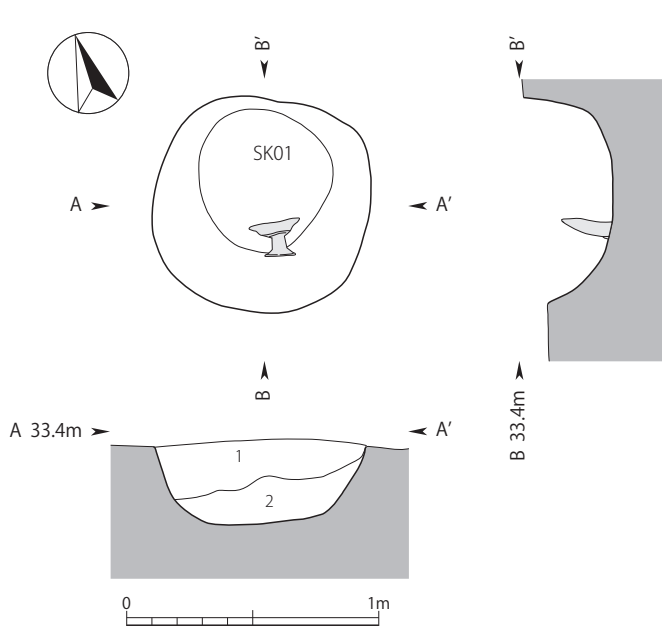
出土遺物：図化出来る資料はない。

所見

時期は不明である。

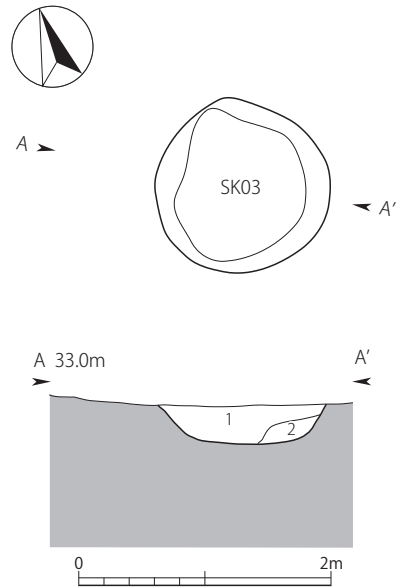


第92図 S X 02・03 遺構実測図



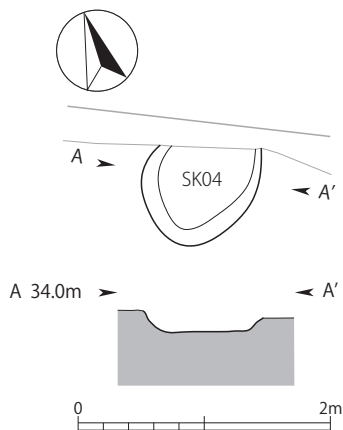
- 1 黒色土 しまりややあり。粘性弱。橙色粒子少量、大淵SC微量含む。
- 2 黒褐色土 しまりややあり。粘性弱。

第93図 SK 01 遺構実測図

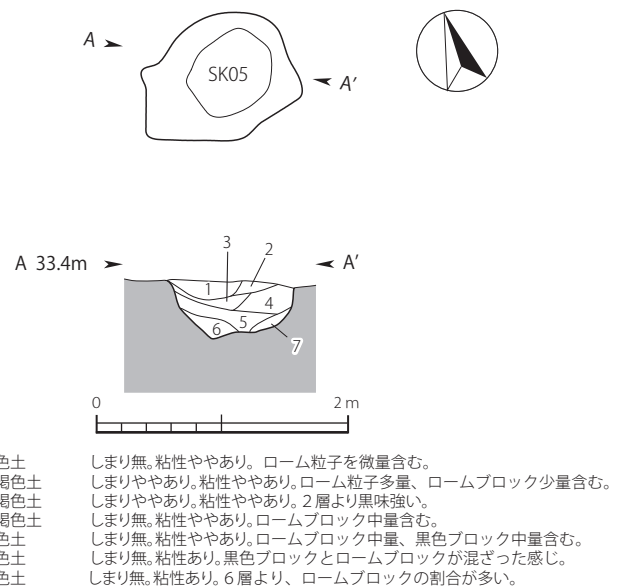


- 1 褐色土 しまりややあり。粘性無。大淵SC極多量に含む。ローム粒子中量。フク土
- 2 黄褐色土 しまりややあり。粘性ややあり。大淵SC少量含む。ローム質。フク土

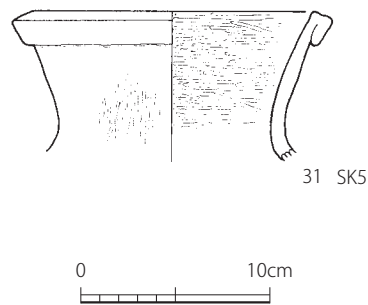
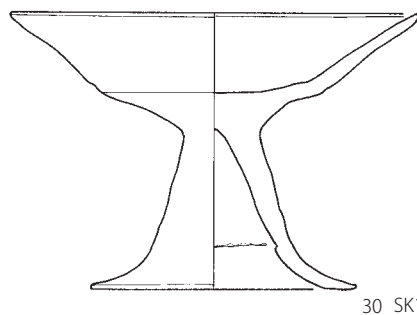
第94図 SK 03 遺構実測図



第95図 SK 04 遺構実測図



第96図 SK 05 遺構実測図



第97図 SK 遺物実測図

第4項 土坑

S K 01

遺構 (第93図・図版12)

位置: D 11 グリッド

主軸方位: N - 22.0° - E

残存状況: 平面形は円形を呈し、径 87cm、深さ 35cm を測る。底面からは土師器高坏が出土する。

覆土: 大淵スコリアを含まない黒褐色土による自然堆積層。

出土遺物 (第97図・図版39)

土師器 1 点を図示した。高坏でほぼ完形品である。坏部は比較的浅く、外反しながら広がる。脚部はラッパ状に開く形態を示す。柱状部が作られ内面調整が施された後、脚端部が接合される。そのために脚内面に明確な段差が存在する。

所見

出土遺物から、古墳時代中期の遺構と考えられる。

S K 03

遺構 (第94図)

位置: F 10 グリッド

重複関係: (古) S B 01 → S K 03 (新)

主軸方位: N - 33.0° - W

残存状況: 平面形は円形を呈し、径 1.40 m、深さ 30cm を測る。

覆土: 大淵スコリアを多量含む褐色土による自然堆積層。

出土遺物: 図化出来る資料はない。

所見

時期は不明である。

S K 04

遺構 (第95図)

位置: D 11 グリッド

重複関係: (古) S D 02 → S K 04 (新)

主軸方位: N - 46° - E

残存状況: 北側は調査区域外となる。平面形は不整形な円形を呈すると考えられ、径は約 90cm、深さ 15cm を測る。

覆土: 黒褐色土による自然堆積層でロームブロックを多く含む。

出土遺物: 図化出来る資料はない。

所見

時期は不明である。

S K 05

遺構 (第96図)

位置: F 10 グリッド

重複関係: (古) S B 01 → S K 05 (新)

主軸方位: N - 21° - W

残存状況: 平面形は東西方向に長い不整形な楕円形を呈する。東西 1.3 m、南北 1 m、深さ 45cm を測る。

覆土: 黒褐色土による自然堆積層で大淵スコリアは含まない。

出土遺物 (第97図・図版39)

土師器 1 点を図示した。端部を折り返す壺の破片で内外面ともにヘラミガキが施される。

所見

出土遺物から、中世以降の遺構と考えられる。

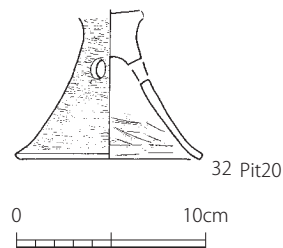
第5項 ピット

遺構 (第82図)

L 地区においては、21 基のピットを検出した。各ピットの詳細は第3表のとおりとなる。

出土遺物 (第98図・図版39)

Pit20 の土師器 1 点を図示した。高坏脚部の破片で三方向にスカシが認められる。全体的に器壁が薄く仕上げられている。特徴的なことは外面調整に横方向のヘラミガキが施される点である。これまでに古墳時代前期の高坏で横方向にミガキを有するものは宮添遺跡では出土していない。



第98図 Pit 20 遺物実測図

第3節 L地区の調査成果

宮添遺跡L地区の調査では、竪穴建物跡3軒、溝状遺構2条、土坑5基等を検出した。遺構に伴わない土器の中に弥生時代後期に遡ると考えられる破片が数点存在するものの図化するには至らない小破片であった。

今回の調査において特筆すべき成果はSB01の調査成果である。成果は大きく分けて2点があげられる。

まず、1点目は、TK208型式と考えられる須恵器の大甕、ハソウが出土したことである。これまで宮添遺跡D地区SB11よりMT15型式の須恵器が比較的まとまって出土していたものの遺構に伴って古墳時代中期の須恵器が出土することはなかった。これにより、整理途上にある愛鷹南麓の古墳時代中期後半から後期への土師器編年との対応が可能になったものと考えられる。

2点目は大淵スコリアの降下時期が絞られてきたことである。大淵スコリアとは、1,500年～2,000年前に富士山南麓の寄生火山である高鉢山から噴出したと考えられるスコリアで（宮地 1988）、富士市域の遺跡では普遍的にみられるため、一種のキー層としての役割を果たしている。

SB01の覆土中層がこの大淵スコリアの単純層によって構成されているということは、スコリアの効果がTK208型式以降ということを示している。降下時期については以

前にもTK23・TK47型式併行期ではないかと言及したことがあるが（佐藤 2011）、今回の調査成果により改めてこの考えが補強されたと考えられる。なお、柱状脚高坏の完形品が出土したSK01の覆土には大淵スコリアが含まれないことから、この土器はTK23・TK47型式以前のものと考えられることができる。

参考文献

佐藤祐樹 2011「E地区における調査成果」『宮添遺跡IV』富士市教育委員会
 宮地直道 1988「新富士火山の活動史」『地理学雑誌』94

第3表 L地区 Pit 一覧

遺構番号	Gr.	形状	規模			覆土	備考（出土遺物等）
			（長軸	短軸	深さ）		
Pit01	C 01	楕円形	80cm	50cm	45cm	黒色土。大淵スコリアを少量含む。	土師器片出土
Pit02	C 11	楕円形	35cm	24cm	34cm	黒色土。大淵スコリアを多量含む。	
Pit03	C 11	楕円形	40cm	33cm	61cm	黒色土。大淵スコリアを多量含む。	土師器片出土
Pit04	C 10	隅丸方形	39cm	38cm	27cm	黒色土。大淵スコリアを少量含む。	
Pit05	C 11	円形	32cm	30cm	23cm	黒色土。大淵スコリアを少量含む。	
Pit06	C 11	楕円形	38cm	30cm	38cm	黒褐色土。大淵スコリアを微量含む。	
Pit07	C 11	円形	21cm	21cm	15cm	褐色土混入黒色土。大淵スコリアを含まない。	
Pit08	C 11	楕円形	28cm	24cm	18cm	褐色土混入黒色土。大淵スコリアを含まない。	
Pit09	C 11	円形	48cm	46cm	47cm	黒褐色土。大淵スコリアを微量含む。	
Pit10	C 11	長方形	83cm	50cm	23cm	黒褐色土。大淵スコリアを少量含む。	陶器片出土
Pit11	C 10	楕円形	40cm	30cm	23cm	黒褐色土。大淵スコリアを微量含む。	
Pit12	C 11	円形	50cm	47cm	81cm	黒色土。大淵スコリアを微量含む。	
Pit13	C 11	隅丸方形	45cm	45cm	64cm	黒褐色土。大淵スコリアを少量含む。	須恵器片出土
Pit14	C 10	隅丸方形	60cm	47cm	27cm	黒褐色土。大淵スコリアを少量含む。	
Pit15	D 10	楕円形	90cm	70cm	15cm	褐色土。黄褐色粒子を中量含む。	土師器片出土
Pit16	D 11	隅丸方形	107cm	78cm	24cm	黒褐色土。大淵スコリアを少量含む。	土師器片出土
Pit17	C 10	円形	38cm	27cm	27cm	黒褐色土。大淵スコリアを多量含む。	土師器片出土
Pit18	H 11	楕円形	74cm	55cm	14cm	黒褐色土。大淵スコリアを含まない。	
Pit19	H 11	長方形	65cm	25cm	20cm	黒褐色土。大淵スコリアを含まない。	
Pit20	F 10	円形	50cm	40cm	18cm	黒褐色土。大淵スコリアを含まない。	土師器高坏（32）出土
Pit21	F 10	円形	38cm	35cm	18cm	黒褐色土。大淵スコリアを含まない。	土師器片出土

第6章 宮添遺跡の調査成果

第1節 浮島ヶ原低地周辺の土器様相

はじめに

昭和60年から平成21年にかけて行われた宮添遺跡の各調査地点の面積は、決して広いとはいえないが、総合すると約7,550㎡（東西100m、南北145m）の範囲を調査したことになる。遺跡の活動が活発になる弥生時代後期以降、平安時代に至るまで、活動休止期間や遺構数の増減などはあるながらも、数多くの遺構が検出・調査された。遺構の変遷について、これまでもまとめたもの（小島2011）を参照していただくとして、本節では出土土器についてまとめることとする。

宮添遺跡では、狭い面積に数多くの竪穴建物跡が作られた結果、良好な一括資料には恵まれない調査となった。そのため、実態をさらに混乱させてしまうのではないかという危惧から、これまでの報告では、混入や流れ込みと考えられる遺物についてもあえて資料操作を行わずにきた。しかし、その一方で、少なからず存在する一括資料の存在を見えづらくもしてきた。そこで本書を含めて5冊の報告書の中から、比較的良好な一括資料を提示し、これまでの土器編年などに対応させながら、弥生時代後期以降の愛鷹山南麓における土器について概観していくこととする。なお、一括資料の提示という目的から土器の型式学的な検討を十

分に加えていない点をあらかじめお断りしておく。

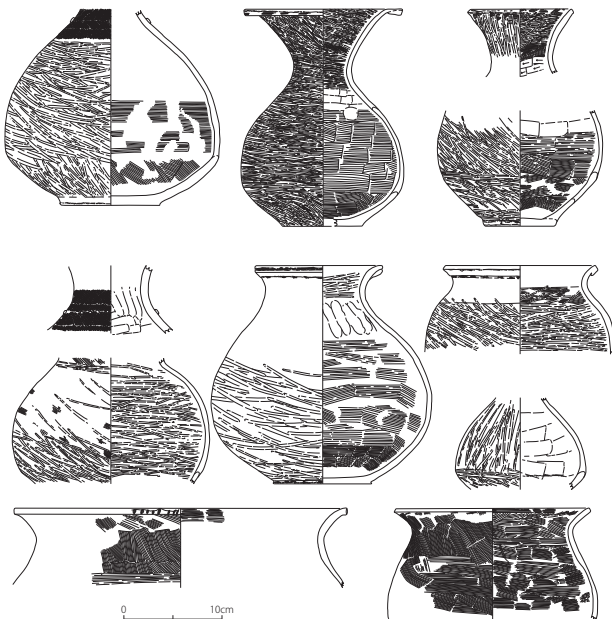
【弥生時代後期前半】

雌鹿塚式前半（Ⅰ式・Ⅱ式）（渡井1997）に対応する。宮添遺跡において、弥生時代後期前半の良好な一括資料はE地区SD01出土土器（第99図）である。SD01は「環濠」であり、広口壺、鉢、甕の破片が出土している。「環濠」という性格上、器種に偏りが存在するが、同じ愛鷹南麓の沼津市尾崎遺跡1号住居（第100図）（沼津市教育委員会2000）や雌鹿塚遺跡1号住居、同12号住居（沼津市教育委員会1990）などの資料によって補完される。

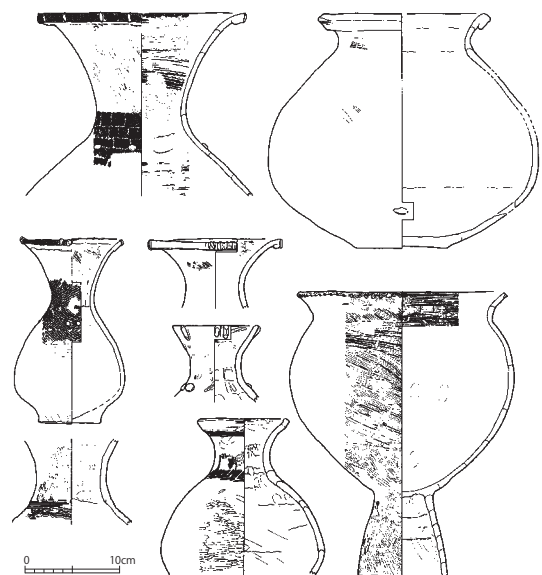
なお、宮添遺跡の同一尾根上の北方600mに存在する平椎遺跡SH08からは、前述の一群より遡ると考えられる土器が認められる（第101図）。SH08の土器には、遠江以西からの外来系土器や東京湾沿岸に見られる口縁部に輪積み痕を残す甕が見られることも注目される（（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所2010）。

【弥生時代後期後半】

雌鹿塚式前半（Ⅲ式・Ⅳ式）に対応する。D地区SB32（第102図）・SX04に一括資料が見られる。しかし、器種のバリエーションに乏しく、雌鹿塚遺跡13号住居や同31号住居（沼津市教育委員会1990）、八兵衛洞遺跡第2



第99図 宮添遺跡E地区SD01出土土器



第100図 尾崎遺跡1号住居出土土器

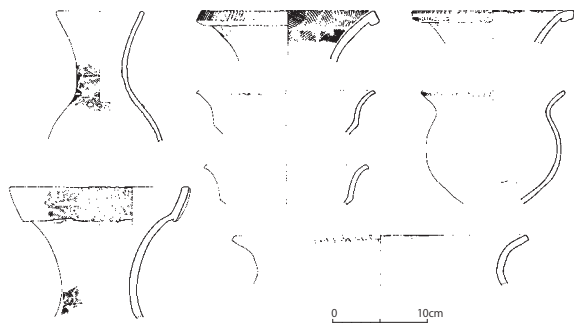
号方形周溝墓（第103図）（沼津市教育委員会 2004）などの資料を加えることで、その全体像を捉えることが出来る。

この段階から遠江の菊川式もしくはその影響を受けた「モミダ型」（篠原 2001）との関連を想定させる土器が東駿河で見られるようになる。富士川西岸の清水岩の上遺跡や東岸の星山丘陵上の高德坊遺跡、月の輪上遺跡など富士山南麓では多く見ることが出来るが、愛鷹山南西麓では顕

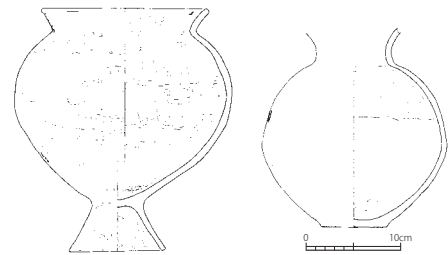
著には認められない。

【弥生時代終末期／古墳時代初頭】

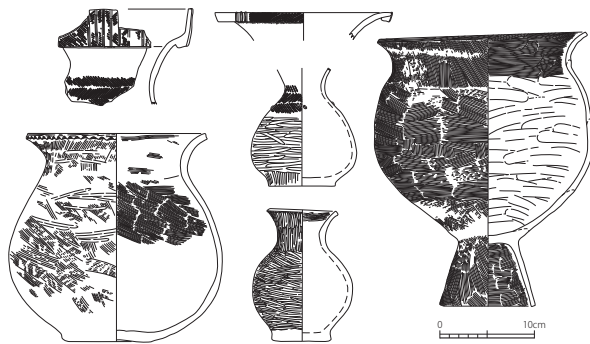
大廓式前半（Ⅰ・Ⅱ式）（渡井 1998）に対応する。宮添遺跡では、この時期の良好な一括資料がない。これは、遺構数の少なさ、遺跡の消長に起因したものと考えられる。大廓式はこれまでの隣接地域間の土器移動（遠江や中部高地、南関東など）とは異なり、伊勢湾沿岸や畿内・北陸など遠方地域との多角的な土器移動により捉えられている。



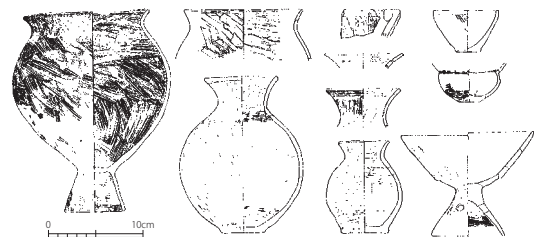
第101図 平椎遺跡 SH08 出土土器



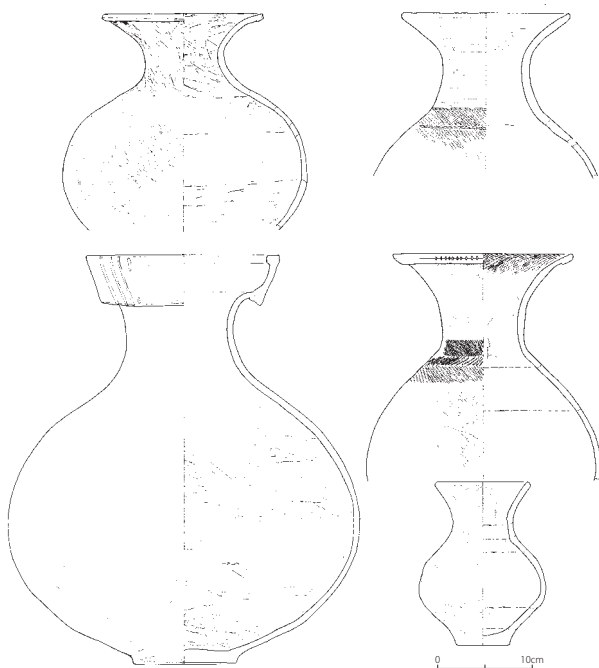
第104図 平椎遺跡 SH05 出土土器



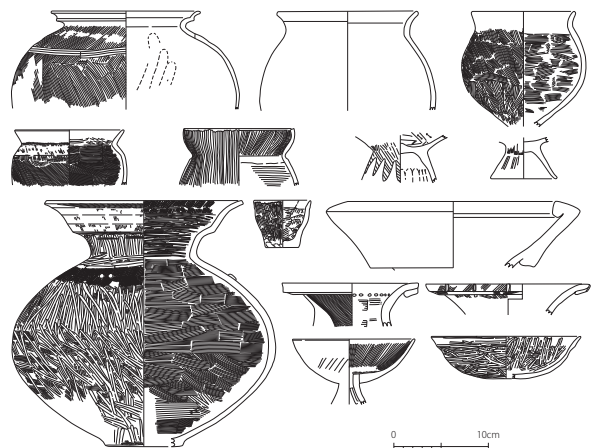
第102図 宮添遺跡 D 地区 SB32 出土土器



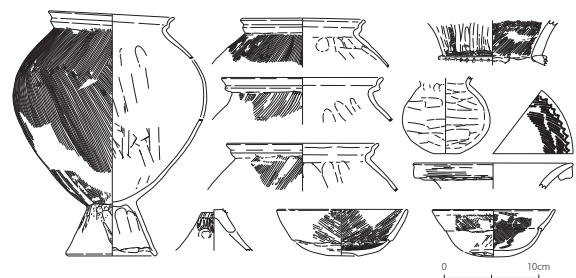
第105図 祢宜ノ前遺跡第15号住居址出土土器



第103図 八兵衛洞遺跡第2号方形周溝墓出土土器



第106図 宮添遺跡 D 地区 SB21 出土土器

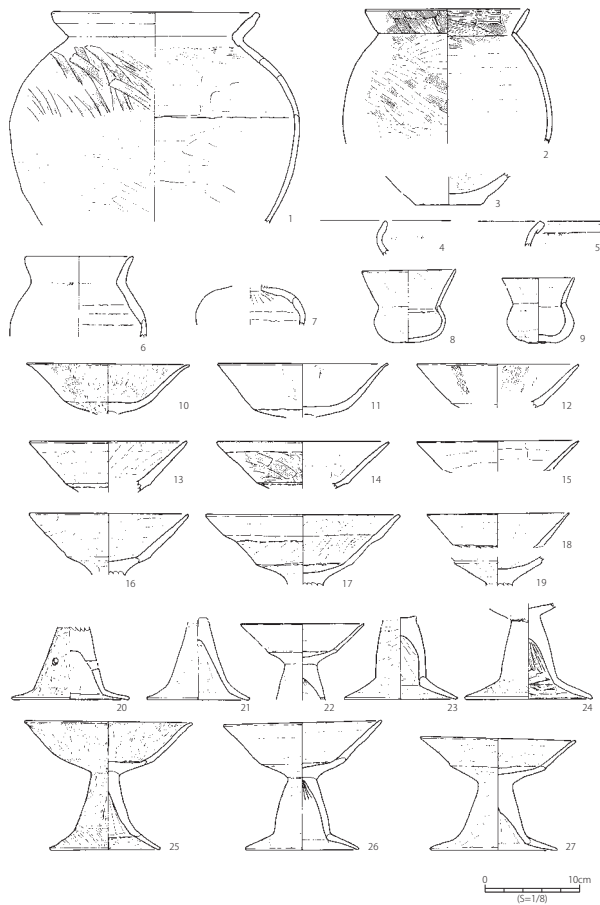


第107図 宮添遺跡 D 地区 SB23 出土土器

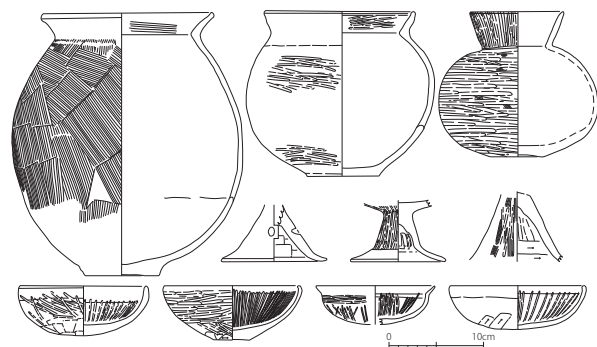
宮添遺跡では見られないものの、隣接した平椎遺跡 SH05 (第104図) や SH11 (大廓Ⅰ式) ((財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010)、祢宜ノ前遺跡第15号住居 (第105図) (大廓Ⅱ式) (富士市教育委員会 2009) などを挙げる事が出来る。

【古墳時代前期】

大廓式後半(Ⅲ・Ⅳ式)、中見代Ⅰ式(渡井 1999) に対応する。この時期の遺構は比較的多く調査されており、



第108図 宇東川遺跡A地区SB5032出土土器



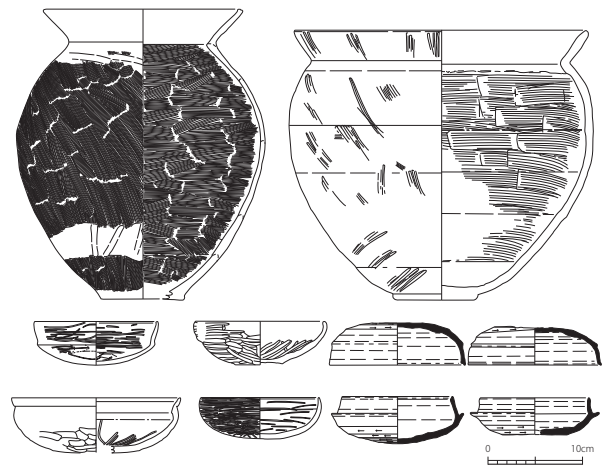
第109図 宮添遺跡E地区SB42出土土器

一括資料も存在し、D地区SB21 (第106図) (大廓Ⅲ式)、D地区SB23 (第107図) (大廓Ⅳ式) がそれにあたる。大廓Ⅲ式は、畿内・伊勢湾の二重口縁壺が一定の器種構成を示す時期と考えられるが、その中でSB21の壺は、二重口縁壺でありながら、外面肩部には縄文や円形貼付文が施文されるなど外来的要素と在来の要素とが融合した特徴的な土器と捉える事が出来る。

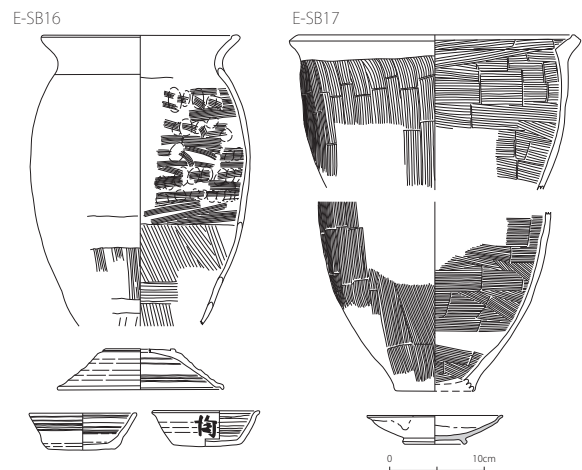
中見代Ⅰ式段階の遺構はほとんどなく、資料に恵まれないが、唯一K地区溝2出土の柱状脚高坏がこの段階の資料として捉えられる。隣接した遺跡では、祢宜ノ前遺跡第24号住居(富士市教育委員会 2009) もこの時期の候補として考えられる。いずれにせよ、この段階をもって、宮添遺跡の集落活動は休止期間に入る。

【古墳時代中期】

中見代Ⅱ・Ⅲ式、TK73～TK47型式期までが対応する。宮添遺跡では、中期前半の明確な遺構は認められていない。これは宮添遺跡に限ったことではなく、東駿河一円に認められる現象である。近年、隣接する遺跡である宇東川遺



第110図 宮添遺跡E地区SB11出土土器



第111図 宮添遺跡E地区SB16・SB17出土土器

跡A地区SB5032(第108図)(富士市教育委員会2012)より中見代Ⅱ式に位置づけられる良好な一括資料が報告されたが、他には認められない。

宮添遺跡の中期の良好な一括資料としては、TK208型式併行期と考えられるE地区SB42(第109図)やL地区SB01(第84図)をあげることが出来る。また、TK23・47型式併行期の資料としてはE地区SB24が上げられる。これらの時期は宮添遺跡において集落活動が再開される時期であり、カマドの導入や初期須恵器の流入なども見られる。

【古墳時代後期】

MT15型式期以降が対応する。MT15型式併行期の良好な一括資料としてはD地区SB11(第110図)がある。焼失住居であるこの遺構からは大量の須恵器とともに、土師器の甕・坏・高坏が多くのバリエーションをもって出土しており、愛鷹南麓における標識的な資料として捉えられる。しかし、その後の良好な一括資料には恵まれない。

【7世紀以降】

7世紀以降も比較的多くの建物跡がつくられるが、良好な一括資料は少なく、9世紀前半のE地区SB16(第111図)や10世紀前半のE地区SB17(第111図)などをあげるのみである。愛鷹南麓では奈良時代の集落活動が活発とは言えず、7世紀、8世紀の良好な資料は富士山南麓の沢東A遺跡や東平遺跡、舟久保遺跡で認められるのみである。9世紀に入ると愛鷹山麓の隣接集落でも良好な一括資料を提示することができ、祢宜ノ前遺跡第26号住居(9世紀後半)、同第3・6号住居資料(富士市教育委員会2009)がそれにあたる。

おわりに

雑駁ではあるが、宮添遺跡に見える一括資料の提示を行ってきた。本来であれば、遺跡内において、継続した土器編年を提示すべきであるが、筆者の力量不足からそれが叶わなかった。今後は、資料の型式学的な検討を経て編年案を提示していくことを目標としたい。

参考文献

- 小島利史 2011「E地区における遺構の変遷」『宮添遺跡Ⅳ』富士市教育委員会
- 佐藤祐樹 2010「集落の動態からみた古墳出現前夜の富士山南麓」静岡県考古学研究 41・42
- 篠原和大 2001「駿河地域の後期弥生土器と土器の移動(補遺)」『シンポジウム 弥生後期のヒトの移動』
- 沼津市教育委員会 1978『藤井原遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
- 沼津市教育委員会 1989『雄鹿塚遺跡発掘調査報告書』
- 沼津市教育委員会 1990『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書』
- 沼津市教育委員会 2000『尾崎遺跡発掘調査報告書』
- 沼津市教育委員会 2004『八兵衛洞遺跡発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2008『宮添遺跡Ⅰ』
- 富士市教育委員会 2009『祢宜ノ前遺跡』
- 富士市教育委員会 2009『宮添遺跡Ⅱ』
- 富士市教育委員会 2010『宮添遺跡Ⅲ』
- 富士市教育委員会 2011『宮添遺跡Ⅳ』
- 富士市教育委員会 2012『宇東川遺跡A地区』
- 渡井英誉 1997「土器編年」『滝戸遺跡』富士宮市教育委員会
- 渡井英誉 1998「大塚式土器小考—大塚式土器の画期とその展開—」『庄内式土器研究』XVI
- 渡井英誉 1999「中見代式土器小考—大塚式土器から中見代式土器へ—」『東国土器研究』第5号
- 渡井英誉 2002「大塚Ⅱ式期の具体相」『三島市埋蔵文化財発掘調査報告書』VII
- 渡井英誉 2007「大塚様式の再検討」『大塚様式の再検討』(静岡県考古学会プレシンポジウム資料)
- 渡井英誉 2010「東駿河における布留式併行期の様相(補遺)—前期古墳の年代を再検討する—」『静岡県考古学研究』No.41・42

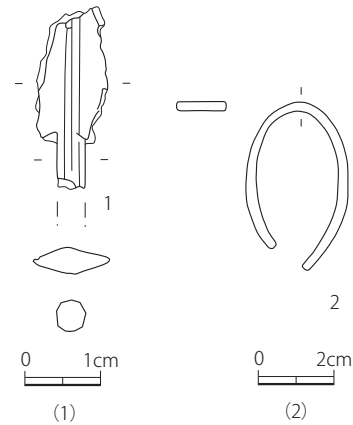
第2節 宮添遺跡出土の青銅製品

宮添遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる銅鏃、銅釧が1点ずつ出土している（第112図）。いずれもD地区南側の弥生時代後期の竪穴建物跡が密集している箇所からの出土のため、弥生時代後期のものと考えている。

銅鏃は、鏃身が五角形を志向し明確な逆刺があり、「東海系銅鏃」（赤塚 2007）とされるものの中でもIV a類とされるものである。これは、東海系銅鏃の中でも最も多く、愛知県から神奈川県にかけての太平洋沿岸で多く見られる形態であり、神奈川県では、相模川西岸と三浦半島に出土が偏ることが指摘されている（林原 2001）。銅釧については、形態的特徴などから今後、製作地などについて分析しなければならないという課題を残している。

浮島ヶ原低地の微高地上に立地する沼津市雄鹿塚遺跡では、銅鏃3点、指輪状銅環2点、銅釧5点、銅板5点が出土しており、「低地占地形集落」「交易拠点型集落」としての性格を担っていたものと考えられている（佐藤 2008）。丘陵上に立地する宮添遺跡は、そういった交易拠点と有機的な関係にあったものと考えられることから、出土数の少なさが、他地域との関係の強弱を示すものではなく、地域社会全体で捉えていく必要がある。

また、前述の雄鹿塚遺跡では、筒型銅製品が出土しており、愛知県朝日遺跡や神奈川県高原遺跡などに類例が求められる資料である。高原遺跡は、三浦半島西側の「佐島の丘」

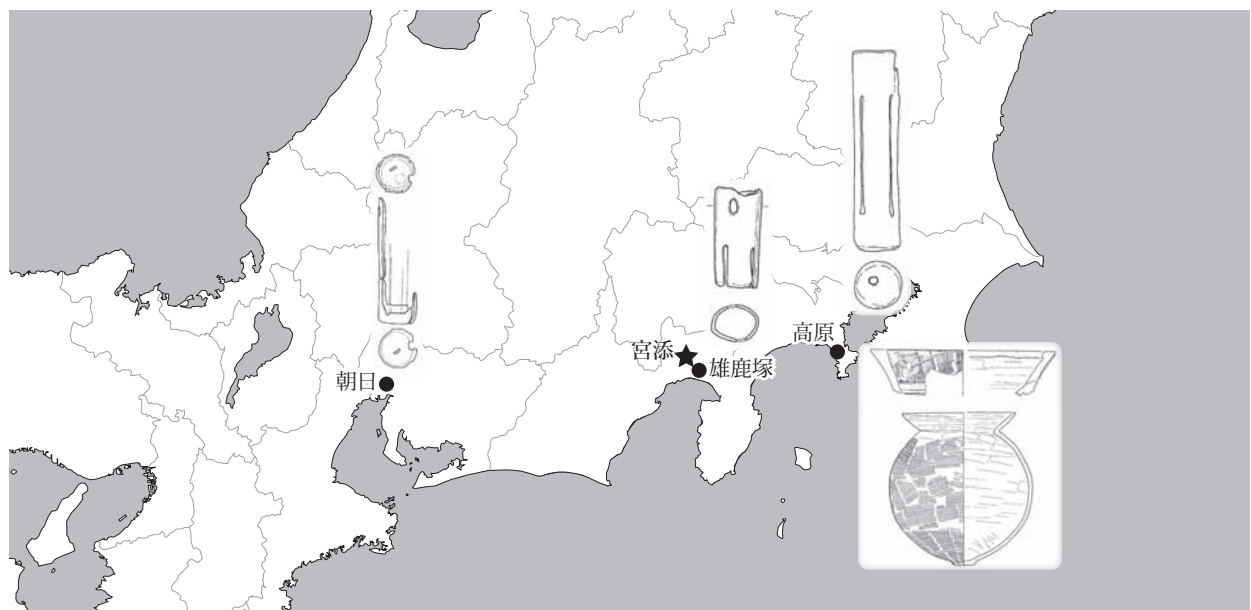


第112図 宮添遺跡出土の青銅製品

に立地し、豊富な青銅製品や駿河湾周辺で製作された「大廓式」の大型壺の破片やタタキ甕も出土しており（横須賀市 2010）、前述の通り、太平洋沿岸におけるモノの流通を考える上で重要な位置を占めている。

参考文献

- 赤塚次郎 2007 「朝日遺跡における金属製品の分布とその特徴について」『朝日遺跡』Ⅶ
- 佐藤祐樹 2008 「古墳時代について」『弥生ノ前遺跡』富士市教育委員会
- 林原利明 2001 「神奈川県内の弥生時代の青銅製品」『弥生時代後期のヒトの移動』西相模考古学研究会
- 横須賀市 2010 『新横須賀市史』別編 考古



第113図 筒型銅製品の出土

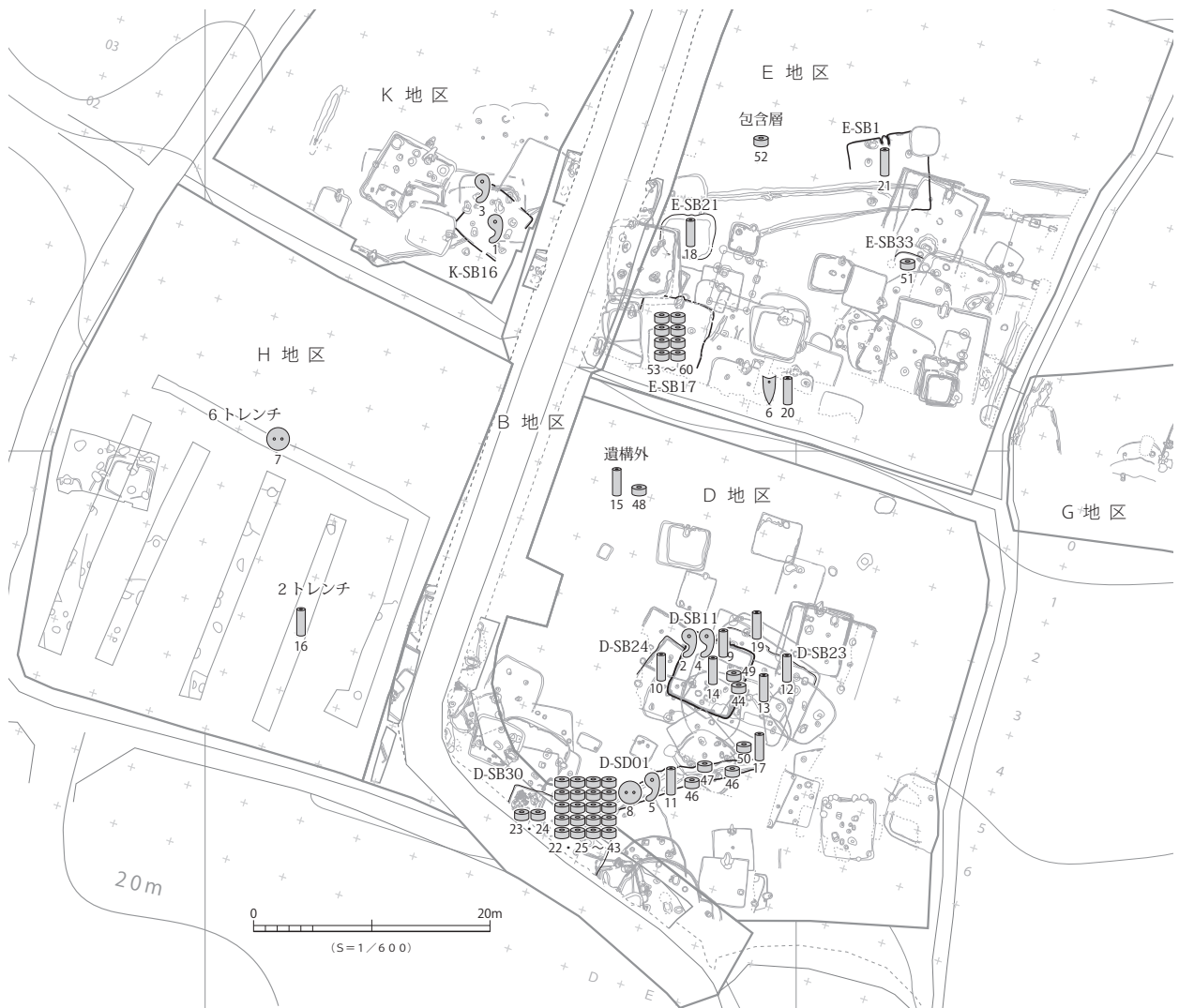
第3節 宮添遺跡出土の石製模造品

宮添遺跡では、これまでに「石製模造品」が60点出土している。その内訳を見ると勾玉5点、剣1点、有孔円盤2点、管玉13点（未製品2点含む）、白玉39点である。これだけの量の石製模造品が出土していたにも関わらず、これまでの報告では分析を行ってこなかった。それは、遺構の切り合い関係の激しさから、石製品が出土した遺構が廃棄された段階の遺構なのか判別できず、使用・廃棄された時期が明らかでなかったことによるところが大きい。

しかし、集落内において石製模造品が出土するということの重要性を鑑みて、これまでの報告を再度見直し、その性格に迫っていくこととする。

始めに出土遺構の整理を行うこととして、まずD-SD1について再考していくこととする。この遺構からは勾玉1点（5、以下第115図の番号を示す）、管玉1点（11）、

白玉20点（22・25～43）が出土している。これまでの報告では、出土遺物の中で最も新しい時期の遺物から平安時代の遺構ではないかと考えてきた。その結果、これらの石製模造品の年代について評価が明確に出来ない状態であった。覆土に大淵スコリアを含むことからTK23・47型式より新しい遺構と考えられる。TK208型式頃と考えられるD-SB30（B-SB21と同一遺構）と7世紀のSB16と切り合い関係をもち、これまではD-SD1はD-SB16より新しいと考えてきた。しかし、実際は前後関係が明確ではないことから、一般的に集落内において石製模造品が多く出土する古墳時代中期後半もしくは古墳時代後期初頭の遺構の可能性も考えられるのである。加えて、D地区において包含層出土とされていたものの出土箇所を図上にプロットした結果、有孔円盤1点（8）、管玉1点（17）、白玉3点（45・



第114図 石製模造品の出土位置

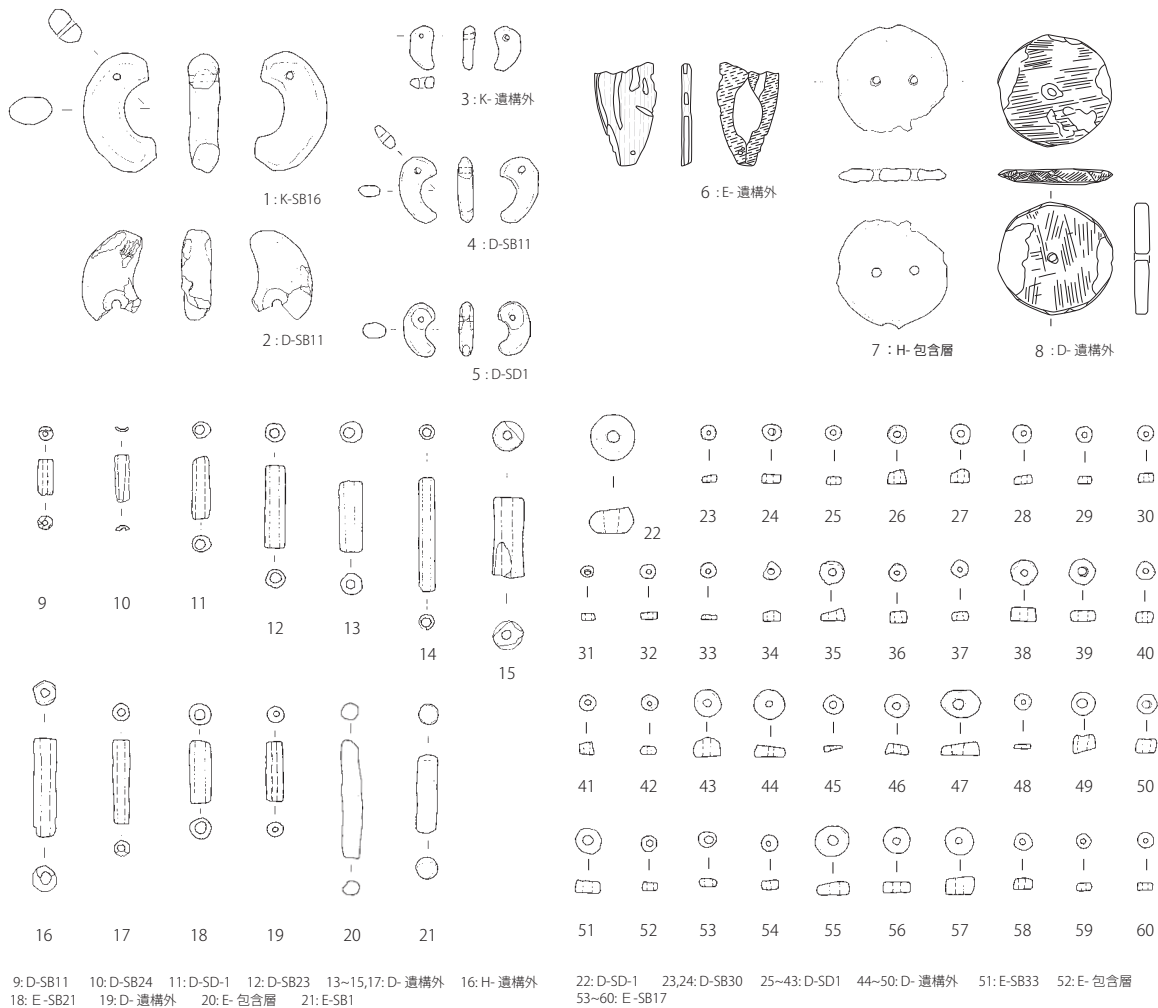
46・50) がD-SD1 に伴う可能性が考えられた。さらにD-SD1 と切り合い関係のあるD-SB30 から出土した白玉2点(23・24)についても、本来はD-SD1 の遺物と捉えることも出来、勾玉1点、管玉2点、白玉25点の石製模造品がD-SD1 から出土したと考えることが出来る。これだけの石製模造品を出土したD-SD1 の性格については後述することにする。

さて、MT15 型式期のD-SB11 からは勾玉2点(2・4)、管玉1点(9) が出土している。また、包含層出土の遺物を図上でプロットした結果、管玉1点(14)、白玉2点(44・49) が、平面的にはD-SB11 の範囲内から出土していることが明らかとなった。さらにD-SB11 周辺は数多くの遺構が重なり合っており、D-SB23 出土の管玉(12) やD-SB24 出土の管玉(10)、周辺から出土した白玉2点(44・49) もD-SB11 に伴う可能性も考えられる。整理するとD-SB11 および周囲からは、勾玉2点、管玉4点、白玉4点が出土していることとなる。

また、西隣のD-SB24 からはガラス小玉が出土しているが、これも本来D-SB11 のものの可能性も考えられる。実際、D-SB11 出土のガラス小玉も1点存在することから、前述の石製模造品に加えて、2点のガラス小玉もD-SB11 に関わる可能性がある。

つぎにE-SB17 出土の8点の白玉(53～60) について検討していくこととする。E-SB17 からは、韃の羽口が出土しており、宮添遺跡における小鍛冶について考える際に重要な遺物として注目される。E-SB17 は灰釉陶器の皿や甲斐型土器の共伴から10世紀の建物跡と考えられているが、TK23・47 型式頃と考えられるE-SB18 の覆土内に収まるように構築されており、E-SB17 出土の白玉8点は本来、E-SB18 の遺物であった可能性がある。

また、K- 遺構外出土の勾玉(3) の出土箇所を検討した結果、古墳時代中期後半の坏や高坏が出土しているK-SB16 の可能性が考えられ、この遺構からは勾玉2点(2・3) と土玉1点が出土したこととなる。



9: D-SB11 10: D-SB24 11: D-SD-1 12: D-SB23 13~15, 17: D-遺構外 16: H-遺構外
18: E-SB21 19: D-遺構外 20: E-包含層 21: E-SB1 22: D-SD-1 23, 24: D-SB30 25~43: D-SD1 44~50: D-遺構外 51: E-SB33 52: E-包含層
53~60: E-SB17

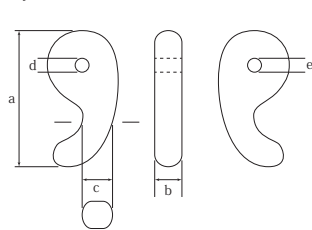
第115図 宮添遺跡出土の石製模造品

第4表 宮添遺跡出土の石製模造品

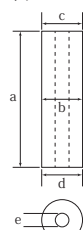
番号	種別	地区	遺構	挿図番号 (各報告書)	重量	a	b	c	d	e	出土位置 ※イ	
1	滑石製勾玉	K	SB16	第31図-8	6.67	3.16	0.72	1.18	0.26	0.19		富士市教委 2008
2	勾玉	D	SB11	第30図-98	2.55	(2.38)	0.80	1.11	0.69	0.68		富士市教委 2010b
3	滑石製勾玉	K	遺構外	第45図-3	0.51	1.09	0.29	0.6	0.16	0.11	ウ-03 杭から南4.19m、東 KSB16の可能性	富士市教委 2008
3.68m												
4	勾玉	D	SB11	第30図-99	0.93	1.71	0.39	0.50	0.23	0.23		富士市教委 2010b
5	勾玉	D	SD1	第109図-279	0.55	1.38	0.37	0.53	0.21	0.19		富士市教委 2010b
6	剣	E	遺構外	第131図-488	5.91	3.78	0.44	2.30	0.15	0.15		富士市教委 2011
7	有孔円板	H	包含層	第19図-36	5.22	3.79	0.34	2.97	0.25	0.26		富士市教委 2010a
8	有孔円板	D	遺構外	第123図-400	5.22	2.91	0.32	2.97	0.23	0.23	D-7 杭から北0.7m、東0.7m	DSD1の可能性 富士市教委 2010b
9	管玉	D	SB11	第30図-100	0.20	0.92	0.38	0.39	0.37	0.18		富士市教委 2010b
10	管玉	D	SB24	第65図-198	0.09	1.20	-	-	-	-		DSB11の可能性 富士市教委 2010b
11	管玉	D	SD1	第109図-280	0.59	1.71	0.49	0.49	0.44	0.20		富士市教委 2010b
12	管玉	D	SB23	第63図-188	0.85	2.15	0.51	0.51	0.51	0.26		DSB11の可能性 富士市教委 2010b
13	管玉	D	遺構外	第124図-416	1.20	1.89	0.60	0.60	0.59	0.29	F-4 杭から南2.5m、西1m	D-SB11の可能性 富士市教委 2010b
14	管玉	D	遺構外	第124図-417	0.92	3.00	0.44	0.44	0.42	0.26	E-5 杭から北2.6m、西0.46m	DSB11の可能性 富士市教委 2010b
15	管玉	D	遺構外	第124図-418	2.38	2.14	0.82	0.87	0.83	0.29		富士市教委 2010b
16	管玉	H	遺構外	第19図-35	1.48	2.53	0.60	0.60	-	0.32		富士市教委 2010a
17	管玉	D	遺構外	第124図-419	0.78	2.18	0.46	0.46	0.44	0.21	F-6 杭から北2.6m、東0.13m	D-SD1の可能性 富士市教委 2010b
18	管玉	E	SB21	第131図-502	0.86	1.61	0.52	0.54	0.53	0.25		富士市教委 2011
19	管玉	D	遺構外	第124図-420	0.44	1.58	0.45	0.45	0.42	0.21	E-4 杭から北2.3m、東1.87m	D-SB11の可能性 富士市教委 2010b
20	管玉未製品	E	包含層	第131図-503	1.40	3.12	0.48	0.48	0.43	-		富士市教委 2011
21	管玉未製品	E	SB1	第131図-504	1.33	2.06	0.58	0.58	0.55	-		富士市教委 2011
22	白玉	D	SD1	第109図-300	0.80	0.70	1.21	0.79	0.78	0.38		富士市教委 2010b
23	白玉	D	SB30	第50図-137	0.06	0.23	0.40	0.41	0.39	0.17		D-SD1の可能性 富士市教委 2010b
24	白玉	D	SB30	第50図-138	0.09	0.30	0.49	0.46	0.47	0.25		D-SD1の可能性 富士市教委 2010b
25	白玉	D	SD1	第109図-281	0.07	0.28	0.41	0.38	0.41	0.21		富士市教委 2010b
26	白玉	D	SD1	第109図-282	0.12	0.37	0.47	0.46	0.42	0.24		富士市教委 2010b
27	白玉	D	SD1	第109図-283	0.13	0.38	0.5	0.50	0.50	0.19		富士市教委 2010b
28	白玉	D	SD1	第109図-284	0.09	0.25	0.47	0.46	0.45	0.20		富士市教委 2010b
29	白玉	D	SD1	第109図-285	0.06	0.21	0.42	0.37	0.42	0.18		富士市教委 2010b
30	白玉	D	SD1	第109図-286	0.07	0.27	0.41	0.39	0.41	0.24		富士市教委 2010b
31	白玉	D	SD1	第109図-287	0.04	0.25	0.32	0.31	0.32	0.21		富士市教委 2010b
32	白玉	D	SD1	第109図-288	0.05	0.21	0.39	0.39	0.39	0.17		富士市教委 2010b
33	白玉	D	SD1	第109図-289	0.05	0.16	0.40	0.40	0.39	0.18		富士市教委 2010b
34	白玉	D	SD1	第109図-290	0.07	0.27	0.43	0.46	0.46	0.20		富士市教委 2010b
35	白玉	D	SD1	第109図-291	0.15	0.29	0.59	0.62	0.62	0.25		富士市教委 2010b
36	白玉	D	SD1	第109図-292	0.10	0.31	0.44	0.41	0.43	0.22		富士市教委 2010b
37	白玉	D	SD1	第109図-293	0.09	0.25	0.46	0.41	0.44	0.22		富士市教委 2010b
38	白玉	D	SD1	第109図-294	0.29	0.38	0.68	0.66	0.65	0.25		富士市教委 2010b
39	白玉	D	SD1	第109図-295	0.23	0.31	0.67	0.65	0.63	0.31		富士市教委 2010b
40	白玉	D	SD1	第109図-296	0.11	0.33	0.49	0.50	0.46	0.23		富士市教委 2010b
41	白玉	D	SD1	第109図-297	0.08	0.34	0.40	0.40	0.40	0.18		富士市教委 2010b
42	白玉	D	SD1	第109図-298	0.05	0.23	0.40	0.37	0.40	0.20		富士市教委 2010b
43	白玉	D	SD1	第109図-299	0.39	0.41	0.70	0.69	0.67	0.23		富士市教委 2010b
44	白玉	D	遺構外	第124図-421	0.36	0.3	0.78	0.79	0.77	0.20	E-5 杭から北1.81m、東2m	DSB11の可能性 富士市教委 2010b
45	白玉	D	遺構外	第124図-422	0.07	0.19	0.50	0.18	0.50	0.21	E-6 杭から南2m、東0.6m	D-SD1の可能性 富士市教委 2010b
46	白玉	D	遺構外	第124図-423	0.17	0.30	0.60	0.57	0.61	0.23	F-6 杭から南0.14m、西1.4m	D-SD1の可能性 富士市教委 2010b
47	白玉	D	遺構外	第124図-424	0.31	0.36	1.00	0.79	1.02	0.31	E-6 杭から南0.43m、東1.25m	D-SD1の可能性 富士市教委 2010b
48	白玉	D	遺構外	第124図-425	0.04	0.13	0.42	0.42	0.40	0.16		富士市教委 2010b
49	白玉	D	遺構外	第124図-426	0.25	0.42	0.62	0.66	0.63	0.31	E-5 杭から北2.6m、東1.27m	D-SB11の可能性 富士市教委 2010b
50	白玉	D	遺構外	第124図-427	0.14	0.36	0.53	0.48	0.51	0.24	F-6 杭から北2.1m、西1.1m	D-SD1の可能性 富士市教委 2010b
51	白玉	E	SB33	第131図-506	0.27	0.34	0.69	0.70	0.71	0.3		富士市教委 2011
52	白玉	E	包含層	第131図-507	0.08	0.22	0.43	0.41	0.41	0.12		富士市教委 2011
53	白玉	E	SB17	第131図-508	0.06	0.24	0.41	-	0.4	0.24		富士市教委 2011
54	白玉	E	SB17	第131図-509	0.08	0.25	0.43	0.42	0.41	0.21		富士市教委 2011
55	白玉	E	SB17	第131図-510	0.42	0.35	0.89	0.86	0.85	0.33		富士市教委 2011
56	白玉	E	SB17	第131図-511	0.26	0.32	0.67	0.67	0.67	0.23		富士市教委 2011
59	白玉	E	SB17	第131図-512	0.48	0.48	0.75	0.74	0.71	0.25		富士市教委 2011
60	白玉	E	SB17	第131図-513	0.11	0.41	0.46	0.44	0.44	0.22		富士市教委 2011
60	白玉	E	SB17	第131図-514	0.06	0.24	0.37	0.36	0.36	0.20		富士市教委 2011
61	白玉	E	SB17	第131図-515	0.04	0.15	0.38	0.70	0.37	0.20		富士市教委 2011

※イ 出土位置は調査時の遺物取り上げラベルの記載による。

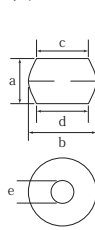
勾玉



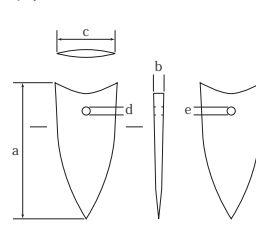
管玉



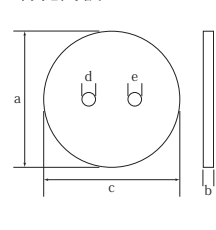
白玉



剣



有孔円板



以上のように、出土位置や出土遺構を検討した結果、宮添遺跡で出土している石製模造品のほとんどが古墳時代中期後半から後期初頭までの遺構から出土している可能性が指摘されるのである。TK23～TK47と考えられるE-SB18は宮添遺跡での集落活動が再開される段階の遺構であり、さらにMT15のD-SB11とあわせて考えると古墳時代中期後半～後期初頭において石製模造品・ガラス小玉を所有する集団が宮添遺跡に認められることになる。

さらに勾玉1点、管玉2点、白玉25点の出土が想定され、集落内を横断するように存在するD-SD1が古墳時代中期後半から後期初頭の遺構と考えることが許されれば、そこには何らかの祭祀行為の存在が想定される。この時期は土器集積と石製模造品による祭祀行為が集落内において認められる時期であり、隣接した地域では、富士市沢東A遺跡（富士市教育委員会1995）、焼津市宮之腰遺跡（焼津市教育委員会2011）、小田原市下馬下遺跡第IV地区（小田原市教育委員会2003）、平塚市沢狭遺跡（金目郵便局建設用地内遺跡発掘調査団1998）などでその類例が認められる。D-SD1は土器集積ではなく、執り行われた祭祀形態は前述のものやや異なっていたとも考えられるが、古墳時代中期後半は、東駿河において初期須恵器の流入や前方後円墳築造の再開など生活スタイルの変化という側面のみ

では理解できない、ヤマト王権の政治的介入が認められ始める時期であり（佐藤2011）、集落の再編成をする際に石製模造品を用いた祭祀が政治的理由により導入されたと考えられるのである（市川・島崎2005）。

今回は、宮添遺跡における石製模造品の出土箇所の再検討から、そのほとんどが古墳時代中期後半から後期初頭のものであることが推察された。宮添遺跡では管玉の未製品が2点（20・21）出土している。今後は、製作技法の詳細な検討や形状の分析などの集落内における玉作りの存在やその使用・廃棄までの一連のプロセスを明らかにしていく必要がある。

参考文献

- 市川創・島崎久恵 2005「畿内における集落出土の滑石製品」『古墳時代の滑石製品』第54回埋蔵文化財研究集会
- 小田原市教育委員会 2003『下馬下遺跡 第IV地区』
- 金目郵便局建設用地内遺跡発掘調査団 1998『沢狭遺跡発掘調査報告書』
- 佐藤祐樹 2010「集落の動態からみた古墳出現前夜の富士山南麓」静岡考古学研究 41・42
- 佐藤祐樹 2011「弥生～古墳時代における宮添遺跡を取り巻く社会構造の変化」『宮添遺跡』IV 富士市教育委員会
- 富士市教育委員会 1995『沢東A遺跡』
- 焼津市教育委員会 2011『宮之腰遺跡』III

から、宮添遺跡に限ったことではない。また、判読可能な資料28点のうち最も多いのが「中」の12点、ついで「弓」4点、「吉」4点、「大」2点である。また、39のように見込み部と側面の二箇所に墨書が認められる例はあるが、

二文字のものはない。

参考文献

木ノ内義昭 2002 「岳南地域出土墨書土器集成」『東平遺跡』（第16地区（三日市廃寺跡）、第27地区発掘調査報告書）富士市教育委員会

第5表 宮添遺跡出土の墨書土器

地区	遺構	挿図番号 (各報告書)	種別	器種	部位	墨文	年代		
1	A	SB1	第9図-1	土師器	坏	側面	墨書「大」力	9世紀	富士市教委 2012
2	B	SB14	第43図-90	土師器	坏	底部外面	墨書「秋」	9世紀	富士市教委 2012
3	B	SB14	第43図-91	土師器	坏	側面	墨書「口」	9世紀	富士市教委 2012
4	B	包含層	第64図-357	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2012
5	D	SB11	第28図-42	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2010b
6	D	SB17	第53図-149	土師器	坏	側面	墨書「吉」	9世紀	富士市教委 2010b
7	D	包含層	第122図-363	土師器	坏	側面	墨書「伍」力	不明	富士市教委 2010b
8	E	SB3	第15図-29	土師器	坏	側面	墨書「中」力	不明	富士市教委 2011b
9	E	SB3	第15図-30	土師器	坏	底部外面	墨書「弓」力	10世紀?	富士市教委 2011a
10	E	SB10	第22図-45	土師器	坏	側面	刻書「中」	9世紀	富士市教委 2011a
11	E	SB10	第22図-47	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
12	E	SB10	第22図-48	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
13	E	SB10	第22図-49	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
14	E	SB10	第22図-50	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
15	E	SB10	第22図-51	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
16	E	SB5	第32図-75	土師器	坏	底部外面	墨書「弓」力	不明	富士市教委 2011a
17	E	SB5	第32図-79	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
18	E	SB6	第36図-107	土師器	坏	側面	刻書「口」	9世紀	富士市教委 2011a
19	E	SB6	第36図-111	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
20	E	SB23	第48図-131	土師器	坏	側面	墨書「口」	9世紀	富士市教委 2011a
21	E	SB23	第48図-134	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
22	E	SB23	第48図-135	土師器	坏	底部外面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
23	E	SB16	第50図-157	土師器	坏	側面	墨書「威」力	9世紀	富士市教委 2011a
24	E	SB16	第50図-160	土師器	坏	側面	墨書「口」	9世紀	富士市教委 2011a
25	E	SB16	第50図-165	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
26	E	SB16	第50図-166	土師器	坏	側面	墨書「中」	不明	富士市教委 2011a
27	E	SB16	第50図-167	土師器	坏	側面	墨書「中」	9世紀	富士市教委 2011a
28	E	SB14	第59図-188	土師器	坏	側面	墨書「口」	9世紀	富士市教委 2011a
29	E	SB14	第59図-189	土師器	坏	底部外面	墨書「口」	9世紀	富士市教委 2011a
30	E	SB14	第59図-190	土師器	坏	側面	墨書「大」力	不明	富士市教委 2011a
31	E	SB14	第59図-191	土師器	坏	側面	墨書「口」	9世紀	富士市教委 2011a
32	E	SB15	第63図-202	土師器	坏	側面	墨書「口」	9世紀~10世紀	富士市教委 2011a
33	E	SB15	第63図-205	土師器	坏	側面	墨書「口」	9世紀~10世紀	富士市教委 2011a
34	E	SB27	第84図-278	土師器	坏	側面	墨書「中」	不明	富士市教委 2011a
35	E	SB27	第84図-279	土師器	坏	側面	墨書「保」	9世紀	富士市教委 2011a
36	E	SK1	第119図-370	土師器	坏	底部外面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
37	E	包含層	第130図-414	土師器	坏	側面	墨書「井」力	10世紀	富士市教委 2011a
38	E	包含層	第130図-416	土師器	坏	側面	墨書「中」	9世紀	富士市教委 2011a
39	E	包含層	第130図-417	土師器	坏	側面/見込み	墨書「吉」	9世紀	富士市教委 2011a
40	E	包含層	第130図-418	土師器	坏	側面	墨書「口」	9世紀~10世紀	富士市教委 2011a
41	E	包含層	第130図-420	土師器	坏	側面	墨書「中」	9世紀~10世紀	富士市教委 2011a
42	E	包含層	第130図-423	土師器	坏	底部外面	墨書「吉」	不明	富士市教委 2011a
43	E	包含層	第130図-427	土師器	坏	底部外面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
44	E	包含層	第130図-429	土師器	坏	見込み	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
45	E	包含層	第130図-430	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
46	E	包含層	第130図-431	土師器	坏	側面	墨書「中」	不明	富士市教委 2011a
47	E	包含層	第130図-432	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
48	E	包含層	第130図-433	土師器	坏	側面	墨書「弓」力	不明	富士市教委 2011a
49	E	包含層	第130図-434	土師器	坏	側面	墨書「中」	不明	富士市教委 2011a
50	E	包含層	第130図-435	土師器	坏	側面	墨書「吉」	不明	富士市教委 2011a
51	E	包含層	第130図-436	土師器	坏	側面	刻書「中」	不明	富士市教委 2011a
52	E	包含層	第130図-437	土師器	坏	見込み	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
53	E	包含層	第130図-438	土師器	坏	側面	刻書「中」	不明	富士市教委 2011a
54	E	包含層	第130図-439	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2011a
55	E	包含層	第130図-440	土師器	坏	側面	刻書「口」	不明	富士市教委 2011a
56	G	SB2	第9図-2	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2009
57	H	SB01	第17図-7	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2010a
58	H	SB01	第17図-15	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2010a
59	H	包含層	第19図-19	土師器	坏	側面	墨書「弓」力	9世紀	富士市教委 2010a
60	H	包含層	第19図-20	土師器	坏	側面	墨書「口」	10世紀	富士市教委 2010a
61	H	包含層	第19図-21	土師器	坏	側面	墨書「口」	9世紀	富士市教委 2010a
62	H	包含層	第19図-22	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2010a
63	H	包含層	第19図-23	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2010a
64	H	包含層	第19図-24	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2010a
65	H	包含層	第19図-25	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2010a
66	H	包含層	第19図-26	土師器	坏	側面	墨書「口」	不明	富士市教委 2010a

出土遺物観察表

- ・残存率のうち（ ）をつけたものは、全体の形が不明なため、図示した範囲における残存の割合を示したことを表している。
 - ・数値のうち（ ）を付けたものはその部位が完存せず欠損していることを表し、—は計測不能であることを表している。
 - ・土器を除く観察表の計測箇所は、個々に示した方式に拠っている。
-
-

A地区出土遺物観察表

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調			外面色調		備考	
1	第9図	PL36	SB1	土師器	坏	70%	11.0	3.9	6.2	2.5YR	4/6	赤褐色	2.5YR	5/6	明赤褐色	体部に墨書「大」か
2	第9図	PL36	SB1	土師器	甕	(20%)	23.0	(4.7)	-	2.5YR	4/8	赤褐色	2.5YR	4/6	赤褐色	
3	第9図	PL36	遺構外	土師器	壺	90%	8.2	12.5	3.0	2.5YR	5/6	明赤褐色	2.5YR	5/6	明赤褐色	小型丸底壺

B地区出土遺物観察表(土器)

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調			外面色調		備考	
1	第13図	PL13	SB1	土師器	坏	-	-	(3.7)	-	5YR	5/6	明赤褐色	5YR	5/6	明赤褐色	甲斐型坏
2	第13図	PL13	SB1	土師器	甕	-	-	(5.6)	-	5YR	5/6	明赤褐色	2.5YR	5/6	明赤褐色	
3	第13図	PL13	SB1	土師器	甕	(25%)	-	(8.2)	-	5YR	5/6	明赤褐色	5YR	4/6	赤褐色	
4	第15図	PL13	SB5	須恵器	坏蓋	-	-	(1.9)	-	10YR	5/1	褐灰色	10YR	6/2	灰黄褐色	
5	第15図	PL13	SB5	灰釉陶器	碗	(20%)	-	(2.3)	8.7	5Y	5/2	灰オリーブ色	2.5Y	5/2	暗灰黄色	
6	第18図	PL13	SB7	土師器	甕	(20%)	26.0	(12.4)	-	2.5YR	4/6	赤褐色	2.5YR	5/6	明赤褐色	
7	第18図	PL13	SB7	土師器	甕	(20%)	-	(11.4)	-	2.5YR	4/6	赤褐色	5YR	4/6	赤褐色	
8	第18図	PL13	SB7	土師器	甕	(15%)	19.2	(5.4)	-	2.5YR	4/6	赤褐色	2.5YR	4/6	赤褐色	
9	第18図	PL13	SB7	土師器	甕	(45%)	-	(2.4)	9.0	7.5YR	6/4	にぶい橙色	2.5YR	5/6	明赤褐色	底部に木葉痕
10	第18図	PL13	SB7	土師器	高坏	95%	10.2	6.5	5.2	7.5YR	5/4	にぶい褐色	7.5YR	5/4	にぶい褐色	
11	第18図	PL13	SB7	土師器	坏	80%	13.0	4.7	-	7.5YR	6/6	橙色	7.5YR	5/6	明褐色	
12	第18図	PL13	SB7	土師器	坏	(25%)	14.0	(4.3)	-	7.5YR	6/6	橙色	5YR	5/6	明赤褐色	
13	第18図	PL13	SB7	土師器	坏	70%	11.5	3.8	5.0	5YR	7/8	橙色	5YR	6/8	褐色	
14	第18図	PL13	SB7	須恵器	坏蓋	-	-	(1.7)	-	10YR	7/2	にぶい黄褐色	10YR	6/1	褐灰色	
15	第18図	PL13	SB7	須恵器	坏蓋	(20%)	12.0	(2.3)	-	7.5Y	5/1	灰色	10Y	5/1	灰色	二次転用の可能性
16	第18図	PL13	SB7	須恵器	坏	20%	12.0	3.8	5.8	10YR	6/2	灰黄褐色	10YR	5/1	褐灰色	
17	第18図	PL13	SB7	須恵器	坏蓋	-	-	(1.5)	-	N	5/	灰色	N	4/	灰色	
18	第18図	PL13	SB7	須恵器	坏蓋	-	-	(1.4)	-	7.5Y	6/1	灰色	7.5Y	4/1	灰色	
19	第18図	PL13	SB7	灰釉陶器	碗	-	-	(1.6)	-	2.5YR	7/3	浅黄色	2.5YR	6/2	灰黄色	
20	第18図	PL13	SB7	土師器	甕	(15%)	18.2	(2.9)	-	7.5YR	7/4	にぶい橙色	7.5YR	4/3	褐色	S字甕
21	第18図	PL13	SB7	土師器	甕	-	-	(2.4)	-	7.5YR	4/3	褐色	7.5YR	4/2	灰褐色	
22	第18図	PL13	SB7	弥生土器	壺	-	-	(2.5)	-	5YR	6/6	褐色	5YR	6/6	褐色	口唇部に棒状浮文
23	第18図	PL13	SB7	弥生土器	壺	-	-	(1.6)	-	7.5YR	7/6	褐色	10YR	6/4	にぶい黄褐色	折り返し口縁内面に縄文
24	第18図	PL13	SB7	土師器	壺	-	-	(2.3)	-	5YR	5/4	にぶい赤褐色	5YR	5/4	にぶい赤褐色	
25	第19図	PL14	SB9	土師器	甕	-	-	(3.6)	-	2.5YR	4/4	にぶい赤褐色	2.4YR	5/6	明赤褐色	
26	第19図	PL14	SB9	須恵器	坏	30%	15.0	4.0	9.6	5Y	6/1	灰色	5Y	6/1	灰色	
27	第22図	PL14	SB2	土師器	甕	-	-	(4.7)	-	2.5YR	6/8	褐色	2.5YR	6/8	褐色	
28	第22図	PL14	SB2	土師器	坏	-	-	(3.8)	-	2.5YR	4/6	赤褐色	2.5YR	4/6	赤褐色	
29	第22図	PL14	SB2	土師器	坏	25%	11.5	3.7	7.0	2.5YR	4/6	赤褐色	2.5YR	4/4	にぶい赤褐色	
30	第22図	PL14	SB2	土師器	坏	25%	10.7	3.8	5.5	2.5YR	4/6	赤褐色	2.5YR	5/6	明赤褐色	
31	第22図	PL14	SB2	土師器	坏	20%	12.3	3.3	7.0	2.5YR	4/6	赤褐色	2.5YR	5/6	明赤褐色	
32	第22図	PL14	SB2	土師器	坏	95%	12.0	4.3	7.7	2.5YR	4/8	赤褐色	2.5YR	4/8	赤褐色	
33	第25図	PL14	SB3	土師器	甕	(10%)	18.0	(7.0)	-	5YR	6/4	にぶい褐色	5YR	6/6	褐色	
34	第25図	PL14	SB3	土師器	こしき	(30%)	-	(8.5)	9.0	5YR	4/8	赤褐色	2.5YR	5/6	明赤褐色	
35	第25図	PL14	SB3	土師器	坏	(20%)	14.0	(4.2)	-	5YR	6/6	褐色	5YR	6/8	褐色	
36	第25図	PL14	SB3	土師器	坏	(25%)	18.6	(4.4)	-	5YR	6/6	褐色	2.5YR	6/6	褐色	
37	第25図	PL14	SB3	土師器	坏	50%	14.8	5.3	-	7.5YR	7/8	黄褐色	7.5YR	7/8	黄褐色	
38	第25図	PL14	SB3	土師器	高坏	(80%)	-	(7.5)	-	7.5YR	7/8	黄褐色	7.5YR	7/6	褐色	
39	第25図	PL14	SB3	土師器	壺	-	-	(3.0)	-	5YR	6/6	褐色	2.5YR	5/6	明赤褐色	口唇部に押文
41	第32図	PL15	6T	土師器	甕	-	-	(2.7)	-	7.5YR	6/6	褐色	5YR	5/4	にぶい赤褐色	S字甕
42	第32図	PL15	6T	土師器	鉢	40%	8.5	3.4	2.8	2.5YR	5/8	明赤褐色	5YR	5/6	明赤褐色	
43	第32図	PL15	6T	須恵器	甕	-	-	(4.7)	-	10YR	6/1	褐灰色	10YR	3/1	黒褐色	口縁部に波状文
44	第32図	PL15	6T	陶器	壺	-	-	(3.6)	-	10YR	6/4	にぶい黄褐色	5YR	3/3	暗赤褐色	
45	第32図	PL15	6T	須恵器	盃	-	-	(3.9)	-	2.5Y	4/4	オリーブ灰色	7.5Y	5/1	灰色	
46	第35図	PL15	SB10	土師器	甕	-	-	(4.0)	-	5YR	4/4	にぶい赤褐色	5YR	4/4	にぶい赤褐色	
47	第35図	PL15	SB10	土師器	甕	-	-	(2.9)	-	5YR	5/6	明赤褐色	5YR	5/6	明赤褐色	
48	第35図	PL15	SB10	土師器	甕	-	-	(3.5)	-	2.5YR	5/6	明赤褐色	2.5YR	4/4	にぶい赤褐色	
49	第35図	PL15	SB10	土師器	甕	-	-	(3.3)	-	5YR	4/6	赤褐色	5YR	5/4	にぶい赤褐色	
50	第35図	PL15	SB10	土師器	甕	-	-	(4.9)	-	5YR	5/4	にぶい赤褐色	5YR	5/4	にぶい赤褐色	
51	第35図	PL15	SB10	土師器	甕	-	-	(2.9)	-	5YR	4/6	赤褐色	2.5YR	5/6	明赤褐色	
52	第35図	PL15	SB10	須恵器	壺	-	-	(5.7)	-	5Y	6/1	灰色	5YR	6/6	褐色	
53	第35図	PL15	SB10	須恵器	甕	-	-	(3.5)	-	5B	5/1	青灰色	5PB	4/1	暗青灰色	
54	第35図	PL15	SB10	須恵器	壺	(35%)	-	(4.5)	8.4	N	6/	灰色	2.5GY	5/1	オリーブ灰色	
55	第35図	PL15	SB10	土師器	坏	15%	12.6	4.0	7.8	2.5YR	4/6	赤褐色	2.5YR	4/6	赤褐色	
56	第35図	PL15	SB10	土師器	坏	50%	10.5	3.8	7.2	5YR	5/6	明赤褐色	5YR	5/6	明赤褐色	底部みこみ部に十字の線刻
57	第35図	PL15	SB10	土師器	坏	(25%)	-	(1.1)	8.0	2.5YR	5/6	明赤褐色	2.5YR	4/6	赤褐色	みこみ部に放射状暗文
58	第35図	PL15	SB10	土師器	坏	(45%)	-	(2.9)	7.3	2.5YR	4/6	赤褐色	5YR	5/6	明赤褐色	体部に放射状暗文
59	第35図	PL15	SB10	土師器	手づくね	95%	5.0	2.0	3.6	5YR	5/6	明赤褐色	5YR	5/6	明赤褐色	底部に木葉痕
60	第35図	PL15	SB10	土師器	手づくね	100%	5.2	2.5	3.0	5YR	6/6	褐色	5YR	6/6	褐色	底部に木葉痕
61	第35図	PL15	SB10	土師器	手づくね	90%	5.5	1.8	3.0	10YR	7/4	にぶい黄褐色	10YR	6/4	にぶい黄褐色	

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考
62	第35図	PL.15	SB10	土師器	坏	-	-	(2.5)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
63	第35図	PL.15	SB10	土師器	皿	-	-	(2.0)	-	2.5YR 6/8 橙色	2.5YR 6/6 橙色	
64	第36図	PL.16	SB11	土師器	甕	-	-	(3.1)	-	2.5YR 4/6 赤褐色	2.5YR 4/4 にぶい赤褐色	
65	第36図	PL.16	SB11	土師器	甕	-	-	(4.5)	-	2.5YR 5/8 明赤褐色	5YR 6/6 橙色	
66	第36図	PL.16	SB11	土師器	手づくね	50%	5.0	1.3	3.6	5YR 7/6 橙色	5YR 7/6 橙色	
67	第39図	PL.16	SB12	土師器	甕	-	-	(4.0)	-	7.5YR 4/6 褐色	5YR 6/6 橙色	
68	第39図	PL.16	SB12	土師器	甕	-	-	(4.7)	-	2.5YR 5/4 にぶい赤褐色	2.5YR 5/4 にぶい赤褐色	
69	第39図	PL.16	SB12	土師器	甕 (60%)	-	-	(6.8)	7.5	5YR 4/4 にぶい赤褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	
70	第39図	PL.16	SB12	土師器	甕 (40%)	-	-	(20.2)	8.0	2.5YR 4/4 にぶい赤褐色	2.5YR 3/4 暗赤褐色	底部に木葉痕
71	第39図	PL.16	SB12	須恵器	甕	-	-	(12.8)	-	2.5Y 7/2 灰黄色	2.5Y 7/1 灰白色	
72	第39図	PL.16	SB12	須恵器	坏 (20%)	12.0	(3.2)	-	10Y 6/1 灰色	10Y 6/1 灰色		
73	第39図	PL.16	SB12	須恵器	坏	-	-	(1.6)	-	N 4/ 灰色	N 5/ 灰色	
74	第39図	PL.16	SB12	土師器	坏	-	-	(4.7)	-	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 5/6 明褐色	
75	第39図	PL.16	SB12	須恵器	坏蓋 (45%)	-	-	(1.9)	-	2.5Y 6/2 灰黄色	7.5Y 6/2 灰オリーブ色	つまみ径 1.5cm
76	第39図	PL.16	SB12	土師器	台付甕 (95%)	-	-	(6.0)	8.5	7.5YR 8/6 浅黄褐色	7.5YR 7/6 褐色	
77	第39図	PL.16	SB12	土師器	不明	-	-	(5.4)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	台付甕の可能性
78	第41図	PL.16	SB13	土師器	甕 (50%)	-	-	(8.9)	6.4	5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	底部に木葉痕
79	第41図	PL.16	SB13	須恵器	坏蓋 (75%)	-	-	(2.0)	-	7.5YR 6/1 灰色	10Y 6/1 灰色	
80	第41図	PL.16	SB13	須恵器	坏 (50%)	-	-	(1.3)	8.8	7.5Y 6/1 灰色	7.5Y 5/1 灰色	
82	第41図	PL.16	SB13	土師器	甕	-	-	(4.8)	-	5YR 5/6 明赤褐色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	
83	第41図	PL.16	SB13	土師器	甕	-	-	(1.7)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	5YR 5/6 明赤褐色	S字甕
84	第43図	PL.17	SB14	土師器	甕 (30%)	23.4	(9.2)	-	5YR 4/6 赤褐色	5YR 4/6 赤褐色		
85	第43図	PL.17	SB14	土師器	甕 (20%)	25.0	(3.2)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 4/8 赤褐色		
86	第43図	PL.17	SB14	土師器	甕	-	-	(2.2)	-	5YR 4/3 にぶい赤褐色	5YR 4/4 にぶい赤褐色	
87	第43図	PL.17	SB14	土師器	甕	-	-	(4.0)	-	10R 3/6 暗褐色	10R 3/6 暗褐色	
88	第43図	PL.17	SB14	土師器	甕	-	-	(4.3)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	
89	第43図	PL.17	SB14	須恵器	坏蓋 (20%)	16.6	(2.5)	-	7.5Y 6/1 灰色	N 7/ 灰白色		
90	第43図	PL.17	SB14	土師器	坏 45%	11.2	4.1	6.4	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	底部に墨書「秋」	
91	第43図	PL.17	SB14	土師器	坏 (80%)	-	-	(2.6)	6.0	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	体部に墨書あり
92	第43図	PL.17	SB14	土師器	坏 (75%)	-	-	(2.0)	6.0	2.5YR 4/8 赤褐色	2.5YR 4/8 赤褐色	
93	第43図	PL.17	SB14	土師器	坏 (30%)	-	-	(1.0)	6.0	2.5YR 6/8 橙色	2.5YR 6/8 橙色	
94	第43図	PL.17	SB14	土師器	坏	-	-	(4.0)	-	5YR 6/8 橙色	2.5YR 5/8 明赤褐色	
95	第43図	PL.17	SB14	土師器	甕	-	-	(2.4)	-	5Y 6/6 橙色	5Y 6/6 橙色	S字甕
96	第43図	PL.17	SB14	弥生土器	壺	-	-	(3.4)	-	10YR 6/3 にぶい黄褐色	7.5YR 6/6 褐色	頸部に縄文及びび円形浮文
97	第43図	PL.17	SB14	土師器	高坏 (20%)	19.5	(5.6)	-	5YR 5/8 明赤褐色	5YR 4/6 赤褐色		
98	第43図	PL.17	SB14	土師器	壺	-	-	(3.0)	-	5Y 6/6 褐色	5Y 6/6 褐色	
99	第43図	PL.17	SB14	土師器	坏	-	-	(3.0)	-	5YR 4/4 にぶい赤褐色	5YR 4/3 にぶい赤褐色	
100	第45図	PL.17	SB21	土師器	壺 (10%)	30.0	(7.3)	-	10YR 7/4 にぶい黄褐色	10YR 7/4 にぶい黄褐色		
101	第45図	PL.17	SB21	土師器	壺	-	-	(3.1)	-	2.5YR 7/6 褐色	2.5YR 7/6 褐色	
102	第45図	PL.17	SB21	土師器	壺	-	-	(3.8)	-	10YR 7/4 にぶい黄褐色	10YR 7/4 にぶい黄褐色	口縁部に棒状浮文
103	第45図	PL.17	SB21	土師器	壺	-	-	(3.1)	-	5YR 6/6 褐色	5YR 7/6 褐色	口縁部に棒状浮文
104	第45図	PL.18	SB21	弥生土器	壺	-	-	(5.3)	-	7.5YR 7/6 褐色	7.5YR 7/6 褐色	口縁部に棒状浮文
105	第45図	PL.18	SB21	土師器	壺	-	-	(4.4)	-	7.5YR 7/6 褐色	7.5YR 7/6 褐色	口縁部に棒状浮文
106	第45図	PL.18	SB21	土師器	甕	-	-	(5.2)	-	5Y 5/6 明赤褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	
107	第45図	PL.18	SB21	弥生土器	壺	-	-	(1.9)	-	5YR 6/8 褐色	7.5YR 7/8 黄褐色	
108	第45図	PL.18	SB21	土師器	壺 (20%)	13.2	(4.4)	-	5YR 6/8 褐色	2.5YR 6/8 褐色		
109	第45図	PL.18	SB21	弥生土器	壺 (85%)	14.0	(3.8)	-	7.5YR 6/4 にぶい褐色	10YR 6/4 にぶい黄褐色		
110	第45図	PL.18	SB21	土師器	壺	-	-	(5.4)	-	10YR 7/4 にぶい黄褐色	10YR 6/4 にぶい黄褐色	
111	第45図	PL.18	SB21	弥生土器	壺 (85%)	-	-	(6.0)	-	7.5YR 7/6 褐色	5YR 7/6 褐色	頸部に結節縄文
112	第45図	PL.18	SB21	土師器	壺 (25%)	-	-	(4.7)	-	10YR 8/3 浅黄褐色	10YR 7/3 にぶい黄褐色	
113	第45図	PL.18	SB21	土師器	壺 (20%)	-	-	(7.0)	-	5YR 6/8 褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	
114	第45図	PL.18	SB21	土師器	壺 (20%)	-	-	(8.0)	-	5YR 5/6 明赤褐色	5YR 5/8 明赤褐色	
115	第45図	PL.18	SB21	土師器	壺	-	-	(2.8)	-	7.5YR 8/3 浅黄褐色	7.5YR 7/4 にぶい褐色	
116	第45図	PL.18	SB21	弥生土器	壺	-	-	(2.0)	-	7.5YR 6/6 褐色	2.5YR 4/8 赤褐色	
117	第45図	PL.18	SB21	土師器	壺	-	-	(4.0)	-	7.5YR 7/4 にぶい褐色	7.5YR 7/4 にぶい褐色	
118	第45図	PL.18	SB21	弥生土器	壺 (25%)	-	-	(6.3)	-	7.5YR 7/8 黄褐色	7.5YR 7/6 褐色	
119	第45図	PL.18	SB21	土師器	壺 (25%)	-	-	(4.8)	17.5	10YR 6/3 にぶい黄褐色	5YR 5/6 明赤褐色	
120	第45図	PL.18	SB21	土師器	壺 (30%)	-	-	(2.4)	12.4	10YR 6/4 にぶい黄褐色	2.5YR 6/6 褐色	底部に木葉痕
121	第45図	PL.19	SB21	土師器	壺 (70%)	-	-	(2.8)	9.4	5YR 6/6 褐色	7.5YR 6/6 褐色	底部に木葉痕
122	第45図	PL.19	SB21	土師器	壺 (25%)	-	-	(3.3)	4.3	2.5YR 5/8 明赤褐色	5YR 7/6 褐色	底部に木葉痕
123	第45図	PL.19	SB21	土師器	壺 (80%)	-	-	(3.3)	8.2	7.5YR 5/2 灰褐色	5YR 6/6 褐色	底部に木葉痕
124	第45図	PL.19	SB21	土師器	壺 (60%)	-	-	(2.7)	9.5	7.5YR 7/4 にぶい褐色	7.5YR 6/6 褐色	
125	第45図	PL.19	SB21	土師器	壺 (20%)	-	-	(2.8)	12.5	5YR 7/8 褐色	5YR 7/6 褐色	
126	第45図	PL.19	SB21	土師器	壺 (30%)	-	-	(4.0)	8.4	10R 6/8 赤褐色	5YR 6/4 にぶい褐色	底部に木葉痕
127	第45図	PL.19	SB21	土師器	壺 (20%)	-	-	(3.5)	8.6	7.5YR 6/6 褐色	10YR 4/1 褐灰色	底部に木葉痕
128	第45図	PL.19	SB21	土師器	壺 (60%)	-	-	(3.1)	5.5	2.5YR 6/6 褐色	5YR 6/8 褐色	
129	第45図	PL.19	SB21	土師器	壺 (45%)	-	-	(2.8)	8.0	7.5YR 6/1 褐灰色	5YR 6/8 褐色	底部に木葉痕
130	第45図	PL.19	SB21	土師器	壺 (30%)	-	-	(2.3)	10.0	10YR 7/4 にぶい黄褐色	7.5YR 6/6 褐色	底部に木葉痕

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考
131	第45図	PL.19	SB21	土師器	壺	(70%)	-	(4.3)	5.2	2.5YR 4/6 赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
132	第45図	PL.19	SB21	土師器	壺	(20%)	-	(1.7)	8.8	10YR 6/4 にぶい黄褐色	7.5YR 7/6 橙色	底部に木葉痕
133	第45図	PL.19	SB21	土師器	壺	(30%)	-	(1.8)	10.0	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/6 橙色	
134	第46図	PL.19	SB21	土師器	壺	95%	9.6	8.6	4.8	2.5YR 5/6 明赤褐色	5YR 5/6 明赤褐色	
135	第46図	PL.19	SB21	土師器	壺	90%	11.4	8.7	4.6	2.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	
136	第46図	PL.19	SB21	土師器	鉢	(20%)	12.0	(5.2)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
137	第46図	PL.19	SB21	土師器	鉢	(30%)	11.5	(3.8)	-	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/6 橙色	
138	第46図	PL.19	SB21	土師器	甕	-	-	(5.0)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
139	第46図	PL.19	SB21	土師器	甕	(45%)	-	(1.2)	8.0	2.5YR 6/6 橙色	5YR 5/6 明赤褐色	
140	第46図	PL.20	SB21	土師器	小型壺	(70%)	-	(1.5)	2.0	10YR 7/4 にぶい黄褐色	10YR 7/4 にぶい黄褐色	
141	第46図	PL.20	SB21	土師器	小型壺	(70%)	-	(2.1)	3.4	2.5YR 6/8 橙色	10YR 7/4 にぶい黄褐色	
142	第46図	PL.20	SB21	土師器	坏	(30%)	-	(2.4)	7.0	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 4/4 にぶい赤褐色	
143	第46図	PL.20	SB21	土師器	壺	(25%)	-	(4.8)	5.4	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	
144	第46図	PL.19	SB21	土師器	壺	(40%)	-	(2.7)	4.0	2.5YR 4/6 赤褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	
145	第46図	PL.20	SB21	土師器	壺	(75%)	-	(2.8)	5.6	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	
146	第46図	PL.20	SB21	土師器	甕	(20%)	25.3	(6.3)	-	5YR 5/4 にぶい赤褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	
147	第46図	PL.20	SB21	土師器	甕	(15%)	17.6	(6.2)	-	7.5YR 5/4 にぶい褐色	5YR 6/4 にぶい橙色	
148	第46図	PL.20	SB21	土師器	甕	-	-	(4.3)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	7.5YR 5/6 明褐色	
149	第46図	PL.20	SB21	土師器	壺	(20%)	12.6	(6.3)	-	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	
150	第46図	PL.20	SB21	土師器	甕	(20%)	17.7	(5.6)	-	5YR 4/3 にぶい赤褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	
151	第46図	PL.20	SB21	土師器	甕	-	-	(6.3)	-	5YR 6/8 橙色	2.5YR 6/6 橙色	
152	第46図	PL.20	SB21	土師器	甕	(20%)	19.4	(3.8)	-	7.5YR 7/8 黄褐色	2.5YR 6/8 橙色	S字甕
153	第46図	PL.20	SB21	土師器	甕	-	-	(3.2)	-	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	S字甕
154	第46図	PL.20	SB21	土師器	甕	-	-	(3.2)	-	10YR 6/3 にぶい黄褐色	10YR 6/3 にぶい黄褐色	S字甕
155	第46図	PL.20	SB21	土師器	甕	-	-	(2.9)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	S字甕
156	第46図	PL.20	SB21	土師器	台坏甕	(30%)	-	(4.7)	-	2.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	
157	第46図	PL.21	SB21	土師器	台坏甕	(70%)	-	(4.2)	-	5YR 7/6 橙色	10R 5/6 赤色	
158	第46図	PL.21	SB21	土師器	台坏甕	(50%)	-	(3.0)	-	2.5YR 6/8 橙色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
159	第46図	PL.21	SB21	土師器	台坏甕	(80%)	-	(3.0)	-	2.5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
160	第46図	PL.21	SB21	土師器	台坏甕	(50%)	-	(2.5)	-	5YR 6/6 橙色	2.5YR 6/6 橙色	
161	第46図	PL.20	SB21	土師器	台坏甕	(60%)	-	(2.7)	-	2.5YR 6/8 橙色	2.5YR 7/8 橙色	
162	第46図	PL.21	SB21	土師器	高坏	(80%)	-	(3.3)	-	5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
163	第46図	PL.21	SB21	土師器	台坏甕	(60%)	-	(2.0)	-	2.5YR 6/8 橙色	2.5YR 6/6 橙色	
164	第46図	PL.20	SB21	土師器	台坏甕	(20%)	-	(2.5)	-	2.5R 6/8 橙色	10R 6/8 赤褐色	
165	第46図	PL.21	SB21	土師器	台坏甕	(40%)	-	(3.3)	-	10R 5/8 赤色	10R 4/6 赤色	
166	第46図	PL.21	SB21	土師器	台坏甕	(70%)	-	(3.1)	-	10R 5/8 赤色	2.5YR 6/6 橙色	
167	第46図	PL.20	SB21	土師器	台坏甕	(30%)	-	(3.2)	-	10R 5/8 赤色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
168	第46図	PL.22	SB21	土師器	台坏甕	(30%)	-	(2.3)	-	2.5YR 6/8 橙色	2.5YR 6/8 橙色	
169	第46図	PL.20	SB21	土師器	不明	-	-	(5.3)	-	10YR 6/4 にぶい黄褐色	10YR 6/3 にぶい黄褐色	
170	第46図	PL.20	SB21	土師器	高坏	-	-	(4.8)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 5/6 明赤褐色	
171	第46図	PL.22	SB21	土師器	高坏	-	-	(4.4)	-	5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	
172	第46図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(20%)	25.6	(3.7)	-	2.5YR 6/8 橙色	2.5YR 6/8 橙色	
173	第46図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(25%)	20.0	(4.2)	-	7.5YR 8/6 浅黄褐色	7.5YR 8/6 浅黄褐色	
174	第46図	PL.21	SB21	土師器	小型器台	(40%)	10.4	(5.0)	-	7.5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
175	第46図	PL.21	SB21	土師器	小型器台	(70%)	-	(6.0)	-	2.5YR 6/8 橙色	2.5YR 5/6 明赤褐色	脚部に穿孔あり
176	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(20%)	20.2	(4.0)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 5/8 明赤褐色	
177	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(10%)	21.0	(7.0)	-	5YR 5/6 明赤褐色	5YR 5/6 明赤褐色	
178	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(35%)	18.0	(5.5)	-	2.5YR 4/6 赤褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	
179	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(75%)	-	(4.0)	-	2.5YR 6/8 橙色	5YR 6/6 橙色	
180	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(75%)	-	(3.0)	-	5YR 6/8 橙色	5YR 6/8 橙色	
181	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(60%)	-	(2.5)	-	2.5YR 6/8 橙色	5YR 6/6 橙色	
182	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(20%)	-	(3.1)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
183	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(70%)	-	(2.8)	-	7.5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
184	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(30%)	-	(3.0)	-	2.5YR 7/6 橙色	5YR 7/6 橙色	
185	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(45%)	-	(1.3)	-	5YR 7/6 橙色	5YR 7/8 褐色	
186	第47図	PL.21	SB21	土師器	高坏	(95%)	-	(3.0)	-	2.5YR 6/8 橙色	2.5YR 6/8 橙色	
187	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(75%)	-	(2.0)	-	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	
188	第47図	PL.22	SB21	土師器	器台	(30%)	-	(1.2)	-	5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 6/6 橙色	
189	第47図	PL.21	SB21	土師器	高坏	(90%)	-	(7.8)	14.0	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	
190	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(20%)	-	(6.3)	11.6	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	
191	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(45%)	-	(6.0)	-	2.5YR 6/8 褐色	2.5YR 6/8 褐色	
192	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(60%)	-	(5.3)	9.6	10R 6/8 赤褐色	2.5YR 6/8 褐色	脚部に穿孔3箇所あり
193	第47図	PL.23	SB21	土師器	高坏	(25%)	-	(2.7)	-	5YR 7/6 褐色	2.5YR 6/8 褐色	
194	第47図	PL.23	SB21	土師器	高坏	(40%)	-	(2.8)	-	10R 5/6 赤色	10R 4/8 赤色	
195	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(60%)	-	(7.2)	-	5YR 6/6 褐色	5YR 5/6 明赤褐色	
196	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(50%)	-	(4.5)	-	2.5YR 4/8 赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	脚部に穿孔あり
197	第47図	PL.22	SB21	土師器	高坏	(50%)	-	(5.8)	-	7.5YR 7/6 褐色	10YR 8/4 浅黄褐色	
198	第47図	PL.23	SB21	土師器	高坏	(30%)	-	(4.4)	-	10YR 4/2 灰黄褐色	10YR 4/3 にぶい黄褐色	

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考
199	第47図	PL.23	SB21	土師器	高坏	(25%)	-	(3.0)	12.2	10YR 6/3 にぶい黄褐色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	
200	第47図	PL.23	SB21	土師器	台坏甕	(20%)	-	(5.1)	8.6	5YR 4/6 赤褐色	5YR 5/6 明赤褐色	
201	第47図	PL.23	SB21	土師器	高坏	(25%)	-	(5.1)	14.2	5YR 6/8 橙色	5YR 6/6 橙色	
202	第47図	PL.23	SB21	須恵器	壺	(20%)	9.7	(2.5)	-	2.5Y 6/1 黄灰色	2.5Y 5/1 黄灰色	
203	第47図	PL.23	SB21	須恵器	坏蓋	(30%)	-	(1.6)	-	2.5Y 6/2 灰黄色	2.5Y 7/1 灰白色	つまみ径 1.6cm
204	第47図	PL.23	SB21	須恵器	坏蓋	(25%)	-	(1.7)	-	2.5Y 5/1 黄灰色	2.5Y 6/1 黄灰色	
205	第47図	PL.23	SB21	須恵器	坏蓋	(20%)	10.7	(3.5)	-	10YR 5/1 褐灰色	10Y 5/1 灰色	
206	第47図	PL.23	SB21	須恵器	坏蓋	(20%)	11.6	(2.3)	-	5Y 6/1 灰色	5Y 5/1 灰色	
207	第47図	PL.23	SB21	須恵器	坏蓋	-	-	(4.3)	-	10Y 5/1 灰色	7.5Y 5/1 灰色	
208	第47図	PL.23	SB21	須恵器	坏蓋	-	-	(2.7)	-	N 5/ 灰色	N 4/ 灰色	
209	第47図	PL.23	SB21	須恵器	坏	(20%)	12.0	(2.9)	-	5Y 5/1 灰色	10Y 5/1 灰色	
210	第47図	PL.23	SB21	須恵器	坏	-	-	(2.7)	-	5P 3/1 暗紫灰色	5RP 2/1 紫黒色	
211	第47図	PL.23	SB21	須恵器	坏	-	-	(2.3)	-	5Y 6/1 灰色	5Y 6/1 灰色	
212	第47図	PL.23	SB21	須恵器	坏	(30%)	9.7	(3.0)	-	2.5Y 6/1 黄灰色	5Y 5/1 灰色	
213	第47図	PL.23	SB21	須恵器	坏	(25%)	8.4	(1.9)	-	5Y 5/1 灰色	2.5Y 5/1 黄灰色	
214	第47図	PL.23	SB21	須恵器	坏	(30%)	-	(2.7)	8.2	2.5Y 7/1 灰白色	2.5Y 6/1 黄灰色	みこみ部に釉
215	第47図	PL.23	SB21	須恵器	坏	(60%)	-	(2.8)	5.4	5Y 6/1 灰色	5Y 5/1 灰色	
221	第48図	PL.24	SB23	土師器	高坏	-	-	(6.2)	-	5YR 7/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
222	第50図	PL.24	SB22	土師器	甕	(20%)	22.0	(3.5)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
223	第50図	PL.24	SB22	土師器	甕	(10%)	20.0	(2.5)	-	5YR 4/6 赤褐色	5YR 4/3 にぶい赤褐色	
224	第50図	PL.24	SB22	土師器	長胴甕	(20%)	-	(7.0)	15.0	5YR 4/3 にぶい赤褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	
225	第50図	PL.24	SB22	土師器	甕	(80%)	-	(2.0)	7.0	5YR 3/1 黒褐色	5YR 5/6 明赤褐色	
226	第50図	PL.24	SB22	土師器	坏	-	-	(2.5)	-	10R 6/6 赤橙色	10R 5/6 赤色	
227	第50図	PL.24	SB22	須恵器	坏蓋	(30%)	-	(2.7)	-	10YR 7/2 にぶい黄褐色	10YR 7/1 灰白色	つまみ径 3.0cm、つまみ高 0.9cm
228	第50図	PL.24	SB22	須恵器	坏蓋	(25%)	-	(2.1)	-	5Y 6/1 灰色	10Y 7/1 灰白色	つまみ径 3.0cm、つまみ高 1.1cm
229	第50図	PL.24	SB22	須恵器	坏蓋	-	-	(1.5)	-	10YR 6/1 褐灰色	2.5Y 6/1 黄灰色	
230	第50図	PL.24	SB22	須恵器	坏蓋	-	-	(1.5)	-	2.5Y 6/1 黄灰色	10YR 5/1 褐灰色	
231	第50図	PL.24	SB22	須恵器	坏	60%	13.4	3.8	10.0	7.5Y 5/1 灰色	7.5Y 5/1 灰色	
232	第50図	PL.24	SB22	須恵器	坏	(30%)	-	(1.6)	9.4	5Y 7/1 灰白色	5Y 7/1 灰白色	
233	第51図	PL.25	SB24	土師器	長胴甕	(25%)	20.4	(18.1)	-	7.5YR 5/4 にぶい褐色	2.5YR 5/8 明赤褐色	
234	第51図	PL.25	SB24	土師器	長胴甕	(30%)	-	(11.4)	-	2.5YR 6/6 橙色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
235	第51図	PL.25	SB24	土師器	長胴甕	(50%)	-	(8.2)	5.8	7.5YR 5/4 にぶい褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	底部に木葉痕
236	第51図	PL.25	SB24	土師器	長胴甕	-	-	(14.1)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	
237	第51図	PL.25	SB24	土師器	小型鉢	-	-	(6.6)	-	5YR 4/4 にぶい赤褐色	5YR 4/6 赤褐色	
238	第51図	PL.25	SB24	土師器	鉢	-	-	(5.0)	-	2.5YR 3/6 暗赤褐色	2.5YR 3/4 暗赤褐色	駿東
239	第51図	PL.25	SB24	須恵器	坏蓋	(20%)	15.4	(2.6)	-	10YR 6/1 褐灰色	10YR 6/1 褐灰色	
240	第51図	PL.25	SB24	須恵器	坏蓋	25%	13.2	2.1	-	10YR 7/3 にぶい黄褐色	7.5YR 7/3 にぶい橙色	つまみ径 2.2cm
241	第51図	PL.25	SB24	須恵器	坏蓋	(30%)	-	(2.1)	-	5Y 6/1 灰色	5Y 5/1 灰色	
242	第51図	PL.25	SB24	須恵器	坏蓋	-	-	(4.4)	-	2.5Y 6/2 灰黄色	2.5Y 6/2 灰黄色	
243	第51図	PL.25	SB24	須恵器	坏	-	-	(4.0)	-	5Y 5/1 灰色	5Y 5/1 灰色	
244	第51図	PL.25	SB24	須恵器	坏	(20%)	-	(1.5)	11.1	5Y 7/1 灰白色	5Y 7/1 灰白色	
245	第51図	PL.25	SB24	須恵器	坏	(60%)	-	(1.4)	10.4	5Y 5/1 灰色	5Y 5/1 灰色	
246	第51図	PL.25	SB24	須恵器	坏	(40%)	-	(1.6)	10.0	10YR 5/1 褐灰色	10YR 5/1 褐灰色	
247	第52図	PL.26	SB26	土師器	長胴甕	(20%)	-	(10.7)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	5YR 5/6 明赤褐色	
248	第52図	PL.26	SB26	土師器	甕	(10%)	-	(3.4)	7.0	7.5YR 7/3 にぶい橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	
249	第52図	PL.26	SB26	須恵器	坏蓋	-	-	(1.0)	-	N 5/ 灰色	N 5/ 灰色	
250	第52図	PL.26	SB26	須恵器	坏	(10%)	10.6	(3.5)	-	10YR 5/1 褐灰色	10YR 4/1 褐灰色	
251	第52図	PL.26	SB26	弥生土器	壺	-	-	(2.4)	-	10YR 6/1 褐灰色	7.5YR 7/6 橙色	口縁部縄文及び棒状浮文
252	第52図	PL.26	SB26	弥生土器	壺	-	-	(4.3)	-	10YR 5/4 にぶい黄褐色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	口縁部縄文及び棒状浮文
253	第52図	PL.26	SB26	弥生土器	壺	(30%)	-	(2.1)	10.0	10YR 7/4 にぶい黄褐色	5YR 6/8 橙色	
254	第55図	PL.26	SB25	土師器	埴	(10%)	31.6	(8.5)	-	2.5YR 4/6 赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
255	第55図	PL.26	SB25	土師器	甕	(30%)	-	(12.5)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	5YR 6/6 橙色	
256	第55図	PL.26	SB25	土師器	甕	(20%)	23.2	(3.3)	-	2.5YR 5/8 明赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
257	第55図	PL.26	SB25	土師器	甕	(10%)	23.4	(3.5)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	
258	第55図	PL.26	SB25	土師器	甕	(10%)	22.0	(3.1)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	5YR 6/6 橙色	
259	第55図	PL.26	SB25	土師器	甕	(15%)	22.6	(3.4)	-	5YR 5/4 にぶい赤褐色	5YR 6/6 橙色	水平口縁甕
260	第55図	PL.26	SB25	土師器	甕	-	-	(4.9)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
261	第55図	PL.26	SB25	土師器	甕	-	-	(3.7)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
262	第55図	PL.26	SB25	土師器	甕	-	-	(3.9)	-	5YR 7/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
263	第55図	PL.26	SB25	土師器	甕	-	-	(3.0)	-	5YR 5/4 にぶい赤褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	
264	第55図	PL.26	SB25	土師器	甕	(20%)	-	(2.1)	8.6	10YR 6/3 にぶい黄褐色	10YR 4/3 にぶい黄褐色	
265	第55図	PL.26	SB25	土師器	甕	(20%)	-	(2.9)	7.0	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	底部に木葉痕
266	第55図	PL.26	SB25	土師器	甕	(25%)	-	(2.3)	6.6	5YR 6/6 橙色	5YR 5/6 明赤褐色	底部に木葉痕
267	第55図	PL.26	SB25	土師器	壺	(70%)	-	(1.6)	3.5	10YR 6/4 にぶい黄褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	
268	第55図	PL.27	SB25	土師器	坏	-	-	(3.5)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
269	第55図	PL.27	SB25	土師器	壺	-	-	(3.9)	-	5YR 5/4 にぶい赤褐色	5YR 5/6 明赤褐色	
270	第55図	PL.27	SB25	須恵器	坏蓋	(10%)	12.0	(2.3)	-	7.5Y 4/1 灰色	7.5Y 4/1 灰色	
271	第55図	PL.27	SB25	須恵器	坏蓋	(30%)	-	(1.6)	-	2.5Y 6/1 黄灰色	2.5Y 6/1 黄灰色	

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考
272	第55図	PL.27	SB25	土師器	小型甕	(35%)	15.0	(6.0)	-	2.5YR 5/8 明赤褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	
273	第55図	PL.27	SB25	土師器	台付甕	(20%)	-	(4.8)	5.3	5YR 5/6 明赤褐色	5YR 5/6 明赤褐色	
274	第55図	PL.27	SB25	弥生土器	壺	-	-	(3.7)	-	5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	口縁部に棒状浮文
275	第55図	PL.27	SB25	土師器	壺	-	-	(2.5)	-	5YR 6/1 褐灰色	5YR 6/8 橙色	
276	第57図	PL.27	SB27	土師器	甕	-	-	(3.0)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	S字甕
277	第57図	PL.27	SB27	土師器	台付甕	(70%)	-	(2.3)	-	5Y 6/6 橙色	5Y 7/8 橙色	
278	第57図	PL.27	SB27	弥生土器	台付甕	(10%)	-	(4.5)	8.5	7.5YR 6/4 にぶい橙色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	
279	第57図	PL.27	SB27	土師器	壺	-	-	(2.5)	-	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	
280	第57図	PL.27	SB27	土師器	壺	(20%)	-	(1.8)	9.0	5Y 6/1 灰色	7.5YR 7/6 橙色	底部に木葉痕
281	第57図	PL.27	SB27	土師器	小型壺	(20%)	-	(4.0)	4.0	2.5YR 4/4 にぶい赤褐色	5YR 6/6 橙色	
282	第57図	PL.27	SB27	土師器	小型壺	(85%)	10.1	10.1	3.5	2.5YR 5/8 明赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
283	第57図	PL.27	SB27	土師器	壺	(15%)	15.0	(5.5)	-	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	
284	第57図	PL.27	SB27	土師器	甕	(20%)	18.0	(5.3)	-	5YR 4/4 にぶい赤褐色	5YR 4/3 にぶい赤褐色	
285	第57図	PL.27	SB27	土師器	甕	(20%)	16.0	(4.0)	-	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/3 にぶい橙色	
286	第57図	PL.27	SB27	須恵器	坏蓋	(65%)	-	(1.9)	3.6	7.5Y 6/1 灰色	7.5Y 5/1 灰色	
287	第59図	PL.28	SK1	須恵器	高坏	(90%)	10.2	(5.8)	-	7.5Y 6/1 灰色	7.5Y 5/1 灰色	脚部に三方透かし
288	第61図	PL.28	SX1	緑釉陶器	碗	(15%)	-	(1.6)	6.4	10Y 4/2 オリーブ灰色	7.5Y4/3 暗オリーブ色	高台高 0.8cm
289	第61図	PL.28	SX1	土師器	坏	90%	9.8	2.7	4.6	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	底部に回転糸きり痕
290	第63図	PL.28	5T	土師器	壺	(30%)	-	(1.5)	14.6	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/8 黄褐色	
291	第63図	PL.28	5T	土師器	甕	-	-	(2.0)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 6/8 橙色	S字甕
292	第63図	PL.28	5T	土師器	甕	-	-	(4.8)	-	5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
293	第63図	PL.28	5T	土師器	甕	-	-	(2.0)	-	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	
294	第63図	PL.28	5T	土師器	長胴甕	(20%)	-	(3.9)	6.0	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	
295	第63図	PL.28	5T	土師器	高坏	(60%)	-	(6.6)	-	5YR 6/8 橙色	5YR 6/6 橙色	
296	第63図	PL.28	5T	土師器	坏	-	-	(3.5)	-	2.5YR 4/8 赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
297	第63図	PL.28	5T	須恵器	瓶	(15%)	-	(4.2)	-	5Y 6/1 灰色	2.5Y 5/1 黄灰色	
298	第63図	PL.28	5T	須恵器	罎	(61%)	11.4	(3.0)	-	5Y 4/1 灰色	5Y 4/1 灰色	
299	第63図	PL.28	5T	須恵器	坏蓋	-	-	(1.2)	-	2.5Y 6/1 黄灰色	5Y 7/1 灰白色	
300	第63図	PL.28	5T	灰釉陶器	小碗	(40%)	-	(1.6)	6.2	2.5Y 8/2 灰白色	2.5Y 8/2 灰白色	
301	第63図	PL.29	2T	弥生土器	壺	-	-	(1.5)	-	10R 5/6 赤色	10R 4/6 赤色	
302	第63図	PL.29	2T	土師器	壺	(25%)	-	(3.7)	9.6	2.5Y 6/1 黄灰色	7.5YR 7/6 橙色	底部に木葉痕
303	第63図	PL.29	2T	土師器	高坏	(60%)	-	(3.9)	-	5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	
304	第63図	PL.29	2T	土師器	高坏	(85%)	-	(4.7)	-	10YR 6/4 にぶい黄褐色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	
305	第63図	PL.29	2T	土師器	高坏	(40%)	-	(5.3)	-	2.5YR 6/8 橙色	2.5YR 5/8 明赤褐色	
306	第63図	PL.29	2T	土師器	高坏	(80%)	-	(6.1)	8.0	2.5YR 6/8 橙色	2.5YR 6/8 橙色	
307	第63図	PL.29	2T	土師器	坏	35%	13.4	5.6	5.7	7.5YR 7/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
308	第63図	PL.29	2T	須恵器	ハク	(25%)	-	(4.2)	-	2.5Y 5/1 黄灰色	7.5Y 5/1 灰色	
309	第63図	PL.29	2T	須恵器	坏蓋	-	-	(1.0)	-	2.5Y 5/1 黄灰色	2.5Y 5/2 暗灰黄色	
310	第63図	PL.29	2T	須恵器	坏	(40%)	-	(3.4)	8.0	2.5Y 5/2 暗灰黄色	5Y 5/1 灰色	
311	第63図	PL.29	2T	灰釉陶器	小碗	45%	10.2	3.1	6.0	2.5GY7/1 明オリーブ灰色	5GY6/1 オリーブ灰色	底部以外に全体的に施釉
312	第63図	PL.29	1T	土師器	壺	(25%)	19.1	(5.0)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
313	第63図	PL.29	1T	弥生土器	壺	-	-	(3.3)	-	10YR 5/3 にぶい黄褐色	7.5YR 6/6 橙色	口唇部に棒状浮文
314	第63図	PL.29	1T	弥生土器	壺	-	-	(2.4)	-	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	口縁部縄文及び円形浮文
315	第63図	PL.29	1T	弥生土器	壺	-	-	(3.3)	-	5YR 6/8 褐色	7.5YR 7/6 褐色	
316	第63図	PL.30	1T	土師器	壺	-	-	(3.4)	-	7.5YR 7/6 褐色	7.5YR 7/6 褐色	
317	第63図	PL.30	1T	弥生土器	壺	-	-	(5.3)	-	7.5YR 7/6 褐色	5YR 7/6 褐色	
318	第63図	PL.30	1T	弥生土器	壺	-	-	(4.0)	-	7.5YR 7/6 褐色	7.5YR 7/6 褐色	頸部に羽状縄文及び円形浮文
319	第63図	PL.30	1T	弥生土器	壺	-	-	(5.2)	-	10YR 7/6 明黄褐色	10YR 7/6 明黄褐色	
320	第63図	PL.30	1T	弥生土器	壺	(25%)	-	(2.0)	11.0	10YR 8/3 浅黄褐色	7.5YR 6/6 褐色	底部に木葉痕
321	第63図	PL.30	1T	土師器	壺	(70%)	-	(2.1)	6.4	10YR 7/3 にぶい黄褐色	10YR 7/6 明黄褐色	
322	第63図	PL.30	1T	土師器	甕	(25%)	-	(2.4)	8.0	10YR 7/2 にぶい黄褐色	7.5YR 7/6 褐色	
323	第63図	PL.30	1T	弥生土器	甕	-	-	(3.6)	-	2.5YR 6/8 褐色	5YR 6/6 褐色	
324	第63図	PL.30	1T	土師器	甕	-	-	(4.6)	-	5YR 4/6 赤褐色	5YR 5/6 明赤褐色	
325	第63図	PL.30	1T	土師器	甕	-	-	(2.6)	-	5YR 6/6 褐色	5YR 4/3 にぶい赤褐色	
326	第63図	PL.30	1T	土師器	台付甕	(20%)	-	(2.9)	-	7.5YR 4/3 褐色	7.5YR 6/6 褐色	
327	第63図	PL.30	1T	土師器	台付甕	(25%)	-	(1.8)	-	5YR 6/6 褐色	5YR 6/8 褐色	
328	第63図	PL.30	1T	土師器	小型壺	(30%)	-	(3.5)	3.4	5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
329	第64図	PL.30	1T	土師器	長胴甕	(20%)	25.8	(8.0)	-	5YR 5/6 明赤褐色	5YR 5/6 明赤褐色	
330	第64図	PL.30	1T	土師器	甕	(20%)	23.8	(3.7)	-	2.5YR 4/6 赤褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	
331	第64図	PL.30	1T	土師器	甕	-	-	(3.4)	-	7.5YR 5/4 にぶい褐色	7.5YR 6/4 にぶい褐色	
332	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	-	-	(4.6)	-	5YR 6/6 褐色	5YR 6/6 褐色	
333	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	-	-	(4.6)	-	2.5YR 4/4 にぶい赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
334	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	-	-	(4.1)	-	2.5YR 4/6 赤褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	
335	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	-	-	(3.4)	-	2.5YR 4/4 にぶい赤褐色	2.5YR 4/3 にぶい赤褐色	
336	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	-	-	(2.4)	-	2.5YR 5/4 にぶい赤褐色	7.5YR 7/6 褐色	
337	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	-	-	(3.9)	-	5YR 5/6 明赤褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	
338	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	-	-	(3.5)	-	5YR 6/6 褐色	7.5YR 6/6 褐色	
339	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	-	-	(3.6)	-	5YR 5/4 にぶい赤褐色	5YR 5/3 にぶい赤褐色	

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考
340	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	-	-	(4.6)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 5/6 明赤褐色	
341	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	(25%)	-	(5.5)	-	2.5YR 4/6 赤褐色	2.5YR 3/4 明赤褐色	
342	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	(20%)	-	(3.8)	10.0	10YR 6/4 にぶい黄褐色	7.5YR 6/6 橙色	
343	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	(25%)	-	(3.3)	8.2	5YR 6/6 橙色	2.5YR 6/8 橙色	底部に木葉痕
344	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	(25%)	-	(2.9)	8.6	5YR 4/2 灰褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	底部に木葉痕
345	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	(20%)	-	(1.9)	8.0	7.5YR 7/2 明褐灰色	7.5YR 7/6 橙色	
346	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	(20%)	-	(1.7)	9.0	2.5YR 4/4 にぶい赤褐色	2.5YR 4/8 赤褐色	底部に木葉痕
347	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	(25%)	-	(2.6)	6.0	5YR 5/4 にぶい赤褐色	5YR 4/3 にぶい赤褐色	
348	第64図	PL.31	1T	土師器	甕	(25%)	-	(3.0)	6.0	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	底部に木葉痕
349	第64図	PL.32	1T	土師器	高坏	(25%)	13.1	(4.0)	-	2.5YR 4/6 赤褐色	2.5YR 6/6 橙色	
350	第64図	PL.32	1T	土師器	高坏	(20%)	-	(1.6)	-	10YR 7/3 にぶい黄褐色	10YR 6/3 にぶい黄褐色	
351	第64図	PL.32	1T	土師器	高坏	(60%)	-	(5.3)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
352	第64図	PL.32	1T	土師器	高坏	(25%)	-	(5.9)	-	2.5YR 6/8 橙色	5YR 6/6 橙色	
353	第64図	PL.32	1T	土師器	高坏	(20%)	-	(5.3)	-	7.5YR 7/8 黄褐色	5YR 7/8 橙色	
354	第64図	PL.32	1T	土師器	坏	(20%)	12.0	(2.9)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	
355	第64図	PL.32	1T	土師器	小型鉢	(20%)	9.8	(4.0)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
356	第64図	PL.32	1T	土師器	小型鉢	(30%)	8.6	(4.9)	-	5YR 4/3 にぶい赤褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	
357	第64図	PL.32	1T	土師器	坏	(30%)	-	(2.5)	6.2	2.5YR 4/6 赤褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	体部に墨書
358	第64図	PL.32	1T	土師器	坏	(20%)	-	(1.0)	7.6	2.5YR 6/8 橙色	2.5YR 5/8 明赤褐色	
359	第64図	PL.32	1T	土師器	坏	(55%)	-	(1.5)	5.4	2.5YR 4/8 赤褐色	10R 4/4 赤褐色	
360	第64図	PL.33	1T	灰釉陶器	坏	(20%)	-	(1.6)	6.2	10YR 5/1 褐灰色	10YR 6/1 褐灰色	
361	第64図	PL.33	1T	灰釉陶器	碗	(40%)	-	(1.7)	5.4	2.5Y 5/2 暗灰黄色	2.5Y 5/2 暗灰黄色	内面体部に施釉
362	第64図	PL.32	1T	須恵器	坏	(20%)	-	(1.8)	10.6	7.5YR 5/1 褐灰色	7.5YR 5/1 褐灰色	
363	第64図	PL.33	1T	灰釉陶器	碗	(30%)	-	(1.5)	5.8	2.5Y 6/2 灰黄色	2.5Y 6/2 灰黄色	内面体部に施釉
364	第64図	PL.32	1T	須恵器	坏	(20%)	-	(2.0)	9.8	10YR 7/3 にぶい黄褐色	5Y 7/1 灰白色	
365	第64図	PL.32	1T	須恵器	坏	15%	12.4	2.9	8.6	5Y 6/1 灰色	2.5Y 6/1 黄灰色	
366	第64図	PL.32	1T	須恵器	坏	-	-	(2.1)	-	N 4/1 灰色	N 4/1 灰色	
367	第64図	PL.32	1T	須恵器	坏	(25%)	-	(1.1)	10.8	5Y 5/1 灰色	2.5Y 7/1 灰白色	
368	第64図	PL.32	1T	須恵器	坏	10%	15.0	4.8	10.2	7.5Y 6/1 灰色	7.5Y 6/1 灰色	
369	第64図	PL.33	1T	土師器	甕	(20%)	-	(3.6)	-	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	
373	第68図	PL.33	SB16	土師器	甕	(35%)	-	(8.5)	8.0	10R 4/4 赤褐色	10R 3/6 暗赤色	底部に木葉痕
374	第68図	PL.33	SB16	土師器	甕	-	-	(4.0)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	
375	第68図	PL.33	SB16	土師器	坏	-	-	(2.8)	-	7.5YR 5/6 明褐色	7.5YR 5/6 明褐色	
376	第68図	PL.33	SB16	須恵器	甕	-	-	(18.2)	-	N 6/ 灰色	N 5/ 灰色	
377	第68図	PL.33	SB16	土師器	坏	(10%)	13.0	(4.5)	-	5YR 7/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
378	第68図	PL.33	SB16	土師器	坏	(15%)	15.0	(3.3)	-	5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	
379	第68図	PL.33	SB16	土師器	坏	(10%)	14.0	(3.0)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 6/8 橙色	
380	第68図	PL.33	SB16	須恵器	坏蓋	(25%)	-	(1.3)	-	7.5Y 6/1 灰色	7.5Y 5/1 灰色	
381	第70図	PL.34	SB17	土師器	長胴甕	(25%)	22.8	(11.6)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
382	第70図	PL.34	SB17	土師器	長胴甕	(30%)	-	(13.5)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	5YR 4/8 赤褐色	
383	第70図	PL.34	SB17	須恵器	坏蓋	-	-	(2.0)	-	5Y 5/1 灰色	5Y 6/1 灰色	
384	第70図	PL.34	SB17	土師器	皿	40%	14.7	3.3	7.9	10R 4/6 赤色	10R 4/6 赤色	
385	第70図	PL.34	SB17	土師器	長胴甕	(25%)	-	(21.0)	-	2.5YR 4/6 赤褐色	2.5YR 4/8 赤褐色	
386	第70図	PL.34	SB17	土師器	甕	(70%)	-	(5.0)	7.0	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	
387	第70図	PL.34	SB17	土師器	長胴甕	(70%)	-	(4.6)	6.8	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 4/4 にぶい赤褐色	
388	第70図	PL.34	SB17	土師器	高坏	(75%)	-	(6.0)	5.8	5YR 7/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
389	第70図	PL.34	SB17	土師器	壺	(55%)	-	(6.7)	7.3	5YR 6/6 橙色	10YR 5/1 褐灰色	
390	第70図	PL.34	SB17	土師器	坏	25%	13.2	4.5	5.8	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
391	第70図	PL.34	SB17	土師器	坏	70%	11.5	3.3	7.6	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 4/4 にぶい赤褐色	
392	第70図	PL.34	SB17	土師器	坏	40%	10.8	3.5	7.0	2.5YR 5/8 明赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
393	第70図	PL.34	SB17	土師器	坏	40%	11.0	3.6	5.2	2.5YR 5/6 明赤褐色	2.5YR 4/6 赤褐色	
394	第72図	PL.35	SB18	土師器	甕	-	-	(2.9)	-	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	S字甕
395	第72図	PL.35	SB18	土師器	甕	-	-	(3.7)	-	2.5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	
396	第72図	PL.35	SB18	土師器	壺	-	-	(1.5)	-	7.5YR 6/6 橙色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
397	第72図	PL.35	SB18	土師器	壺	(20%)	-	(5.0)	9.8	5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	
398	第72図	PL.35	SB18	土師器	壺	-	-	(3.4)	-	5YR 8/3 淡橙色	7.5YR 8/4 浅黄褐色	
399	第72図	PL.35	SB18	土師器	高坏	(90%)	-	(5.5)	9.4	2.5YR 6/8 橙色	5YR 6/6 橙色	
400	第72図	PL.35	SB18	土師器	高坏	-	-	(4.0)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 6/8 橙色	脚部に穿孔あり
401	第72図	PL.35	SB18	土師器	器台	(80%)	-	(1.8)	-	2.5YR 6/8 橙色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
402	第72図	PL.35	SB18	土師器	高坏	(60%)	-	(1.9)	-	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	
403	第72図	PL.35	SB18	土師器	坏	95%	13.0	4.6	2.8	2.5YR 6/8 橙色	2.5YR 6/8 褐色	
404	第73図	PL.35	SB19	土師器	甕	-	-	(2.6)	-	7.5YR 6/4 にぶい橙色	2.5YR 6/6 橙色	
405	第73図	PL.35	SB19	土師器	甕	-	-	(3.0)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 5/6 明赤褐色	
406	第73図	PL.35	SB19	土師器	坏	20%	11.2	3.4	6.0	10R 4/6 赤色	10R 3/2 暗赤褐色	
407	第73図	PL.35	SB19	土師器	壺	(50%)	-	(2.0)	7.8	5YR 7/6 橙色	5YR 6/8 褐色	
408	第73図	PL.35	SB19	土師器	甕	(70%)	-	(3.5)	7.8	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 褐色	
409	第73図	PL.35	SB19	須恵器	坏	(30%)	-	(1.8)	10.0	5Y 7/1 灰白色	7.5Y 6/1 灰色	
410	第73図	PL.35	SB19	須恵器	坏	(20%)	-	(1.3)	8.0	5Y 6/2 灰オリーブ色	5Y 6/1 灰色	

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考
412	第74図	PL.36	SB20	土師器	甕	-	-	(3.4)	-	2.5YR 4/8 赤褐色	2.5YR 5/8 明赤褐色	
413	第74図	PL.36	SB20	土師器	坏	(25%)	-	(1.0)	6.0	2.5YR 4/6 赤褐色	2.5YR 4/4 にぶい赤褐色	
414	第74図	PL.36	SB20	土師器	壺	(25%)	-	(1.5)	7.4	7.5YR 6/6 橙色	2.5YR 6/8 橙色	
415	第74図	PL.36	SB20	土師器	壺	(20%)	-	(2.9)	8.0	7.5YR 5/3 にぶい褐色	7.5YR 6/6 橙色	
416	第75図	PL.36	SK2・3	土師器	甕	-	-	(4.6)	-	5YR 4/4 にぶい赤褐色	7.5YR 3/3 暗褐色	
417	第77図	PL.36	4T	土師器	甕	(15%)	27.0	(11.4)	-	2.5YR 5/4 にぶい赤褐色	2.5YR 5/6 明赤褐色	
418	第77図	PL.36	4T	土師器	甕	-	-	(1.8)	-	2.5YR 5/8 明赤褐色	2.5YR 6/8 橙色	
419	第77図	PL.36	4T	土師器	小型壺	-	-	(3.0)	-	5YR 6/6 橙色	5YR 6/8 橙色	
420	第77図	PL.36	4T	土師器	小型壺	-	-	(3.9)	-	2.5YR 6/8 橙色	5YR 6/8 橙色	
421	第77図	PL.36	4T	土師器	坏	(25%)	12.2	(3.7)	-	2.5YR 5/6 明赤褐色	5YR 5/6 明赤褐色	
422	第77図	PL.36	4T	土師器	小型鉢	-	-	(3.4)	-	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 7/6 橙色	
423	第77図	PL.36	4T	灰釉陶器	甕	-	-	(1.4)	-	5Y 4/2 灰オリーブ色	5Y 5/1 灰色	
424	第77図	PL.36	4T	須恵器	高坏	(30%)	-	(3.0)	8.0	7.5Y 5/1 灰色	7.5Y 5/1 灰色	

B地区出土遺物観察表 (石器)

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	材質	重量	長さ	幅	厚さ
40	第27図	PL.14	7T	石器	石鏃	黒曜石	0.35	1.8	1.6	0.2
81	第41図	PL.16	SB13	石製品	砥石		163.93	(7.5)	4.7	2.6
216	第47図	PL.24	SB21	石器	打製石斧		69.41	10.0	4.7	1.3
217	第47図	PL.24	SB21	石器	打製石斧		118.06	7.5	5.8	1.6
218	第47図	PL.24	SB21	石製品	不明		250.22	(5.6)	5.9	3.8
219	第47図	PL.24	SB21	石製品	凹石		728.09	8.4	13.0	4.3
220	第47図	PL.24	SB21	石製品	凹石		1968.86	13.4	13.4	7.0
372	第64図	PL.33	1T	石器	石鏃	黒曜石	0.61	1.7	1.3	0.4
425	第77図	PL.36	4T	石製品	石錘		73.14	7.0	4.8	1.4

B地区出土遺物観察表 (土製品)

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	残存率	重量	a	b	c	d	e	内面色調	外面色調
370	第64図	PL.33	1T	土製品	土錘	40%	46.96	6.1	4.0	2.8	1.9	2.4	10YR 4/2 灰黄褐色	2.5YR 4/4 にぶい赤褐色
371	第64図	PL.33	1T	土製品	紡錘車	45%	19.90	2.9	5.1	3.0	0.8	4.8	10YR 4/2 灰黄褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色
426	第77図	PL.36	4T	土製品	円形土製品	-	199.44	(13.9)	-	-	-	-	5YR4/3 にぶい赤褐色	2.5YR2/1 赤黒色

B地区出土遺物観察表 (鉄製品)

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	重量	長さ	幅	厚さ
411	第73図	PL.35	SB19	鉄製品	鉄鏃	20.4	8.1	3.6	0.6

C地区出土遺物観察表 (土器)

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考
1	第81図	PL.36	遺構外	土師器	甕	(30%)	15.4	(6.3)	-	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	2.5YR5/8 明赤褐色	

L 地区出土遺物観察表 (土器)

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調			外面色調		備考
1	第84図	PL38	SB1	須恵器	甕	(15%)	-	(6.1)	-	7.5Y	4/1	灰色	10Y3/1	オリーブ黒色	
2	第84図	PL38	SB1	須恵器	ハソウ	(25%)	8.0	(2.8)	-	7.5Y	4/1	灰色	10Y	4/1 灰色	3と同一か
3	第84図	PL38	SB1	須恵器	ハソウ	-	-	(3.0)	-	5B	6/1	青灰色	10Y	4/1 灰色	穿孔あり 2と同一か
4	第84図	PL38	SB1	土師器	壺	(30%)	10.0	(6.0)	-	2.5YR	6/8	橙色	2.5YR	6/8 橙色	直口壺
5	第84図	PL38	SB1	土師器	壺	(30%)	8.4	(3.6)	-	7.5YR	6/6	橙色	7.YR	6/6 橙色	直口壺
6	第84図	PL39	SB1	土師器	壺	(80%)	-	(8.2)	3.8	7.5YR	7/6	橙色	2.5YR	6/8 橙色	
7	第84図	PL38	SB1	土師器	甕	75%	17.6	27.2	8.0	7.5YR	7/6	橙色	7.5YR	8/6 浅黄橙色	底部に木葉痕
8	第84図	PL38	SB1	土師器	甕	50%	19.8	26.1	8.6	10YR	6/6	明黄褐色	7.5YR	8/6 浅黄橙色	底部に木葉痕
9	第84図	PL39	SB1	土師器	甕	(30%)	-	(10.8)	-	5Y	6/6	橙色	7.5YR	6/6 橙色	胴部に穿孔あり
10	第84図	PL38	SB1	土師器	高坏	(30%)	17.6	(4.7)	-	7.5YR	6/6	橙色	7.5YR	6/4 にぶい橙色	
11	第84図	PL38	SB1	土師器	高坏	(25%)	14.6	(4.3)	-	5YR	6/6	橙色	7.5YR	6/4 にぶい橙色	
12	第84図	PL38	SB1	土師器	高坏	(15%)	17.6	(4.3)	-	5YR	6/6	橙色	5YR	6/6 橙色	
13	第84図	PL38	SB1	土師器	高坏	(50%)	-	(2.2)	-	5YR	6/6	橙色	7.5YR	6/6 橙色	
14	第84図	PL38	SB1	土師器	高坏	(90%)	-	(6.3)	-	2.5YR	5/6	明赤褐色	2.5YR	5/4 にぶい赤褐色	
15	第84図	PL38	SB1	土師器	高坏	(30%)	-	(5.4)	-	7.5YR	7/6	橙色	7.5YR	7/6 橙色	
16	第84図	PL38	SB1	土師器	高坏	(40%)	-	(3.5)	-	2.5YR	3/1	暗赤灰色	2.5YR	4/4 にぶい赤褐色	
17	第84図	PL39	SB1	土師器	高坏	(75%)	-	(6.1)	-	2.5YR	6/8	橙色	5YR	6/6 橙色	
18	第84図	PL38	SB1	土師器	高坏	(60%)	-	(5.0)	9.8	5YR	6/6	橙色	5YR	6/6 橙色	
19	第84図	PL38	SB1	土師器	高坏	(20%)	-	(6.6)	-	2.5YR	4/8	赤褐色	2.5YR	4/6 赤褐色	
20	第84図	PL38	SB1	土師器	高坏	(30%)	-	(3.9)	15.8	7.5YR	6/6	橙色	7.5YR	7/6 橙色	
21	第84図	PL38	SB1	土師器	壺	-	-	(3.0)	-	5YR	6/6	橙色	7.5YR	6/6 橙色	
22	第84図	PL39	SB1	土師器	壺	(25%)	-	(4.4)	10.0	7.5YR	7/4	にぶい橙色	7.5YR	7/6 橙色	
23	第84図	PL38	SB1	土師器	甕	-	-	(2.5)	-	2.5YR	5/6	明赤褐色	2.5YR	5/6 明赤褐色	S字甕
24	第84図	PL38	SB1	土師器	壺	-	-	(5.2)	-	7.5YR	7/6	橙色	7.5YR	6/4 にぶい橙色	
26	第87図	PL39	SB2	土師器	甕	-	-	(3.0)	-	5YR	4/6	赤褐色	2.5YR	3/1 暗赤褐色	S字甕
27	第87図	PL39	SB2	土師器	高坏	(50%)	-	(2.2)	-	5YR	5/6	明赤褐色	5YR	5/6 明赤褐色	
28	第87図	PL39	SB3	土師器	壺	-	-	(4.3)	-	2.5YR	6/6	橙色	5YR	7/6 橙色	
29	第91図	PL39	SX1	土師器	甕	-	-	(2.8)	-	2.5YR	5/6	明赤褐色	2.5YR	5/8 明赤褐色	S字甕
30	第97図	PL39	SK1	土師器	高坏	95%	21.3	14.5	14.0	2.5YR	5/8	明赤褐色	2.5YR	5/6 明赤褐色	
31	第97図	PL39	SK5	土師器	壺	(20%)	17.0	(7.8)	-	2.5Y	6/2	灰黄色	2.5Y	5/2 暗灰黄色	
32	第98図	PL39	Pit20	土師器	高坏	(20%)	-	(7.8)	10.0	2.5YR	5/8	明赤褐色	2.5YR	5/6 明赤褐色	脚部に穿孔あり

L 地区出土遺物観察表 (土製品)

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	残存率	重量	a	b	c	d	e	内面色調		外面色調	
25	第84図	PL39	SB1	土製品	土玉	100%	11.95	2.1	2.5	1.2	0.5	1.2	-		7.5YR	6/6 橙色

写真図版



図版表紙

宮添遺跡から望む 史跡浅間古墳

(撮影 佐藤祐樹)



1 A地区遠景 (浅間古墳を望む)



2 SZ1

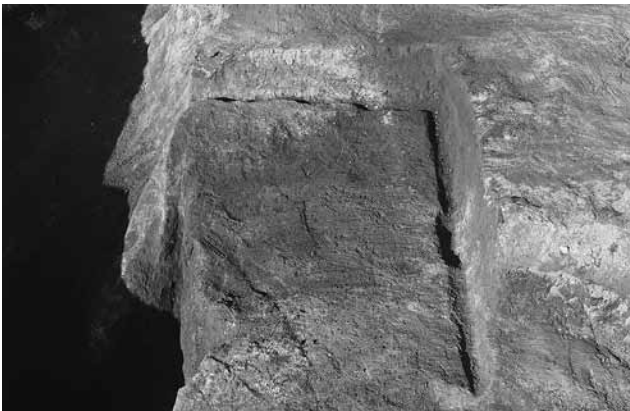
PL.2 遺構 (A・B地区)



1 SZ1 東側周溝



2 SZ1 東側周溝土層



3 SB1



4 SZ1・SB1土層



5 B地区 調査前遠景



6 SB1・SB5



7 SB7



8 SB7カマド



1 SB9



2 SB9カマド



3 SB2・SB6



4 SB28



5 SB3



6 FP1



7 SB8



8 SX3

PL.4 遺構 (B地区)



1 SB 10・SB 11



2 SB 10 カマド



3 SB 12



4 SB 12 カマド



5 SB 14



6 SB 14 土層



7 SB 21



8 SB 21 土層



1 SB 21 集石



2 SB 23



3 SB 22



4 SB 24



5 SB 24 カマド



6 SB 26 カマド



7 SB 26 カマド

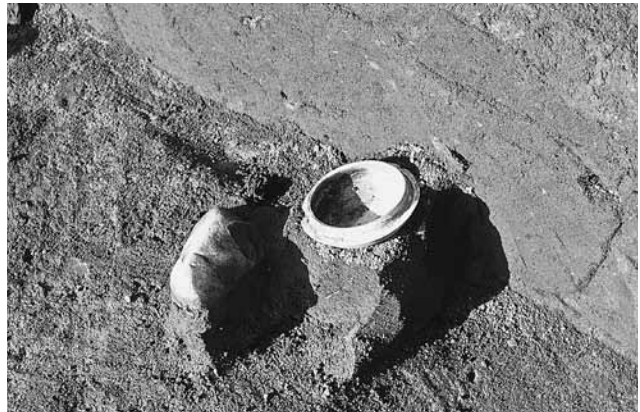


8 SB 25

PL.6 遺構 (B地区)



1 SB 27



2 SK 1



3 SB 15



4 SB 16



5 SB 17



6 SB 17 カマド



7 SB 18



8 SB 18 出土遺物



1 SB 19・20



2 SB 19 鉄鍬



3 C地区 調査前近景



4 C地区基本土層



5 SZ 1



6 SZ 1土層



7 SB 1



8 SB 1土層

PL.8 遺構 (L地区)



L地区全景 (西より)



1 L地区全景 (南より)



2 調査区遠景 (北より)

PL.10 遺構 (L地区)



1 SB 01 (南西より)



2 SB 01 土層 (北西より)



3 SB 01 土層 (南東より)



4 SB 01 土層 (スコリア堆積) (西より)



5 SB 01 - FP 01 (南より)



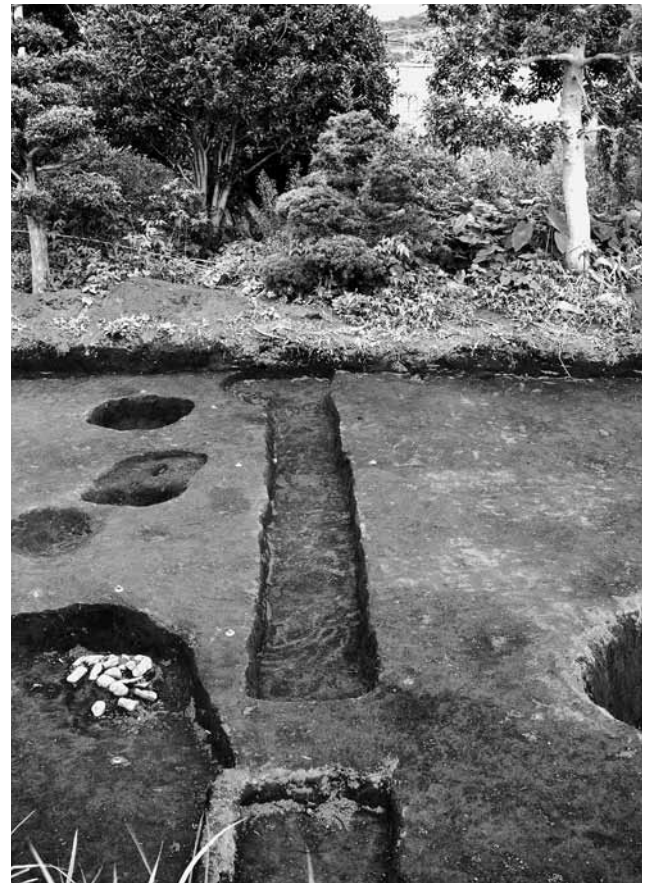
1 SB 02 (南より)



2 SB 02 土層 (北より)



3 SB 02-SX 01 (南より)



4 SD 02 (南より)

PL.12 遺構 (L地区)



1 SB 03 (南より)



2 SD 01 (南より)



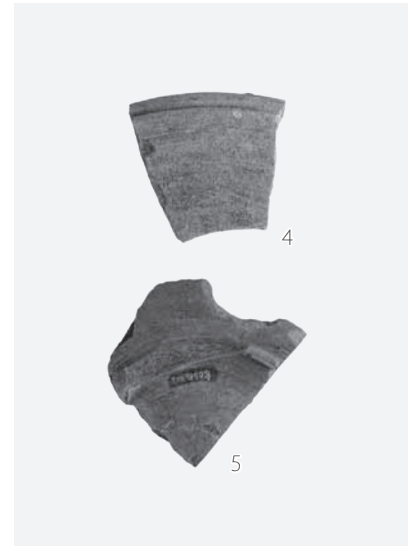
3 SK 01 (南より)



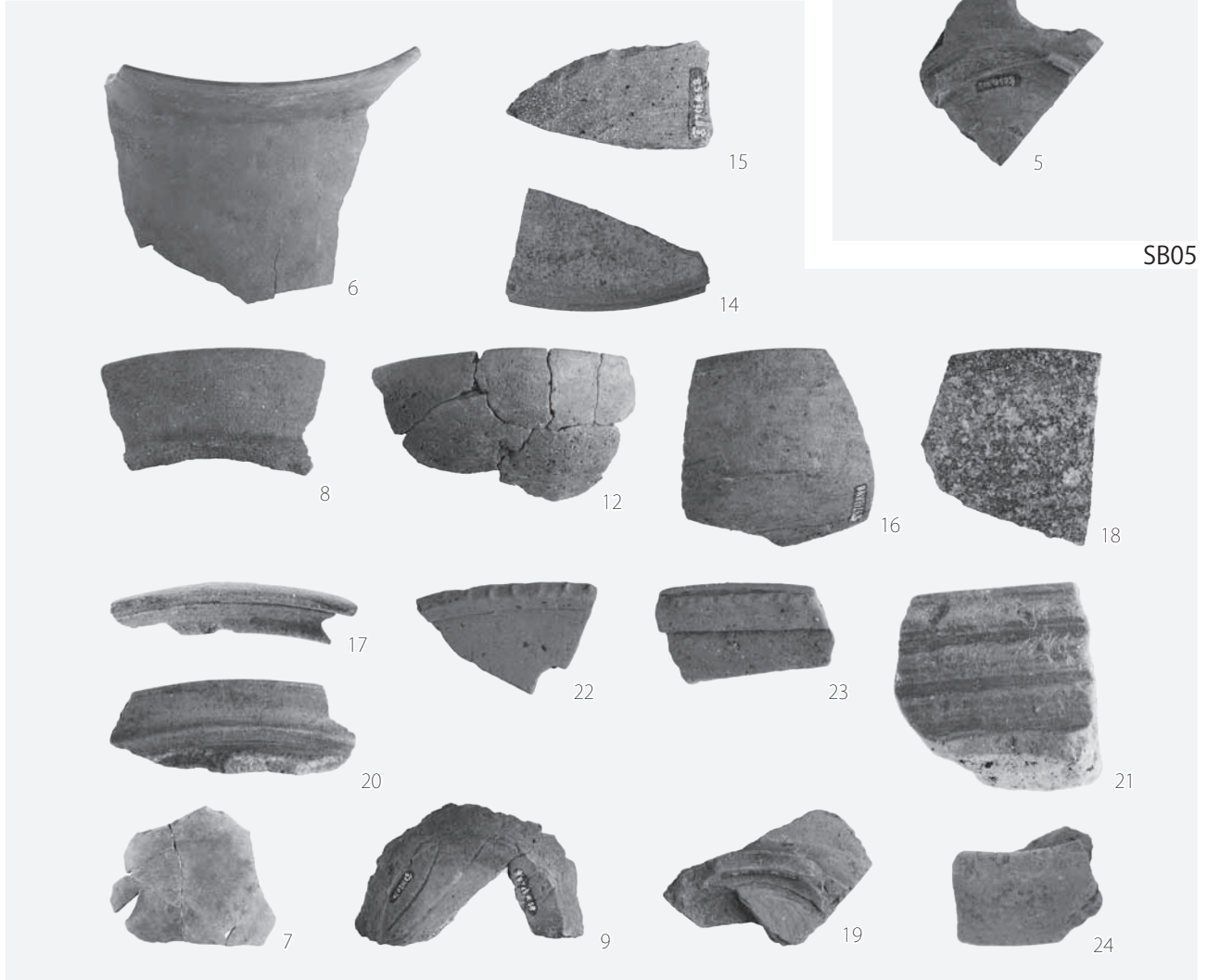
4 基本土層 (南より)



SB01



SB05



10



11



13

SB07

PL.14 遺物 (B地区)



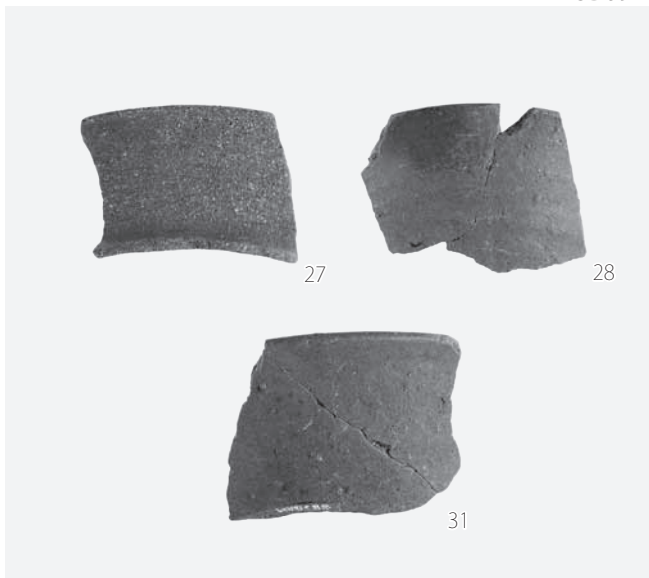
25

26

SB09



29



27

28

31



30

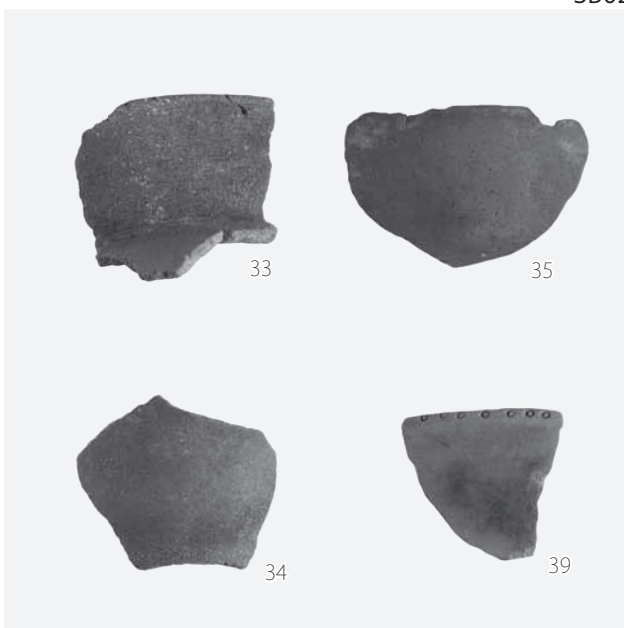


32

SB02



36



33

35

34

39

SB03



37



38

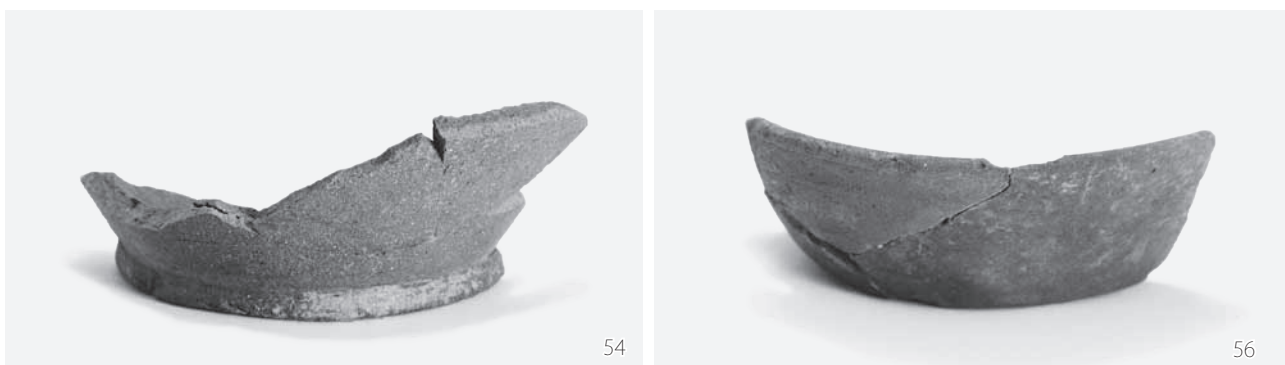
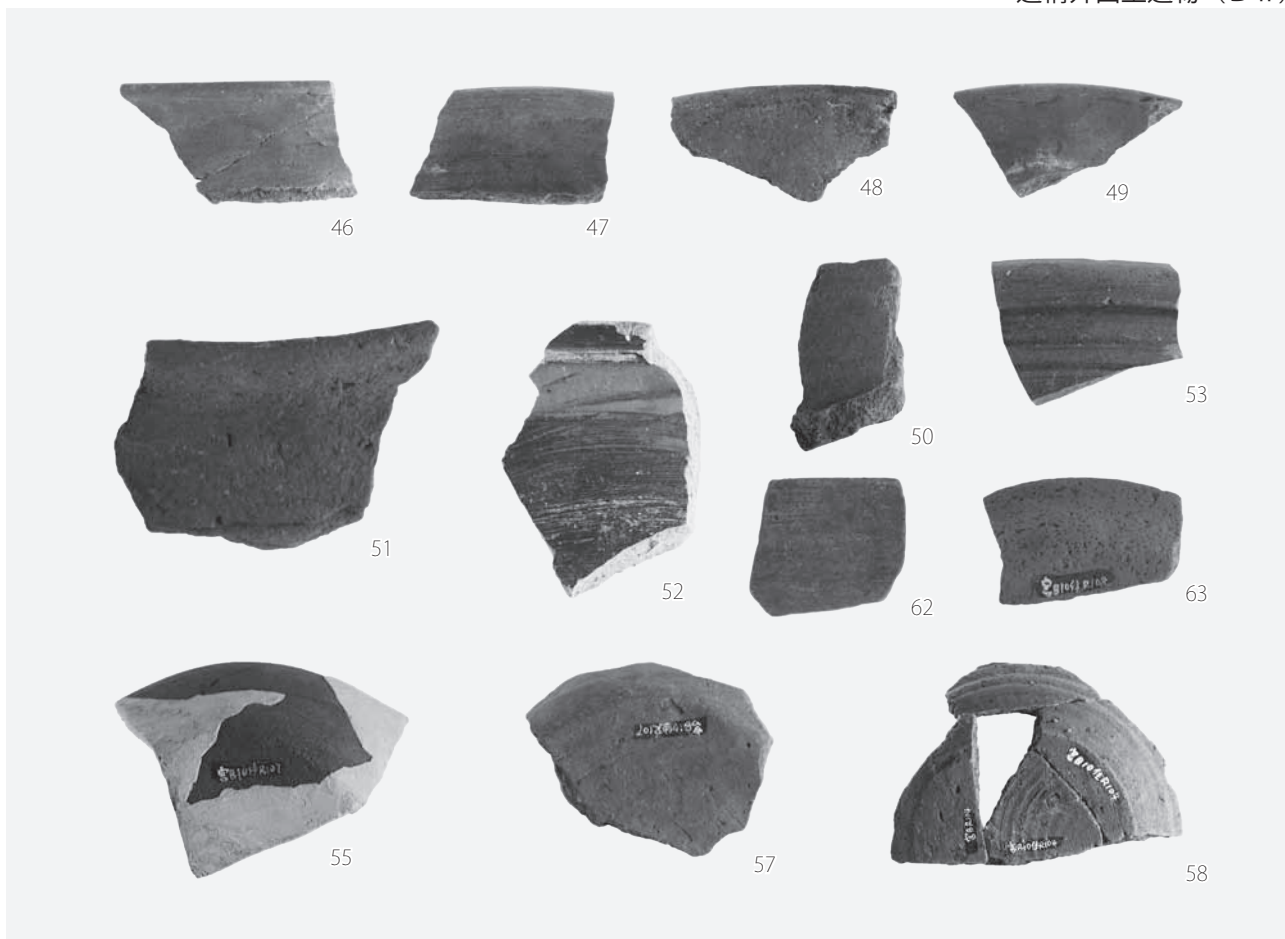


40

遺構外出土遺物(B I)



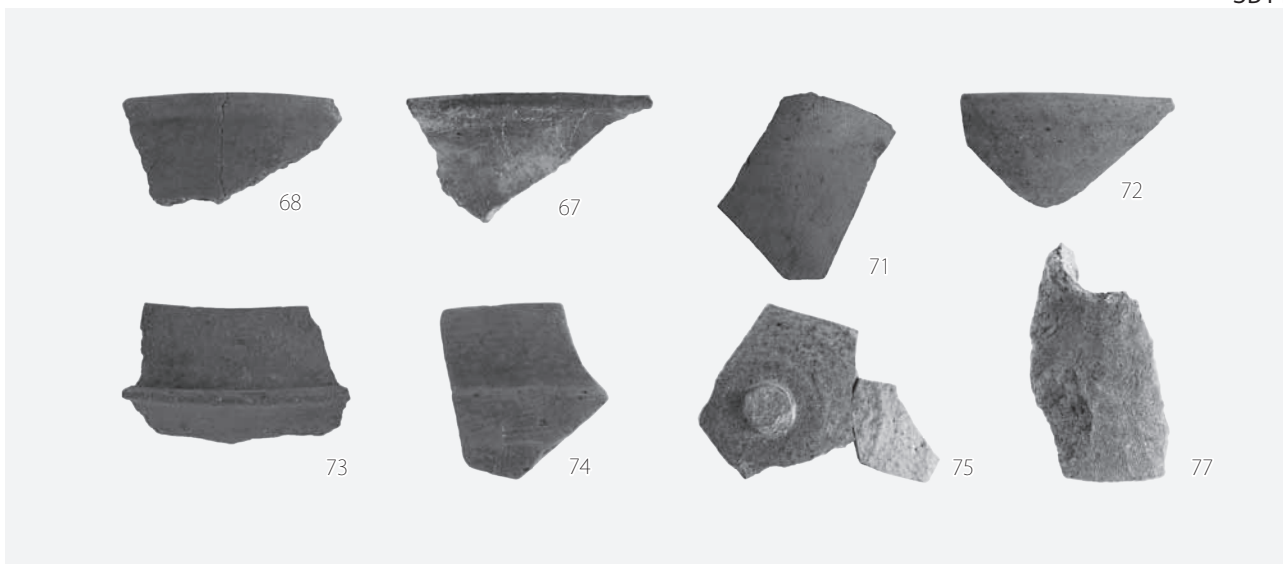
遺構外出土遺物 (B II)



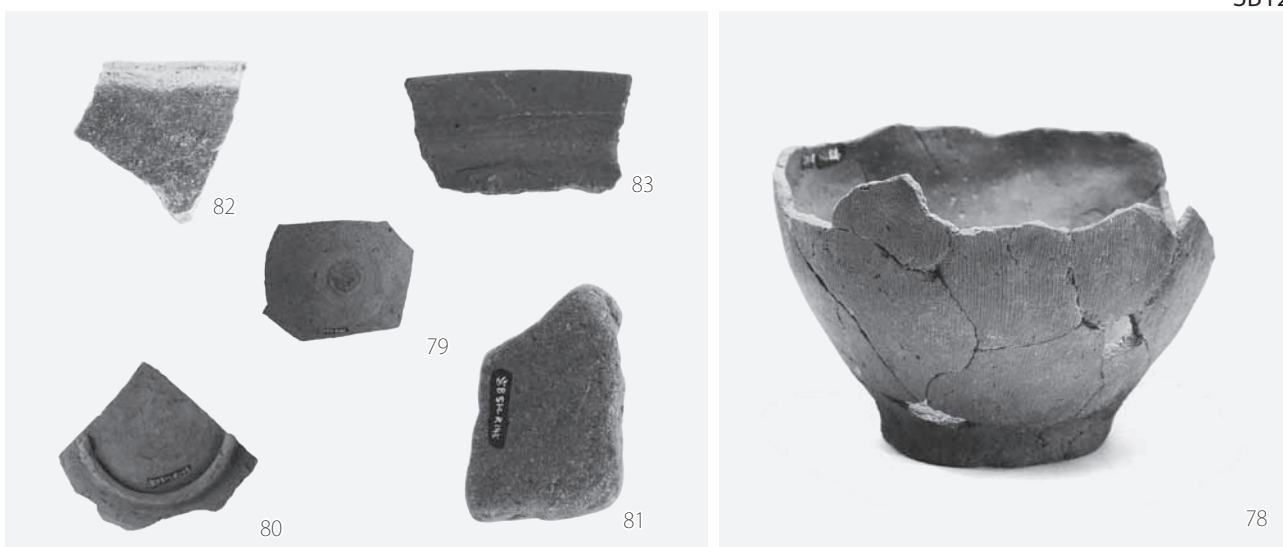
PL.16 遺物 (B地区)



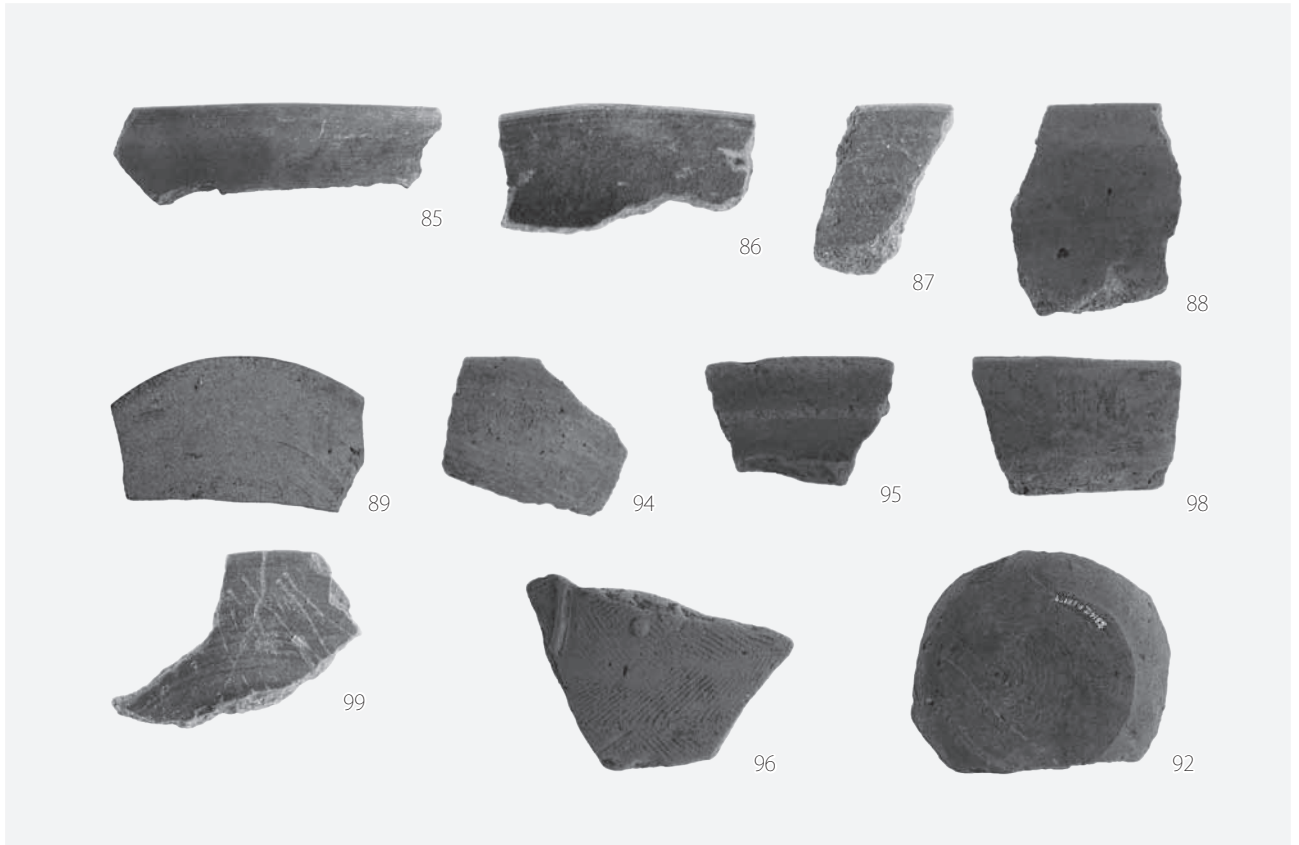
66
SB11



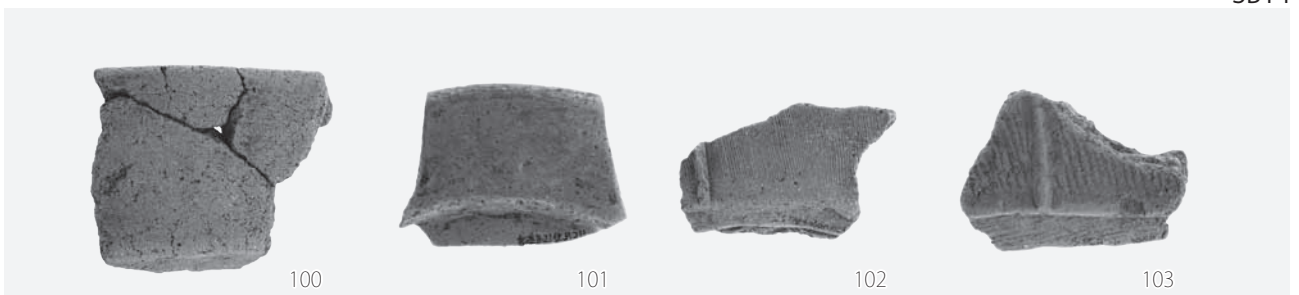
76
SB12



78
SB13



SB14



SB21

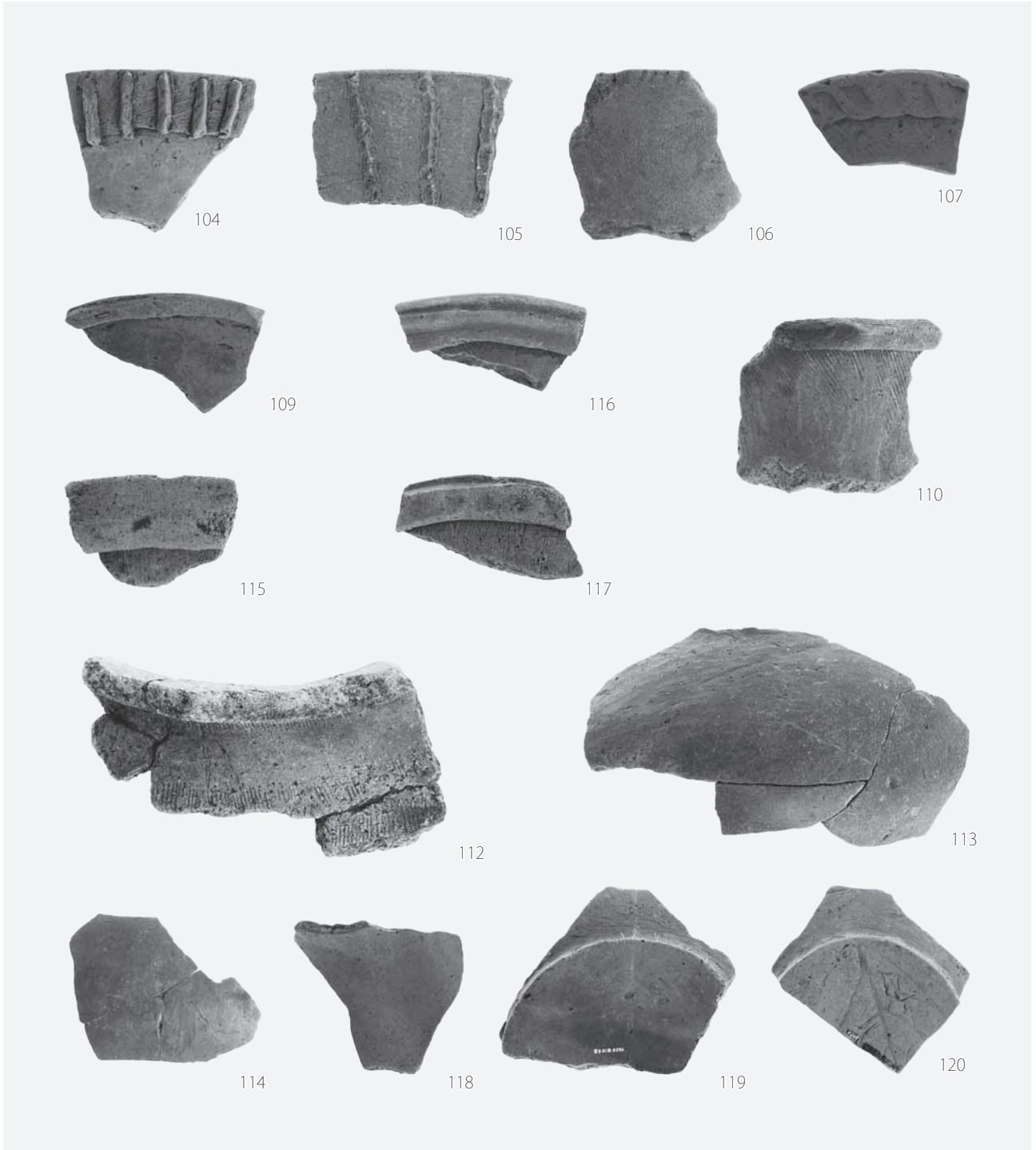
PL.18 遺物 (B地区)



108



111



104

105

106

107

109

116

110

115

117

112

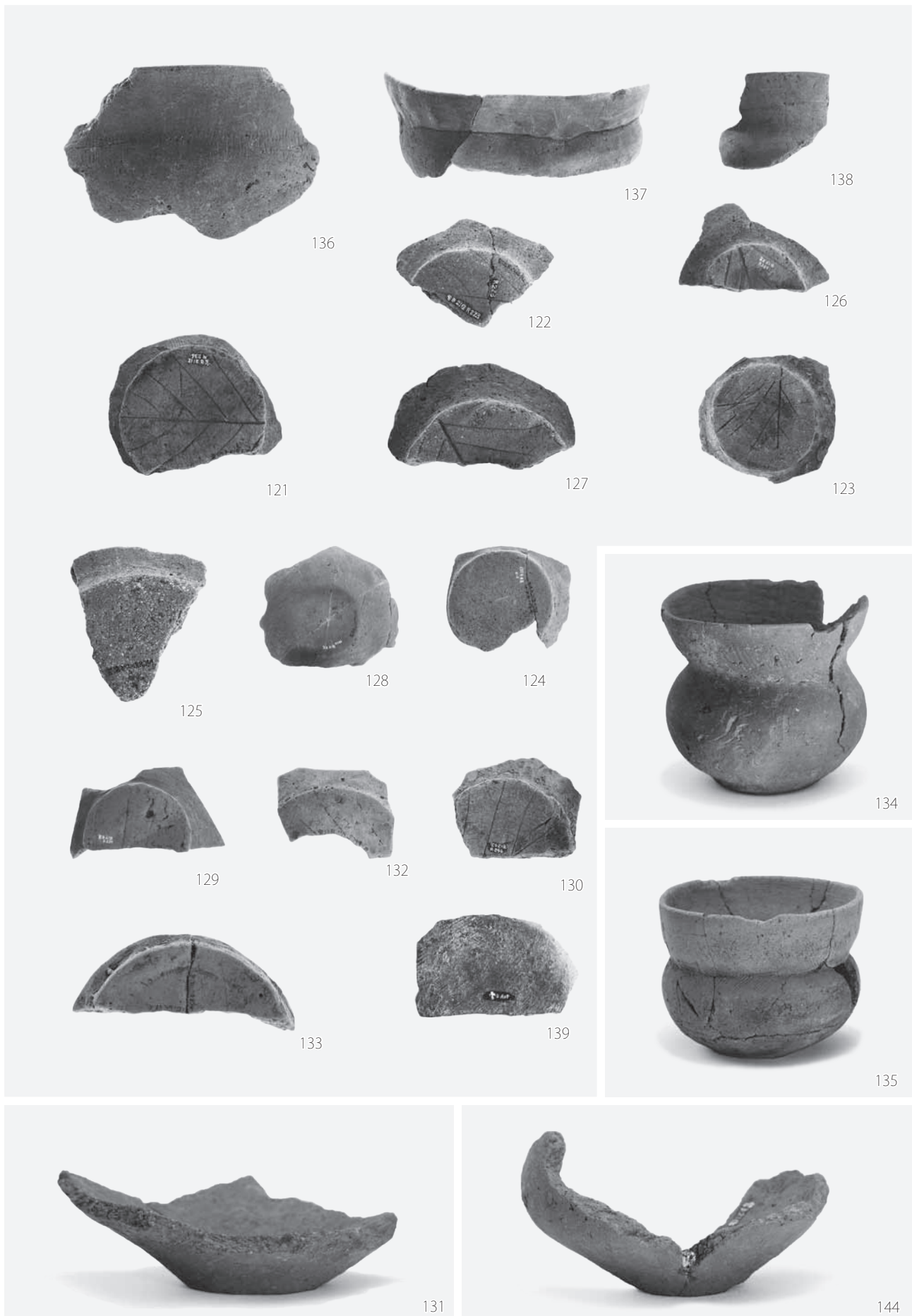
113

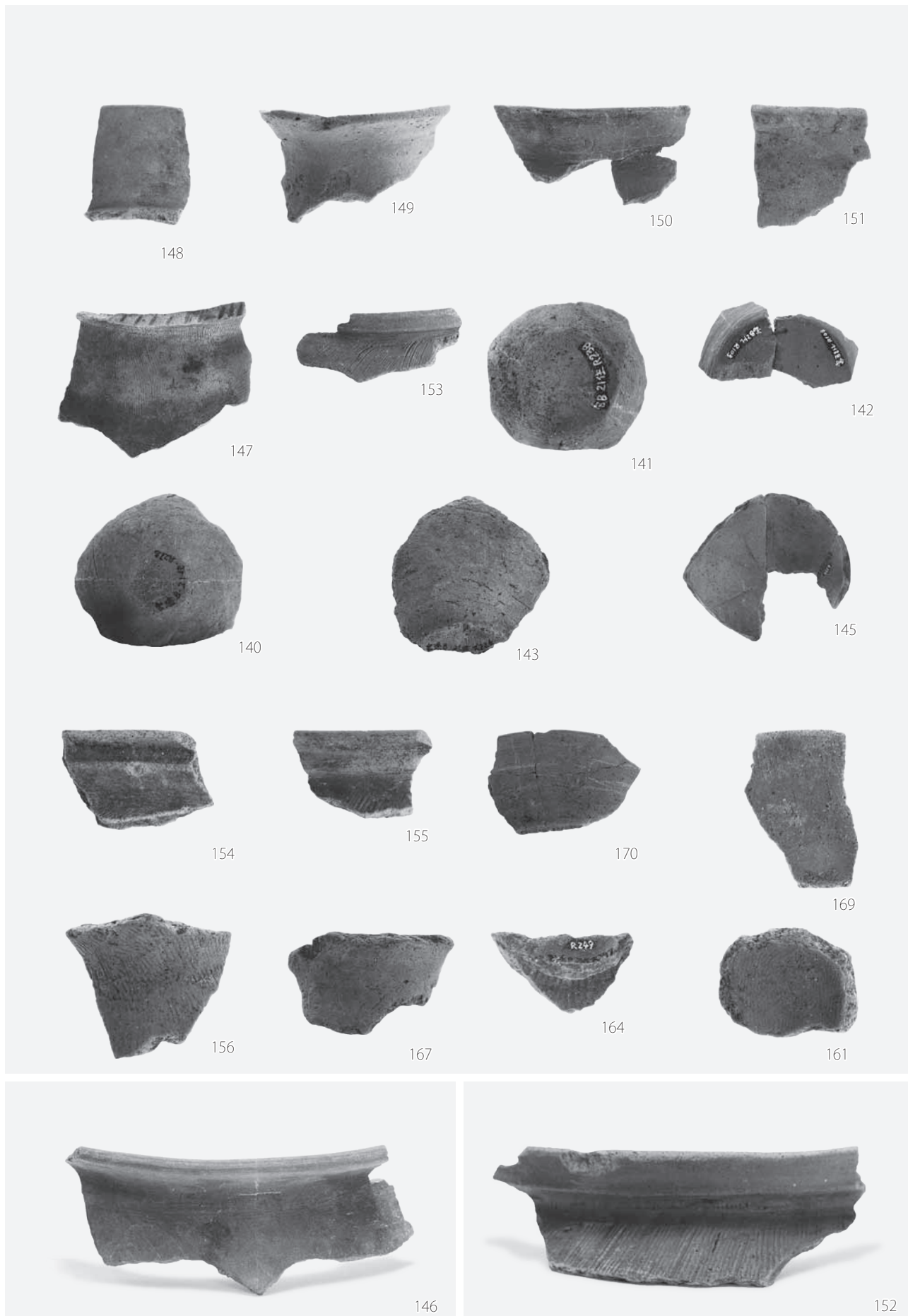
114

118

119

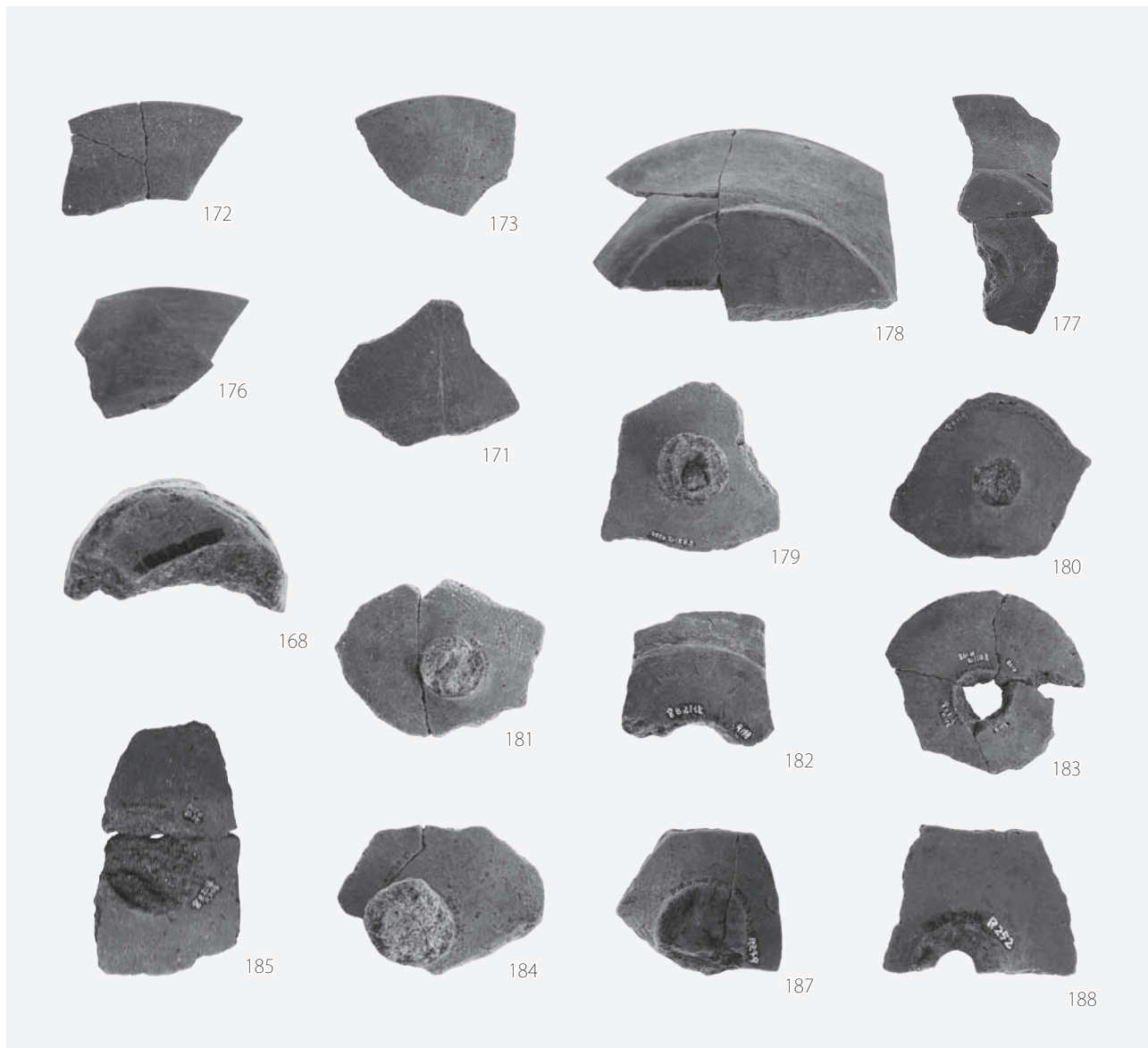
120

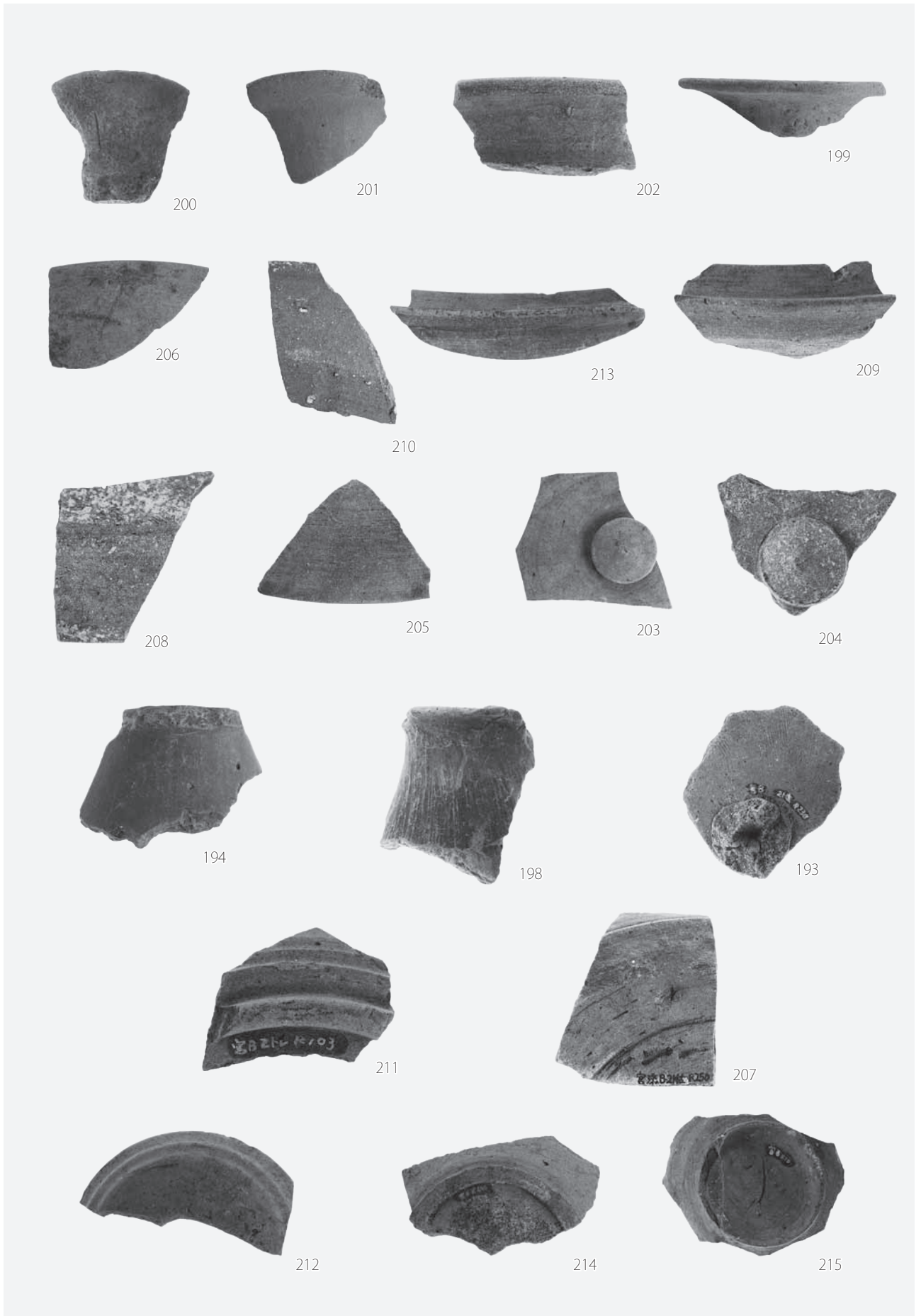




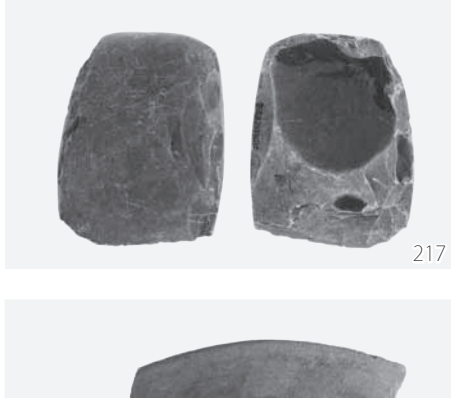


PL.22 遺物 (B地区)



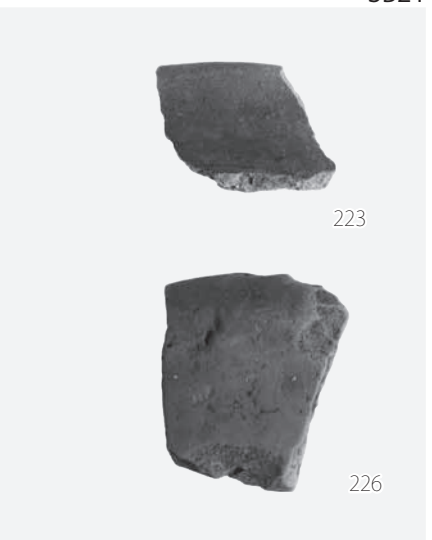
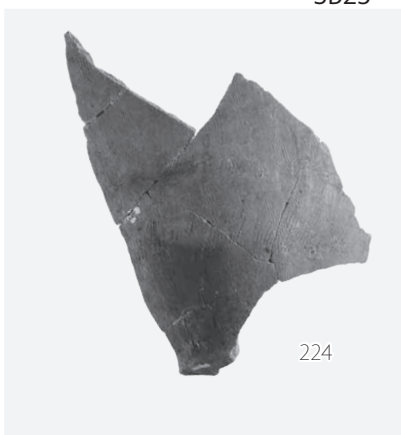


PL.24 遺物 (B地区)



SB21

SB23



SB22



235



233



234



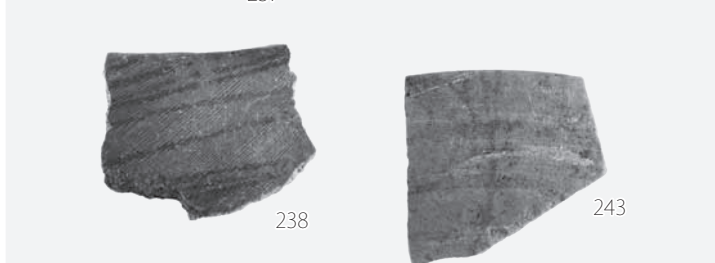
239



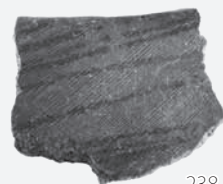
236



240



237



238



243



242



241



244

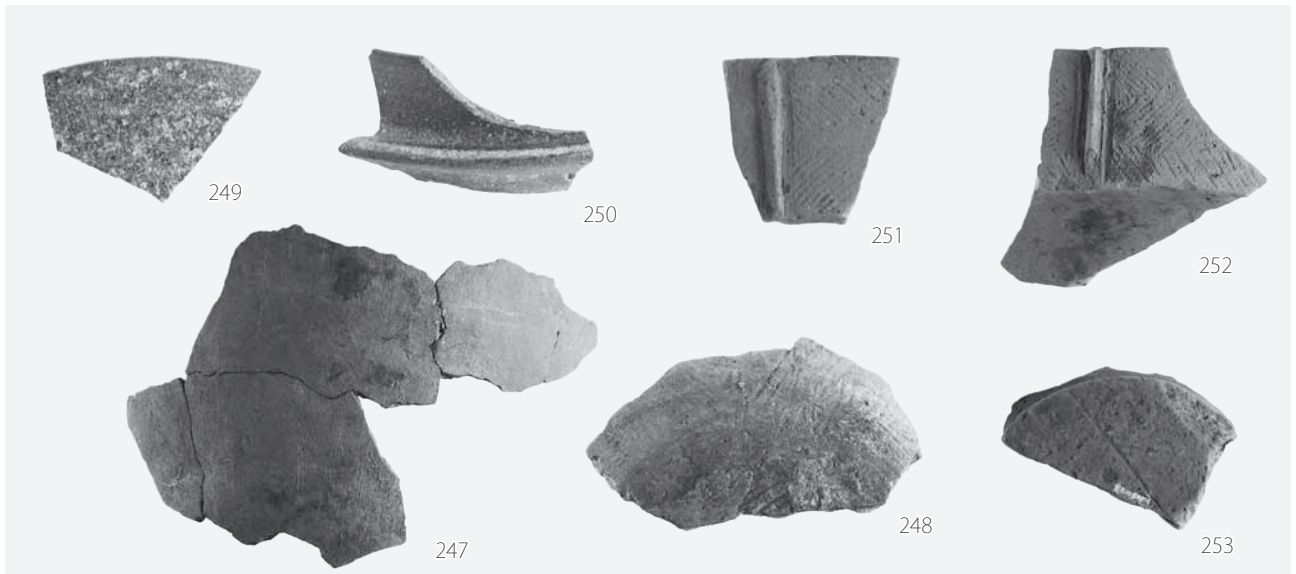


245

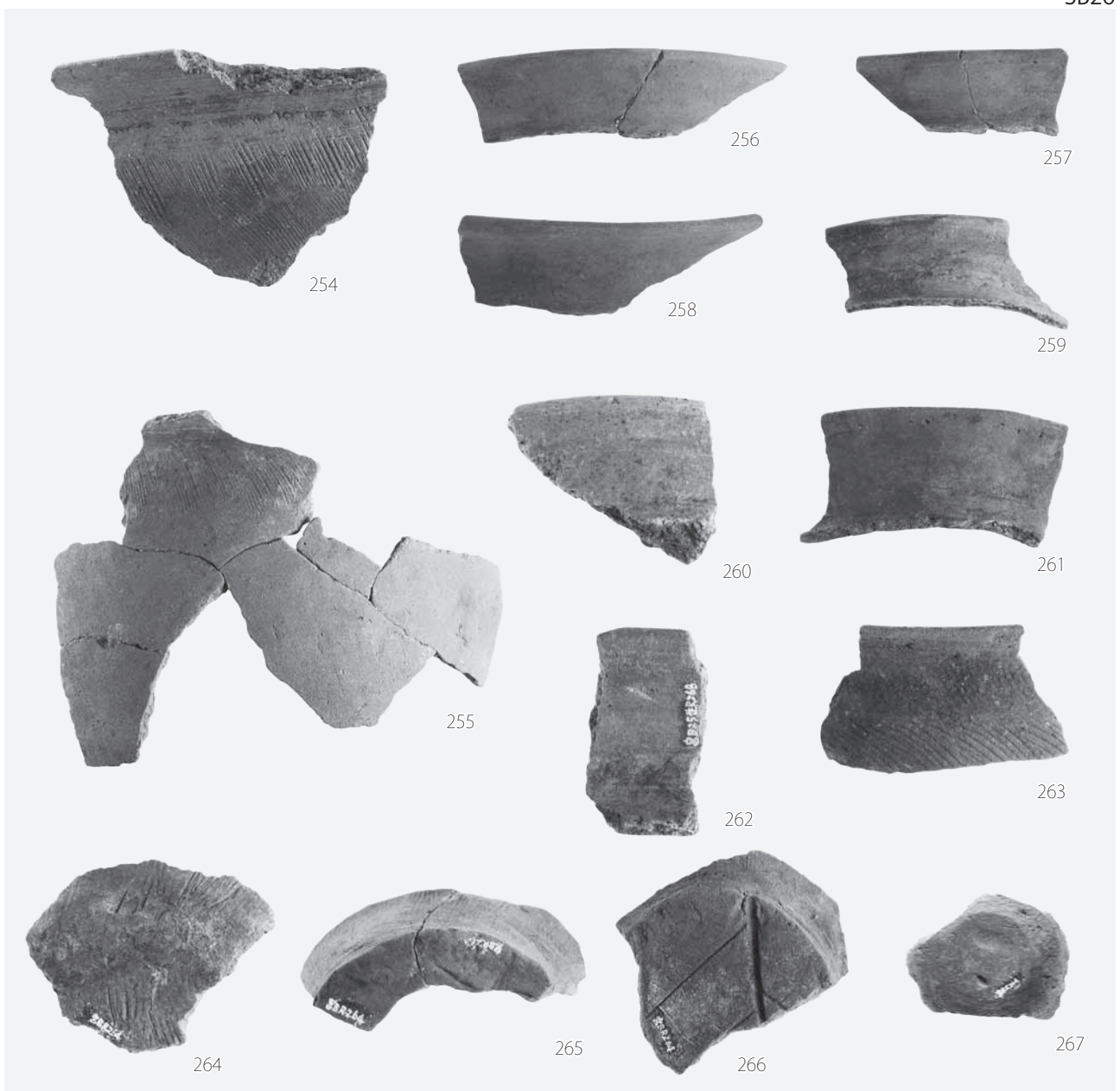


246

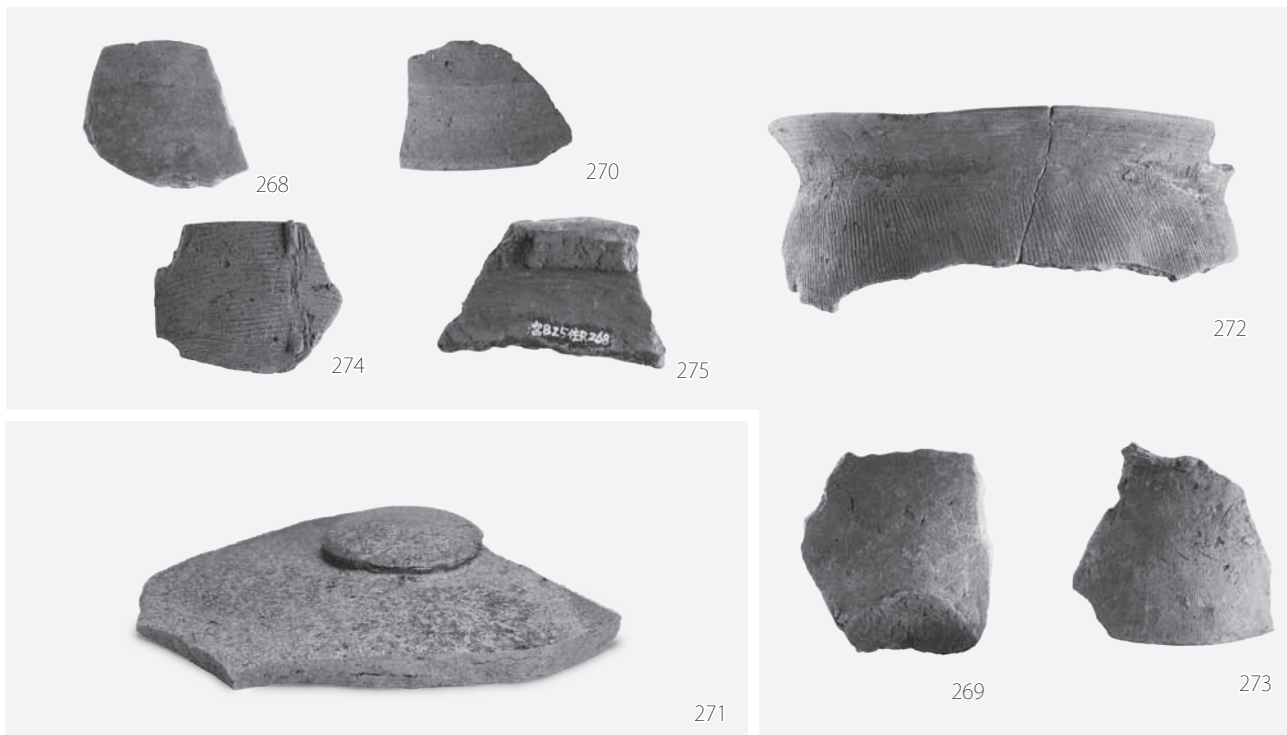
PL.26 遺物 (B地区)



SB26



SB25



SB25



SB27

PL.28 遺物 (B地区)



287

SK01



288



289

SX01



291

293

296

298

290

297

295

299

300

294

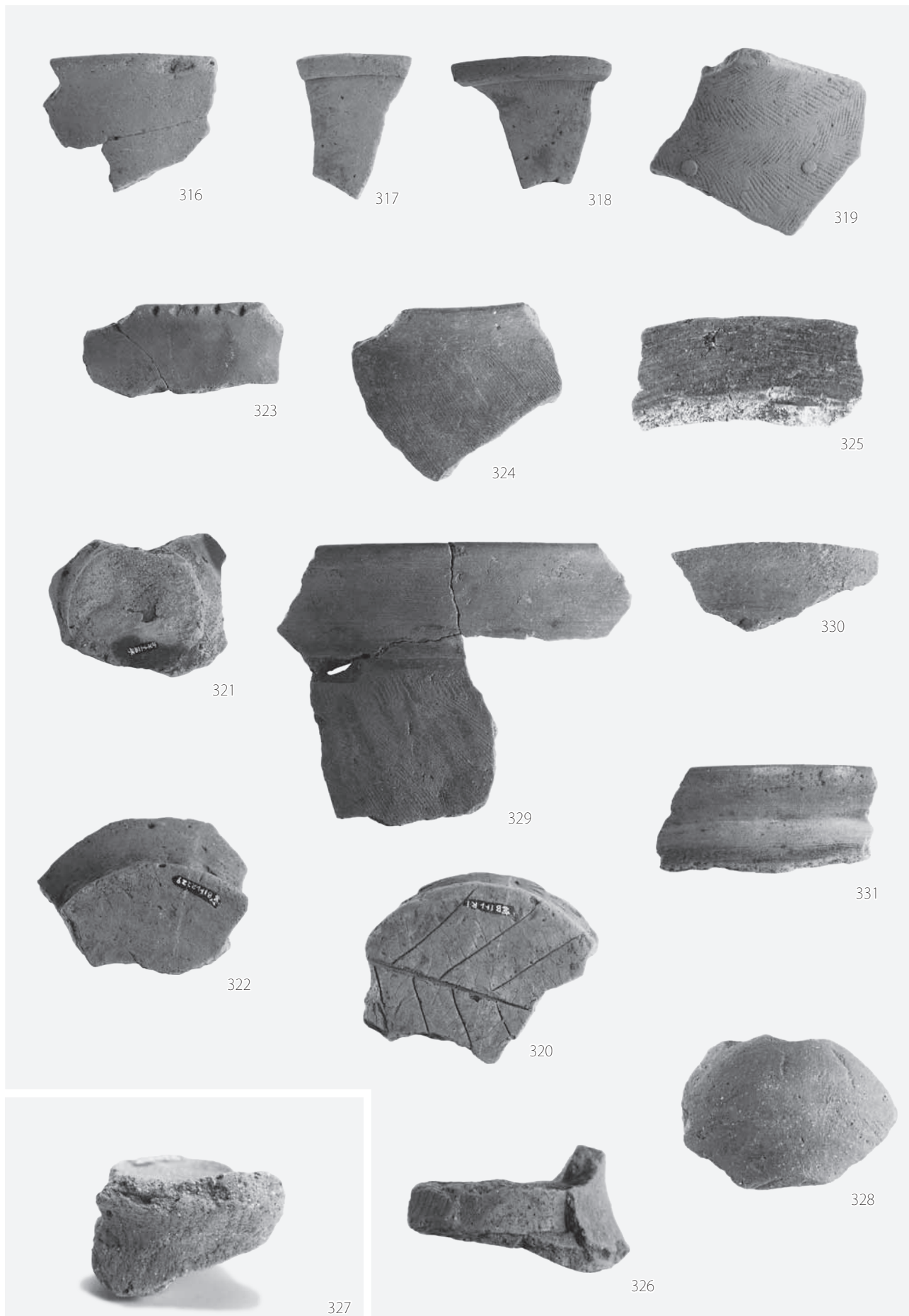
遺構外出土物 (B III 5 トレンチ付近)



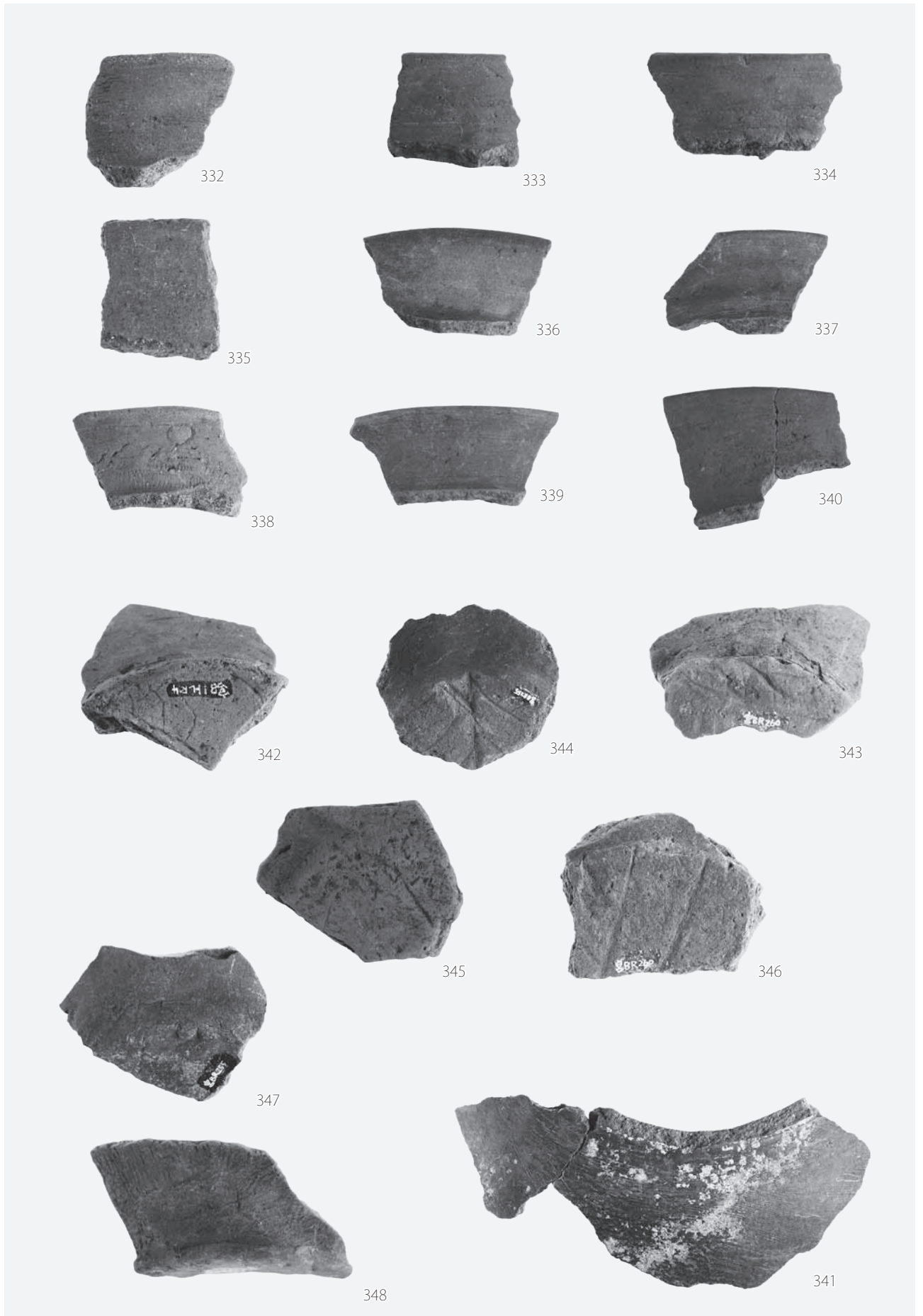
遺構外出土物 (B III 2トレンチ付近)



PL.30 遺物 (B地区)

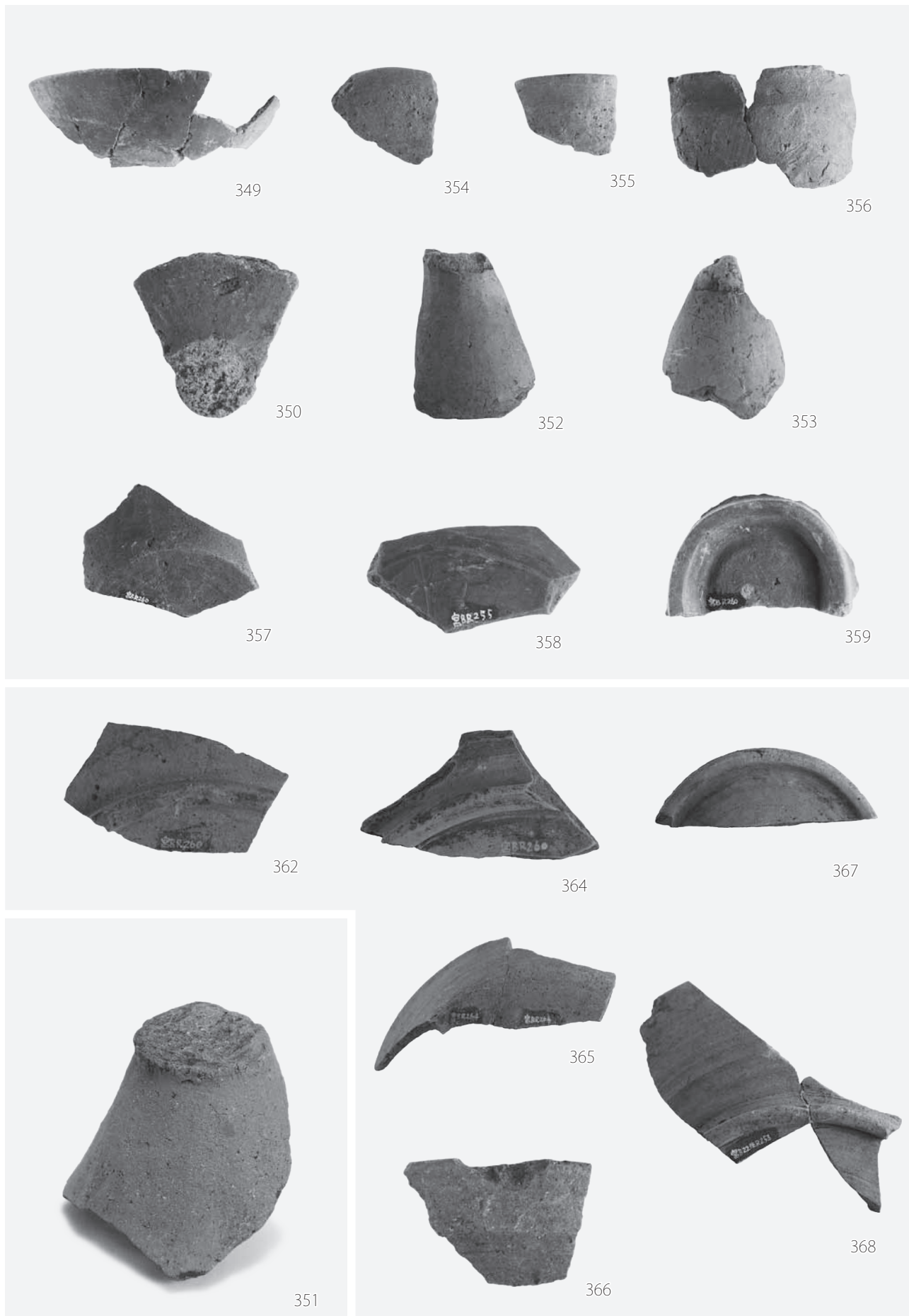


遺構外出土物 (B III 1 トレンチ付近)

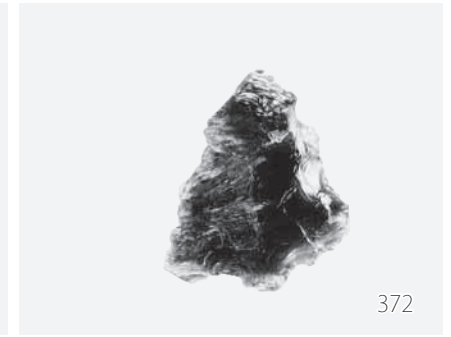
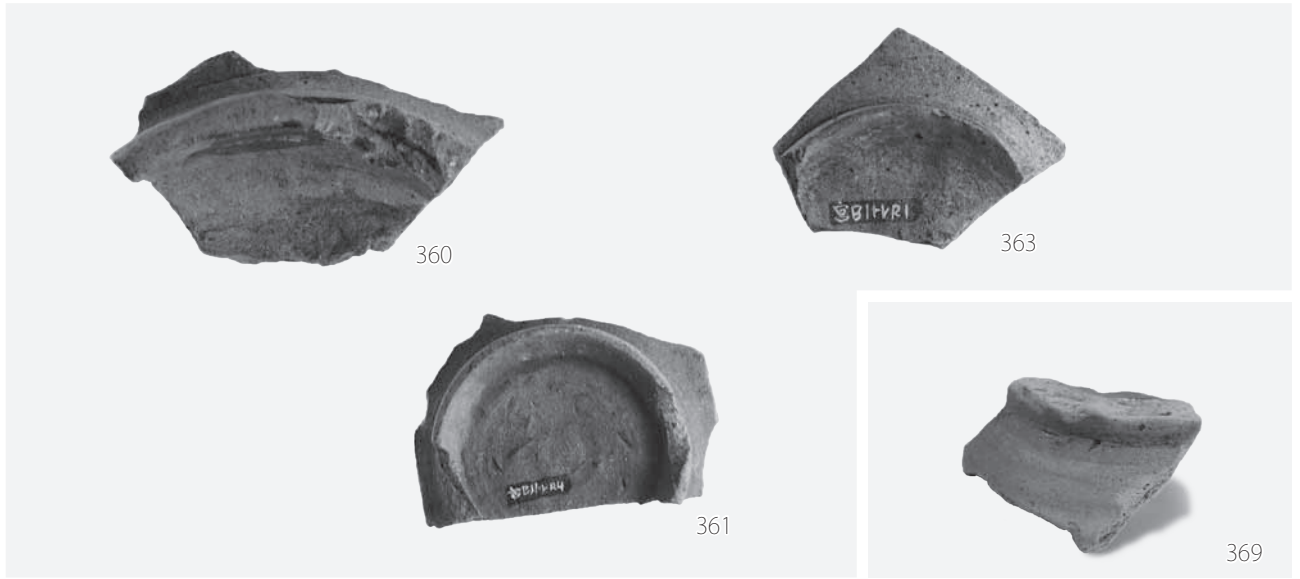


遺構外出土物 (B III 1 トレンチ付近)

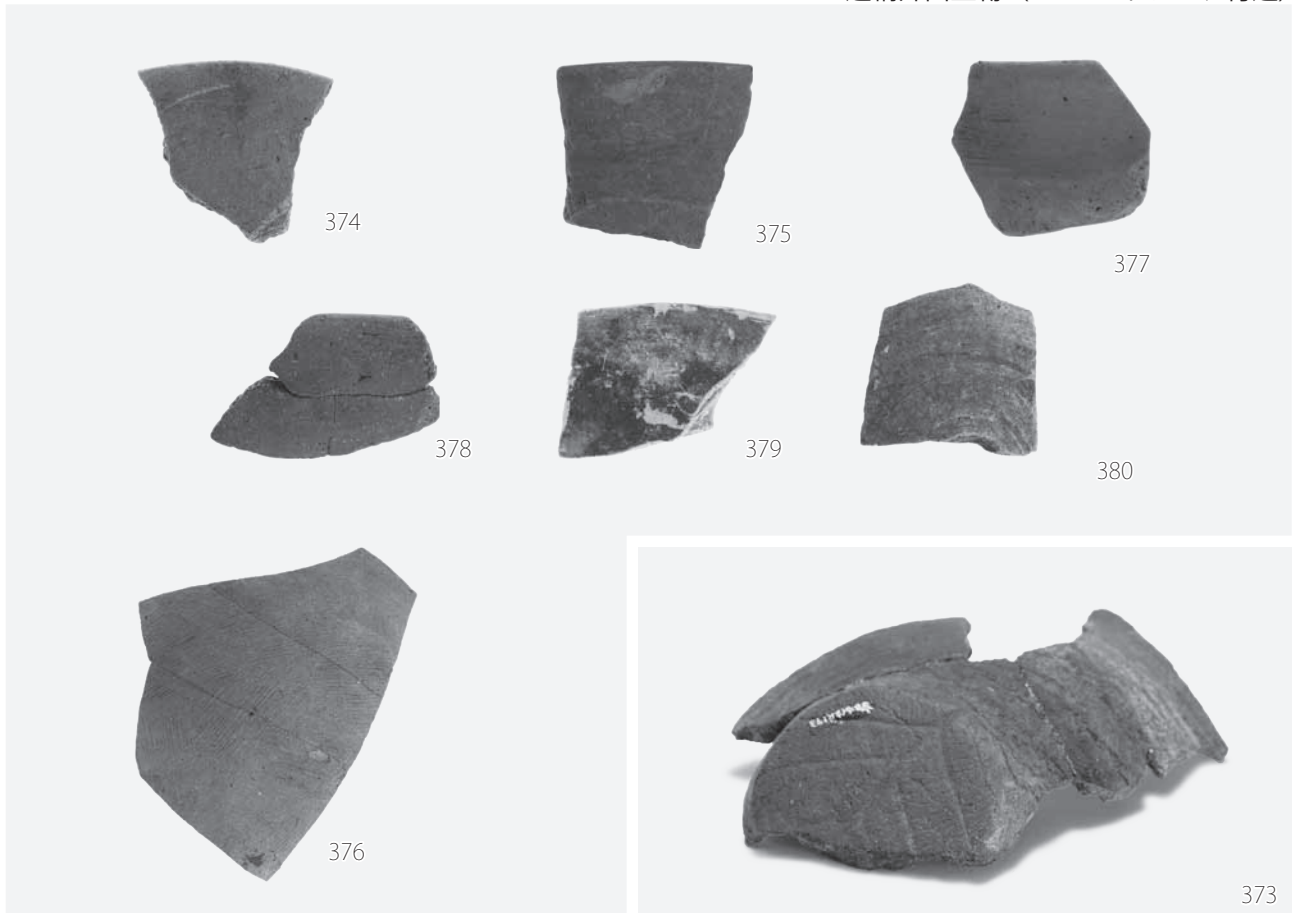
PL.32 遺物 (B地区)



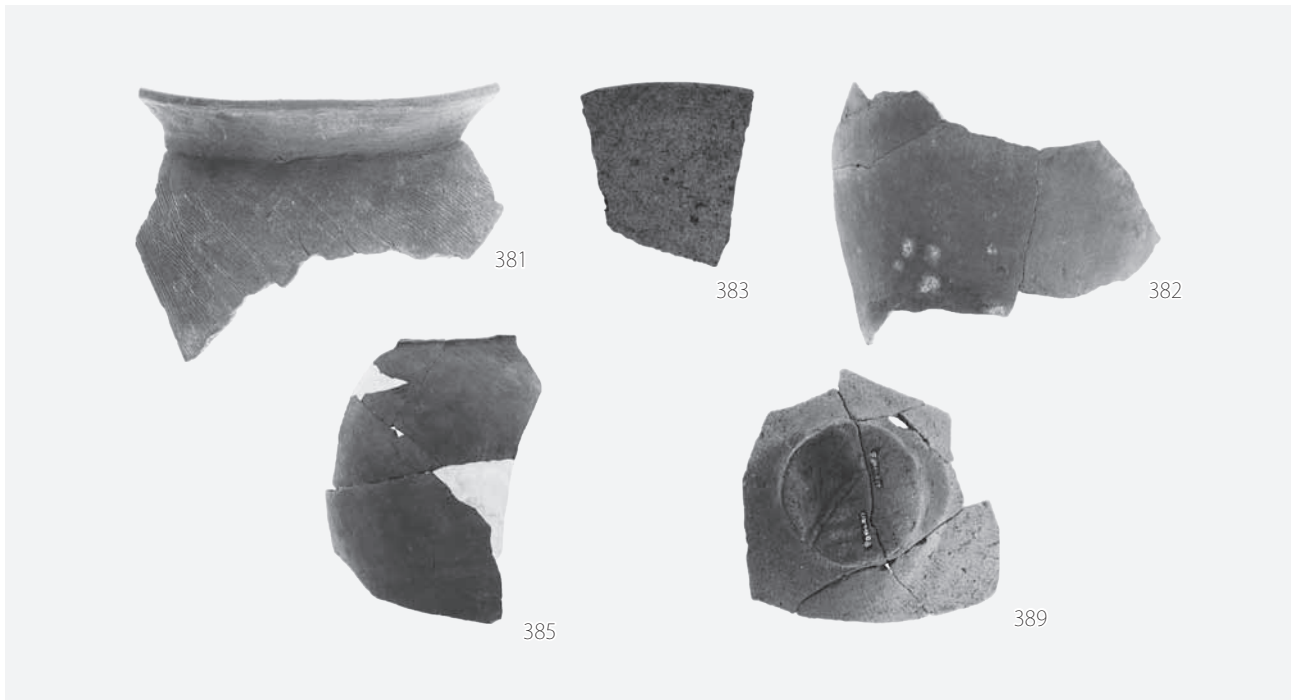
遺構外出土物 (B III 1 トレンチ付近)

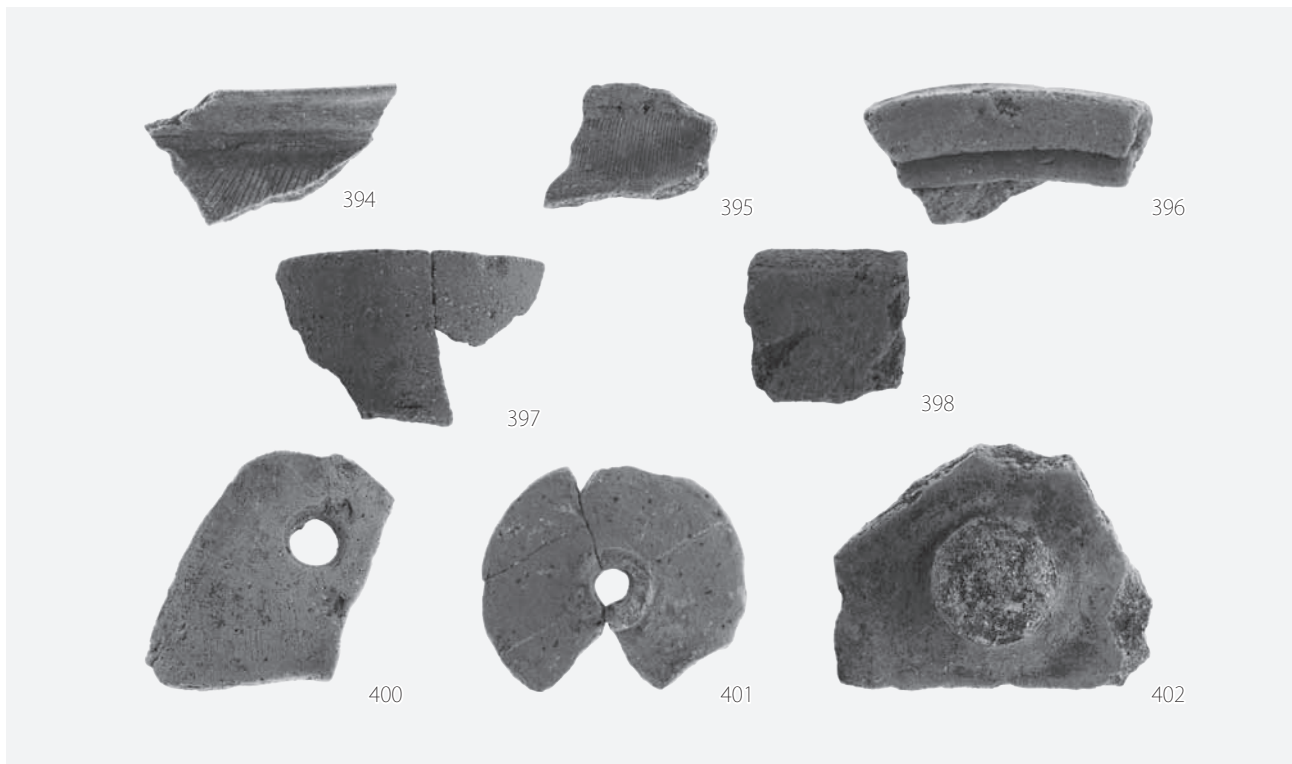


遺構外出土物 (B III 1 トレンチ付近)

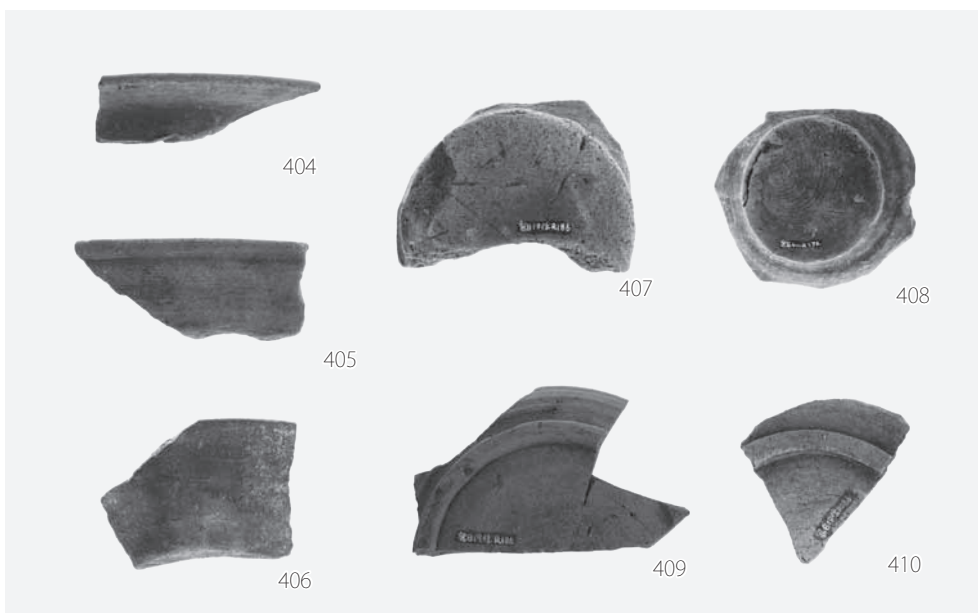


PL.34 遺物 (B地区)



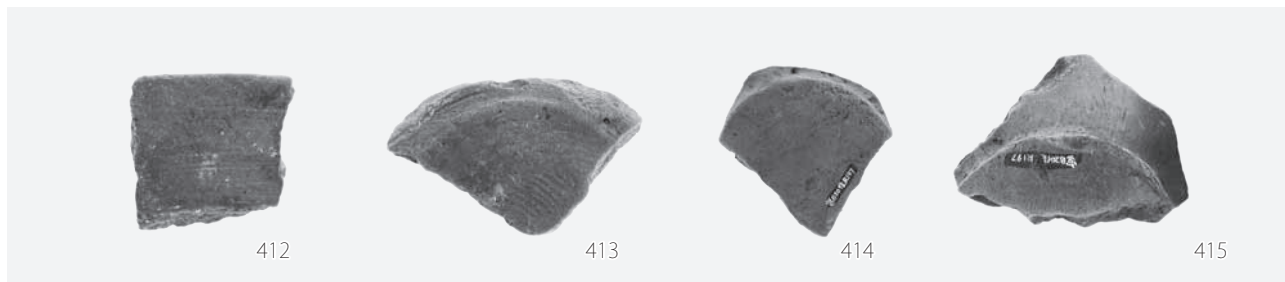


SB18



SB19

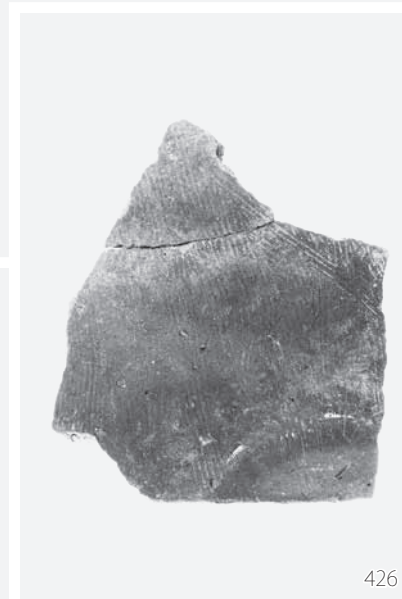
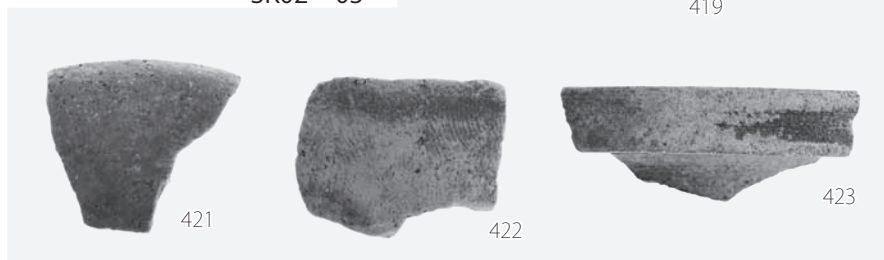
PL.36 遺物 (B地区・A地区・C地区)



SB20



SK02・03



遺構外出土物 (BIV 4トレンチ付近)

A地区出土遺物

C地区出土遺物



SB1

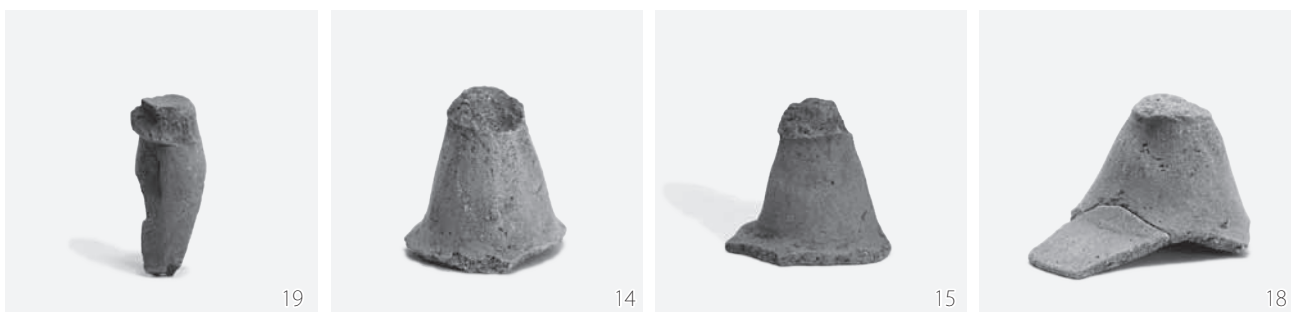
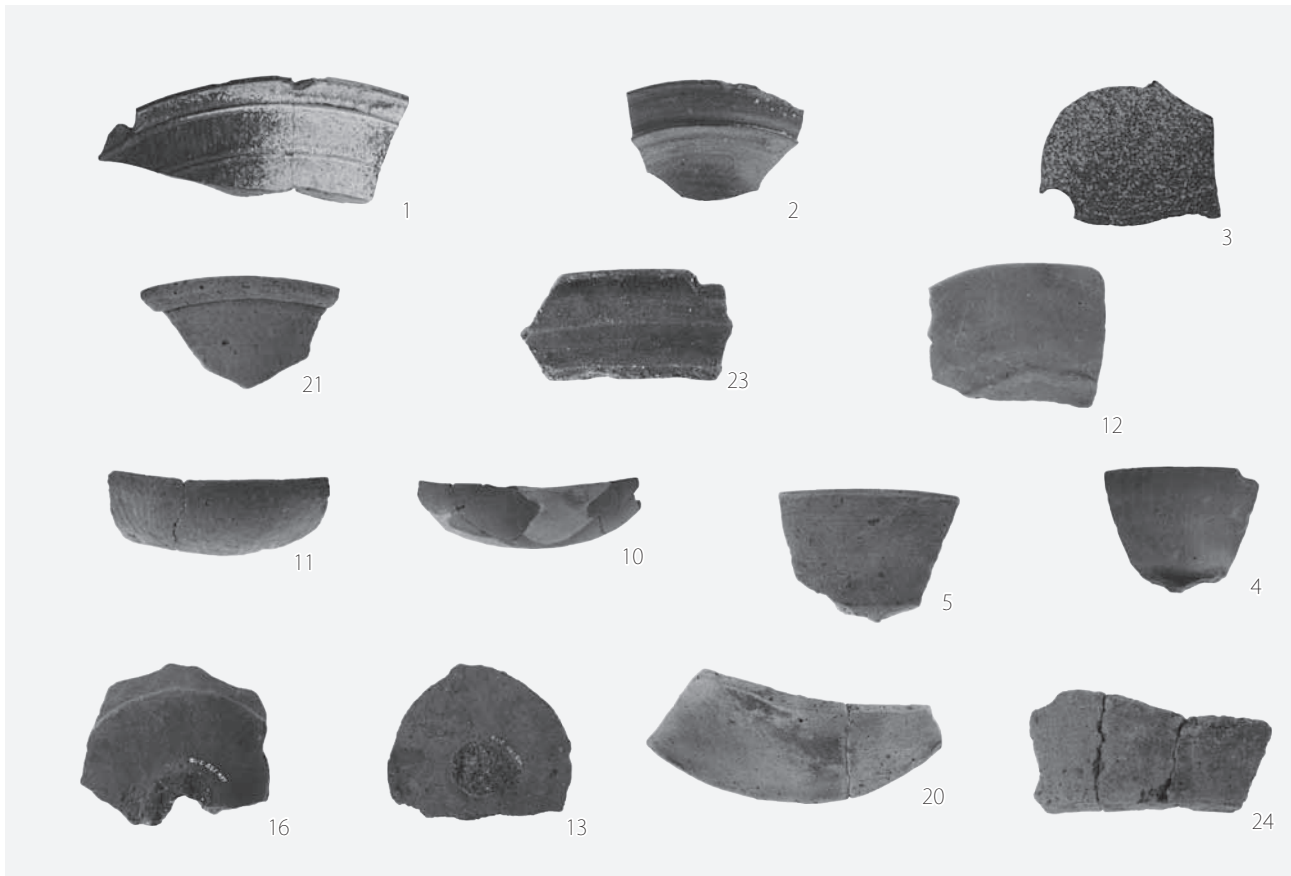
表採

遺構外出土物



SB01 出土土器

PL.38 遺物 (L地区)





25



22



17



9

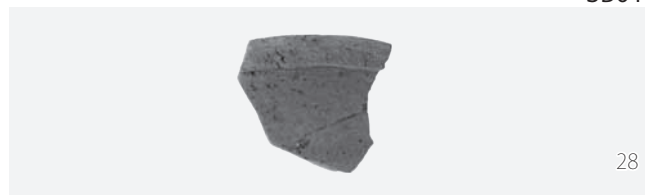


6

SB01



26



28

SB03



27

SB02



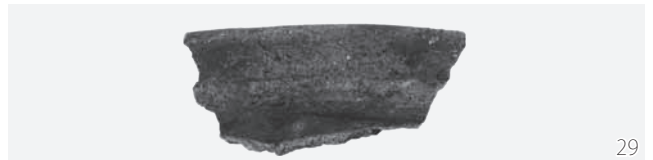
31

SK05



30

SK01



29

SX01



32

Pit20

報告書抄録

ふりがな	みやぞえいせき					
書名	宮添遺跡V					
副書名	土地改良工事に伴う宮添遺跡A地区埋蔵文化財発掘調査報告書 市道改良工事に伴う宮添遺跡B地区埋蔵文化財発掘調査報告書 市道改良工事に伴う宮添遺跡C地区埋蔵文化財発掘調査報告書 駐車場整備工事に伴う宮添遺跡L地区埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次						
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告					
シリーズ番号	第52集					
編著者名	佐藤祐樹(編)・小島利史					
編集機関	富士市教育委員会(担当課:文化振興課)					
所在地	〒417-8601 静岡県富士市永田町1丁目100番地 TEL 0545-55-2875 E-mail:ky-bunkashinkou@div.city.fuji.shizuoka.jp					
発行年月日	平成24年3月31日					
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘原因
所収遺跡	所在地	市町	遺跡	世界測地系		
みやぞえ	しずおかけんふじしますかわ	22210	S067	35° 09' 36.93"	138° 44' 53.28"	記録保存調査
宮添	静岡県富士市増川			日本測地系		
				35° 09' 25.13"	138° 45' 04.54"	
所収遺跡名	調査期間	調査面積	種別	主な時代	主な遺構	主な建物
宮添遺跡 A地区	19860305 } 19860308	500㎡	集落	弥生、古墳 平安	方形周溝墓 1基 竪穴建物跡 1軒	弥生土器、土師器
宮添遺跡 B地区	19931018 } 19940114	700㎡	集落	弥生、古墳 平安、平安	竪穴建物跡 28軒 土坑 3基 炉穴 1基 性格不明遺構 3基	石器、(石斧・石鏃など)、 弥生土器、土師器、須恵器、 金属製品(鉄鏃)
宮添遺跡 C地区	19940718 } 19940729	586㎡	集落	弥生、古墳 平安、平安	方形周溝墓 1基 竪穴建物跡 1軒	弥生土器、土師器
宮添遺跡 L地区	20090717 } 20090811	200㎡	集落	弥生、古墳 平安、平安	竪穴建物跡 3軒 溝状遺構 2条 性格不明遺構 2基 土坑 4基	弥生土器、土師器、須恵器
要約	<p>北に富士火山、南に田子浦砂丘、駿河湾を望む愛鷹南麓には、旧鎌倉往還「根方街道」が存在し、現在も富士市から沼津市を経て三島に至る「静岡県道22号三島富士線」として利用されている。「根方街道」沿いの丘陵先端には数多く集落が存在し、宮添遺跡も周辺の集落と共に弥生時代後期に形成され始める。</p> <p>遺跡は、途中、断絶はあるものの平安時代まで集落として活動し続けることが明らかとなった。愛鷹南西麓では、これまで、検出されることの少なかった方形周溝墓が認められたことや、古墳時代中期後半の富士山の噴火によってパッキングされた竪穴建物跡から出土した遺物は良好な一括資料として注目される。</p>					

富士市埋蔵文化財調査報告 第52集

宮添遺跡 V

土地改良工事に伴う A 地区埋蔵文化財発掘調査報告書
市道改良工事に伴う B 地区埋蔵文化財発掘調査報告書
市道改良工事に伴う C 地区埋蔵文化財発掘調査報告書
駐車場整備工事に伴う L 地区埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成 24 年 3 月 31 日

編集・発行 富士市教育委員会

〒 417-8601 静岡県富士市永田町一丁目 100 番地

TEL 0545-55-2875 FAX 0545-53-0789

E-mail:ky-bunkashinkou@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本 文光堂印刷株式会社

〒 410-0871 静岡県沼津市西間門 68 番地の 1

(富士市行政資料登録番号 23 - 59)